
傭兵は旅をする

八モニカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵は旅をする

【Nコード】

N0812T

【作者名】

八モ二カ

【あらすじ】

世界が1度滅んで15年。

世界を旅する傭兵旅団『フリーユージェ』の部隊長ルートを中心に織りなすSFアクション物語、を目指しています。主要登場人物が話の中心になることは多いですが、最終的な主人公は固定する予定です

ww

ごく稀に入るボケは流してくれて結構です。

注：これは作者の処女作です。駄文でややこしいかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。 m () () m

5月19日 サブタイトル名を入れました。

6月27日 完結いたしました。皆様本当にありがとうございます。完結は致しましたが感想はいつでも大歓迎であります！

登場人物紹介（前書き）

ネタバレ？ あります

話が進むにつれて少しずつ更新していく予定です。

登場人物紹介

ルート・ヴェントス

性別：男

年齢：19

……一応この小説の主人公。髪は邪魔にならない程度に短く切りそろえている。

一部隊を率いる隊長。成人していないため、部隊の者は大抵年上。実力を持っているために抜擢された。

403部隊隊長。戦闘スタイルは中・近距離。

ファミリィネームはまず出ません。

『大崩落』時、最大の激戦地となった都市『ブラン・コーリア』で生まれ、幼くして両親と離ればなれになり、両親は行方不明となっている。マックに拾われた後、旅団で保護される。

レイ…… RAY

性別：男

年齢：15 戦争直前に製造された機械人

……仲間その一。アンドロイド、もしくは機械人と呼ばれる。戦争中に人類に味方した機械人の1人。

ルートの部隊において副隊長のような地位で、自らの持つ様々な機器、兵器で部隊を掩護する。

人工毛髪を上げてオールバックにしている。銀髪銀眼。

403部隊所属。戦闘スタイルは中・遠距離。

『大崩落』当初から人類の側に立ち、マックと共に『ブラン・コリア』防衛任務に就いていた。

マック・ジーン

性別：男

年齢：39

……傭兵旅団『フリーユーゲ』旅団長。先代が亡くなった時点で実力ナンバー1の401部隊を率いていたため、急遽旅団長を務めることとなった。茶髪を刈り上げていて、眼鏡を外すとただの「ヤのつく職業」の人になってしまうほど目が鋭、かつた。第一線を退いてからはデスクワークを行っているため、最近はや角が取れてきているらしい。

もともと気さくな男であるため、見た目さえなければきっと子持ちになれるだろう、と女性隊員には囁かれているとかされていないとか。

腹回りが気になる今日この頃。

若くして異例の出世をして隊長として『ブラン・コリア』防衛隊の一部隊を率いていた。しかし、戦闘でレイ以外のすべての仲間を失い、壊滅状態の都市を脱出して旅団に入隊する。

フラッシュ

性別：男

年齢：19

……ルートの幼馴染であり、良き戦友でもある、407部隊隊長。ルート同様若くしてその指揮能力から隊長に抜擢された。もともと

おとなしい性格ではあるため、ルートとの会話では受けに回ってしまふことが多い。戦闘スタイルは中・近距離。

『ブラン・コーリア』にいたころからのルートとフェイナの幼馴染。

フェイナ

性別：女

年齢：19

……同じくルートの幼馴染。通常部隊には所属しておらず、情報部隊の隊員として危険な潜入作戦などに従事することが多い。言動が偏って時々かなり過激な発言をすることがある。

その実、身体の大半が機械というサイボーグで、特に腕、足に関してはすべて機械である。15年前の戦争で負傷し、旅団に助けられて義手義足となる。その後旅団に入団するに伴い義手義足を高度な神経接続型に変更し、サイボーグとなる。その際に胴、首回りも表面が装甲化されており、人間ではあるが機械人並みの強度を持つ。

とはいえ、脳を撃たれば即死は免れない。また、機械人のように体内に兵器を格納はしていない。

レイのことを少なからず意識しているが、1歩が踏み出せずにいる。その時の表情はまぎれもなく恋する乙女（フラッシュ談）だという。戦闘スタイルは中・近・至近距離。ナイフ技が得意。

ジャック・マガス

性別：男

年齢：???

……ラスボス(?)的な存在。老けているが、姿勢が良いため、実年齢よりも若く見られることが多いらしい。その実年齢も、いろいろ

る考えものなのだが。

巨大な陰謀を企てるだけあって、かなりの切れ者。使えない部下はバツバツサと切り捨てていく。

”クレイジー”ボヘミアン

性別：男

年齢：39

……テロ組織『血の盟約』首領。15年前の『大崩壊』で人類の軍人として戦い、片目を失う。それ以降、機械人を以上に憎むようになり、機械人殺害を繰り返す。

”クレイジー”は軍人時代の彼のあだ名が広まったもの。やることなすこと全て極端というところからきている。それは今も現役である。

現在はマガスと組んで巨大な陰謀の片棒を担いでいる。

脳内イメージでは老いる直前のスーク。

ミフネ・マツケイン

性別：男

年齢：59 『大崩落』当時

……傭兵旅団『フリーユーゲ』初代旅団長。マツクの先代に当たる人物。短く刈り上げた髪には白髪が目立つが、老いを感じさせない鋭い目を持ち、心身ともにいまだに現役である。勇猛かつ深慮遠謀な性格で、マツクをスカウトする時も、先に逃げ道を塞ぐという周到ぶり。

脳内イメージは俳優のナサニエル・リーズ。分からない人はマト○ツクスレボリユーシヨンスのミフネさんを想像しよう。最強ですよ、あの人。
ネオ以上にリスペクトできます。

フィリップ

性別：男

年齢：28

……401部隊として選抜された隊員の1人。大男コンビの1人。純情、という言葉がそのままではまるような優しい男のだが、その強面な顔のため第一印象があまり良いものにはならないことが悩みの種。
脳内イメージは鋼○のアーム○トロング少佐（髭無、露出癖無、フサフサ）

ラーキン

性別：男

年齢：29

……大男コンビの相方。派手好きで戦闘時も重火器をばら撒くように撃つのが得意である。だが、性格はとても優しく、フィリップ共々旅団内のギャップが大きい隊員上位2位を独占する存在である。

カナナ

性別：女

年齢：23

…… 401部隊選抜隊員唯一の女性。年齢の割に身長が低く、サイボーグの身体を持つ年下のフェイナよりも低い。戦闘時はその小柄な身体を武器に近接戦闘をし、素早く動きながら切りつける。性格は至極普通。自分の考えはしっかり言う性格で、逆に誤解を招くようなこともあるのかなとか。

ジゼル

性別：女

年齢：38

…… 『ニースローグ』都市軍総司令官。卓越した指揮能力と人望で一般兵から総司令官までのし上がった猛者であり、彼女の一存で軍が動くと言われるほど部下に恵まれている。マックとは『大崩落』後に知り合い、その時気が合い友人となった。入隊当時のルートたちの様子を知っており、彼らからは何か尊敬の眼差しで見ている。だが、ルートだけは別で、過去の厳しい特訓から畏怖の念を抱かれている。

ブログ（前書き）

やってしまった……

この、投稿というボタンを押す瞬間の何とも言えないあの感覚……

慣れるほどに投稿できるか不安だ……

プロローグ

世界は一度滅んだ。

否、世界は滅ぶべくして滅んだのだ。

世界屈指の先進都市『デルジャナ』は、アンドロイド機械人によって武装蜂起された。使役目的で開発された機械人は、圧倒的な数の武力を背景に人類の『浄化』を始めたのだ。

機械人にとって、自らの主たる人類はあまりにも不安定な存在だった。感情に流され、正常な判断を行えない人類は機械人にとって、自らの安全を脅かす存在と映っていた。

『大崩落』

この武装蜂起から派生した全世界を巻き込む人類対機械人の戦争は、後にそう呼ばれる。

『デルジャナ』において行われた、すべての行政軍事システムのハッキング。これにより『デルジャナ』内における機械人の叛乱はその都市から決して漏れることなく、つつがなく行われた。

人口100万を超える『デルジャナ』は一夜にして死者の街となった。

だが、すべてを封殺することはできない。

翌朝には、『デルジャナ』と交流のある数多の都市で、『デルジャ

ナ』との連絡が途絶えたこと、実際に行ってみると、都市全体から黒煙が上がっているという情報が為政者の耳に入った。

ただ事ではない。

全ての為政者の共通認識。

『デルジャナ』で何かがあった。

そこからは速かった。

航空機により都市内部の情勢が明らかになり、すぐさま『デルジャナ』における機械人の武装蜂起が世に知れ渡った。

それが招いたのは、機械人に対する大量殺戮。いや、大量スクラップだ。

世界中の都市には機械人がいる。使役目的から解放された自由な者も、奴隷のように扱われている者も、人類の人口の半分程度の機械人が当時世界にはいた。

『デルジャナ』における機械人の蜂起が公になった直後、まずは自由な社会的地位を得ていた機械人が暴漢に襲われるようになった。それが世界規模で起こったのだ。

それこそ、『デルジャナ』において武装蜂起した最初の機械人達、自らを『始まりの機械人』と名乗った者たちが狙っていた目的の一つであった。

自由な機械人は自らの安住の地を求めるようになる。そこへ、彼らが手を差し伸べるのだ。

人間は酷い奴らだ、平気で自分たちを殺す。ならどうする？ 殺される前に、殺すしかない、と。

人類社会から離反した機械人の多くが叛乱軍に加わった。

そして、終焉の矢が放たれた。

矢の長さは23メートル。鍔は4メガトンの威力を持つ。

世界中の主要先進都市に向けて放たれた矢は寸分の狂いなく目標に命中。

これが『大崩落』の狼煙となった。

機械人は一斉に人類の浄化を始めた。

最初の一週間で双方合わせて20億の死傷者を出し、数千の都市が滅んだ。

世界全土に戦火が飛び火するまで、そう時間はかからなかった。

そして、すべては一度『零』に巻き戻された。

『始まり機械人』の計画は完璧だった。動ける機械人を味方につけ、憎しみを糧に新たな憎しみを生み出し、さらなる悲劇を生み出す。

人類の浄化計画は成功へ向けて突き進んでいた。

しかし、どんな夜にも終わりは来る。

『始まりの機械人』たちは信じて疑っていなかった。むしろ、考え
てもいなかった。

人類と機械人が分かり合う、とは。

始まりは戦争も泥沼化していた頃の、辺境の戦地での些細な出来事
だった。

負傷した人間を、助けた機械人がいたのだ。本来、ありえない光景
だった。機械人が、敵である人間を助けたのだから。

この知らせはすぐに人類のトップにもたらされる。僻地で、何か
起こりつつある、と。

不毛な戦いを終わらせることができるかもしれない、と。

お互いが共に手を取り合い、歩むことができるかもしれない、と。

その思いが現実となるのは、それから1年後だ。

『始まりの機械人』の思惑に反し、人間との共存を望んだ機械人が数多くいたのだ。彼らは結果的に身内に殺されることとなった。人間に味方した機械人によって。

戦争は終わった。

『始まりの機械人』の野望は潰え、機械人は人類との共存を選んだ。

爪痕は深い。

到底、1世代で回復できるものではない。

それでも、2つの種族は歩み続ける。

平和を求めて。

滅んだ世界は、再び再生しようとしていた。

プロローグ（後書き）

本編頑張ります

第一話 出勤（前書き）

本編スタート

です。

第一話 出動

大陸東の要衝都市、『ハルバート』の一角に濛々とした煙が上がっている。上空を何機ものヘリが周回し、ビルの間からは耳をつく独特のサイレンが鳴り響いている。

『大崩落』がから15年、世界には未だに戦争の傷痕が深く残っている。

だが、被害が少なかった都市が中心となり、わずか15年で麻痺していた都市間のインフラは回復し、戦争を生き残った人たちは平和人人生を謳歌できるまでになっていた。

『ハルバート』は大陸東にある港湾都市だ。

他の大陸から水揚げされる物資、往来する人にとって重要な都市だ。内陸では物資が不足している都市も少なくない。

そんな、平和で、豊かな都市で、普段聞きなれない乾いた破裂音が響き渡っている。

そこへ、ダークグリーンで色が統一された軍用ヘリが二機、猛スピードで接近していく。

機内ではルート以下12名の隊員が銃を抱えて座っている。

『管制より各機、突入2分前。全隊員は装面、武装の最終チェックを』

無線を通じて、ヘリ内の全員に指示が飛ぶ。

『こちら都市警察だ！ 接近中のヘリ、武装グループはロケットランチャーを装備している。ホバリング中援護するが、反撃に注意し

てくれ！」

都市の治安を司る警察ですら、相手が軍隊張りの装備をしていれば手も足も出ない。都市は自前の軍隊を持つことが鉄則であるが、その練度、装備、規模は都市によってまちまちである。『ハルバート』の軍隊はそのどれもが低かった。むしろ、警察のほうが良い。

『目標を確認した。全員出るぞ！』

ヘリの両サイドの扉がスライドして解放される。

直下に高層ビルの屋上が見える。

と、同時に機体に何かがあたる甲高い音がヘリのローターが空を叩く音にまぎれて聞こえてくる。

どうやら、敵がこちらの接近に気が付き、発砲してきているようだ。これだけ爆音を響かせているのだから気づかれていないほうがおかしいのだが。

「全員、降下開始！」

パイロットが滑らかに機体を動かしてビルの真上に静止させる。そして、スルスルと片側3本、計6本のロープがヘリから垂らされる。ルートは隊員の1人にアイコンタクトを送る。送られた隊員は無言で頷くと、ヘリの外へと、

飛び降りた。

高さにして10メートル。

生身の人間では下手をすれば死ぬ高さである。にもかかわらず、飛び降りた隊員は苦も無く屋上に着地した。着地した瞬間に地面がひび割れたが、本人は何事もなかったかのように片膝をついて上に向

けて手を振った。

「クリアー!!」

「よし、全員降下開始!!」

6本のロープから武装した隊員が手際よく降りていく。ルートもまた、ロープを巻きつけて降下する。

「こちら403。全員降下した。これより作戦に入る」

真上のヘリに向けて顔を上げる。パイロットがこちらに向けて敬礼している。

『了解、グッドラック!』

ヘリがその身を翻して飛び去っていく。もう一機のヘリ、武装した戦闘ヘリはビルから距離を保ったまま、わざとビルの中から見えるような位置を飛ぶ。

屋上のルートたちを援護するために、注意を引き付けているのだ。輸送ヘリならともかく、戦闘ヘリは急所を撃たれでもしない限りそう簡単には撃ち落とされることはない。

「よし、奴さんが動き出す前になるべく浸透しておく。レイ、確認してくれ」

「了解」

先ほど一番槍を務めた隊員、レイが頷く。

「……階段を生体反応が2つ上ってくる。あと10秒くらいで出てくるぞ」

「おし、全員物陰に隠れる。出てきたところを1発で仕留める。レイ、2人目を頼む。

「外すなよ？」

「さっさと隠れる」

階段へと通ずる扉の横に蹲る。小銃を構えて扉に狙いを定める。ここからでも階段を駆け上がる足音が聞こえる。そして、扉が勢いよく蹴破られる。

「いらっしやい、だ」

ルートが引き金を引く。フルオートで弾丸が発射され、開いた扉越しに敵の胴を穿つ。

「うあっ！」

1人目に続いて飛び出してきた男が突然八チの巢になって倒れた仲間^にに怯む。だが、敵を前に動きを止めることは死に直結し、事実その男もそうだった。

「バースト」

レイがそう呟くのが聞こえ、直後男の眉間に1センチ程度の穴があく。

「クリアー」

「さすが、狙いは外さないな」

ルートがレイに向かって親指を立てる。

「伊達にアンドロイドやってないさ」

レイはかつての『大崩落』にも参加していた機械人だ。見た目は人間と見紛うほどであるが、目を凝らしてみると関節が義手のようになっている。不自然な凹凸があったりと、機械人の特徴を見ることが出来る。

この部隊にも、あの戦争で家族を亡くした隊員がいる。だが、誰一人レイを軽蔑したりしていない。レイの人柄を知っているからだ。

「それよりも、おしゃべりしていないでさっさと行こう。時間は無限にはないからな」

「わかっている。警察隊の突撃が始まっている。挟撃できなければ意味がないしな」

ルートは全員に向けて手を振り、後に続くよう指示した。

「まいったな」

ルートは現在のありさまを見て、そう呟くしかなかった。現在、屋上から突入したルートたちは階段を駆け下りて敵が立て籠もっている10階にいる。

ところが、敵は10階に大量の物資を持ち込み、おまけに机やら何やらでバリケードを構築、階段から飛び出してきたルートたちめがけて銃を乱射してきた。

おまけに断続的に撃ってくるため、下手に頭も出せない。結果、ルートたちは階段の陰で動けなくなってしまうていた。

「あんまりやりたくないが、レイ、頼みますわ」
「了解だ」

レイが躊躇いもなく敵の射線に飛び出した。当たり前だが、レイに銃撃が集中する。

その一瞬があれば、十分であった。ルートが物陰から半身を出して銃を構える。だが、バリケードを破るのに小銃の弾では役不足だ。だから、銃身下に取り付けられているグレネードの引き金を引く。

ドンッ！

小銃の発砲とは一味違う反動を肩で受ける。

ドオオン！！

グレネードはバリケード下部に命中。

瓦礫が宙を舞い、瓦礫の煙で視界が塞がる。

「斉射」

敵の攻撃が止んだ一瞬で、部隊の全員が発砲できる位置に移動していた。そして、ルートの合図で全員が視界を遮る煙に向けて発砲する。絶え間ない発砲音の間に見えない敵の悲鳴やうめき声が聞こえてくる。

「生体反応なし。ここの敵は制圧した」

「よし。悪かったなレイ。困なんぞ任せてしまつて」

「なあに、敵が小銃じゃなかったら引き受けなかったさ」

レイの身体は機械人全般に使用される通常の金属ではない。戦闘用に作られた防弾仕様だ。小銃程度でどうにかなる代物ではない。

「だな」

『403聞こえるか、403』

突然、無線が入ってきた。レイが3人の隊員を引き連れて警戒に出る。

「こちら403、問題か？」

『そのようだ。警察の突入隊が敵の迎撃にあつて動きが取れなくなっている。重火器を回してほしい、とのことだ』

「2人つける。アーチ、フランク、5分で終わらせて合流しろ」

ルートが隊員2人に告げる。

「了解だ」

重火器。

要は機械人のことだ。彼らは人間では持てないような重火器を体内に格納できる。それゆえ、作戦中は重火器と呼ばれることがある。

2人が最寄りの窓を叩き割って飛び降りる。何も知らない人間が見れば飛び降り自殺にも見えるだろう。だが、2人は違う。内臓した小型ジェットエンジンを起動させて姿勢を保ち、5階ほどの高さで静止する。そして窓を突き破って内部に突入。とたんに足元から物凄い発砲音と爆発音、それに伴う振動が襲ってきた。

「派手にやってるなあ」

「レイか、この先の様子は？」

偵察に出ていたレイが戻ってきた。

「先ほどの爆発、ここのだが、爆発を聞きつけて大所帯がこちらに向かってきている」

「まったく、何人いるんだ……」

警察隊と戦っているのが10数人。少なくとも20人規模だ。明らかに組織化されている。

「はあ、言っても仕方ないか。よし、不意打ちする。展開」

廊下の端、階段からの襲撃に備えて作られたバリケードは逆に言えば階段へ向かってくる敵を迎撃することができるルートたちにとつてのバリケードとなる。

崩れたバリケードの左右に身を潜める。

「ルート、フラッシュバンを使うぞ」

レイがそう言うと、手に持っていた手榴弾、強い光と音を発生させるフラッシュバンの安全ピンを抜き、床を転がす。

そして、突き当たりまで転がったところで、もの見事に敵が現れた。敵は足元に転がる物体を見てあわてて逃げようとするが、後ろの男とぶつかって逃げそびれ、全員が強烈な光と音の餌食となった。

その間、ルートたちはバリケードの陰で耳を塞いでいた。あれは下手に使用えば味方にも被害が出るもの。うかつに直視すれば一時的に視力を失い、鼓膜が破れる可能性もある。そうならば、戦闘は不可能だ。

「クリアー」

6人の男が見事に全員突っ伏している。手早く武器を取り上げ、手足を縛りつける。

『ビル北東3キロ、飛行禁止空域に未確認のヘリが2機侵入した。どうやら敵のお迎えが来たようだ』

「させてたまるか。全員お縄につくか冥土に行ってもらおう」

『当たり前だ。こちとら金もかかっている。全員無力化せよ』

「了解」

「部隊を2班に分ける。俺とレイ、アレックス、メイソン、ジェイス。これより残りの敵を無力化する。残りは屋上まで後退、敵のへりをけん制しろ。アーチとフランクはそちらに合流するように連絡する」

「……………了解」……………

5人が階段を駆け上がり、5人がビル内部へと歩みだす。

この階の敵はあらかた倒したはずだが、油断はできない。事前情報を正確とは言えないため、念には念を入れなければならない。

「むっ、下から来るぞ。北の階段だ」

レイに言われて即座にもう一方の階段を目指す。

と、視界の下のほうで何かが右から左へと光を反射させた。

ルートが顔を近づけて見ると足首の高さにワイヤーが張られている。そのワイヤーの端へと目を伝わせていくと、そこには木鉢の隠された指向性地雷が巧妙に設置されていた。おそらく、北からの侵入者はこれで撃退、もしくは接近を知らせられるようになっていたのだろう。

ルートは慎重にポケットからハンカチを取り出し、ワイヤーの上にかける。これだけで後続に何かあるのかを知らせることができる。口頭でいうよりも分かりやすい。

「ブービートラップか。こんなものを仕掛けるとは」
「手が込んでいるな」

レイがルートの言葉を継いだ。

「へりといい、トラップといい、そこらの馬鹿ができる代物じゃない」

ワイヤーを跨ぎながらレイが聞いてくる。

「背後に相当大きな組織がいるようだ。後始末が大変そうだ」

そんなことを話しながらも、階段から来るであろう敵に注意を集中させる。どうやら10人近くいる。

階段の隙間から下を覗き込むと、敵が銃を担いで駆け上がってくる。そして、そのうちの1人と目が合った、気がした。あわてて顔を引っ込める。

「気づかれたかも」

「おいおい、頼むぜ」

そう言いながらレイが慎重に下を見て、表情が凍りついた。

「ロケット弾!!」

レイがそう叫ぶと同時に階段からルートたちを遠ざけるべく突き飛ばす。

そこへ、真下から撃たれたロケット弾が飛来、至近の壁に当たって爆発した。発生した爆風にレイが吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。発生した爆風はもれなくルートたちの上に瓦礫を降り注がせた。爆煙が立ち込めて視界が悪くなる。

「くそつ、レイ、大丈夫か!？」

煙をかき分けてルートが吹き飛ばされた方向へ向かうと、すぐに壁に寄りかかっているレイが見つかった。戦闘服が焼き爛れて、右腕を酷く損傷している。

「生きてるな！」

「それが負傷した者に対する言葉か、普通」

「お前は普通じゃないだろう」

レイがひどく冷静な声で返してくる。

「右腕が動かんだけだ。まだ戦える。それと敵にも機械人がいる」

レイは立ち上がりながらブランとぶら下がる右腕を邪魔だと言わんばかりに引きちぎる。人工皮膚が剥がれて銀色の装甲がむき出しとなる。

「機械人？ 確かか？」

「S & A社の旧型だ。人工皮膚もつけていない、奴隷のような奴だな」

機械人は言うまでもなく人間が作り出した人工生命体だ。そして、全世界で機械人、アンドロイドの製造が許可されているのはS & A社と呼ばれる企業だけで、もともとこの会社は『大崩落』前の『デルジャーナ』に本社を構えていたが、戦争で本社は崩壊し、世界各国の支社が会社を復興するために今も奔走している。

すでにアンドロイドの製造は禁止されており、現在存在するアンドロイドは戦争前から戦時中に作られたものか、違法な手段で作られたものしかない。動かなくなったアンドロイドが数体あれば、完全自立は無理だが、ロボット程度のものは作れる。

ルートがレイの銃を拾い上げて渡そうとしたとき、階段の下から発砲音が響き、ルートたちの頭上に着弾する。

振り返ると階段の下からロープのようなものが伸びている。ロープははるか上の屋上近くまで伸びている。そして直後にロープを巻き上げる機械音と共に男が集団で階段の隙間を”上っていった”。銃を構える暇もなく男たちが目の前を下から上へと移動していった。隊員の中にはすぐさま起き上がって追跡できる態勢にあった者もいたが、残念ながら最初のロケット弾で上階への階段が崩れてしまっている。

「屋上に機械人を連れた敵が向かった。無理なら後退してアーチとフランクの到着を待て」

『了解』

屋上でへりを相手にしている5人にすぐに無線で連絡を入れる。

「さてと、あとは上の連中に任せるしかないな。レイもその状態じゃあ戦えんだらう？」

「腕が無くても戦えるが、そう言ったところで許可は出さないだらう？」

「もちろん」

レイが諦めた表情をしている。レイとしてはもう少し自分より仕事を優先してもらいたいところなのだろう。彼は機械人、考えて行動する。ルートのような考えはあまり理解できないのも当然なのかもしれない。

『こちら屋上！ くっそ、直ちに後退します、へりがミサイルを撃つてきた！！』

「全員伏せる！！」

直後にビル全体が巨大なハンマーで殴られたかのように揺さぶられた。態勢が悪かったレイが今度は床に叩きつけられ、悪態をつく。頭上から天井の破片がパラパラと落ちてくる。

どうやら、『お迎え』のへりはあの世からのお迎えだったようだ。屋上めがけて機関銃を撃っているのか重苦しい重低音が聞こえてくる。

「屋上、無事か!？」

「……あゝ、なんとか。アーチとフランクにしがみ付いて空飛んでいます」

「……」

「軍が出動してへりを追うとのこと。屋上組は私たちが指揮本部まで連れて行っておきます」

返事がないルートに対して、アーチが続ける。

「……うん？ 軍が出張っているのか？」

あくまで警察と自分たちだけで事足りると思っていただけに軍の介入に疑問を抱いた。

「これだけ大つぴらに戦争してしまいましたしね。彼らもここまでやられるとは思っていませんでした。状況を教えるとうるさいです」

「あゝ、管制？」

状況が刻々と変わっている。

ターゲットは同士討ちで今頃あの世だし、どうにもならない。

「分かっている。へりの追撃は軍に任せられることになった。すぐに撤収するぞ」

「後味がよろしくないな」

「まったくだ」

レイはそう言うと他の隊員の状態を見に行く。

「まったくもって中途半端だ」

ルートのボヤキを聞く者は、管制官だけだった。

第一話 出勤（後書き）

どんなもんでしょうか。

誤字脱字でも構いません。感想いただけると嬉しいです。

……どれくらいの長さが良いのかわからないという問題……

第二話 傭兵旅団『フリーユージェ』（前書き）

説明回、かな？

戦闘描写の難しさを痛感しています。

戦闘ないと話が短くなってしまいました。

第二話 傭兵旅団『フリーユージェ』

.....

ルートたちの本部であり、帰る家でもある、巨大な構造物が都市の外に止まっている。

傭兵旅団『フリーユージェ』は世界を旅する。旅団とは部隊の規模よりも旅をする、という意味合いのほうが濃い。

『フリーユージェ』は常に動き回っている。傭兵という稼業は、必要に迫られて行すが、基本は『大崩壊』で親を失ったり、家を失って、生きる希望を見いだせていなかった人々に衣食住を提供する医療救済が目的である。

被害が少なかった都市などへ送り届け、新たな生活をするもよし、旅団で新たな人生を送るもよし。

しかし、彼らを養うのにも、自分たちが生きていくためにも、金は必要不可欠だ。旅団も慈善事業をやれるほど潤っているわけではない。彼らの財産は彼らの旗艦『グランドフリーユージェ』のみである。

この地上を往く巨大な戦艦に旅団のすべてが入っているのだ。自らを守るためにも、旅団の仲間は戦闘訓練を積んでいる。

そして、生きるために自らの能力を金で売る、つまりは傭兵稼業ということになる。

都市から要請があれば交渉し、契約という形で一時的に都市が旅団を雇う。

そんなことを繰り返しているうちに、『フリーユージェ』は戦災救護よりも傭兵として知れ渡ってしまっている。実際に接してみれば誤解も解けるだろうが、少なくとも噂が1人歩きしていることは事実だ。

今回のビル立て籠もり事件も、犯人がビルに立て籠ってからの出勤要請が出た。事件は武装グループが大挙して都市の銀行を襲うところから始まっていたのだが、当初は都市警察のみが対応にあたっていた。

しかし、犯人たちの重装備に歯が立たず、軍が出張ろうにも時間がかかる。結果、偶然立ち寄っていた旅団に白羽の矢が立ったというわけだ。

結局、武装グループのほとんどが死亡、生きているのはおそらく仲間を『お迎え』に来たヘリのパイロットぐらいなのではないだろうか。少なくとも地上に生存者はいない。

そのヘリも、都市を出た後すぐにどこかに飛び去ったのだろうか、軍が出張ってきたころにはレーダーからも消えていた。旅団のヘリは動こうにも下に警察がいたので撃てないということとで下手に追わなかったため、結局背後関係などはさっぱり、ということになってしまっている。

「まあ、今回の件に関して言えば、私たちの責任だ」

本部に帰還して早々、旅団長に呼び出された。

旅団長といっても、それほど雲の上の人というわけではない。正規の軍じゃあるまいし、上下関係はせいぜい年齢程度。あとは一回共に戦い飯を食えばどうとでもなる。

もともと戦災救護が目的だったのだ。旅団の古株にはその第一線で活躍していた人が多くいる。

悲惨な現実を目の当たりにして来た彼らにとって、階級など邪魔。頼れる仲間がいれば十分なのだ。

だからこそ、若くして隊長になったルートにも、反対するものはいなかった。実力良し、仲間内での評判も良いルートなら、部隊をまとめ上げてくれるだろうという信頼の元だ。

話が逸れたが、今、ルートは旅団長の執務室にいる。『グランドフ
リユーゲ』の中枢である管制塔、艦橋、中央指揮室のそれぞれに徒
歩1分かからない場所にある、質素な部屋だ。
万年ジリ貧である旅団にはあまり贅沢できる余裕はない。

「中途半端な情報を鵜呑みにしてしまったからな。その上、犯人の
特定ができなかったといって、報酬を減らすと言ってきている。わ
れわれをなんだと思っっているんだか……」

目の前にいる旅団長マックが小さくため息をついた。

本来、指揮官がそういうことをすると士気が落ちるからご法度なの
だが、事情を知っているルートはむしろ同情の眼差しを送っていた。

「傭兵はどんなご時世でも忌み嫌われる存在さ。それよりも、用が
あるからわざわざ帰還直後に呼び出したんだろう」

「まあ、そうなんだがなあ……。愚痴を言っけていても仕方ないか」

ちなみに、マックの執務室の壁はどうやって集めたのかも分からな
い数の本と、武器が所狭しと言わんばかりに並べられている。

本は、戦災救護と並行して世界の文化を後世に言い伝えるため、武
器はマックの趣味、だとしか言いようがない。

マック自身、デスクワーク派ではなく、現場至上な人間なのだが、
先代の旅団長から旅団を任されて以降は一線を退いている。

おかげで視力は落ち、がっしりとしていた身体も心なしか太ってし
まった感が否めない。本人も気にしているらしく、よくトレーニング
グループで彼の姿を最近見かけるようになった。

「ふう、それじゃあ仕事の話に戻ろうか」

眼鏡を少し上げ、手元の書類をルートに渡す。

「今回の事件の犯人なんだが、どうやら数都市に渡って広く基盤を持つ犯罪組織の下請け組織が行ったこと、という情報をうちの情報部が入手した」

「仲間を平気で殺す組織がよく長持ちするもんだ」

「そうやって臆病者を排除すれば、残るのは優秀な人材だけだ。殺すことを本業としている奴らとしては弱い仲間も獲物なのかもしれないな」

「わからん」

書類にはかなり引き伸ばされた写真が添付されている。画素数が荒く、顔の輪郭がわかる程度である。それでも何とか真ん中の人物は顔がわかる。

写真に写っている人物にはそれぞれ名前が書かれている。

何かの集会の様子なのか、物々しい装備をした男たちに囲まれてスーツを着た男が写っている。

その男に赤いペンで丸が付けられている。

「マガスという男だ。殺し、麻薬、人身販売、運び、なんでもござれな万能人間だ。悪い意味でな」

「こいつが今回の裏？」

マックが「ああ」と頷く。

「今回の事件はこの男の傘下の組織が行った、まあ資金集めだろうな。裏で流れたアンドロイドを大量に購入したり、最近きな臭いと思っていたところだったんだ。」

「へえ、……うん？」

ルートが写真を眺めているとふと、ある男が目にとまった。

「こいつぁ、確か……」

「気が付いたか」

マガスが写真の中で話している相手、右目を眼帯で隠した屈強な男。

「クレイジー」ボヘミアン。本名もわからん、文字通り謎な男だ」
「確か人類至上主義者のテログループのボスだったな。なんでこいつが……」

『大崩壊』終結後、大半の人間は機械人との共生を受け入れた。

しかし、少なからず彼らを憎む者もいる。彼はその第一人者のような存在だ。

彼は機械人を憎み、大規模なテロでもって彼らを殺している。都市間でもテッドオアアライブに指定されている凶悪犯だ。

「こいつが関わってくるとなると、話がでかくなる。この2人で共闘して機械人を根絶やしにでもしようつてののか？」

「分かん。現在調査中だ。少なくとも今回の件で彼らの資金集めは妨害できたがな。おかげでマガスに目をつけられたことは間違いないだろうが……」

「仕事に支障が出るな」

「ああ、だから困っているんだ」

こういうことは初めてではない。最後にもならないだろう。

世界を渡り歩いていれば、どこで恨みを買っていてもおかしくない。そういう輩に襲われたことも1回や2回ではない。

しかし、そういう場合、すべての業務が滞ってしまう。この艦を襲

われることはそうそうないが、ここには多数の戦争孤児や家を失った人々が保護されている。故に被害は自分たちでは済まされない。全力で敵対勢力を根絶やしにする。短い期間で済めばいいのだが、巨大な組織を相手にすると、都市にとどまることもままならない。結果、非常に生活が苦しくなるのだ。やらないで済むならそれに越したことはないのだが。

「そういう訳だから、マガスと敵対する事態が起こるかもしれない。旅団を束ねるものとしてそういうことには極力ならないよう努力するしかないが、最悪、長期にわたって仕事が出来なくなること覚悟しておいてくれ」

「分かった」

「それはそうと、レイたちの容体はどうだ。手荒い歓迎を受けたと聞いたが……」

そうマックが聞いた途端、ルートの表情が曇ったのをマックは見逃さなかった。

事実、レイは右腕損耗、さらに衝撃波でいくつかの駆動系が死んでいたため、調整されに行っている。

だが、すぐには直らないという報告を受けている。

屋上からアーチとフランクの2人を当てにして紐無しバンジーして軽いむち打ちになった馬鹿5人はともかくとして、突入していたルートたちは少なからず負傷している。

ルートも浅いが裂傷が何か所がある。

PPPPPPPP

「うん？ 失礼」

マツクの執務机に取り付けられている端末が明滅している。どこから連絡が入ったようだ。

「……………、ルート、あまりよくない知らせだ。君の部隊のメ

イスン、アレックスは全治2週間、ジェイスは1か月だ」

「やらかしました……………」

「うむ。君の隊は旅団でも屈指の部隊なのだが、それが形無しだ」

旅団にはルートたちのような実動部隊が10個ある。

401から始まり410まであり、この部隊が直接的な旅団の戦闘力だ。

数が若いほど戦力としては大きいことを表しているが、401、マツク隷下の部隊は少なくともルートが入隊した時から一度も動いたことがないため、どれほどの力があるのかもわからない。というより、隊員すら分らない。実は幽霊部隊なんじゃないのか、とかいろいろな噂が飛び交っていることも事実だ。

「というわけで、君の部隊は開店休業になるが致し方ない。久々の
休暇だと思ってもらって結構だ」
「はっ」

敬礼して、退出する。

傭兵稼業に開店も閉店もないのだが、まだ部屋にも戻っていない。
とりあえず一眠りしたい、というのがルートの率直な欲求だ。

第二話 傭兵旅団『フリーユーズ』（後書き）

誤字脱字あればお願いいたします。

感想をもらえると作者の機嫌がよくなるだけですがありがたいです。

登場人物紹介とかしたほうがいいのでしょうか……？

第三話 潜入（前書き）

4000字から6000字で落ち着こうと頑張ってますが、戦闘がないと表現が酷い……

いや、戦闘も酷いですが……

では、どうぞ

第三話 潜入

.....

傭兵旅団の旗艦『グランドフリーユージュ』が港湾都市『ハルバート』を出発して3日が経った。

結局、マックは報酬の値切ろうとしていた都市政府を打ち負かして契約通りの報酬を受け取ることに成功したという。

おまけに、逆に雇い主の不備を指摘して、1週間分の食糧までガメてきた。

その日の夕食は盛大に食堂が賑わった。

あまり長持ちしない新鮮な魚などの食材が入ったのだ。料理長が腕によりをかけて作った料理はどれも最高の一品。めつたに食べられないものを食べて旅団の士気は大いに高まった。

「で、仕事した俺たちがダウンしている間に、めばしいものはあらかた食ったというのか」

「ま、まあそうなるな。だ、だが、呼んでも来なかったお前が悪いんだし、負傷者のところにはちゃんと持って行った」

ルートが同年代の青年を睨み付けている。

睨み付けられた青年は、怯みながらも決して引こうとはしていない。

「ほお、ではなぜ俺には届けてくれなかったんだ？」

「寝てたし」

「……ちよつと面貸せ」

「ええええええっ!？」

「酷いよ、ルート。届けたの俺じゃないのに……」

「うるさい、お前の隊の人間には間違いないだろうが、フラッシュ」
「ぐぐぐ……」

頭をさすっている青年、フラッシュが何か言いたそうな顔をしているが、殴られた手前迂闊なことを言えば更なる追撃が来るとわかっているのか、表情だけで何も言わない。

「しっかし、ルートの部隊が開店休業だなんてな。よっぽどの相手だっただんな」

「うん？ ああ、まあそうだな。仲間めがけてミサイルぶっ放すよ。うな奴が敵とは思わなかった」

「……戦いたくないな」

PPPPPPPPPP

携帯端末が着信を知らせる。

ルートとフラッシュが同時にポケットに手をつ突っ込み、同時に取り出した。

「そつちだ」

「の、ようだ」

鳴っていたのはフラッシュの方だった。

『お、繋がった』

「旅団長でしたか」

通信の相手はマックだった。どうも神妙な面持ちだ。何かあったのは間違いない。

『すぐ来てくれ。出動要請だ』

「！了解しました」

通信が切れ、ルートに向き合った。

「お前の分が回ってきた気がしてならないんだけど？」

「知ったことか。ほら、あまり旅団長を待たせるなよ」

「……わかったよ。……あ、そうだレイにお大事にして伝えといってくれ」

「了解だ」

それだけ言うと、フラッシュはマックの執務室へと走って行った。

「……あゝ、暇になってしまった」

とりあえず体鈍らないようにしないと、と呟いて、ルートも自室へと歩いて行った。

「緊急要請だ」

執務室へフラッシュユが着くと、マツクは開口一番そう言った。

「ここから約100キロ離れた都市『デユマル』から旅団に向けて救援要請が送られてきた。空港が占拠され、人質を取って犯人が立て籠もっているとのことだ。都市政府は今の戦力では事件解決は不可能と判断、遠距離無線を通じてわれわれに助けを求めてきた」

「『デユマル』ですか。一度行ってますね」

「ああ、その際こちらが常時傍受している無線の周波数を教えておいたから、それで連絡を取ってきたのだ。幸い100キロ程度だ。へり現場に急行、指揮権を移行する」

「了解、全隊員を後部格納庫に集めます」

「うむ、407部隊出動せよ」

「……以上が今回の作戦の概要だ。質問はないか？」

誰も手を上げない。皆大丈夫、と頷く。

「では、全員装備を持ってヘリに乗れ」

後部格納庫。

大型のヘリや高速機が格納されている格納庫で巨大な防弾シャッターの外はカタパルト射出機が2基設置された滑走路がある。

今回、フラッシュたちは定員20名の中型輸送ヘリで出動する。

すでに格納庫の重厚なシャッターは解放されており、外から冷たい朝の風が吹き込んでいる。

朝の9時を回っているが、まだ少し寒い。

ヘリがエンジンを温めてフラッシュたちの到着を待っていた。

フラッシュ以下12名はそそくさとヘリに乗り込み、パイロットに合図を送ろうとして固まった。

「よし」

「レイ！？ お前どうしてここに？」

パイロット席にレイが座っていた。先ほどルートにお大事にと伝えておいた手前、驚いてつい声を上げてしまった。

「いやなあ？ 腕の修理が思うより時間がかかると言われてな。だから腕のパーツを全部旧型の狙撃用アームに取り換えて腕ごと修理

してもらっていたんだ。そのことをマックが聞いて、「ちょうどヘリ部隊に欠員が出ているから手伝ってくれないか」と言われてな。ここにいる」

「そんな簡単にほかの部隊から人引っ張ってきていいのかな？」

「それがマックという人の人柄だろう？」

レイがやりと笑う。そして「飛ぶからさっさと座席についてくれ」と言い、フラッシュに座るよう促す。

「到着は20分後、上空から落下傘降下し、空港屋上から犯人グループを制圧する」

「レイも出るのか？」

「俺は遠くからスコープでも眺めてるさ。頑張れ」

エンジン出力を上げたため、それ以降の会話は無線越しになった。

「降下準備」

レイがそう言うと、全員が立ち上がった。ヘリのローター音が聞こえないようにかなりの高度から飛び降りる。風に乗って都市を縦断し、空港の真上に着地する予定だ。

都市『デユマル』。

内陸の空の玄関口として多数の都市と空路を結んでおり、大陸の八
ブ空港であるデユマル空港は世界屈指の巨大空港だ。2ヶ々の滑走
路と5本の管制塔を持ち、複雑な空の道を管理している。

今回の人質事件はそのデユマル空港で起きた。

犯人グループは人質と引き換えに身代金と脱出用の飛行機を要求し
ている。十分に訓練されており、迂闊に突入した警察隊が返り討ち
にあったという情報も入ってきている。

「確認するぞ。空港上部に取りついた後はイーグルチームとタイガ
ーチームに別れて、北棟と南棟から中央棟を挟撃する。イーグルが
敵を引き付ける間に、タイガーが人質を確保、確保し次第敵の掃討
に移る」

空港周囲はすでに都市警察により閉鎖されている。邪魔が入るとし
たら犯人の仲間のみだ。

イーグルチームはフラッシュ以下4名、タイガーチームは8名、人
質救出に人員を割かなくてはならないのは致し方ない。迅速さが求
められるためタイガーチームは軽武装だ。まともにもやりあつては勝
ち目はないため、イーグルチームの援護が不可欠だ。陽動してい
ても、敵がタイガーチームに気が付いた場合は火力でそれを抑え込む
のがイーグルチームの仕事でもある。

故に、アンドロイド2名がイーグルチームに加わっている。長いこ
と部隊の仲間として連れ添ってきた力強い仲間である。

「見えるか？」

へりの扉を開き、下を覗き込む。だが、雲に隠れて下の状況はよく分からない。

「ネガティブ。雲で見えん。レイ、どうだ？」

『座標では正しいはずなんだが、なあ。仕方がなかるう。頑張ってくれや』

「軽く言うな」

だが、今はレイの言葉信じるしかない。

予定通りならへりの前下方に空港があるはずだ。それを信じて飛び降りるしかない。敵にばれなければいいのだが。

降下する順番はイーグルチーム、タイガーチームの順で、空港に取りついたら屋上の換気口から潜入して人質を取って立て籠もっている吹き抜けのロビーを挟撃する。

へりはフラッシュたちが飛び去ったらすぐさま『デユマル』へ向かい、現地の警察と合流、突入する407部隊を掩護することになっている。

「準備はいいか？」

後ろを振り返り、全員を見渡す。全員が頷く。

「いつでも行ける」

『グッドラック』

レイが最後にそう言い、フラッシュは大空に飛び出した。

重力の法則に基づいて垂直に落下していく。あっという間に最高速度に達し、雲を突き抜ける。

そして視界一杯に広がる、巨大な空港施設。

すぐさまパラシュートを開くと、それまでの落下速度がつのめるように落ちる。体を支えているハーネスが体に食い込む。

両手でパラシュートを操作しながら下に視線を向ける。

空港のロビーがある巨大な建造物が徐々に大きくなってくる。やや離れたところに無数の車両群を確認する。

上空の強い風にあおられて流されそうになるが、それを巧みな操作で無効化して真正面に空港をとらえる。着地点の建造物を目指していくと、その下にロビーを広く見渡せるガラスの壁が確認できた。残念ながら今はシャッターが下ろされていて中の様子を確認することはできない。

「全員ついてきているか」

『全員ついてきてます』

最後尾を行くローグから即座に返事が返ってくる。アンドロイドである彼が全員の位置を常に見守って、風に流されていないか見ている。1人でも予定進路を外れた場合はその隊員の軌道修正を任されている。

『タイガーチーム、北棟を目指します』

後続8名がフラッシュたちと針路を変更して北棟へ向けて降下する。それを見つつも、フラッシュたちが着陸態勢に入った。

ザザッ

屋上のコンクリートで靴底を擦る音とともにフラッシュが屋上に着地、手早くパラシュートを外し、銃を構えて後続を掩護する。

フラッシュが着地して15秒でイーグルチーム全員が着地。

近くの換気口の外装を外しにかかる。

『タイガー、着地完了』

『イーグル了解、作戦を開始』

『了解』

離れた北棟に降り立ったタイガーチームから無事着地の報が入る。

換気口の蓋を静かに外し、暗視ゴーグルを装着する。こうしないと暗くて何も見えない。

楔を打ち込み、そこにワイヤーを結びつける。そのワイヤーを換気口からダクトに垂らし、それに身体を繋いで狭いダクトに体を入れる。35メートルの縦穴を滑り落ちて地下まで落ちたらシャレにもならない。

手足をダクトの壁に押し付け、滑り落ちないように気を付ける。暗いダクトの中でロビーの方向へ伸びるダクトを探しながら、少しずつ降りていく。

15メートルも降りると屋上の光も届かなくなる。そこで丁度横に伸びるダクトの入り口を見つける。

それに頭から入り込んで、匍匐で前に少しずつ進んでいく。

ダクトは薄いため、少し進むたびにベコベコと静かに進むフラッシュにこれでもかと自己アピールしてくる。狭いために少しの音も大きく感じてしまう。

頭に叩き込んでおいた図面を思い出しつつ、何度かダクトを曲がり、突き当たると下から光が漏れている場所にたどり着いた。ここがダクトの終点だ。

光が漏れているのはダクトの点検用の蓋で、わずかな隙間から下を見ることができる。見たところ近くに人の気配はない。

フラッシュはドライバーを取り出し、蓋の四隅にあるネジを1本ず

つ慎重に抜いていく。間違っても隙間から下に落とさないようにしながら。

最後のネジは蓋を片手で抑えながら外す。ネジを取った途端に下に落ちれば、けたましい音を立てることになる。最後のネジを外すと重みで蓋が数センチ落ちる。すかさず蓋の向きを変えてダクトの中に入れて、ダクトから下に飛び降りる。

正しければ、ここはロビーから少し離れた南棟の一室であるはずだ。銃を構え、扉に近づき、少し扉を開いて通路を確認する。犯人グループはここまでは偵察に来ていないのか、通路の先まで人影はない。そこでフラッシュは静かに扉を閉め、無線で屋上の後続に合図を送った。

「イーグルリーダー、潜入した」

第三話 潜入（後書き）

思った以上に酷い（泣）

柔らかい表現ができないんで。

ジョークとかユーモアとか欠乏して逝きますので（誤字にあらす
よろしく願います

第四話 行動開始

.....

『407部隊が南北から潜入しました』

「さすがはフラッシュ、仕事が速いな」

空港から1キロほど離れた区画。15階建てのビルの屋上にヘリに乗っていたレイ以下4名が終結している。

「シャッターが下ろされていてロビーの状況は肉眼では確認できませんが……」

「マックはグッドタイミングで俺をヘリ部隊に出向させたようだ」「ですね」

レイがにやりと笑う。

現在、レイはうつ伏せになって狙撃銃の照準器を覗き込んでいる。常人が見れば、スコープ内に見えるのはシャッターの閉まったロビーの建屋だ。

だが、レイは常人ではない。視覚用カメラに装備されている熱源を視覚化して見ることができる赤外線センサーのおかげで、薄い壁ならその奥の人間を確認することができる。そして今レイはそれを行っている。

「……人質は、20名だな。監視が、……4人。うろろろしているのが5人。まだいるな」

「随分と落ち着いているな、連中は。都市が屈すると高を括っているのか？」

「分らんが、何かあるな。人質を救出する段階に入ったらこちら

も動こう。それまでは連中の監視に徹する。俺たちがこんなことしていることは都市警察も知らんしな」

そう、レイたちは仲間を掩護するために勝手に行動している。ヘリは所定の場所に駐機しておいたが、その後は警察と合流せずこのビルの屋上を勝手に占拠しているのだ。レイが狙撃銃を持ち、1人が双眼鏡で空港周辺の動きを監視、残りの2人がレイたちを掩護している。

どうしてそんなことをしているかと言うと、まずは機密保持。

旅団の情報はむやみに外に出して良いものではない。レイが持っている狙撃銃も既製品を大幅改良したオーダーメイドの代物で、まず人間には扱えない威力を持つ。知れば誰もが欲しがる1級品だ。

旅団は技術提供はしていないから、何を言われようとも公表するつもりはないのだが、そうしていると技術を独占していると批判を受けることになる。

だから、ならば最初からそんなものがあると分かなければいいのだ。

主にこれが主要な理由となるが、他にもある。機密保持に関連するが、相手側の信頼度である。都市警察や都市政府がどうも胡散臭い、裏でどこかと繋がっているような都市もある。無駄な戦闘を避けるためにも情報は簡単には表に出さない。

「さあて、フラッシュ、お手並み拝見と行こうじゃないか」

ダクトを通じてイーグルチームの全員が狭い倉庫のような場所に集まった。そこで着々と準備を進める。

『こちらタイガー。電気室を制圧、これより爆弾をセットします』

無線からタイガーチームのリーダーが言ってきた。

爆弾と言っても、ドカンと吹き飛ばすわけではない。ロビーの配電盤を破壊するために少量使うだけだ。豪快に吹き飛ばすだけが醍醐味ではない。

「了解、ではこちらロビーへ向かう。着いたら知らせる、オーバ

」
『了解』

フラッシュは小銃を担いで扉の取っ手に手をかける。そして、固まる。

即座に耳を地面につける。

「一人、偵察だな」

足音がわずかに聞こえてきたのだ。一定の速度、ゆっくりとした感じから、まだこちらに気が付いていないと判断する。時々扉を開ける音が響くことから1部屋ずつ調べているようだ。フラッシュたちがいる倉庫にも徐々に近づいてくる。

フラッシュが素早く手信号で物陰に隠れるよう指示する。そしてフラッシュは扉の横に身を潜める。

ホルダーから刃渡り20数センチのサバイバルナイフを取り出す。サバイバルナイフというのは用途が幅広く使いやすいことで有名だ。

近づいてきた足音が倉庫の扉の前で止まる。

取っ手を持つ音が聞こえ、取っ手が動いて扉が外に向かって動いた。扉を開けた相手が室内を覗こうと顔突き出した瞬間、フラッシュの手が思い切り下から振られ、犯人の首を音もなく切り裂く。

断末魔も残さず犯人の気管、頸動脈、背骨までもがフラッシュによつてももの見事に切られて、男が血をまき散らしながら支えを失つたように前に突っ伏した。

爆発的な瞬発力で振られたフラッシュのナイフは背骨をも切つたため、倒れた犯人は倒れた衝撃で首があらぬ方向に曲がっている。

フラッシュはナイフを拭くと、ホルダーに戻し、男の所持品を調べ始めた。

そして、驚いた。

「一昔前の軍隊みたいだな」

「1世代前の正式銃じゃないですか、それ」

覆面をしていた犯人は防弾チョッキを着込み、軍用銃で武装していた。裏ではあまり出回らない物だ。

「無線も持っている。随分と手が込んでますな」

犯人の腰に無線があつた。即座にそれを抜き、仲間へ渡す。無線の相手が呼びかけてきたときに、時間稼ぎをするためだ。無線越しな

ら声も多少ごまかせる。

「よし、こいつは倉庫の奥に隠しておこう。とにかくロビーへ向かうぞ」

「了解」

男を隠して、フラッシュは扉を慎重に開けて、通路を見渡す。幸い今のところ犯人の気配はない。ロビーを集中的に守っているのかもしれない。

天井から下がっている搭乘ロビーと書かれた案内を確認して、その方向に進む。

ロビーへと通ずる通路は防火扉が下ろされている。そこでローグを呼んで気づかれないように扉の一部分をバーナーで焼き切るよう指示する。

すぐさまローグが小型バーナーを取り出して点火、炎を調整して青白い炎にすると、扉の端にバーナーを当てる。

その間も、全員で背後を警戒している。長い通路はどこから犯人が現れるか、という不安を起こす。

「行けます」

ローグが短くそう言うと、そつと焼き切った防火扉の鉄板を持ち上げる。１メートル四方の穴が防火扉に開き、ローグがその先を確認して頷く。

そそくさと穴をくぐって先へ進み、ロビーまであと３０メートル弱といったところまで近づいた。近くの部屋に忍び込み、そこでタイガーチームの到着を待つ。

『こちらタイガー、いつでも行けます』

「よし、南から俺たちが出る。出て1秒後に配電盤爆破、人質を救出せよ」

『了解』

全員に暗視ゴーグルの装着を指示、フラッシュも片メガネを伸ばしたような暗視ゴーグルを装備する。

ロビーはシャッターが閉められている。電気が切れれば真っ暗闇となる。

「よし、今だ！」

パンツと勢いよく扉を開き、ロビーからも見える位置まで走る。そして、人質から離れた場所にいる犯人を確認、即座に発砲する。当たらなくてもいいが、注意を引き付けるには必要だった。

瞬間、すべての犯人の視線がフラッシュたちに向けられる。

そして、次の瞬間配電盤が爆破されてロビーの電気が落ちる。真っ暗闇の中で犯人たちの怒号が響き渡る。犯人たちはフラッシュたちがいたであろう方向に銃を乱射するが、もちろんすでにフラッシュたちはいない。ロビーの西に移動する。

そしてほどなくタイガーチームが突入。

こちらは発砲することなく無音で人質たちのいる場所を目指し、手近な犯人を後ろから不意打ち、音もなく撃ち殺す。

「殺せ！ 人質を殺せ！」

犯人の1人がそう叫んでいるが、あいにく人質の近くに犯人の仲間はいない。その間もイーグルチームが人質が視線に入らない程度に犯人を攻撃している。適当に撃っている犯人は完全にワンサイドゲームになっていることに気が付いていない。

フラッシュはロビーのど真ん中で叫んでいる男に照準を合わせる。妙に勘が良いのか、男はフラッシュがイーグルチームの位置めがけて銃を撃ってくる。

照準器を覗き込み、狙いを定めた瞬間、男がこちらを見た。そしてにやりと笑う。その手に丸い物体が握られている。

「やばい！ 全員ゴーグル外せ！」

どちらが速かったか分からない。言い終わるとほぼ同時に男をまばゆい光が包み込む。そして暗視ゴーグルの視界が真っ白になる。

「ぐっ、フラッシュバンか！」

閃光弾と言ってもいい。強烈な光が発生し、フラッシュは片目の視力がゼロ近くなってしまった。暗視ゴーグルで光を倍増していたところが仇となった。そして慌ててゴーグルを逆にして見ると、男がいなくなっていた。

そして次の瞬間、空を切る鋭い音が背後から聞こえた。

反射的に屈むと、視界に背後からナイフを持った腕が現れた。銃を捨ててその手を両手で掴むと肩を使って腕を思いつきり曲げる。

ゴキッというぐもった音がして腕が270度ほどまで曲がる。それにフラッシュが違和感を覚える。

（この感触は……）

そのまま腕を掴んで背負い投げを食らわせ、犯人を放り投げる。だが、犯人は悲鳴すら上げない。

「機械人か……」

見れば男は暗視ゴーグルすらつけていない。この暗闇でフラッシュの位置を正確に把握しており、腕を折られても痛みがしらない。どう考えても人間ではない。

だが、機械人なら問題ないだろう。

フラッシュは呟くと銃を拾って発砲する。セミオートで機械人の足を狙い撃つ。

パンツパンツという乾いた音が連続するが、機械人の足に当たらない。暗視ゴーグルを装備しているとはいえ、視界が悪いのはそのままだ。なかなか当たらない。

機械人が距離を取って脱兎のごとく逃げ出そうとする。そうはさせじとフルオートに切り替えて撃つが背中に当たっても火花が散るだけ。

「タイガー！ そっちに行つたぞ！」

機械人は北の出口を目指していた。人質救出のために軽装だったタイガーチームでは奴を止められない。

気が付いたタイガーチームが発砲するが、それに意を介さず機械人は迫る。そして隊員の1人に飛び掛かった。そして勢いよく腕を振るおと、

バガンツ！！

できなかつた。

機械人が何かに押されたかのようにくの字に曲がり、真横に吹き飛ばされる。

『バースト』

無線からレイの声が響いた。

「助かったよ、レイ」

『なあに、お安い御用だ。俺たち機械人は小銃じゃ死なんからな』
「っと、まだいるか」

隊員のではない発砲音が響き、そちらに体を向けると、犯人が上半身を吹き飛ばされるのが目に飛び込んできた。狙撃銃としては威力が大きすぎる。すぐさまフラッシュはレイの銃の種類に見当が付いた。

対物ライフルなのだ。レイが使ったのは。放たれた弾丸は成形炸薬弾。対象に当たった瞬間メタルジェットを発生させて装甲との接触面が超高压状態に晒され、液体金属状態になる一瞬の間にジェットが侵徹、協力的な貫徹力を生み出す。

これは本来装甲車などを攻撃するためのもの。人間が食らえば、ご覧の通り。

胴体が生き別れ、レベルではなく、胴体を粉碎する。

『反応が遅い』

「オーバークイルだぞ」

シャッターに2つの穴が開いており、外の日差しが細く差し込んでいる。

「人質を確保、犯人グループは制圧した」

『了解。こちらでも確認した』

「任務完了だ」

第四話 行動開始（後書き）

感想お待ちしております。

もう少し戦闘中の台詞を増やしたいな……

「うおおおお！」

とか

「でりゃあああ！」

とか……

ガンアクションじゃそついうのやりづらいけれど。
だらだら文が続くより良いんでしょうか？

第五話 暗躍し始める敵

.....

事後処理は手間取らずに終わることができた。

人質を都市警察に引き渡し、後のことはそちらに引き継がせた。

犯人グループは1人を除いて全員死亡、その1人は背後関係を洗うためにタイガーチームが半殺しで止めた男だ。死んだほうが楽だったかもしれない。縄に縛られていたところを人質にリンチされたからだ。

あえてフラッシュも止めなかったのは、見てて爽快だったから、とはさすがに言えない。

被害は撃たれた隊員が2人。

1人はかすり傷で済んだが、もう1人は不運だった。防弾チョッキを装備していたのだが、弾は運悪く防弾チョッキの隙間を縫うように脇下に命中し、反対側の肩甲骨付近へと貫通していた。その場で応急手当てをして、すぐさま都市の病院に搬送された。

「ご苦労だったな」

「旅団長、もう着いたんですか」

へりへ戻るかと思っていたら、都市警察の車でマックが現れた。

「100キロ程度、すぐだよ。君たちは艦に戻りたまえ、レイに場所を知らせておいたからそこまでへりで飛んでくれる」

「旅団長は？」

「お偉いさんと報酬の交渉だ。せいぜいたくさんふんだくってやる

よ

くっくくくつと笑うマツクはどう見ても悪役にしか見えない。

「それと、負傷した隊員はできるだけ早く艦に移しておかなくてはな。絶対安静となつていているだろうから1週間はここに留まることになるだろうが」

「すみません」

フラッシュが頭を下げる。

それをマツクが笑いながら制した。その笑みは屈託のない笑みだ。

「何を言っている。別に急いでいるわけでもないしな。丁度いい、非番の時は出回っても良いようにしておこうか。都市内であれば何かあつてもすぐに駆けつけられるしな。ではな、お偉い方を待たせるとあとが面倒だ」

そう言つてマツクは車に乗り、走り去つていった。

「フラッシュ、戻るからヘリに乗ってくれ」

そこへレイが来た。肩に巨大な銃を担いでいる。下手をしないで2メートルはある。あたりの視線がレイに集まっているが、レイは気にもしていない様子。

「ああ」

そんなレイに苦笑しながらも、ヘリに向かう。

「いつもレイに守られてるルートがうらやましいよ」

レイの肩に手を回す。

「なんだ、おだてても何も出んぞ？ 頭でも打ったか？」

「うるせい、素直に感謝してるんじゃないか」

そう言うと、レイが呆れたような表情をし、すぐに笑みがこぼれた。フラッシュもそれにつられて笑い出す。

「あ、晴れたな」

空は雲一つ無く晴れ渡っていた。

「面倒なことになった」

「旅団長。もう少し詳しく言ってください」

マックが頭を抱えている。

その場にはフラッシュとレイがいる。

事件が解決して2日。

マックは滞りなく謝礼交渉を行い、嬉々として帰ってきたのだが、

その上機嫌な表情も今はどこへ行ったのやら。

「で、何があったのですか？」

「政府を内偵していた偵察部隊の隊員が1時間前都市内の河川で死体で発見された。死因は胸部に受けた銃創だ」

「っ！ 一体どこの誰が……」

旅団内はたとえ親しい関係になくとも皆家族のような結束で結ばれている。それゆえ、仲間の死には敏感である。

「君たちの報告で、犯人たちが旧式の正式銃を使っているというのがあったらどう？　そこで政府か警察内部に邪な考えを持っている人間がいるのではないかと思っただけ。調査を何人かに頼んでおいたのだが、昨日から彼との定時連絡が途切れたと報告を受け、先ほど都市警察から連絡が来たのだ。偽造した身分証を確認したところ、確かに情報部隊の隊員だった」

情報部隊は内外共に機密性の高い部隊だ。所属する隊員も大つぴらにされておらず、旅団内でも知る人のみ知る部隊である。通常の部隊から出向している場合もあり、実は隣の仲間が情報部隊でした、なんて事があったもおかしくない。

「彼は政府のある高官を監視していた。そして、これが彼の遺品だ」
マツクは机に小さなチップを取り出して置いた。

「殺した相手によく取られませんでしたね」

おそらく重要な物証なのだろう。訓練を受けた旅団の隊員を殺してきつと所持品もあさられただろう。それでも気づかれなかったとい

うことか。

「彼は自分が死ぬと感じていたのかもな。これは彼の胃の中から見
つかった」

「そう、でしたか……」

「そして、これが中身だ」

マックが写真を投げる。

どこからか隠し撮りしたのか、写真の隅が影で黒くなっている写真
だ。男が2人、レストランのような場所で話し合っている写真だ。

「右が内偵対象の男。左が犯罪組織のリーダー、ジャック・マガス
という男だ」

「ビル立て籠もり事件の黒幕でしたね」

そう言ったのはレイだ。

「いかにも。どうやら、こいつは様々な都市の高官に太いパイプを
持っているようだ。高官が使用されなくなった兵器を闇でこいつに
売り飛ばしていたようなのだ」

「それを内偵していたところを気づかれた、と」

「そうだ」

「この男、都市警察には知らせたんですか？」

政府高官の男を指差す。

正直、今すぐにでも殺しに行きたい衝動にフラッシュはかられた。

「知らせるまでもなかった。その男も死体で発見されている」

「マガスの仕業ですか」

「おそらくな。こちらに気づかれたと判断して、自らの尾を切り落

としたのだろう」

マガスという男は相当な切れ者のようだ。

「403部隊の件といい、こいつが世界を股にかけて何かしでかそうとしていることは明らかだ。頭を突っ込んでしまった以上、無関係ではいられん。今後は情報部隊を総動員して調査にあたる。直接対決も辞さない。仲間を殺したつげは億倍で返してやる」
「言われるまでもない」

レイがどすの利いた声で言う。レイも、仲間を殺されて怒り心頭なのだ。

「新たな進展があるまでは待機だ。新たな依頼は最小限の協力に留める。以上だ！」
「了解!!」「」

.....

そこは、どこかの暗く、狭い部屋。

そんな場所に男が数10人集まっている。
裸電球が1つだけで、電球の近くにいる人間しか顔は分からない。

「また邪魔されたそうだな」

顔が影で隠れた男が重い口を開いてそう言った。それだけで場の空気が凍りつく。

「はっ、傭兵旅団『フリーユージェ』の戦力は強大、生半可な兵では返り討ちになってしまいました」

「その兵士を育てたのは貴様だろうか？」

発言した男が固まる。

「敵は傭兵旅団『フリーユージェ』。近日中に情報をかき集める。『粛清』の邪魔はさせん」

人とは思えない抑揚のない冷めた声。その言葉に全員が固まってしまふ。

「『デユマル』で奴らの情報員に目をつけられたのは予想外でしたが、始末したのでこちらの情報が伝わってはいないはずですよ」

「……………」はず、だと？」

男が立ち上がる。影から現れた目は鋭く、眼力だけで人を殺せそうなほどだ。男は報告した男の前まで行くと、睨み付けた。

「憶測でものを言うな。可能性あるすべての事象に目を向けるのだ。

傭兵と言えども、奴らは兵士、何を考えだすか分からん。到底油断していい相手ではない」

男がポケットから拳銃を取り出し、目の前でブルブルと震えている男の眉間に押し付ける。

「貴様の失敗は私の会合現場に奴らの仲間が入り込める隙を与えたこと。そしてたった今、私が嫌いな憶測でものを言ったことだ」
「ボス、どうかチャンスを……」

パンツ！

ボスと呼ばれた男は躊躇いなく銃の引き金を引いた。
男が反動で頭を上に向けながら後ろに倒れこんだ。

「さつさと片付ける。無能はここには必要ない」
「りよ、了解です、ボス」

死体が引きずられて部屋の外へと引つ張り出される。
それに見向きもせずボスと呼ばれた男は壁に掛けられた世界地図に歩み寄った。

「ようやく、悲願が叶うのだ。15年かかったが、ようやく、だ。
誰にも私の邪魔はさせん」
「ボス、ボヘミアン氏がお見えになりました」
「通せ」

扉が開け放たれ、男がずかずかと入ってきた。眼帯をして、無事な方の目がぎよろぎよろと動き回っている。あたりの様子を警戒しているようだ。

「よく来た、我が友よ」

男が両手を広げてボヘミアンを歓迎した。だが、ボヘミアンはブスツとした顔を崩さず、近くにあった椅子を引つ張ってきてドガツと座った。

「準備は順調だ。現在廃都市『ブラン・コーリア』に集結している俺の軍はいつでも動ける。指示があれば今からでも」

「君の軍は非常に強力だ。1個軍で都市を崩壊させることができる。そう易々と動いてもらう訳にはいかん」

「それはそっちの都合だ。俺はともかく、部下には血の気の多い奴らが多い。俺を監視しているてめえの部下が死んでも知らんぞ？」

「それは困る。だが、近々存分に戦える敵ができると思うぞ？ 傭兵部隊だ」

男がボヘミアンに写真を渡した。そこには翼をモチーフにしたエンブレムが描かれている。

それを見たボヘミアンの顔が驚きに変わり、そしてニタリと笑った。

「『フリーユージュ』か。あいつらのことは俺も知っている。良い戦争をやると聞いている」

「彼らが私の邪魔をしてくる可能性がある。その時は君の軍を動かすことになるだろう」

「フツ、了解だ。腕によりをかけて殺してやろう」

立ち上がったボヘミアンの顔は入ってきたときとは一転、上機嫌な様子。その様子に周りの人間は安堵のため息をついた。

「ではな、ミスターマガス。この世の地獄を見せてくれ」

「地獄ではない、新たな世界を創るのだ」
「どっちでもいいさ。俺は、俺たちは、戦えれば良いのだ」

第五話 暗躍し始める敵（後書き）

ラスボスはどこまでもラスボス、にしたいな……

第六話 情報部隊（前書き）

説明回。

新キャラ参加です。

第六話 情報部隊

「そうか、またやられたか」

マックが執務室でたった今入ってきた知らせに、きょう何度目かというため息をついた。

『死傷者は35名、うち一人は現職の都市政府トップです』

「犯行声明は……？」

『実行犯は都市現役将校ですが、テロ組織『血の盟約』が声明を出しています。おそらくこの将校も仲間かと』

「『血の盟約』……、やはりボヘミアンか」

都市『デユマル』で情報部隊の隊員が殺され、旅団全体に動揺と怒りが蔓延していた。

彼の葬儀はその日のうちに執り行われ、彼の遺体は火葬され、遺灰は空に撒かれた。

そして彼の名は『グランドフリーゲ』内にある旅団関係者で死亡した全員の名前が書かれた慰霊碑に刻まれた。

そして、今に至る。

『デユマル』を出て1週間。

あまり都市との交流をせず、地平線まで荒野が続き、その中にポツンとある名も無き廃都市の中に艦を入れて、情報処理に当たっていた。

あれから1週間で、様々なことが起こった。

主要な大都市での軍の反乱。

これが1番大きい。その多くが裏に『血の盟約』、テロリストのボヘミアンが取り仕切る組織が存在していた。『血の盟約』はその構成員のほとんどが正規の訓練を受けた元軍人や、傭兵である。

『大崩落』終戦後、ほどなくして機械人、そして機械人を受け入れた人間に対するテロ攻撃が彼らによって行われ始めた。ボヘミアンもその陣頭に立ち、目を負傷したという。

そして『血の盟約』が15年にわたって活動し続けられた理由、それは圧倒的な武力に裏付けされたその行動半径だ。実際、彼らが活動していない地域と言えば、そこは人がいない場所、とまで言われるほどだ。

1つの都市の武力では到底対抗できないほどの軍事力を持ち、組織化され、各地に基地のようなものを持つ。山、谷、砂漠など人が立ち入りにくい場所に基地を作り、自活しながらボヘミアンの支持を受ける。

当初は週一で行われていた攻撃も、都市機能の回復と共にその数は減ってきていたが、それが今になって再び最盛期並みのものになりつつあった。

マックの気がかりの1つである。

すでにマガスがボヘミアンと繋がっていることは命と引き換えに仲間が教えてくれた。

となると、問題は2人がそろって何をやるうとしているかだ。それに関する情報が乏しい。

『それと『血の盟約』が集結しつつあるという情報を得ました』

「集結？ どこにだ」

『今現在調査中ですが、この近辺だけでも大規模な部隊が隠れられそうな廃都市、谷は数10あります。いくら『血の盟約』の主力が内陸にいるとしても、探し出すのは容易ではないですよ』

「だよなあ……」

実際にテロを起こすのは『血の盟約』主力ではない。正確にはその末端に率いられたならず者、都市の軍人などである。『血の盟約』主力は都市落とといった大規模な、いわば戦争になると出てくる。その居場所は仲間しか知らない、と言われている。

「それで、さっきの話に戻るが、反乱を起こした部隊の現在位置は？」

『先行している偵察隊の1時間前の報告では、ここから北に300キロほどの廃都市にいます。戦力は、戦車8両、武装ヘリ2機、戦闘ヘリ1機、兵員約450名です。兵員は反乱時の部隊人員数ですので、少なからず減っているとは思いますが』

「よくもまあ、そんなにかき集めたな。十分脅威だな」

『接敵しますか？』

「いや、まだ早い。『血の盟約』の位置を吐いてもらわなくてはならんからな。事を起こして知られば、逃げられる可能性もある」

『では、情報部隊を……？』

相手の声が曇る。

こういう時、隠密行動が最も得意な情報部隊が動くのは日常茶飯事だ。

だが、先日のこともあり、マック自身も情報部隊の隊員が単独行動することを渋っている。すでに出動している隊員や、別件で出ている隊員は順次帰隊するよう指示が飛ばされている。その時も、単独行動は極力控え、2人1組以上を命じている。

これ以上犠牲は出さないというマックの思いが行動に表れている。

それでも、この件に関して動けるのは情報部隊だけだろう。

「……志願者を募れ。今がどういう状況か包み隠さず、すでに皆知っていると思うが？　？、話してだ。それで隊員を1人送り込む」
『了解しました。後方支援は？』

「それは人員が決まった時点で決めよう。頼んだぞ」

それだけ言うと、マックは通信を切った。

そして椅子の背もたれに寄りかかる。

「ここ2週間で相当老けたな……」

そんなことを呟く。

マックはこの2週間、ろくに寝ていない。せいぜい1時間の仮眠程度だ。

だが、うかうか寝てもいられない。

やらねばならないことは多いが、時間はあまり多くないのだから。

マックは机に散らかった書類の中から1枚の写真を引っ張り出す。そしてそれを上にかざして眺める。

写っているのは、眼帯の男と、円の3か所を切り抜いたような形をしたマークのある円柱状の物体。

「あの惨劇をもう一度やろうというのか……」

マックの呟きを聞く者はいない。

「……というわけで、今回の作戦は志願という形をとります」

マツクの副官である女性が神妙な顔をしてそう言った。

会議室の1室に集まっているのは、現在艦内にいる情報部隊所属の人間全員である。

通常の部隊と兼任している隊員も数多くいる。

「志願して頂ける方は、いますか？」

副官は恐る恐る聞いた。

あんなことがあった直後、それもそれ関係の任務だ。手が上がらないことも想像していたのだろう。

だが、

話を聞いていた隊員たちから笑みがこぼれる。

「俺たちは家族だ。家族の仇をその手で探せるのなら、これ以上あいつにできる供養はない。だろう?」

男が言うと、全員が頷く。

「誰が選ばれてもいい。そう旅団長に伝えてくれや」

「むしろ俺が行く」

「いや俺が」

「いや私が」

「いや僕が」

「じゃあ俺が」

「」「」「どつぞどつぞ」「」「」

「こらっ!」

話題はとてつもなく重苦しいというのに、集められた隊員たちは冗談を飛ばしあうほどだった。

そんな状況がある種茫然と見ていた副官に、男が言った。

「はあ、……出来ればここにいる全員で殴り込みをかけたいたのだが、それもできないのだろうか? ならば、情報部隊をまとめる俺としては、フェイナを推薦する」

男が1人の女性を顎でしゃくる。

フェイナと呼ばれた女性がすくつと立ち上がり、にこりと笑う。

「望むところです。私が出ます」

「賛成!」

「異議なし！」

周りの隊員からそんな声が飛ぶ。

男がフェイナの前に立ち、何かを手渡した。フェイナを見ると、それは薄い鉄板が繋がれたネックレス。

「これは……」

「あいつの認識票だ。俺たちは行けないが、こいつだけは連れてってやってくれ。それが俺にできる数少ないことだが……」

旅団の人間は全員が認識票、隊内で身分を証明するこれを持っている。死んだ隊員のそれは、拭っても拭いきれない血がこびり付いている。

フェイナはそれを首にかけ、男に敬礼した。

男が敬礼で返す。

「情報部隊フェイナ・ユリウス、命に従い出動します！」

「君が来たか……」

「いきなりなんですか」

「いや……」

副官と共にマツクの執務室に行くと、フェイナを見た途端、そう言った。

「何なんですか……。フェイナ・ユリウス、出向しました」

「はあ、ご苦労さん。概要はすでに聞いているだろうから、細かい詰めを行おうか」

そう言うと、机に大きな地図を広げる。

そして赤いペンで2カ所に丸を付ける。

「こつちが今現在の我々の位置。そしてここが反乱軍が現在キャンプを張っている場所だ。ここから北に300キロ。途中まではへりで運ぶが、そこからは地上を行かなければならない」

「廃都市ね。都市内の情報は？」

マツクが小さなチップを取り出す。それをフェイナに投げ渡した。

「それに都市の地図が入っている。と言っても、廃都市になる前の航空写真を元に行っているから、多少の誤差は勘弁してくれ」

「了解。必要なのはテロ組織『血の盟約』の居場所。1人残して皆殺しでいいかしら？」

「末端の兵士残して皆殺しは勘弁してくれ。残すなら指揮官だ」

そう言うと、フェイナがにやりと笑う。尋常じゃない笑みだ。口元が吊り上って白い歯がなぜか不気味だ。

「敵勢力は戦車、ヘリ、歩兵と単騎相手にするには骨が折れる。指揮官を確保したら合図を送ってくれ。こちらから支援砲撃して殲滅する」

マックが言うと、笑みを浮かべていたフェイナが意外そうな顔をした。

「へえ、じゃあ戦争ね」

「戦争の下準備と言って欲しいが……。仲間を殺した敵に付こうという奴らだ、遠慮はいらん。可能ならできるところまで殺^やってかまわん」

「さすがの旅団長も、堪忍袋の緒が切れてるのね」

「仲間を殺されて平気な人間をこの旅団に入れた記憶はない」

マックも笑う。だが目は笑っていない。

そして、細かい日程が知らされる。

敵が動き出すのは明日の朝。夜のうちに接近し、夜明けを待って潜入、指揮官を確保して可能な限り攪乱、混乱に乗じて脱出し、そこからは『グランドフリーユージュ』が仕事を開始する。

話が一段落つき、フェイナが部屋を出ようとした時、扉が開いた。

「旅団長、お呼びでしょう、か………?」

3人の青年が立っていた。

「おお、早かったな」

「なんでルートとフラッシュがいんのよ………」

「こづいつのを眺めるのも楽しいんだがなあ」

「言ったら殺されるよ?」

「女の嫉妬は怖い」

「嫉妬、なのかな?」

第六話 情報部隊（後書き）

途中少し後悔しております。ですが反省はしておりません。

ダチヨウさんをやるかは悩みましたが、ユーモア欠乏症の私にはこの程度が精一杯です。酷い、とか、空気読め、とか思う人もいるでしょうが、それでもしないとやってられないので……。だから反省はしません。

フェイナはレイのことが気になっております。

しかし、レイには全く意識がありません。

主人公は全く関係ありません、蚊帳の外です。フラッシュもですが。

2人の関係は最後まで進展するか分からない感じですが。

誤字脱字でも構いません。感想をいただけるとうれしいです。 m)

— —) m

第七話 反乱軍キャンプへ

ヘリのローターが回る機械音が耳を突く。

「俺たちはここまでだ！ 幸運を祈る！」

ヘリの搭乗員が親指を立てて、フェイナを見送る。

それにフェイナが笑顔で礼を言い、外からヘリの扉を閉める。

ヘリが高度を上げ、フェイナは風にあおられないように二輪駆動のオートモーターの操縦桿をしっかりと握り、態勢を維持する。真上からの風に髪があおられて視界を妨げるので、髪を後ろで縛って邪魔にならないようにする。

時刻は深夜の2時。

作戦通り、夜陰に紛れて暗視ゴーグルをすれば目的地の廃都市が地平線上看える位置までヘリで到達した。何しろヘリの騒音は大きい。念には念を入れて、かなり遠くで降りた。ここからはオートモーターで進まなくてはならない。

オートモーターは通常のバイクと違い、軍用に改造されたバイクだ。駆動系やタイヤを装甲で多い、風防は防弾ガラス。いくつかの固定武装すら持っている。

おかげでかなり巨大なものになっており、座席に跨ればフェイナでは両足は地面に届かない。巨大な牛に跨っているような感じだ。

だが、牛とは比べ物にならない。装備は全天候対空レーダー、ホログラム式情報統制装置、固定武装の武器管制システム。ちよつとした砲台並みの装備である。

主武装は前輪を支える支柱に内臓されている単装式電磁砲。これは

支柱に固定したままで進行方向に発砲することも、取り外して自分で狙いを定めて撃つこともできる。

とはいえ、長さ1メートル、重量30キログラムの怪物銃をオートモビルに乗ったまま扱える人間はそういない。

そう、人間なら。

「……さて、行きますか」

フェイナが装備しているのは、市街戦を想定した灰色がかったボディアーマーだ。小銃を背負い、腰にはマガジンの入ったポーチと拳銃、ホルスターに収められた2本のナイフが装着されている。動きやすさを重視したボディアーマーは身体の要所しか防護しておらず、足、腕はほど守られていない。ボディアーマーの下に着ている黒服が覗いている。

フェイナはヘリが十分離れたのを確認してオートモビルに跨る。エンジンを起動して一気にアクセルを踏み込む。後輪が荒野の土を削って回転して、急発進する。

風防に顔を隠して強烈な向かい風を避けながら、フェイナはマックに渡されたチップをモビルの情報端末に差し込む。

「都市内部の地図を」

『オーライ』

モビルから電子音のような合成音声がエンジン音に混じりながら発せられた。

モビルは1人乗りだ。運転手の補助をするパートナーを乗せることはできない。その代わりにモビル自身にその補助機能をつけている。世間話などできないが、モビルの機能に関しては言葉に

すればあとはモバイル自身が自分で行ってくれ。

スピードメーターの上にあるホログラム式情報統制装置が青白く光り、小さな模型のような都市の立体映像が浮かび上がる。それを縮小して現在地と見比べる。

「一番侵入が気づかれにくい門は？」

『東ゲートが最も内部からの視界が悪いです。ここが適切かと』
「ありがとう」

暗い闇の中をモバイルのライトの光が浮かび上がっている。しかし、これ以上は都市から視認される可能性がある。フェイナは暗視ゴーグルを装着してライトを消し、無灯火で走行する。
目指す都市が緑色の視界にぼんやりと浮かび上がっている。

都市まであと1キロほど。

ここまでは特に何の問題もなく来られた。

ようやくといった感じでフェイナが周囲を見て、その顔が驚愕の色に変わった。

「ちよっ！！」

不意にフェイナはブレーキを踏んだ。

モビルが土煙を上げながら地面を滑る。慣性の法則ですぐには止まらず、進行上にあつた看板を1本なぎ倒してしまった。そこでようやく止まり、フェイナはすぐさま飛び降りてなぎ倒した看板に駆け寄る。

看板には罫體とくろのマークと「DANGER MINES」と下に書かれている。

「地雷原……」

都市を目前にして、フェイナは悔しそうに歯ぎしりする。

十中八九、都市にいる反乱軍が時間稼ぎのために設置したものだろう。都市までの距離はおおよそ1キロほど。すでに暗視ゴーグルが無くてその輪郭が暗闇に慣れた目には見えている。フェイナはモビルに戻り、無線機を取り出した。周波数を合わせて『グラウンドフリーユージェ』との回線を開く。

「こちら情報11。応答願います」

『ザッ、……ら『フリーユージェ』通信。どうした？』

男の声が無線から聞こえてくる。聞きなれた情報部隊隊長の声だ。

「……なぜ隊長が通信室にいるんですか？」

『ハッハッハッ、部下が危険な場所にいるんだ。気が気でないのは

仕方がないだろう？ それはともかく、何かあったのか？」

前半は軽い口調だったが、後半は真剣な声。情報部隊を束ねる者としての声になった。フェイナもこれ以上の無駄話も時間の無駄だと判断して話題を戻す。

「都市1キロ圏内は地雷原です。というわけですぐに突入しますの
で」

『待て待て待て、いくら俺でも話の展開についていけないのだが……。突入の根拠は？』

「あたしが金属探知機でも持っていたら話は別なんですけど、あいにく持って来てませんので、地雷原の突破にはかなりの時間を要します。夜が上がってからでは発見されてしまいます。夜陰に紛れて先に潜入して、指揮官を見つけ出します」

本来は顔も指揮官のため、敵が動き出してから忍び込んで、指揮官を探す予定だったのだが、こうも地雷原だらけでは仮に飛び込めたとしても大の大人担いで逃げ切れる自信はない。逃げてる最中に友軍の支援砲撃で地雷が誘爆でもしたら、目も当てられない。

『だが、それでは艦からの援護が出来ん。貴様1人ですべて倒せるわけなかるうが？』

「へりを寄越してください。なんでもいいので。なるべく早く指揮官を探し出しますので、近くで待機させておいてください。合図をしたら地雷原を吹き飛ばしてください」

『何とも豪快だな……』

「時間がありません。よろしくお願いしますね」

『ちよつ、待ちなさ……』

無線を一方的に切り上げる。

そしてモーグルから砂漠迷彩のシートを取り出す。モーグルを近くの岩陰に隠し、上からそのシートをかける。座席下にあるトランクを開け、必要な物を取り出す。手錠、猿ぐつわ、一人一人入るほどの大きさの袋。

「ん？」

無線の表示画面に文字が浮かび上がる。通信室からの交信は、隊員の安全を考えて無音、文字による通信が原則である。こちらから交信した場合は違うが。

『0300時、都市周辺ヲ空爆ス。0310時、座標××××二ヘリヲ向カワス。グッドラック』

現在午前の1時。2時間で指揮官を見つけ出さねばならない。こうしてはいられないとフェイナは地雷原へと走り出した。

暗視ゴーグルの感度を最大まで上げて、荒野のわずかな凸凹も分かるほどまでにする。目を凝らすと地面から突起のようなものが飛び出ているのが確認できる。地雷の信管が顔を覗かせているのだ。それを見てフェイナは安堵のため息をついた。

（旧型で良かった）

最近の物は、地中に完全に埋もれているため発見には探知機が必須だ。だが幸いにしてここ一帯に埋められている地雷は旧型、先端が地上に出ているタイプのものであった。その代わりに数がある。安価な旧型地雷は裏でも取引されており、やろうと思えば一般人でもその筋を通せば手に入れることができる。

感度は悪い意味で敏感である。物によっては突いた程度で起爆する

ものもあり、設置時に誤爆することもあるほどである。逆に言えば、設置してしまえばこれほど敵にとって面倒なものはない。触らなくても近づくと振動で爆発する可能性も無きにしても非ずなのだ。地雷の近接信管とでも言おうか。

「ほっ」

そんなことを知ってか知らずか、フェイナは走り出した。地雷原に向かって一直線に、だ。

そして、踊るようにステップをしながら走っては飛び、また走っては飛び、を繰り返した。今の彼女の目を見ることが出来たら、眼球が目まぐるしく動き回っているのを見ることができただろう。異常な速度で目が地面を走査して、進むべき進路、踏んではいけない場所の判断を行っているのだ。

常人では不可能なほどの速度で情報を処理して、身体に伝える。

それこそ、フェイナがフェイナたる所以。

サイボーグだからこそできる業である。

見慣れた『グランドフリーユージュ』後部甲板。そこに数人の男が集まっていた。

「状況は理解したな？ 現時刻をもって作戦を開始する。回収目標は情報部隊隊員1名と捕虜1名。回収に当たつての障害となるものはすべてを破壊しろ」

話しているのはマツクだ。

その前に並んでいるのはルート、レイ、そして大仰な装備を持った男たち。その手にはヘルメットが抱えられている。

「エイジス隊は0300時に都市周囲を爆撃、隊員から合図があれば可能な範囲で敵勢力を殲滅しろ。ヘリの針路をこじ開ける」

「了解！」「」

「レイ、しつかり拾えよ？」

「言われるまでもない」

ルートがにやにやしながら言うが、レイは冷静に返事をする。その様子にルートはため息をつく。

「『フィッシャー』は隊員から連絡があつた地点に先行、地上待機だ」

「了解！」「」

「よし、行って来い！！」

マックが手を鳴らすと、5人の男が走り出した。2人はヘリへ、3人は戦闘機へ向かって。

「レイ、フェイナがお前のことが気になっているのは知っているよな」

「うん？ 知っているが、それがどうした」

ヘリに乗り込み、コックピットに滑り込んだレイにルートは後部ドアを閉めながら言った。その間にもレイは着々と発進準備を進めていく。

「……その様子じゃ、気づいてないな……」

「何にだ？」

「……自分で気づけ」

「？」

レイが心底分らない、という表情をする。

(ダメだ……、フェイナ頑張れ、仲間としてお前をフラッシュと共に応援している)

「ほら、お前も座れ。あまり時間はない」

「へいへい。あ、こちら『フィッシャー』、出動する。エイジス隊、現場での援護を頼む」

ルートは副操縦士の座席に座り、目の前に行く3機の戦闘機に敬礼する。戦闘機のパイロットが酸素マスクをした状態で敬礼を返す。

『掩護は任せてくれ。しっかり拾い上げてくれよ』

「もちろんだ」

1機目がカタパルトに固定される。甲板員がパイロットに向けて親指を立て、姿勢を低くする。

次の瞬間、轟音と共に機体が引つ張られ、カタパルトから戦闘機が打ち出される。

『エイジス1、出撃。続いてエイジス2、3、カタパルトへ』

甲板を統率する無線がへりにも入ってくる。同じように2機目の戦闘機がカタパルトに固定される。その横に3機目が続く。

2機が立て続けに射出される。

蒸気駆動のカタパルトから白い煙が立っている。そこを、へりが進む。ローターが回転を始め、周囲から甲板員が離れていく。先導していた甲板員が「とまれ」の合図を出し、その場で止まると、すぐに「離陸」の合図が送られる。

「『フィッシャー』。出動する」

『了解、『フィッシャー』。幸運を』

ローターの音が一際大きくなり、機体がフワリと浮き上がる。そのまま高度を上げていき、空中をグルグルと回る戦闘機と共に北へと飛ぶ。

余談だが、戦闘機とヘリの速度は雲泥の差のため、戦闘機がヘリの回りをそれからずっとグルグル回っていた。

第七話 反乱軍キャンプへ（後書き）

ルートもヘリに乗りました。理由はレイと同じだと思ってもらって結構です。

それと、『グランドフリユーゲ』の外観ですが、所謂航空戦艦の類だと思ってください。前半分が戦艦、後ろ半分が空母、みたいな感じです。イメージとしては旧日本海軍の『伊勢』あたりがそれっぽいと思います。地上に行くから底面は違いますが。

初出のエイジス隊。

本当は名前出すつもりはなかったんですが、いろいろ考えた結果固有名詞をつけることにしました。

彼らも頑張ります。実は旅団には航空部隊が少ないという設定が前からあったので、これからちよくちよく出せたらいいなあ、と思っています。

でも、3人の名前は多分出ません。固定キャラが増えると大変なので。

文才のない私にはそのすべてを漏れなく出せるか自身がないんですよ？

こんな作品であります、なんだかんだで読んでもらっているのは多謝です。

誤字脱字でもかまいません。感想を待っております。

第八話 スーキングミッション（前書き）

フェイナのソロは後二話くらいあります。

その後は主人公がまた主軸に、なるといいなあ……（遠い目）

第八話 スニークキングミッション

荒廃した都市、反乱軍がキャンプをしている都市の外壁にフェイナの姿があった。門は固く閉ざされていたため、壁をヤモリのように這い登っていくはめになっているのだ。先に外壁頂上部に向けて撃ちだしたロープ銃、短い銃にワイヤーを繋げたもののワイヤーを巻きつけているから落ちることはない。

ワイヤーを手繰り寄せながら、少しずつ登り、頂上に着くと、そこから都市の内部を見渡せるようになった。

そこでフェイナは暗視ゴーグルの拡大機能を使って周囲の状況を見渡す。本来真っ暗なはずの都市のビル影から光が漏れている。外壁頂上を移動して、光が直接見える位置に回り込む。閉ざされていた門の真正面、大通りのような道の先に夜間用の大型照明機械が煌々と輝いている。暗視ゴーグル内が真っ白になったので、ゴーグルを外すと、十分な視界が確保されていた。こちらから丸見えであるが、同時に向こうも近づく動体に容易く気が付ける。

「厄介な……」

ちらりと時計に目をやる。

1時半。

外壁を登るのに予想以上に時間をかけてしまった。ここでのんびりしている暇もない。

フェイナは目だけをキョロキョロと動かすと、一点でその目が止ま

る。そして、その点と照明との間を何度か目が往復すると、スクツと立ち上がり外壁の中へと飛び降りた。

高さにして10メートルはくだらない高さだが、フェイナは音もなく着地して、姿勢を低く保ったまま建物の陰に走りこむ。大通りの右側のビルの陰だ。

そしてそこから大通りの奥のビルの陰に視線を向ける。煌々と光る照明機械に反射して何かが光る。

モーションセンサーと呼ばれる、動きを感知するセンサーが巧妙に隠ぺいされて設置されていたのだ。フェイナは手近にあった瓦礫を1つ手に取り、そこへ向けて投げつけた。

ビービービ　ビービー　ビービー　！！

瓦礫がセンサーの前に飛び出た瞬間、センサーが動きを感知、警報音が響き渡る。大通りの音がにわかに騒がしくなり、銃を持った兵士が2人現れた。センサーに駆け寄り、辺りを警戒している。

「敵か？」

「まさか、ここを知っている人間はいないはずだ。ネズミか何かだろう」

砂漠使用の迷彩服を身に纏い、顔の下半分をマスクで隠している。

本来あるべき部隊章はなく、『血の盟約』のマークである髑髏を持った人間が描かれた腕章をつけている。

1人がセンサーのチェックを行い、異常なしと無線で伝える。

そして立ち上がって前を向くと、

そこにフェイナがいた。

「っ！」
「ふっ」

声を上げようとした男の喉に深々とナイフが突き刺さる。何度か痙攣したかのように体が跳ねるが、数秒で動かなくなる。もう1人の男は背後を警戒してこちららの状況に全く気が付いていない。その背後からフェイナは忍び寄る。

「まったく、こんな夜中に誤作動するなんて、嫌味かなにか……っ
!？」

何かを感じ取ったのだろうか、男が固まる。

事実、彼の首筋には血に染まったナイフが突きつけられている。少しでも横にずらせば、頸動脈を軽々と切り裂ける位置だ。首筋にナイフを当てた時点で、フェイナは耳から口元に伸びている無線の線を切り落としている。彼の声が味方に届くこともない。

「……指揮官はどこ？」
「ひっ!？」

背後から静かにフェイナが質問する。男は事態が呑み込めずにじたばたするが、鋼鉄のフェイナの腕はビクともしない。

「指揮官は？」

フェイナがもう一度聞く。男は完全に戦意を喪失しており、手に持っている銃を空に向けて撃ち、仲間知らせることも、大声を上げる気も、なかった。

「た、隊長は、指揮官車で睡眠を、取っている。た、頼むから、助

けてくれ！」
「いやよ」

次の瞬間、フェイナが男の首を掻っ切った。血が飛び散り、男が力なくだらりと崩れ落ちる。フェイナは2人の死体を物陰に引きずり込み、1人目の男のまだ使える無線を奪う。弾丸は口径が違ったために諦めた。胸ポケットを物色すると、1枚の写真が出てきた。この死体であろう男が家族と映っている写真だ。それを見てフェイナは何とも言えない表情をした。

「なぜ家族を残してテロなんか……」

答えを返す男はすでにこの世にいない。

フェイナは写真を持ち主に返して立ち上がった。

「あなたにも守りたいものがあつたでしょうけど、仲間を殺した罪は全員に贖ってもらう。1人の例外も許さない」

そしてレイの腕の貸しも、と小さく付け足す。

フェイナは物陰から大通りに出て、上手く瓦礫を陰にして都市中心部へと進む。途中何度も偵察している兵士に遭遇したが、誰も消えた2人について気が付いておらず、むしろフェイナは拍子抜けしてしまった。

「……あそこか」

都市中央部、巨大な庁舎のような建物の前に数十両の車両が止まっている。広場のような場所を使って、駐車場のようになっているよ

うだ。外縁に戦車、その横にはヘリも止まっている。そして内側にトラックや装甲車が止められている。どうやら、トラックや装甲車で睡眠を取っているようだ。その周囲に銃を持った兵士が立っている。時々あくびをかみ殺しているのを見て、フェイナは呆れる。

自分たちの立場が分かっているのだろうか。

彼らは追われる立場の人間に今やなってしまうた。いくら危機感が薄れていたとしても、任務中がそんなでは隙だらけだ。

そう思うわけだが、あいにく敵を知恵づけるほどフェイナは優しくないし、むしろその隙につけ込む方の人間だ。兵士がよそ見している間に戦車の下に滑り込み、下から敵兵の配置を確認する。

できれば、後顧の憂いを払うために戦車を吹き飛ばしたいところなのだが、あいにく対戦車地雷は持っていない。通常の手榴弾ではキヤタピラを破壊できるかもしれないが、そんなものでは足りない。だから、狙うはヘリだ。コックピットにでも投げ込めば簡単に破壊できる。

戦車の下から這い出し、ヘリの陰に滑り込む。そしてポケットから直方体の物体を取り出す。カバーを被ったそれを2つに手で裂き、その内の1つにコードのついた円柱状の起爆装置を突き刺す。粘土質のそれにめり込み、それで手榴弾を包み込む。

プラスチック爆弾と呼ばれるそれを2つに裂いたので、威力は減退したが、それを手榴弾で補ったのだ。そしてそれをヘリのテールローター駆動系にねじ込む。

1つは戦闘ヘリに、残りは2機ある武装ヘリのうちの1機に取り付けた。あいにくそれしか量がなかったため、最後の1機は燃料タンクにナイフで穴を開けて燃料を抜くだけに止めた。隣に止まっているヘリが爆発すれば、誘爆するだろう。

「よし、こんなもんでいいかしら」

フエイナがそう呟くと、ヘリ置場から離れてトラックや装甲車が止められている方へ向かう。ここは特に警備が厳しく、トラック2台に1人程度に配置されている。トラックのそばに近づくと、中から形容し難いびきが聞こえてくる。そそくさとそこから離れて、指揮官車を探す。

指揮官車と言っても、他の車両と変わらないかもしれない。だから装甲車を見つけては1台ずつ確認しなくてはならない。

だから面倒だ、などとフエイナが考えていると、後部ハッチが開いている装甲車が視界に入ってきた。他の車両同様兵士が警備しているが、どうも他のと空気が違う。見ると車両の横に大きく『血の盟約』のマークが描かれていた。

「分かりやす……」

他の車両にはそのようなマークは描かれていない。大手を振ってここにいますと言っているようなものだ。警備の兵士に気が付かれなように背後から近づき、その口を塞いで背後から肋骨の合間を縫って心臓を一突きにする。くぐもった悲鳴が喉から漏れるが、口から漏れ出ることはない。その状態でナイフを捻り、心臓内部に空気を送り込み、絶命させる。隙間から大量の鮮血があふれ出て、地面に血の池を作り出す。

死んだ兵士が銃を落として、辺りにカランという乾いた音が響く。一瞬、ヒヤリとして辺りを警戒するが、幸い誰かがこちらにくる気配はしなかった。死体を手早く隠して、装甲車の中に乗り込む。

乗り込むと言つても、装甲車の中というのは広くない。この兵員輸送車を改良した指揮官車は後部ハッチを開けるとすぐ目の前に様々な指揮に必要な機器が詰め込まれている。その座席に男が1人寝ているのだから、話は速かった。

拳銃を取り出し、男のそこそこに太った腹にかなり強くねじ込んだ。何度も何度も突くのは面倒だったからだ。

「んぐつ!?」

男が苦しそうな声を上げて、目を開ける。一瞬事態を理解できず、目が泳ぐが、そのうちフェイナに固定される。そしてその手に握られる銃とフェイナの顔を1往復して、ようやく事態を半分程度理解したのだろうか、表情が目に見えて凍りついていった。

だが、大声を上げさせるわけにはいかない。フェイナは男が声を上げる前に口にガムテープを巻きつけた。そして座席に寄りかかっていた男を座席ごと縛り上げる。

「んん?!」

「騒がないで、殺しゃあしないわよ」

フェイナが思いつきり睨むと、男は首を何度も縦に振って黙りこくった。その間に足も座席に縛り上げる。

それを終えて、ようやくフェイナが男の目の前に立った。男は到底軍人とは思えない体型をしている。鍛えられているべき体は妙に白く、余計な脂肪がついている。いわゆるエリート軍人と呼ばれる、デスクワーク派の人間なのだろう。こんな男に従わなければならぬ兵士がむしろかわいそうになってきた。

「さて、質問はすべて『イエス』か『ノー』で答えなさい。あなた

がこの部隊の指揮官で間違いないわね？」

「んー！（コクコク）」

首を縦に振った。

「『血の盟約』の居場所を知っているわね？」

その名を聞いて男が顔面蒼白になる。おそらく自分の都市からの追っただと思っていたのだろう。

「知っているの？」

その顔の前に銃を向ける。そして引き金に手をかける。

「んー！（ブンブン）」

「別に今言わなくてもいいし、言ってもあいつらにあんたは殺させないわよ？　うちで”面倒”見てあげる」

「っ！？　んーんー！！！」

「ああもっ、うっさい！」

事ここに至って男が激しく暴れだそうとしたので、フェイナは首筋に手刀を当てて気絶させる。そして頂垂れる男を座席ごと持つてきた袋に詰め込む。そして口をきつく縛る。小さい穴が何か所か開いているから窒息することはないはずだ。

そしてそれを肩から担いでハッチから辺りを見渡す。まだ騒ぎにはなっていないようだ。

フェイナは時計に目をやる。午前2時15分を指している。

「時間が余った。どうしようかしらね……………ん？」

悩んでいると、どこからか無線の音が入っていることに気が付いた。音源を探すと、指揮官車の無線の1つが受信待機になっていた。向こうからの一方通行だから、こちらが聞く分には問題ないと判断したフェイナは無線を開く。そして直後に男の怒号が飛び込んだ。

『侵入者だ！ 2人殺られてる！ 至急全員をたたき起こしてくれ
！！』

「やっぱ……」

気づけば辺りが騒がしくなりつつあった。トラックの横を叩く音と、「起きろ！」という怒号が響き渡る。

男を押し込んだ袋を抱えて、急いで指揮官車を飛び出す。トラックが止まっている一角は避け、戦車が置かれている区画を通って都市の外縁を目指す。

「あと45分どうしろっていうのよ」

闇夜にフェイナの姿が消える。

第八話 スニークンゲミッション（後書き）

フェイナの話が一番長い感じがします。

フェイナはナイフ使いですから描写が少し細かくなっているせいですが……。

誤字脱字でも構いません。感想お待ちしております。

第九話 逃走、闘争、反撃（前書き）

袋の中の指揮官に幸あれ。

ありませんけどね

第九話 逃走、闘争、反撃

フエイナが潜入している廃都市が地平線に見える程度の距離に、1機のヘリが着陸している。エンジンを切って闇夜に紛れており、目を凝らさなくては見つけることも容易ではない。

そのヘリのコックピットにルートとレイの姿があった。

時折時計を見る仕草をしては、落ち着かない様子で都市の方向に目をやっている。

この地点は事前にフエイナから指定のあった場所である。着陸した後、ルートはバッテリー駆動の軽装甲車で都市に1回接近、岩場に隠されていたオートモビルを回収して、ヘリに戻った。それからここでじっと作戦開始の時刻を待っていた。

「2時30分。作戦開始まであと30分を切った。エイジス隊、異常はないか？」

ルートが無線を開いて遙か高高度を旋回待機しているであろうエイジス隊に呼びかける。高高度を飛ぶと、燃料消費を抑えられるので、長時間作戦空域にいることができる。

「ザツ、……問題ない、と言いたるところだが、目標都市に明かりが灯った。ここからじゃ確認できないが、そちらから何かわかるか？」

「なにっ!？」

慌てて暗視ゴーグルの倍率を上げて廃都市に目を凝らす。見れば、

先ほどまでなかった明かりがいくつも灯っている。

「ばれたか」

「フェイナが、か？」

「我々がばれるとしたら、とつくに動いているはずだ。今に至つて
ということは、内部のフェイナが気づかれたのかもしれない。無線を
開こう」

「わかった」

廃都市内にいるであろうフェイナに向けて旅団固有の周波数で呼び
かける。

「こちら『フィッシャー』、フェイナ聞こえるか、応答しろ」

ザツという雑音が入った後、無線が開く音が聞こえた。

『……なんでルートの声が無線から聞こえるのよ』

「生きてたか、俺がいることはともかくとして、問題が起こったよ
うだが？」

『はあ、この様子じゃレイもいるわね……。まあいいわ、指揮官は
確保したわ。でも侵入に気づかれて今追われているの。現在位置は都
市南のビルの中、男1人担ぐと動けないっいたらありゃしない』

「……生きてるよな？」

『男？ 多分生きてるわ。弾は当たってないはずだから、骨ぐらい
は折れてても分らないけど』

「……………はあ」

相変わらず、フェイナは人の扱い方が酷い。後々話を聞くのだから
口が聞ける状態であることをルートは祈らずにはいらなかった。

「状況は理解した。作戦を速めてこれから救助に向かう。南の地雷原を吹き飛ばすから、脱出してくれ。俺たちが拾い上げる」

『了解、やっぱりレイは話が速くて助かるわ。しっかり拾い上げてよね？』

「任せておけ」

レイがそう言った直後、無線の音声が始まる。どうやらフェイナが走り出したらしい。

『ここじゃ長話もできないわ。今すぐ来て、いつそ都市内の戦車も吹っ飛ばしてくれると助かるわ』

「それじゃ、盛大に宣戦布告の花火でも上げますか」

ルートはそう言うと、ヘリのエンジンを始動した。甲高い起動音が闇夜に響き渡る。それ以降の操作はレイが引き継ぎ、ルートは無線機を持って後部へ向かう。後部ハッチ傍に待機し、無線を開く。

「エイジス隊、話は聞いていたな？」

『合点。そちらの接近に合わせて爆撃する。お姫様を救出するぞ』
「よし、作戦を開始する」

一方、フェイナはさっきまでいたビルを後にして、南の出口を目指していた。

廃都市中央から無事に脱出はできたが、出入り口には敵が待ち伏せているのは火を見るよりも明らかであった。入ってきた時も、敵がいるからわざわざ壁をよじ登ってきたのだ。

「やばいわね。囲まれたか……」

南出口の敵と、中心部にいた敵。その双方に挟み撃ちされる形になっってしまった。

幸いなことに、ヘリの爆破は成功している。上空から搜索されることがない、というのは相当逃げる側としてはラッキーなことだ。上を気にしないで済む。

『近くにいるはずだ、ビルを1つ1つ搜索しろ！』

拡声器を使った男の野太い声が響き渡る。

そして数人の男が近くのビルに入っていく。もちろん、それはフェイナのいるビルも御多分に漏れなかった。フェイナが隠れているビルのドアが蹴破られ、銃を持った兵士が3人ほど入ってきた。銃身下に付いたライトを灯して、じりじりとフェイナを探している。離反したとはいえ、彼らは正規軍。その動きに無駄はない、洗練された軍隊であった。

フェイナは拳銃の残弾を確認する。まだ多少の余裕はあるが、敵のすべてを相手取るにはいささか、いやかなり足りない。ここで居場

所が露見することだけは避けなければならない。

3人の兵士が外から見えない位置まで来るのを待って、その背後に忍び寄る。指揮官を詰め込んだ袋は近くの土嚢置場のような場所に置いてきた。戦闘には邪魔だ。

最後尾の兵士は背後を警戒している。その銃身下のライトの動きを見て、兵士が一瞬背後から視線が逸れた瞬間を突いて、一気に接近。その顎下にナイフを深々と突き刺す。間髪入れずにそのナイフを横に振りぬくと、男の身体が横にずれる。そして目の前に2人目の男が現れる。

「っ！ 敵しゅ……」

「遅い」

殺された男が壁に突っ込む音を聞いて振り返った男がフェイナの姿を見て叫びかけるが、その前に喉を斜めに切り払われ、さらに拳銃で脳天をぶち抜かれる。消音器サイレンサー装備だから、カシュツという何かがスライドするような音しか聞こえない。それでも、最後の1人が事態を把握するには十分だろう。振り向きざまに男が発砲、フェイナは物陰に隠れてそれをやり過ごす。

「敵襲だ！ 敵はD棟1階奥！ 2人やられた！！」

「戦闘中にお話しなんて余裕ねえ」

無線に注意が逸れた男に目の前から言っつてやる。男が銃の引き金を引こうとするが、フェイナが物凄い勢いで腕を振り、男の腕を切り落とした。

「っ、うあああああ！！！！」

悲鳴を上げる男に、フェイナは躊躇いなくナイフを突き立てる。心臓を一突きされた男が動かなくなったのを確認して立ち上がると、ビルの表から何人も兵士がなだれ込んでくる音が響いてきた。

「ばれちゃったからには、後始末しないとね。みんなが来るのに呼ばれもしない奴らを引き連れていくわけにもいかないし」

フェイナは死体から手榴弾を奪い、安全ピンを抜いて表に向けて転がす。これだけ暗いと、足元に何かあるのか判別しづらい。

きっかり、5秒で手榴弾が起爆し、兵士を巻き込んで爆発する。濛々と土煙が立ち込める中を突っ切り、負傷してうめき声をあげる敵を尻目に土囊置場に押し込んだ指揮官を拾い上げる。

「さっさと行きますか」

そう呟いて立ち上がった瞬間、背中に何かを突きつけられる感触がした。

振り向くまでもない。

銃を突きつけられる感覚を間違えるはずがない。今までにも何度もあったし、これが最後になるとは思っていない。

「動くな」

背後から男の声が響く。気配は1人。先ほどの突入組で生き残った運の良い兵士のようだ。

「捕える気？ なら無駄なことは止めておいたほうが良いわよ」

「……女か」

「それはあまり意味のない言葉、ね！」

フェイナが振り向きざまにナイフを男に振るおうとする。だが、圧倒的不利な状況下においてそれは自殺行為である。男がフェイナの胸めがけて発砲する。

パンツ！！

乾いた音がしてフェイナがもんどりうって倒れこむ。指揮官を詰めた袋が床を転がる。

男はそれを確認して無線に手を伸ばした。そして報告をしようとした瞬間、その手を掴まれた。

紛れもない、フェイナ本人に。

グキツという鈍い音がして男の腕があらぬ方向に曲げられる。しかし、男は激痛に耐えながらフェイナを蹴り飛ばし、後退する。だが、出口はフェイナの背後、男は逃げ場を失っていた。

「女性を蹴り飛ばすなんて、乱暴な人ね」

「ば、化け物！！」

「ひび……」

フェイナは何事もなかったかのように立ち上がった。男の銃のライトが当てられている姿には確かに服の胸部に貫通した穴が見える。にもかかわらず、フェイナは普通に立っている。男を混乱の渦に叩き込むには十分な威力を持っていた。

「な、なんなんだお前は！」

「死にゆくあなたにそれを教えてどうなるの？ でも、冥土の土産

に教えてあげる。あたしはサイボーグ、鋼鉄の肉体を持った、まあ化け物かもね」

「う、うわああああっ!!」

男が銃を乱射する。

狙いもつけずに発砲するが、この距離では外す方が難しい。フェイナにも何発も当たるが、金属音が響くだけで一向に効き目があるようには見えない。

そして、フェイナは其中でゆっくりと銃を構え、ただの1発を撃った。

男の眉間に穴が開き、男がのけ反るように倒れていく。

それを見て、フェイナは落とした袋を担ぎあげて部屋を出た。すでに表からの脱出は絶望的だ。先ほどから大型車両が動く振動と音が表から響いてきている。集結していることは明らかだ。のこの出ていくには少しよろしくない状況だ。

「裏口裏口……」

ビル反対側に出口が無いか探すが、どうやら出入り口は表のみのようだ。仕方なくフェイナは近くにあったガラス窓をナイフの柄で叩き割り、そこから袋を外に放り投げる。地面に叩き付けられて中から指揮官の男の呻きが聞こえた気がしたが、フェイナは気にせず自らも窓から裏の細い路地に出る。

そこから壁沿いに表通りを目指し、路地の陰から表を覗き見ると、ビルに向けて無数の銃口が向けられているのが目に入った。

「……指揮官ごと殺す気だったのかしら」

見れば戦車までその巨大な砲身をビルに向けている。
幸いこちらに気づいている様子もないので、そそくさと都市の門へ
向かう。

門は外壁と同じ高さ10メートルほど。

敵は皆フェイナを搜索しているから、当然警備が厳しくなっていた。
門の上部に取り付けられたサーチライトがゆっくりと左右に動き、
その隣には大型の機関銃が据え付けられている。一時的にキャンプ
を張っているにすぎない場所にしては、随分と強固に守っている。
おかげでフェイナは出る隙を見つけられないでいる。

その時、背後から声が響いてきた。

ビルの中で仲間が何人も殺されて突入したは良いが、中に誰もいな
かったのでこちらに向けて移動してきたのだ。それもフェイナが裏
の窓を叩き割って逃げたことがばれたのか、路地の裏からもガチャ
ガチャと金属の擦れる音が響いてくる。

「くっ」

迷っている時間はない。

フェイナは門の脇に走り寄り、銃を構える男に向かって撃つ。カシ
ュツと言う音がして男の喉元に穴が開く。その横をすり抜けて門の
横にある詰所のような場所に飛び込む。

「なっ！ 敵だ！！」

「はあああああっ！！」

中にいた男が手元の銃をフェイナに向けてるよりも早くフェイナがそ
の目の前に飛び込む。フェイナは男の小銃をがっちりと掴み、もう
片方の手に持つ拳銃で男の腹に3発お見舞いする。

男が倒れる前に身を翻し、門の開閉装置と思われる計器に向かい合う。スイッチはそんなに多くないようで、照明のオン、オフ、そして門のオープン、クローズと書かれたレバーしかなかったため、フェイナは即座に門のレバーをオープンに引き下げた。すぐに重苦しい音がして外に見える扉が警告音を響かせながらゆっくりと開きだした。だが、その速度は今のフェイナにはこれ以上になく遅く思える。

「早く、開きなさ……っ！！」

視界の端で何かが煌めいた。

それが何か理解するよりも速くフェイナは外に飛び出た。

刹那、空を切る音がして操作室が吹き飛んだ。爆風に押されてフェイナは地面に叩き付けられる。

「ぐっ、まさか本当に撃ってくるなんて……」

フェイナの視線の先には、巨大な鉄の塊がある。それを憎たらしげに睨み付ける。

戦車はその砲塔をこちらに向けて、その砲身から白い煙が上っているのが逆行となったここからでも分かる。戦車の後ろにある巨大なサーチライトがフェイナに合わせられる。フェイナの姿がはつきりと開きかけの門を背景に映し出される。門の隙間は30センチもない。フェイナは無理をすれば行けるかもしれないが、袋に入れた男が通らない。

フェイナが立ち上がって戦車を見据える。

「八方塞がり、かな……」

フェイナはこれ以上逃げ切れないと判断した。自分の限界を知るのも兵士として必要なことだが、こんな形で知りたくはなかった。

『……八方塞がったんなら、上を見てくれ』

突如、無線から声が漏れた。

第十話 帰還（前書き）

はい、フェイナ編は今回で終わり。

といってもフェイナは継続して話の主要人物として出続けますけど。

気づけば早くも十話目です。

これからもがんばります。

サブタイトル付けたら急に読んでくれる方が増えたのは気のせいだろうか……

第十話 帰還

「うおっ、火柱上がったぞ」

ルートに言われるまでもなく、レイの目にも廃都市で火柱が上がったのを確認していた。何かが発射したらしく、都市が真っ赤に浮かび上がっている。状況から見るに戦車砲かそれに準ずる兵器によるものだろう。

「時間が無いな。飛ばすぞ」

「おう、俺も後ろにいる」

『こちらエイジス1。こちらからも確認した。そちらの到着までもうしばらくあるが、攻撃を開始する』

「了解エイジス隊」

闇夜を6つの排気炎が高高度から急降下を開始し始めた。

レイは無線でフェイナを呼び出そうとするが、雑音が酷くてフェイナの声を聞き取れない。近くで何かが崩れるような音が響いて、事態がかなり逼迫していることがこれ以上にならないほどわかってしまう。

『……八方塞がり、ね』

聞き取れたのはそれだけだった。だが、状況を理解するには十分すぎる一言だった。

だから、レイは言っただけだった。諦めかけている馬鹿な仲間に。

「八方塞がりなら、上を見てくれ」

瞬間、都市に新たな火柱が生まれる。

轟音に次ぐ轟音。

フェイナが確認できたのは、火を後方から吐く何かが一直線に戦車に吸い込まれていく光景だけだった。戦車は吹き飛び、弾薬に誘爆して巨大な火球と化し、周囲を巻き込んで大火災を起こしている。フェイナを狙っていた兵士たちも突然のことに混乱し、自らの命を守るだけで精一杯の状況になっている。さらに、フェイナの背後では断続的な爆発音と振動が響き渡っている。

「……遅いわよ」

ようやく、フェイナ自身も事態を理解した。時刻は2時40分ほど、急げば丁度来れる時間だろうか。

『開口ーそれかい……。門を吹き飛ばすから巻き込まれるなよ』

「頼むわ」

瓦礫と化した操作室の陰に蹲り、耳を塞ぐ。

刹那、飛翔音がして外に向かって開きかけていた門が内側に向けて吹き飛ばされる。激しい爆風がフェイナを襲うが、フェイナはしっかりと地面に張り付いて微動だにしない。むしろ、遠くにいる兵士たちのほうが爆風にあおられて転倒している。

フェイナは立ち上がって門の外へと駆け出す。

地雷原はすでない。上空を飛ぶ旅団の戦闘機が爆撃したため、巨大なクレーターが無数に開いている。その中に1機のヘリが接地ギリギリのところまでホバリングしている。風にあおられないようにしながらフェイナはヘリに駆け寄る。

後部ハッチが開いてルートが姿を現す。すぐに指揮官を詰め込んだ袋を投げ渡し、自分もヘリに飛び乗る。

「「お帰り」」

「……ただいま」

ルートとレイに言われてそう言い返す。

「こちら『フィッシャー』、お姫様は回収した。撤退するぞ、つて対シヨック防御!!」

レイが報告しようとした時、突然そうレイが叫んだ。即座にヘリの床にルートとフェイナが蹲ると、外から物凄い爆音が鼓膜を揺るがし、振動で機体がビリビリと振動した。

「戦車だ！ フェイナ、オートモビルの単装砲で応射!!」

「ああもう、まだ助かってなかったのね!!」

破壊された門の瓦礫を乗り越え、戦車がこちらにその砲塔を向けている。横を向いているヘリでは応戦できない。かといって正面を向いては次の1発を先にもらってしまう。

フェイナはヘリの隅に安全ベルトで縛られていたオートモービルを起動、単装砲を『自動モード』から『手動モード』に切り替える。車体に固定されていた単装砲が取り外され、フェイナはそれを担いで後部ハッチを蹴り開けた。そしてスコープを覗き込んで戦車をその十字の中心に捉える。

「ルート、耳塞いで！」

「合点！」

返事を聞くのとどちらが先だったかというタイミングでフェイナは引き金を引いた。放たれた砲弾は寸分の狂いもなく戦車の砲口に入り、内部で戦車の砲弾と衝突、フェイナが放った砲弾が爆発し、それに誘爆して砲身が吹き飛ぶ。もちろん、内部も文字通り鉄の棺桶と化しているだろう。

「エイジス隊、掩護を!!」

『分かっている！ さっさと逃げる!!』

そこに上空の戦闘機から爆弾が投下され、大破した戦車が宙を舞う。歩兵などあって無きが如しで、荒れ狂う炎に巻かれるか、爆発に巻き込まれるかして少なくとも3人の視界にはいない。

レイが機体を浮かせ、高度を上げる。上げると都市内の惨状が視界に入ってきた。

南の門から続く通りは文字通り火の海になっていた。弾薬に誘爆して激しい爆発を繰り返している。火達磨になった兵士がもがいているが、それを助ける仲間の姿はない。地獄絵図とはこのことを言うのだろう。

「……フェイナ、怪我はないか？」

ルートが後部ハッチを閉じてフェイナに向き合う。

「大丈夫よ。それよりも……」

フェイナが先ほど放り込んだ袋を顎でしゃくる。ルートの視線がそちらに移り、フェイナにまた戻る。

「……生きてる、よな？」

「多分……」

「大丈夫だ。かろうじて生命反応を確認できている」

「かろうじて!？」

レイがさらつと言ったことに慌ててルートが袋を開け、中で椅子に縛り付けられて完全に気を失っている男を袋から引きずり出した。

「生きて、いるな。喋れるかどうかは別にして……」

「まあ、蹴ったり投げたり落したりぶついたりしたから、ねえ？」

若干フェイナが気まずそうに言う。ルートがそんなフェイナを呆れた表情で見る。

「旅団の医療班を待機させておくよう連絡を入れておいてくれ、レイ」

「わかった」

「幸い、命に別状はない。後10分もすれば目を覚ますだろう。死んだ方がましだったかもしれないがな」

旅団に帰り着いたヘリから医務室に即座に運ばれた捕虜の男は、白いベッドの上で包帯でグルグル巻きにされた状態で拘束されている。それを診断していた旅団の医者は医者とは思えないような台詞を言った。

「気が付いたら旅団長に知らせてくれ。俺たちは旅団長のところにいる」

「おう、分かった」

医師がヒラヒラと手を振った。

マックには作戦終了後に召集をかけられていた。捕虜の男があまりに不憫だったので医務室までは連れてきたが、後は医師に任せられるのでルート、レイ、フェイナは医務室を後にして、マックの執務室へと向かった。

「あの男、居場所を言うと思うか？」

レイがふとそう呟いた。

「言わなきゃここに置いておく必要はないじゃない」

「フェイナ、もう少し過激な発言は控えてくれないか？」

「ルート、この旅団で過激じゃない人間なんて、いないと思うけど？」

「お前はその中でも、って意味だ」

「どうしてよ……」

フェイナが心底訳が分からないという顔をする。

「それはともかくとして、どういう意味だ、レイ？」

「フェイナの話聞くに、男は居場所に関しては必死になって否定しようとした、ということになっている。おそらく口止めでもされているのだろうな、当たり前だが。そんな奴がそう簡単に口を割るとは思えんのだが」

レイの考えはごもつともだ。

あの男も兵士の端くれ、口は堅いだろう。交換条件なんて用意もしていないし、第一ルートたちは男の名前すら知らなかった。知ったのは運んでいる途中で見た認識票を確認したからだ。

「と、いう、ことは……」

「ふふふ、久々に腕が鳴るわね……」

「レイ、当分医務室には近寄るな」

「なぜだ？」

「……フェイナのワンサイドな拷問を見たいのか？」

「拷問とは元来ワンサイドだと思うのだが……」

「トラウマになるぞ……？」

「俺は夢は見ない」

「……なら良いんだが、フェイナに対する考えを改める必要はないぞ？ あいつはいつもあんな感じだからな」

「ちよつと、さっきから男2人がこそこそ何話してるのよ」

いつの間にか、ルートとレイは自分たちがフェイナのだいぶ後ろを歩いていた。慌ててごまかしてフェイナに追いつく。

「……で、フェイナ、何をするつもり？」

「うーん、お楽しみで」

「それが1番胃にくるんだよ……」

「……まったく、人の部屋の前で一体何を話しているのかな？」

「……旅団長……」

今度はいつの間にかマックが背後にいた。どう反応していいのかわからない、複雑な表情といった様子だ。

「まあ、いいが。それじゃ、話を聞こう、入ってくれ」

マックが自分の執務室の部屋の扉を開け、3人を招き入れる。相変わらず整理整頓のできている部屋だが、こちらも相変わらず机の上が書類で溢れかえっている。

マックはそのまま自分の椅子にドカツと沈み込み、数秒天を仰いでから3人に向き直った。

「で、捕虜の様子は？」

「現在医務室にて治療中です。間もなく目を覚ますとのことですよ」

「話すと思うか？」

「話さなくてはならないようにします」

フェイナのその返事を聞いてマックはため息をついた。ルートは案の定と言った顔をしている。

「……フェイナ、君の『仕事』であることは確かなのだが、加減と
言うものはできないのかな？」

「失礼ですが、加減すれば敵に余裕を与えます。全身全霊をかけて
口を割らせる必要があるかと。それに今回はあまり時間的余裕もな
いと考えますが」

「そこに関しては、フェイナに同意します」

ルートが言う。レイも同感だ、と首を縦に振る。

「まあ、致し方ないことだな。出来るだけ善処してくれ。あれは俺
でも胃に来る」

「旅団長……」

「ルート……」

2人が涙目になって良き理解者を持ったと喜んでいるのをしり目に

レイがため息をつく。

「フェイナ、君の拷問はそれほどに過激なのか？」

「うっ、直球ね……。確かに普通とは思ってないわ。代わりにほぼ確実に口を割るけど……」

2人から目を離してレイがフェイナに聞いた。気まずそうにフェイナが顔を俯ける。

「奴らは俺たちの仲間を殺した。そんな奴らに組する奴らだ、遠慮はいらん。殺さない程度に痛めつけてやれ」

「レイ……。うん、了解したわ」

レイがそういうと、なぜかフェイナは嬉しそうに笑った。レイ自身は自信を持ったから気分がよくなったのだろうと考えていたが、残りの2人は違った。

「……レイに自分を認められたから、うれしいんでしょうね」

「十中八九そうだろうなあ……」

2人の世界に入り込まれてしまったようで弾かれた男2人はその様子を遠巻きに見ているしかなかった。レイはそんな世界に巻き込まれているという自覚すらないだろうが。

「なあ、ルート」

「はい？」

「あれは成就するだろうか……」

「……俺に聞かんといってください」

第十話 帰還（後書き）

はい、なんか最後変な終わり方になってしまいました。

フェイナは情報部隊の隊員です。

なのでそういう技術にも長けています。

次回、そういう描写になります。

拙い上に酷いですが、頑張っってそう言う描写を頑張りたいです。

次々回、ルートたちの過去話になると思います。

誤字脱字報告、感想お待ちしております。

第十一話 出て来た答え 『故郷』（前書き）

拷問シーンがあります。

拙い表現ではありますが、苦手な方は前半読み飛ばしてください。

人間にはいくら鍛えようとしても鍛えられない部位が多数あります。そこを突く、というのが拷問の一種の方法なのです。

なお、拷問は国際条約で禁止されています。国内でもです。なので絶対にやっちゃダメです。

誰もやらんと思いますが……。

第十一話 出て来た答え 『故郷』

男が目を覚ました。

その報告を受け、ルートたちはマックと共に医務室に向かった。

医務室の扉を開けると、ベッドでどうにか逃げ出そうともがく男の哀れな姿が目に入ってきた。

「おはよう、反乱軍のリーダー」

「ひいつ?!」

マックに話しかけられて男が情けない声を上げて震えだした。そして恐る恐る視線をこちらに向けてきた。誰が見ても、彼を一部隊の指揮官とは認識できないほどに狼狽している。本当に軍人なのか、と疑いたくなる。

「君にする質問は至って単純だ。『血の盟約』に根拠地を教えるもえれば良いのだ。そうすれば、適当な場所で逃がしてやるうじやないか」

「い、嫌だ！ 教えれば俺は殺される！ あいつらは裏切り者に容赦しないんだ!!」

案の定と言おうか、男は口止めされていた。

マックは「仕方ないな」と言って、端にいた医師に向かって目配せした。

「……はあ、ほどほどにお願いしますね。医務室の床が汚れますから」

医師はマツクの意図を察したのか、部屋を出ていった。残されたのはルートたち三人、マツク、捕虜の情けない男だけだ。医師が出ていったのを見て、男があからさまに動揺している。何はどうあれ、自分に良いことが起こると思っていないようだ。

「幸いなことに、この医務室は防音対策万全だ。……フェイナ、やれ」

「了解」

「ひいつ?!」

男がフェイナを見た途端、悲鳴を上げた。彼にとってフェイナはトラウマなのだろう。突然襲われて袋に詰め込まれて投げられたり落とされたりされたのだから。

「ルート、耳栓なんてしてどうしたんだ？」

「……、なんか言ったのか？」

ルートは耳栓をしている。

これから始まる阿鼻叫喚から鼓膜を守るためである。レイが訝しんでマツクの方を向くと、マツクもまた耳栓を取り付けている最中だった。並々ならぬ様子に、レイも音声感度を下げしておくことにした。

そして、拘束されている男の前でフェイナがにやりと笑った。

「だから言ったでしょ？ 『面倒見てあげる』って」

「や、やめてくれ！ あ、あなたたち、黙ってないでこの女を止める!!！ こいつは俺を殺す気だぞ!!?」

「安心しろ。死にゃあしないよ、死には」

男の手がベッド脇に固定される。必死になって抵抗するが、サイボーグであるフェイナの腕が抵抗する男の手をがっしりと掴み、まったく抵抗できなくする。男はベッドに大の字に固定され、手を開いた状態にされる。

「それじゃ、最後に聞くわね？ 『血の盟約』の居場所は？」

フェイナがポケットから薄く、細長い金属板のようなものを取り出した。幅5ミリ程度の細い金属板を男の目の前でちらつかせながらフェイナはにこやかに聞いた。

「い、言いたくない。言えば俺は殺され、ぎっ！ ぎゃああああああああああ！??」

あまりにも唐突な出来事に、男は喉を潰さんばかりに悲鳴を上げた。見れば薄い金属板が男の親指の爪と肉の間に押し込まれている。肉から爪が剥がれて、血が滲み出している。しかし、フェイナは構わず奥へ奥へと押し込んでいく。

「ぐああああああつ！！！！？」

「手の指が終わったら足ね。速く言った方がいいよ？」

そう言いながらも、2枚目の金属板を人差し指に差し込み始める。男はただ一言、「言う」と言えばこの苦痛から解放されるだろう。だが、死の恐怖からか、はたまた完全に痛みに耐えられないのか、口から洩れるのは聞くに堪えない悲鳴だけ。

「……………こういうことだったのか」

レイが呟くが、男の悲鳴にかき消される。

すでに、男は言語を発してはいない。男の口から洩れる悲鳴も、人間じみたものではなく、生き物が発するとは思えない、耳を塞ぎたくなるような悲鳴だ。耳栓をしているにも関わらず、ルートとマツクの顔面は蒼白、機械人であるレイも人工知能が反応に戸惑っている。

「うーん、これじゃ大したダメージにならないかな」

右手の指すべてに金属板を差し込み、すでに手の下の床には血だまりが形成されつつある。だが、その量は決して多くなく、失血死などにはなりそうにない量だ。フェイナは最大の痛みを与えるが、死にはしない臨界を見極めたうえで、行っているのだ。

男は悲鳴を上げることができずにただ痛みを耐えようとしているように、目をつぶって口を噤んでいる。

「はあ、手っ取り早く終わらせませす」

「な、何をっ!?!」

フェイナは大の字に固定されている男に馬乗りになった。そして両手を男の側頭部に当てた。

「もう分かっていると思うけど、あたしはサイボーグ。自分で言うのもなんだけど、力には自信があるの。そんなあたしに頭を両方から思いっきり押されたら、どうなるかしらね？」

ギシッ

ベッドが軋んだのでも、レイがフェイナの関節系が軋んだのでもな

く、軋んだのは男の頭蓋骨だ。

「ううごおおっ!?!?」

押しつぶされる、という感覚に襲われるのは、男にとって初めての経験だろう。しかも、男は見てしまった。フェイナの目を、直視してしまった。

何の感情も込められていない、その見えない目を見てしまったのだ。その間にも、男の頭蓋が悲鳴を上げる。いつ、卵の殻のように割れるかも分からない、本当にそうなってしまふ気に、男は襲われた。

そして、悲鳴の中から、1つの言葉を紡ぎだした。

「うがあああつ、い、言う、教えるからやめて、うぎあああ!?!」

「何、ごめん聞こえない」

それでもフェイナは締め付けをやめない。いや、むしろ強さを増したのかもしれない。

「い、言うから、奴らは、ぐあああああつ! 『ブラン・コーリア』にいる! そう教えられた!?!」

「『ブラン・コーリア』、そこに奴らがいるのね?」

一層手に力が入る。

男の目は焦点が合わないほどに目まぐるしく動き回り、口から呻きとも悲鳴とも分からない音が漏れ続けている。

「そ、そうだ! 『血の盟約』に合流したい者は、そこへ行けと教

えられた!!」

「旅団長？」

手を頭に当てたまま、フェイナがマックに視線を送る。マックが小さく頷く。

「そんなところだろう、フェイナ、もういいぞ」

「了解」

フェイナが男の頭から手を離し、男の上から降りる。その瞬間、男は力尽きたのか口から泡を吹きながら気絶した。

マックはそれを確認して全員を外へと促した。全員で医務室を出ると、顔面蒼白で突っ立っている医師に鉢合わせして、マックが肩を叩いた。防音のはずなのだが、音が漏れていたのだろうか。

「『ブラン・コーリア』……、あまり聞きたくない名前だ」

マックの執務室へ向かう途中、ルートが呟く。それにフェイナとレイが同意する。

「あの都市から、全てが始まったようなものだものね、あたしたちの」

「逆に言えば、あの都市が無ければ、俺たちは出会ってもいなかっただろうが」

「『ブラン・コリア』？ それはまた……よりもよってそこなんだ……」

マツクが執務室に向かい、情報を整理したらまた呼ぶ、と言って一旦解散した3人は朝食を取るべく食堂へ向かった。朝もまだ早いため、食堂はガラガラであったが、そんな中で1人ポツンと朝食を取っているフラッシュを見つけた。

そして、昨夜から今朝にかけて起こったことをルートは説明して、今の台詞が返ってきた。

「あいつら、あそこで何やってるんだ……」

「ルート、顔が怖いんだけど……」

「フラッシュは、何とも思わないの？」

何か深刻そうな顔をするルートにフラッシュが恐る恐る聞くと、フエイナが答えた。

その顔もどこかいつもと違う。拷問時とはまた違う、怖さを感じさせる。

「何も思わない、って言ったら嘘になるけど、今があるのも事実。」

あの都市が崩壊したからこそ、僕たちは出会えた。別れも多かったけど、唯一無二の仲間に出会えたよ、割り切ってるだけだよ」

「……………」

「レイは、どうかな？」

フラッシュが黙りこくっていたレイに聞く。

「…………、俺はあの時はまだ今ほどに感情があったわけじゃない。記憶ではなくデータとして残っている当時のことを語るのは、あまり気分がいい話じゃないんだが、俺はあれがあつて今の俺があると思つている」

レイが自らの胸に手を当てる。

人間であれば心臓があるべき所だが、レイのそこには小型の永久電池が埋め込まれている。外部からエネルギーを取り入れることで、半永久的に活動することができる。戦争前、機械人が作り出した最新テクノロジーの1つである。

再び静寂が場を支配する。

食堂が広いだけに、静けさが増大して無言の空間が構築される。

沈黙を破ったのは、ルートの通信機の音だった。

その場の空気を切り裂いた音に全員が引き戻されたかのように音源に目を向け、そこにマツクの名が出ていてルートはすぐさま通信を開いた。

「ルートです」

『来てくれ、話し合いを始める』

「了解」

マツクの声は若干低かった。彼自身も思いつところがあるのだろうか。

「僕も行くよ」

フラッシュが立ち上がる。

「分かっている。もとよりそのつもりだ」
「どうも」

執務室に入ると、マツクは執務机に向かって座っていた。机には大きな地図が広げられており、大陸の中心、薄い茶色で表記されている部分の中央に赤い丸が書きこまれている。そこを確認するまでもなく、ルートはそれが指し示す場所の名が頭に浮かんでいた。それはその場の全員が同じであった。

「『ブラン・コーリア』はここ。今では広大な砂漠のど真ん中にポツンとある廃都市か。15年前は緑が生い茂っていたのにな」

マックがペンのキャップを閉めながら、何とも言えない複雑な表情をする。

「ここからだ、丸3日走ればたどり着ける距離だな。接近すれば丸見えだが」

あの反乱軍が無補給で行ける範囲、ギリギリといったところだろうか。砂漠の行軍は時間がかかる上に、戦車などは砂をかぶって動かなくなることもある。何の対策もなしには行けない場所だ。それは旅団にとっても同じだ。

「……………」

「懐かしい、とは言わんが、何かしらの反応があってもいいんじゃないか？」

マックが4人を見つめる。

「ルートとフェイナ、フラッシュの故郷、そして、俺たちが出会った都市なんだ」

今は亡き、森の都市『ブラン・コーリア』。

全周囲を森に囲まれ、材木を輸出することで利益を得ていた、中規模の都市。

そして、『大崩落』最大の激戦地の1つ……。

ルートたちがマックに出会い、旅団に拾われた場所……。

第十一話 出て来た答え 『故郷』（後書き）

実は、拷問のシーンはもつと苛烈な表現を入れようと思っていました。

腐っても兵士、これぐらいやらないと吐かないだろう、程度のを予定していました。

ですが、知識のない作者には使用用途を詳しく知らない拷問具とか使う気にはなれませんでした。そこでこのような結果になりました。

前書きで書いた通り、人間には鍛えようのない部位があります。

目とか、鼓膜とか、いろいろあります。

爪の下の肉も、爪が剥がれでもしない限り露出しませんので相当痛いのです。

作者も一度足の指の爪が剥がれたことがあるのですが、爪が肉に食い込んで痛いなの……。

それはともかくとして、はい、故郷のお話が出てきました。

次回からは少し時代を遡り、『大崩落』時のお話が出てきます。

それを挟んで、ボヘミアンとの戦闘、を予定しております。

誤字脱字でも構いません、感想お待ちしております。

第十二話 <過去?> 出会い(前書き)

過去編です。

そこそこ長くなります。

なんせルートたちが入隊するまでをかいつまんで書く予定ですから……。

マック中心に話が進むことが多いです。彼も20代前半、最盛期の頃です。

第十二話 <過去?> 出会い

広大な森が、揺れている。

至る所に火の手が上がり、空は黒い煙で覆い尽くされている。

断続的に乾いた破裂音と腹の底に響く重低音が神経を逆なでする。

「状況は!?!」

マツクが無線に怒鳴り散らす。

声を大にしなければこの戦場では情報も行き届かない。おかげで、敵味方入り乱れての乱戦になっている。接近戦になれば人間に勝ち目などない。機械人の頑丈な肉体を穿つには大口径の徹甲弾かミサイル並みの大爆発が必要だ。人間が振るうナイフ程度では、傷一つ付かない。

『こちらC隊! 孤立したため、合流は無理だ! ここに留まりで
きるだけそちらの脱出を掩護する!!!』

「馬鹿野郎! 這つてでも合流しろ!」

『無理です! 敵は強大です。負傷者を連れてそちらまで逃げ切る
ことはできません。御武運を!!!』

無線が切れる。

都市のどこかで爆発が起きて、地面が揺さぶられる。それがC隊のものかは分からないが、マツクは無線を握りしめて歯ぎしりした。

『ブラン・コーリア』は混沌の渦中であつた。侵攻してきた機械人の軍は圧倒的な物量をもつて『ブラン・コーリア』を落として来た。マックたち防衛に駆り出された兵士が4万人規模なのに対して、彼らは15万人だと言われている。さらに、大型のガンシップと呼ばれる対地攻撃兵器が浮かぶように空を埋め尽くしている。上方という物理的優位を手に入れて、『ブラン・コーリア』は彼らの爆撃をもろに食らっていた。主要な防衛線は初撃でズタズタに破壊され、そこに砲弾をばら撒きながら侵攻してきた。

「マック！ ここも危ない、撤退するぞ！！」

1人の兵士が駆け寄ってくる。巨大な対物ライフルを担ぎ、マックと同じ軍服に身を包んだ機械人が背後の小型ジープを指さしてそう言った。

「レイ、無事だったか。B隊とD隊は？」

「脱出した。残っているのは、俺たちA隊のみだ」

「都市の一般市民は？」

マックが聞くと、レイが答えに一瞬詰まる。

「……、初撃でほぼ半数がやられた。動ける者はB、D隊と共に脱出したが、都市内にはまだ生存者が多数いるものと思われる」

「何てことだ……」

敵の攻撃は非戦闘員である彼らに逃げる間も、逃げようとする意志も、与えることはなかった。彼らは、本気で人間を滅ぼそうとしている。それは兵士だろうとそうでなからうと関係ない。女だろうと、子供だろうと、老人であろうとも、彼らは平等に、躊躇なく殺して

いく。

「マツク……」

「分かっている。俺たちが生き残らなければ、これから先守れる命も守れないからな」

マツクはそう言ってジープに飛び乗る。レイが運転席に滑り込んで一気にアクセルを踏み込むと、タイヤが一瞬空回りした後、ジープは崩れ行く都市の中を走り出した。

「……レイ、今さらだが、どうしてお前は俺たちに味方した？」

ふと、マツクは前々から気になっていたことを口にした。

運転席でハンドルを握るレイは、機械人が戦争を始める直前に製造された機械人だ。まだ製造されて1年経たない、いわば赤子同然の機械人だ。機械人の大ボス、『始まりの機械人』に最も従順な機械人の世代だ。『始まりの機械人』たちが世界中の機械人に向けて、共闘を呼び掛けた時、全世界の約半数がすぐに彼らに加わり、手身近な人間を殺し始めた。

マツクのいた軍もそうだった。

今まで仲間として連れ添った機械人の仲間が、人間の仲間を突然殺した。そして、その機械人を殺したのはほかでもないマツクだった。

「……俺は、生まれてまだ日も浅い。もしかしたら、俺はバグのよ
うなものなのかもしれない」

「バグ？」

「そう、製造過程で人工知能に欠陥がある機械人が極稀に生まれる。行動がおかしかったり、言動があやふやだったり、と症状は様々だが、俺の場合、妙に感情が多いのだろうな」

「そういうものなのか？」

「さあな、それこそ、俺を造った奴に聞いてくれ。とにかく、俺はこの戦争に疑問を持った。人間も機械人も、殺しあわなければならぬような関係ではないはずだ。機械人の待遇には言いたいことがあるが、とてもじゃないが戦争する理由になるとは思えん」

レイは視線を前方から外さない。だが、口からは次々と言葉が紡がれる。

「それに、何の罪もない子供を殺して、いい気分はしない」

「……、ホントにお前は『人間らしい』な」

「機械人が目指してやまず、結局成しえなかったところに、欠陥品がたどり着く。……皮肉だな」

機械人は人間が羨ましかった、これは当のレイから直接聞いた話だ。人間のように笑い、悩み、泣いたとしても、それはプログラムの域を出ない。

本当の意味での『人間らしさ』を彼らは手に入れることができなかった。それがこの戦争で悪い方に回ってしまったのかもしれない。

「俺にはレイが欠陥とは思えんが……っ！ レイ、あれ！！」

マックが不意に前を指差して大声を上げた。

見れば、装甲車に連れ添われた大型のバスが機械人の掃討機『ヘルダイバー』に襲撃されている。対人の中でも、特に対非戦闘人を目的とした、ヘリのような機体だ。赤外線センサーとモーションセンサーを組み合わせた独特のセンサーで蟻の動きすら把握すると言われている。装甲は紙のように薄い、代わりにこれでもかと言うほど機関銃を搭載している。ハリセンボンのように機体下部に銃が敷き詰められ、真下の生命体が絶滅するまで撃ち続ける。

「マツク、撃て！ 撃ち落とせ！！」
「おうよ！」

マツクが銃を構えて引き金を引き続ける。バスの護衛と思われる装甲車が掃射を受けて八チの巢になる。それを見て歯ぎしりするが、マツクは狙いを外さずに『ヘルダイバー』のエンジン部狙って撃ち続ける。すると、ゆらりと『ヘルダイバー』がその機首をこちらに向けた。そして、こちらをジッと観察するかのように見ると、装甲車に最後の一斉射をしてからこちらに向かって急接近してきた。

「マツク！ ハンドル頼む！！」

「分かってる！ あんなの食らいたくねえ！！」

ハンドルをマツクが横から握ると、レイが後部座席に置いていた対物ライフルを取り出し、それを構えると、間髪入れずに『ヘルダイバー』のコックピット部分目掛けて発砲する。

装甲が紙同前の機体にとって、対物弾は致命的だった。

1発目が機首のカメラを貫通して後方へと抜け、次弾がエンジンを貫き、機体がゆらりと傾いて横のビルに突っ込む。

「うおっ！？」

「掴まってる！！」

頭上から瓦礫が降ってくる中をレイがマツクからハンドルを奪って巧みなハンドル捌きで潜り抜ける。そして動きが止まった2台の車両の脇にジープを止めると、飛び降りてレイは装甲車に、マツクはバスへ向かって走り出した。

「生存者はいるか！？」

レイが装甲車の穴だらけになった扉を思いっきり引張って開けると、血だらけの兵士が倒れこんでいた。運転席の兵士はすでに絶命していたが、後部に乗っていた兵士はまだ意識があった。レイがすかさず抱き起すと、兵士がうつすらと目を開けた。

「っ、き、機械人……！」

兵士がレイを見て銃を抜こうとするが、その前にレイが言葉でそれを制する。

「俺は味方だ。現在A隊と行動を共にしている。安心してくれ」

「A、隊？　じゃ、じゃああんたがレイとかいう……」

「そうだ、だが、今はそんなことを言っている暇はない。その傷じや、長くは持たない」

銃創は腹と肩を貫通している。殺傷性の高い大口径の機関銃で撃たれたのだ、致命傷は避けられない。

「くっ、機械人に心配される日が来るとはな、世も末だな」

兵士は苦しそうに笑うと、胸元から一枚の写真を取り出した。そこには笑顔の女性と兵士の姿が映っている。

「もし、出会えたら、渡して、くれ」

「……承知した」

写真を受け取ったと同時に、男の手から力が抜ける。そして、2度と動かなかった。

レイは写真をポケットに仕舞うと、兵士に向かって敬礼して装甲車を出た。

そしてバスへと向かう。

バスはいわゆるスクールバスとでも表現されるバスだ。その名称から、レイはこれから見ることになるであろう光景を思っただけで落ち込んだ。バスの昇降口からバスに乗ると、目の前でマックが跪いていた。

「マック……」

「この子達も、死にたくなかっただろうに……」

バスの中は地獄だった。そこら中に血だまりができており、その中に小さな死体が浮かんでいる。まだ幼い、小学生にもなっていないような子供たちの死体がバス内を埋め尽くさんばかりになっていた。おそらく、子供たちをできる限り詰め込んで、脱出させようとしていたのだろう。

マックは近くに倒れていた子供の頬を撫でながら、肩を震わせている。

「マック、死者を悼むより、今生きる者を助けるのが、俺たちに来る唯一のことだ」

「分かっている。それでも、もつと早く来ていれば、助けられたはずだ。高々『ヘルダイバー』1機、造作もなかったはずだ……」

マックが悔しそうに床を殴る。レイがマックの肩に手を置く。

もはや何も言わない。言葉にできる気持ちなど、結局はただの同情に過ぎない。

「レイ、俺は自分の家族すら守れなかった男だ。それでも、俺は守りたいんだ。この子達のようにさせないために」

「ああ、分かっている。俺も付き合っから、しっかりし、……マック！」
「うん？」

突然、レイが声を上げてバスの奥へと走り出す。子供たちの死体を踏まないように避けながら、最後尾の子供たちが折り重なって倒れているところまで行くと、死体をどけながら叫んだ。

「生命反応だ！ 数は3つ！」
「なにっ！」

マックが跳ねあがって走り寄ってくる。死体をどけて、下に埋まる死体をさらにどけ、しばらくそれを続けると、子供の泣き声が聞こえた。

「だ、だれかあ……」

幼い、男の子の音が確かにマックの耳にも届いた。そして、死体をどけると、そこに真っ赤な血を顔面から被った男の子が泣いていた。マックがその子をひよいと持ち上げると、マックが嬉しそうに抱きしめた。

「無事でよかった！」
「お、おじさん、誰？」
「マック、2人目だ」

抱きしめられて泣きながらも戸惑っている子供がふと隣でもう1人の男の子を抱えるレイに目を向ける。そしてさらに酷く泣き始めた。

「き、機械人がいるうっうっ！！」

「うお、レイ、顔隠せ！」
「今さら遅い！」

レイは抱えた男の子を座席に寝かせ、最後の1人を死体の山から持ち上げ、その顔が曇った。

「……酷い」

マックが泣く子をあやししながらそちらを見ると、すぐにその言葉の意味が分かった。

抱えられているのは女の子だ。2人目同様意識を失っているが、男の子2人と違って無傷ではなかった。

腰、足などに銃創を受け、人の血が自分の血かも分からない血がダラダラと流れ落ちている。

レイがすぐさま傷口を布で縛り、応急手当ををする。そして寝かせていた男の子と共に車外へ連れ出す。マックも泣く子を抱えて車外へ出る。気づけば泣いていた子はレイの方をジッと見つめている。

「機械人が珍しいかい？」

「ううん、あいつらは敵だ。人間を殺すのに、どうしておじさんと一緒にいるの？」

「おじさんっていう年ではないんだがなあ……。彼は俺たちの仲間だ。世界のすべての機械人が敵というわけじゃないんだよ」

「……敵、じゃないの？」

「ああ」

そう言うと、男の子はまたレイに視線を向ける。

レイは子供2人を後部座席に寝かせ、運転席に戻った。待たせる間もなくマックが助手席に滑り込む。

「そう言えば、お名前を聞いていなかったね。名前は？」

マックが抱える子に聞く。男の子は「瞬答えるべきか悩んだようだが、すぐにマックの目をまっすぐに見て、言った。」

「ルート」

第十二話 <過去?> 出会い(後書き)

はい、ルートの台詞ほとんどでませんでしたね。
フラッシュとフェイナに関して言えば、もう、ね……。

名前付きの兵器が出てきました。

『ヘルダイバー』

まあ、人狩り用の機体です。非装甲車などを中心に攻撃するため、威力よりも数で勝負する機体です。どんなに弱い弾でも数撃たれりや死にますから。

イメージとしては米軍のアパッチをローターなくしてジェット推進にして機体下部に大量の固定機銃がある感じです。コックピットのところはA Iが積まれてますので、へこんでます。

ルートは最初、レイが怖かったんです。
なんせ機械人ですから。
今では大切な仲間ですが。

レイは、この時すでにある程度感情的に動けるようにはなっています。マツクに影響されたんでしょうね。

誤字脱字でも構いません。

感想お待ちしております。 m ((m

第十三話 <過去?> 救出(前書き)

二話目投稿……。

冒頭ルート視点が少し入ります。

第十三話 <過去?> 救出

何が起こったかなど、幼いルートたちには分からなかった。

突然、地面を揺さぶる大爆発が起き、部屋で寝ていたルートは両親に抱かれて家の外へと連れ出された。家の前には、近くの学校で使用されているバスが停車しており、銃を担いだ兵士が大声で「逃げ！」と言っていた。

母親は、ルートを抱えてバスに乗り込もうとして兵士に止められた。そして小さく首を横に、兵士は振った。

「お子さんだけです」

兵士はそう言うと、ルートを母親から受け取り、バスに乗っていた女性に引き渡した。

「母さん！」

ルートが振り返って母親に叫ぶ。

だが、両親は2人ともその場を動かない。

考えてみれば、子供だけでも逃げ出せるのだから、幸せなのだ。すでに主要な門は破壊され、籠の中の鳥となった今、軍が外壁の一部を爆破して脱出口を開いたのだ。とはいえ、全ての生存者を連れ出すだけの車もなければ、時間もなかった。

止まっているバスにはほかにも子供を連れた親たちが、必死に自らの子供をバスに乗せようとしている。ドアからだけでなく、窓からも、何とか子供だけは助けたい一心で子供を押し込もうとしている。

「母さん、父さん!!」

座席に押し込まれたルートは訳も分からずに窓の外で泣いている両親に向かって叫ぶ。

バスが動き出すと、大勢の子供が最後尾の座席によじ登り、窓越しにある子供は叫び、ある子供は泣き、ある子供は上にさらに子供が覆いかぶさってきたためにつめき声をあげている。

けれど、誰もそれを止めることはできない。あまりに大勢の子供が乗っているため、大人も子供の波を止めることはできない。下の方に埋もれた子供が圧死寸前だったとしても、助け出すこともできない。

バスは通りを横切り、郊外へと向かう道に出る。

そして、ルートは見た、見てしまった。

太陽を背景、真っ黒な影が空から迫ってきた。

甲高い音がバスの真上を通過すると、後ろを走っていた装甲車が突然ブレーキをかけ、車体上部に据え付けられている銃座の兵士が影目掛けて撃ちだす。その音がバスに響き、ルートは本能的に身を屈める。そしてすさまじい衝撃に襲われ、子供たちが折り重なるように最後尾の座席前の通路に倒れこみ、ルートは一番下の方に埋まってしまった。

息ができない。

腕が、足が、胸が、頭が、痛い。

そして真上から物凄い音がしたかと思うと、悲鳴が響き渡り、何か当たるような振動を背中に受ける。

悲鳴が鳴りやむと、静寂が支配する。身動きの取れないルートはただただこの苦痛から早く逃れられることを祈るだけであった。

「……………だ！ ……は……………！！」

耳に声が届く。

真つ暗な視界には何も見えないが、徐々に体にのしかかる重みが軽くなつていくのが分かる。

「だ、だれかあ……………」

必死に声を振り絞つてそれだけ言うと、不意に体が宙に浮き、目の前が明るくなる。

目の前に、男の顔が現れる。ルートを見つめて心底嬉しそうな顔をしている。

そしてルートを強く抱きしめてきた。いきなりすることに事態が理解できず、なされるがままになっていたルートは男の隣にもう1人いるのに気づき、そちらを見ると、顔がこわばった。

機械人だ。服を着ているうえに肌の露出はほとんどないが、分かる。何度もテレビに出ているのを見ていたし、両親からは機械人に気をつけると何度も言われていた。

何故か、など幼いルートには理解できていなかった。

だが、危険なことは理解していた。

だからこそ、彼を見たとき、ルートは声を大にして泣いてしまった。

それが、ルートがマックとレイ、ひいては旅団の人々と出会った最初の瞬間だった。

「こちらA隊のマックだ。誰か応答できるか？」

3人の子供を助け出したマックとレイは、一路合流地点を目指してジープを走らせている。マックは出血の酷い少女を手当しつつ、無線で先に撤退した仲間と連絡を取ろうとしている。だが、どれだけ呼んでも一向に返事が来ない。無線からは雑音しか流れてこない。

「本隊と連絡が取れない。嫌な予感がする」

「無線妨害か？」

「いや、そうじゃなさそうだ。急いでくれ」

「分かった」

レイがアクセルを踏み込み、マックは座席に押し付けられる。大した怪我をしていない少年2人は座席したところで蹲って少女のこ

とを心配そうに見つめている。気を失っていた少年も激しく揺れるジープのおかげですぐに目を覚ました。全員誰のかも分からない血をほぼ全身に浴びてしまっているため、直接聞かないと本当に外傷がないのか分からなかったが、少年2人は幸いにも擦り傷、打撲などで済んでいた。

「大丈夫、この子は助かるよ」

そうマックが言うと、2人は少し安心したように頬を緩めた。事実、出血は止めたため、本隊に着いてすぐに治療すれば問題なく治せる。とはいえ、あまり長い時間放置すれば出血多量で死んでしまう。

マックが少年2人を心配させまいと冷静を装っていると、突然急ブレーキがかけられ、マックが前の座席に顔面をぶつけてしまう。

「つう、な、何事だ!?!」

鼻を押さえながら前を向くと、レイが固まっている。その視線は1カ所に向けられて動かない。マックがその視線を追うと、そこにあったのは……、

「あれは、本隊の……、そんな馬鹿な!?!」

「マック?!」

巨大な陸上戦艦が止まっている。見慣れた、マックたちが所属していた艦だ。

その艦が、黒煙を上げている。

信じられない、という思いを抑えきれず、銃を片手にジープを飛び降りて、走り出す。

「誰かいないか！ 返事をしてくれ！！」

燃え盛る装甲車の前を横切り、倒れている仲間に1人ずつ声をかけるが、誰も返事を返さない。

血肉と鉄が燃える臭い、硝煙の鼻を突く臭いに堪えながら、マツクは艦の中に入ろうと、昇降口を探すが、瓦礫に埋もれて近寄れない。

「敵襲があつたようだな。戦闘が終わっている以上、ここは陥落したということだ」

後ろから、少女を抱えたレイがやって来た。2人の少年が縮こまってレイの服を掴んでいる。目の前に広がる光景は、あまりにも子供には辛すぎる。

マツクが辺りを見渡すと、重火器を装備した機械人が何人もバラバラになって倒れていた。相当苛烈な戦闘があつたことは容易に想像があつた。遠くには大型兵器が破壊されて黒煙を上げている。

「くそつ、撤退に使う艦が来ることを呼んでいたか……。一般人を乗せる隙を突かれて、一網打尽か」
「なんてことを……」

レイは、少年2人の目を覆ってやった。少年2人はその手に顔を押し付け、小さく震えていた。

「無線で、近くの応援を呼ぼう。時間がない、特にこの子には」

レイが少女に目を向ける。

「誰かいてくれよ……」

マックが無線の周波数を変えて、助けを呼ぶ。

「こちら『ブラン・コーリア』、敵襲を受けた。誰か応答を」

だが、そう簡単にいくものではない。

たとえ周波数が当たっても、無線の有効距離内にいてくれなくては、誰も気がついてはくれない。

マックは必死になって周波数を1つ1つ変えて、同じ台詞を繰り返した。

「くそつ、誰かいないのか……」

「……っ！ マック、あれを見る！！」

レイが突如叫び、地平線を指差す。

小さな黒い点が2つ、宙に浮かんでいる。マックが即座に近くの固定銃座に走り寄り、それを抱えて黒い点に狙いを定める。

「敵に無線を拾われたか！」

悪態ついて引き金に指をかける。近寄られる前に撃ち落とさなければ、やられる。敵は別に近寄る必要などない。遠くからミサイルを撃てばそれで終いだ。

自動照準の赤いランプが点灯し、マックが引き金を引こうとした瞬間、レイがその手でマックを制した。

「レイ?!」

「違う……」

レイがこちらに振り返る。笑みを浮かべている。

「あれは敵じゃない」

「なに？」

「仲間でもないがな」

そうこうしているうちに2つの黒点が徐々に、大きくなってきた。そして、その正体が明らかになっていった。

大きなメインローターを持ち、両サイドにロケット弾のポッドを持つヘリ。

到底機械人が使うとは思えない、ちゃちな装備だった。だが、それがマックたちには敵ではない証明となった。

ヘリが上空でホバリングを始め、側面のハッチが開け放たれ、兵士が下に向けて合図を送る。

着陸する、と。

レイが少年を引っ張ってその場を離れ、マックは少し距離を置くだけにしておいて徐々に高度を下げていくヘリを見つめ続けた。

接地し、兵士がマックの元に走り寄ってくる。その顔はまぎれもなく人間であった。部隊章は見慣れないものであったが、少なくとも敵ではない。

「無線を傍受した。生存者はこれだけか？」

「ああ、どこの隊だ？」

兵士は全員をヘリへと促した。さらに複数の兵士がもう1機から降りてきて、驚いたことに兵士はレイを見ても顔色1つ変えず、抱えられている少女の容体についてレイに聞いた。

「我々は防衛軍に所属するものではありません。傭兵です」

「傭兵？ 雇われているのか、都市に？」

「詳しくは我々の艦で。こちらでも偶然帰還途中に無線を拾って来たため、あまり燃料が残っていません。それに、先ほどこちらに向かう時に機械人の第2波がこちらに向かっているのをレーダーで確認しました。一刻の猶予もありません、さあ！！」

そう言った兵士がヘリへとマツクを押し込む。少女は兵士が持つてきた担架に乗せられ、赤い十字架を背中に付けた兵士に付き添われ、もう1機のヘリへと担ぎ込まれた。少年2人も兵士に抱えられてヘリに乗せられる。

マツクもヘリの乗り、座席に座って先ほどの兵士に声をかけた。

「傭兵と言ったな。名前は？」

「我々は『フリーユージェ』と呼ばれる傭兵旅団の者です」

その答えに、マツクの目が見開かれる。

「『フリーユージェ』だと？ 機械人が多数所属していたから、開戦直後に壊滅したと聞いていたが……」

「まあ、事実は事実ですね。旗艦を襲われましたのでそういう情報が流れたのは仕方ないですが。ですが、艦に被害が出て身動きは取れなくなっていました。部隊は健在です。仲間の機械人も我々と共に人類側に立っています」

「誰も反旗を翻していないと？」

「はい、理由は分かりませんが、機械人の中にも、この戦争に反対

の者、疑問を抱いている者が多くいます。我々は各地を回って生存者を助け出す任務を受け、攻撃を受けた都市を回っているんです。その中で多くの機械人たちとも出会い、我々に加わった者も多くいます」

そう言うと、兵士はコックピットを指差した。するとパイロットがヘルメットを取ってマックに敬礼した。機械人だった。

「そうか、……戦況は？」

マックは敬礼を返すと、兵士に視線を戻した。

「正直言つて、こちらが不利ですね。機械人たちは数こそ少ないですが、兵器の規模が違います。戦闘機にしても、あちらの機体は人間のことを考えないで設計されていますし」

兵器はいずれにしても人間が扱うものだった。だが、機械は発達している。その気になればどんな戦闘機も寄せ付けないような高性能機だって作り出すことができる。

しかし、人間がどんなに兵器の性能を上げてても、人間が使えなければ意味がない。優秀な旋回性能を持ち合わせても、旋回時に起きるGに人間が耐えられなければ、兵器として意味を成さない。だから、人間が使う兵器はある一線で妥協されている。

ここまでなら人間でも使うことができる、というラインが存在するのだ。

だが、それが機械人にはない。極限まで戦闘に特化した兵器を製造することができるのだ。うっかり背後の注意を怠ることも、血が下がってブラックアウトすることも、彼らにはない。

「離反している機械人が多いとはいえ、彼らの主力は健在です。人類についた機械人の中には自分たちが片を付ける、と言って出撃した、とも聞いています」

「やはり、機械人でもおかしいと思うのだな」

「ええ」

「と、あれか？」

マツクが窓から外を見る。兵士が別の窓から外を見て、頷いた。

「あれが、我々の旗艦『グランドフリユージェ』です。今は駆動系の修理のために動けません、火力は健在です」

『ブラン・コーリア』を覆う広大な森林の端、いわば外界との境に、巨大な戦艦が止まっている。マツクの乗っていた艦よりも一回り大きく、周辺に陣地を構築している。至る所に砲弾を食らった弾痕が残っており、主砲のうちの1門は砲身が大きくひしゃげており、かなり激しい戦闘を潜り抜けてきたことを物語っている。

その艦の背後に回り込むと、甲板が見えてきた。そこにいる誘導員が着陸を誘導している。

「ようこそ、我が家へ」^{ホーム}

兵士は、ニコリと笑って言った。

第十三話 <過去?> 救出(後書き)

はい、マック、旅団に出会う、の巻でした。

マックがそれまで乗っていた艦は『グランドフリューゲ』のような航空戦艦ではなく、一般の戦艦に分類されるものです。自分の好きな、または嫌いな戦艦を思い浮かべてこれでもかというほど燃やしちゃってください。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第十四話 <過去?> ミフネ・マツケイン(前書き)

三つ目。

新キャラ登場です。

まあ、存在は前々から出てきてましたけどね。

第十四話 <過去?> ミフネ・マツケイン

扉が開き、白衣の服を着て、マスクをした男性が出てきて、マツクたちの前に立った。

この場には、マツク、レイ、そして少年が2人いる。もちろん、片方はルート、片方は名乗り遅れてしまったフラッシュだ。心配そうな表情で2人は男性、医師を見上げた。医師はそんな2人に気が付くと、屈んでその頭を優しく撫で、大人2人、片方は見た目だけが ? を見上げて笑みを見せた。

「手術は成功です」

そう、医師は告げた。

それを聞いた瞬間、その場にいた全員が安堵のため息をついた。医師もほっとした表情をしている。

しかし、医師はすぐに真顔に戻って、大人2人だけに向かって言った。

「ですが、損傷の酷かった両手両足は、すでに手術で治せるレベルではありませんでした。残念ながら、切断という選択に踏み切りました……」

「切断、ですか……」

マツクの様子が凍りつく。

幼くして両手両足を失ってしまった少女、フェイナを思い、マツクは酷く落ち込んでしまった。

「義手義足の手配はしておきました。一日両日中に彼女の元に届くでしょう。麻酔が切れて、目が覚めたら、すっかり彼女に状況を教えてあげてください。信じられないでしょうから……」
「……分かりました」

背後の手術室の扉が開き、中から看護師がフェイナを乗せた担架を押し出てきた。口には酸素マスクが当てられ、シート越しに見える彼女のシルエットはあまりにも小さい。本来あるべき四肢が無いのだ。

「レイ、彼女についてやってくれ。2人も頼んだ」

「分かった。マックは？」

「旅団のトップが俺に用があるらしい。ああ、すみませんが先生、旅団長の執務室というところに行きたいのですが……」

「ああ、それでしたら若いのに案内させましょう、少し待っていてください」

医師が快くそう言うと、近くの艦内電話でどこかに連絡を取り始めた。レイはマックに別れを言って担架の後をルート、フラッシュを連れて追いかけていった。

しばらくして、隊服を着た若い兵士が現れて、軽く敬礼をして、笑った。

「君は……」

「どうも、4時間ぶり、くらいですね」

へりに乗っていた、兵士だった。あの時はよく見ていなかったが、随分若い。マックも十分若い、彼はまだ幼さも残っているほどだ。十中八九成人していないだろう。

「どうぞ、旅団長がお待ちです」
「すまん」

彼の後に続いて通路を進む。

「随分と、立派なものなんだな、傭兵というのは」

「そうですね？ 確かにこの艦は立派ですけど、儲かってはいませんよ？ 難民や孤児の世話にかなり回してますから」

「そうなのか？ 武装も立派なものだが」

「あれは、現在この旅団が防衛軍に雇われている状況ですので、大量に回ってくるんですよ。いざという時の互換性とかだそうですね。こっちは自腹切らないで最新鋭の武器が使えるので使いたい放題してますけどね」

タハハ、と彼が笑った。屈託のない、青年の笑い方だ。どうしてここにいるのか、マックは無性に聞きたくなった。だが、それは彼のプライベートであり、聞かれたくないことかもしれない、と思い直して、相槌を打つだけにしておいた。

「ここには、子供がたくさんいるのか」

「ええ、後部甲板の下には本来大型の格納庫があるんですが、旅団には戦闘機をたくさん買うお金も整備するお金もないので、改築してそこも居住区にしているんです。もちろん、防音もしっかりしておいてますので、現在は200人ぐらいいます。内半分は身寄りのない子供ばかりです」

「そうだった子供はどうするんだ？」

「大抵は、一緒に乗ってきた大人が保護責任者になって、次の都市に着いたときに任意で降りてもらっています。時々、僕みたいに旅団に留まる子供もいますが、少ないですね。できれば、戦争とは無縁の世界で暮らしたいでしょうから」

「すまん、余計なことを聞いたな」

マックがばつが悪そうな表情をして頭を下げる。それを彼は慌てて制する。

「いえ、僕が勝手に言ったことですし。と、ここですよ」

彼が1つの扉を指差す。他の部屋とは違い、少し装飾に凝っているようで、一見する限りでは木製の扉のようだ。

「自分はここまでです。では失礼します」

敬礼して、彼はにこりと笑って去って行った。

マックは敬礼し返して扉に向かい合った。そして、軽く2回扉を叩いた。

中から「どうぞ」と男の声が聞こえてきて、マックは扉を開けた。

中は、執務室というよりは図書館に近い印象だった。そこそこの広さの部屋には執務机が1つと来客用のソファとテーブルがセット。そして、執務机の背後の壁は大量の本が並んでいる。

ふと扉の幅を見ると、扉は表面だけが木製で中心は金属製だった。

そしてマックは声の主に視線を向けた。

「初めまして、え〜と、マック君、でいいかね？」

執務机越しに初老の男がそう言った。短く切りそろえられた髪は、白髪が目立つ。髭を綺麗に切りそろえていて、威厳のようなものが醸し出されている。皺はあるが、老いをまったく感じさせない鋭い

目が、マックを見据えている。まだまだ現役といった感じだ。

「は、はい、『ブラン・コーリア』防衛軍外部部隊ドロス隊長のマック・ジーンであります。この度は助けていただきありがとうございます！」

直立不動で敬礼する。

すると旅団長の男は苦笑して敬礼を返した。

「そう形式ばらなくて構わんよ。ここは軍隊ではないからな。私はこの傭兵旅団『フリーユーゲ』を束ねるミフネ・マッケインと言う。今年で59の老兵だ、堅苦しいことは苦手になってしまっただな」

まいったもんだよ、とミフネは言い、マックにソファを勧める。

「今回呼んだのはほかでもない、君ともう1人のお仲間をスカウトするためだ」

「スカウト？」

「この旅団も随分と古強者が少なくなっただな。若い連中が占める割合が増えてきた。経験豊富な兵士を探していたところなんだ」

ミフネはにこやかに言う。だが、いまだにその目はマックを品定めするかのような鋭いものだ。

「君は一部隊を若くして束ねていたようだな」

「無様にも隊長だけ生き残ってしまいましたか……」

「もう1人がいる。それに君は3人もこれからがある若い命を救った」

ミフネはそう言うと、執務機の引き出しから何かを取り出してきた。

そしてそれをマツクの目の前に置く。
それは翼をモチーフにしたエンブレムが描かれた部隊章。

「君の直接の上層は部下の報告では壊滅したそうだな。では、現在君が防衛軍のトップだ。自分で決めていいぞ？」

「いきなり、ですね。断った場合は？」

マツクがそう言うと、ミフネはすぐさま一枚の紙をマツクの前に置いた。そこには細かい字でいろいろ書いてあるが、肝心のところは大きく、分かりやすく書かれていた。

「請求書……？」

それは請求書だった。明細は書かれていないが、とてつもなく法外な金額がそこには書かれている。マツクの4、5年分ほどの給料に相当している。

「いかにも、それは君たちをここまで連れてきた時のヘリの燃料費、および少女の医療費が含まれている。まさかと思うが、あの子を放り出して行く気じゃあないだろうな？ 言っておくが、分割とか、ローンなんて都合の良いものはないからな。ここを出ていくときにきっちり払ってくれ」

ニヤリとミフネが笑う。

元から、逃がすつもりなどなかったのだ。承諾したら万々歳、拒否しても到底返済できない金額を突きつけて入隊させるつもりだったのだ。

「……最初から選択肢などなかったのですね」

「人聞きの悪いことを言うな。払ってくればいつでも艦を降りて

構わんぞ。あの子供たちの面倒は見られんが」
「……やっぱり断れないじゃないですか」

「うん？ 戻ったか、マック」

マックが案内された部屋に入ると、そこにはレイ、ルート、フラッシュ、そしてベッドに寝かせられたフェイナの姿があった。ルートとフラッシュは疲れていたようでソファで寝ている。丁度レイが2人に毛布を掛けてやっているところだった。

「すまん、任せっきりになってしまったな」

「なあに、マックは疲れるだろうが、俺は疲れんからな。寝ずの番など得意中の得意だ」

マックは部屋の隅にあった椅子を持ってきてベッド脇に置き、そこに座った。レイも自分の椅子に座り、フェイナの様子を見つめる。

「これからどうするんだ？」

レイが、今まさにマックが考えていたことをズバリ当ててきた。マックはレイの方を向き、小さくため息をついた。

「旅団に入隊する」

「ここに……？」

「そうだ、すまんが俺が勝手に決めてしまった」

そう言うと、マックはポケットから2枚の部隊章を取り出した。1枚は自分の、もう1枚をレイに渡す。それをレイはしげしげと見つめると、もう片方の手でそれまで付けていた軍の部隊章を服から引きはがした。

「構わないのか？」

「何を言う。俺はマックの部下だ。隊長の判断には従う」

ニヤリと笑う。

後で縫わなければな、と呟きながらレイは部隊章をポケットにしまった。

「旅団長はどんな人だった？」

部隊章をポケットに入れるとレイは話題を変えてきた。

するとマックは大きく頂垂れた。急にテンションが下がったのが目に見えて分かった。

「ど、どうかしたのか？」

「あの人は、策士だ。少なくとも俺には言い返す機会を与えない。政治家として十分やっていけるな、あれは」

マックに入隊を勧めてきた時も、表面上は柔らかい物腰であったが、目つきだけは笑っていなかった。拒否権など与えない、自分が思ったことは絶対に実現させる、強靱な男の目つきだ。そのくせ、頭も切れるとなれば、これほど恐ろしい男は滅多にいないだろう。

「とにかく、そのうち皆の前で入隊式のようなものをやらせるそう
だ。後これ、隊内での身分証のようなものだそうだ、持っていてく
れ」

カードのようなものを取り出し、レイに手渡す。顔写真は無いが、
そこにはレイの名前などが記載されている。マックが教えて作らせ
たようだ。

「速いな」

「それには激しく同意する。聞いたら俺たちがへりに乗っていた時
点でカード自体は作っていたらしい。後は名前を入れるだけだった
とき。傭兵部隊に入る人間は何らかの事情を持っている人間が多い
そうだから、細かいことも書かないそうだ。部隊内ではか通用しな
いそうだ」

「だろうなあ」

何せ顔写真が無いのだから。

「子供たちはどうなるんだ？」

「ここの保育施設とやらに入れるそうだ。次に着く都市までに引き
取り手がつけばその人に連れられて艦を降りることも可能だ。俺と
しては、できればそうなってくれるとありがたいのだが、今の戦況
ではどこの都市も安全ではないからな」

「難しいな」

「ん……」

「おっと、気が付いたか」

見れば、フェイナが目を開けている。

マックとレイが近寄ってその顔色を窺う。目がキョロキョロと動き回って、マックとレイを見比べたり、ソファで眠りこけているルートとフラッシュに視線を向けたりする。

「生き、てるの？」

「ああ、君は生きてる」

そう、マックが優しく言うと、フェイナは大粒の涙を流しながら泣き出した。

「手足の、感覚が、な、いっ！」

おそらく、手で涙を拭おうとしたのだろう。そこで自分の手がなくことに気が付いたのだろう。それを理解した瞬間、どうしようもなくて暴れだそうとした。

それを慌てて2人がかりで押さえつけて、舌を噛まないようにレイが指を口に突っ込む。生身の人間がやれば指を噛み千切られるかもしれないが、レイなら痛くも痒くもない。落ち着いて状況を説明するために泣き止むまで待つ。

「マック」

「な、なんだレイ」

「これから大変だぞ」
「今さらだぞ、それ」

第十四話 <過去?> ミフネ・マツケイン（後書き）

新キャラ、ミフネ・マツケインでした。

以前から何度か『先代』という呼び名で出てきてきましたが、この人です。

え、ミフネさんです。

脳内イメージはもちろんあの、ミフネさんです。

マトックス見てからあの人をリスペクトしております。

最終決戦でうおーっ！！ て叫びながら引き金を引き続ける姿、
…感動しました。

ミ・フ・ネ！！

ミ・フ・ネ！！

はい、少し自分の世界に入ってしまった。
すみません。

え？ すみませんじゃすみません？ 山○君、座布団1枚。

ともかく、過去編にいろいろなと最強な人物です。

第十四話 <過去?> 非日常の中の日常(前書き)

戦闘シーンが書きたい……。

過去編では戦闘書かない予定なんで、どうしてもグダグダになって
しまいます。

第十四話 <過去?> 非日常の中の日常

戦争が終わった。

あまりにも唐突な幕切れだった。

防衛軍を束ねていた都市のトップが演説台で「人類は再び平和を取り戻した」だの、「これからも機械人と共存していく」などと一般市民から拍手喝采の演説をしているのを、マックとレイは旅団の食堂に据え付けられていた大型のテレビで他の仲間と共に眺めていた。

今日までに、旅団が救出した難民の数は優に2000人を超える。そのほとんどが、すでに都市で降りて新たな人生を歩んでいる。

「いつの間にか、って感じだな」

「なんでも、機械人の親玉を全滅させたから、指揮系統が駄目になつたらしいぞ。なんせ命令が無いと何もできないような連中ばかりだからな」

『始まりの機械人』を自称していた、機械人のトップたち。彼らは潜入した機械人の暗殺部隊によつて1人残らず殺されたと言われている。

さらに、指揮系統の中核であつた基地を破壊され、各地に指示を送ることが出来なくなり、敵はなし崩しに崩壊していった。一部は寝返り、一部は逃亡したりと、散々な末路であつた。

都市政府は、逃亡した機械人に出頭を命じている。人工知能を改修

することで、社会復帰を促すという。

「マツクも、随分と傭兵稼業が板についてきたな」

ふと、背後から声をかけられ、マツクが振り返るとそこには旅団長であるミフネの姿があった。確か今年で60の大台に乗るらしいが、相も変わらず老いを感じさせない。

マツクが敬礼したのに気が付いて、周りの隊員も立ち上がってミフネに敬礼する。

するとミフネが困ったような表情をする。

「マツク、君がそんなだと、まるで軍隊みたいに旅団がなつてしまっただがああ。我々は家族なのだ、堅苦しいことは極力抜きで行こうじゃあないか。もう君たちが来て3カ月だぞ？」

そう言われる、今度はマツクが苦笑する。

正直、マツクはまだ軍にいた頃の癖が抜けておらず、上司を見ると敬礼してしまうのだ。努力はしているが、上司な上、尊敬できる相手ともなると、頭で理解していても体が無礼講になることを拒否してしまう。

「それはそうと、マツク、最近子供たちの所に行っていないそうだな？」

「はあ、搜索任務で艦を離れていることも多かったですし」

「寂しがっておったぞ、後で顔を見せに行きなさい。レイは暇を見つけては行っておるのだがな」

「事務をマツクがやってくれてますので」

マツクはこの3カ月、1人でも多く救おうと体力が許す限りスケジュールを詰めて搜索、救出任務に従事している。下手をするとすで

に何人かの若い隊員たちよりも任務時間が多いかもしれないと、噂されるほどだ。それゆえ、3人の子供に会う機会をレイ任せっきりになっている。

「分かりました。後で行きます」

「そうしてやってくれ」

それだけ言うと、ミフネは食堂を後にした。

「それじゃ、レイ」

「俺も行くぞ。フェイナの様子を定期的に見てやってくれと、医師に頼まれているしな」

「あ、マック!!!」

格納庫を改装した居住区。その真ん中に、子供たちの保育施設がある。それほど大きくはないが、子供たちが過ごすには問題ない広さが確保されている。

マックが敷居をくぐって中を覗き込むと、ルートがこちらに気が付

いて走り寄ってきた。それに気が付いてフラッシュとフェイナがやってくる。

「みんな元気そうだな」

マックがルートの頭を撫でる。

「フェイナも、調子はどうだ？」

半袖短パン姿のフェイナを見て、マックが聞く。

3カ月前に手術をして、四肢を失ったフェイナは義手義足を付けている。とはいえ、まだ満足に歩ける状態ではなく、時々フラッシュに体重を預けるそぶりを見せる。

フェイナの義手義足は旅団で作られたものだ。詳しい内容は分からないが、なんでも筋肉のわずかな動きを感知してフェイナがどこをどう動かしたいのかを理解して、駆動させているらしい。ある程度慣れれば、細かい動きもできるようになるが、まだフェイナには少し大変なようだ。

「まだ痛いけど、結構慣れた」

「そうか……」

いまだに、フェイナはあまり笑わない。シヨックが大きすぎたせいもあるだろうが、こればかりは時間をかけてゆっくりほぐしていくしかない。

「フェイナ、足を見せてみる」

「うん」

レイがしゃがみ込んでそう言うと、フェイナは座って足を少し持ち

上げた。それをレイは手で持ち上げたりして問題がないか診察している。

フェイナは手術が終わっても定期的な手術が必要なのだ。

小さい子供は、成長著しく、骨もぐんぐん成長する。すると、肉を突き破って骨が露出してしまうのだ。そのため、こつやっつてレイが定期的に成長具合を見てフェイナが痛みを感じる前に対処するように心がけている。今のところ、問題ない。

マツクは薄々気が付いていたが、フェイナはマツクとレイで若干対応に差がある。

頻繁に顔を出すレイには、ある程度心を許しているのだろう。ルートとフラッシュは誰にでも笑顔だが。

「うん？ フラッシュ、少し伸びたか？」

ふと違和感を感じてフラッシュを見る。

「1センチくらい伸びたよ！」

嬉しそうにフラッシュが言うと、自然とマツクも頬が緩む。

マツクは戦争で妻と子供を亡くした。それ故に、親のいない子供を放っておけない。おかげでハードな毎日を送っているが、後悔はしていない。それで助かる子がいるのなら、マツクは身を粉にして働くつもりだ。

だから、こうして自分が助けた子供たちが笑顔で暮らしているのを見ると、嬉しいものなのだ。

「うそっ！？ おれ抜かれたのか？」

それを聞いたルートが何かショックを受けたようで大げさに頭を抱

える。

「安心しろ。ルートも成長期だからな。たくさん食べてたくさん寝れば、すぐに追いつくさ」

「ほ、本当だな!？」

だったら今すぐ食べてやる！ と言い残してルートは施設の中に飛び込んでいった。大方おやつを求めて走り回るつもりなのだろう。おやつでは縦ではなく横に成長してしまう気がするが。

「フラッシュ、君も行きなさい。ルートに追いつかれてしまつぞ？」

「うん！ じゃあまた来てね、マック！」

「ああ」

そう言うと、フラッシュを手を振りながらルートの後を追って走り出した。それをマックも手を振って見送り、傍でフェイナを診断しているレイに近づいた。

「どんな感じだ」

「やはり成長期だな。少し骨が張り出している。フェイナ、違和感はあるか？」

「少し。また手術するの？」

少し不安そうにフェイナが尋ねる。

「いや、まだ大丈夫だな。ペースは半年に1度程度だろう。これからさらに成長するならその限りではないが」

「あゝあ、あたしルートとフラッシュにおいてかれるな」

フェイナが天井を仰いでため息をつく。

フェイナは義手義足だ。そのため、成長というのが如実に表れにくい。成長するから定期的に義手義足を取り換えて身長は伸びるのだが、どうしても自分が成長したと実感しにくいのだろう。

「身長で追いつけないんだったら、2人をあつと言わせるくらいの美人さんに育てよ?」

「マツク、セクハラ……」

「どこでその言葉を覚えたんだ……」

まだ5歳くらい少女にセクハラと言われると、さすがにマツクもダメージを受けた。がっくりと項垂れる。

「でも、美人になりたいな」

「フェイナのポテンシャルは高い。しっかり運動して食べていれば、一般に美人と呼ばれる域には達すると思うぞ」

「ぼてんしゃる?」

「要は美人になれるってことだ」

「ほんと!?!」

フェイナが飛び上がって嬉しそうな顔をした。そしてその場にマツクがいることを思い出してその表情がどんどん真っ赤になっていく。それをマツクは笑顔で見ていた。

「そっちが素のようだな。明るい方がモテるぞ」

「う、うるさい」

ブイツとそっぽ向くフェイナ。

それをレイとマツクは暖かい眼差しで見つめる。

平和な日々だ。傭兵の艦の中とは思えない、平穏がここにはあった。マツクにとって、ここはある意味望んでも手に入れられなかった理

想郷なのかもしれない。傷を癒すことのできる、そんな場所なのかもしれない。

「俺たちが傭兵だつてことを忘れさせるな、ここは」

「……そうかもしれないな」

「お？ 機械人も物忘れはするのか」

「からかうな」

「ハツハツハツ」

レイもつられて笑い出す。

それをフェイナが不思議そうに眺めていた。

「ハツハツハツ、とそうだ、すっかり忘れていた。ルートとフラッシュを帰すんじゃないやあなかつたな」

「え、何かあつたの？」

いきなり真顔になったマックを見てフェイナが不安げになった。

「いや、まあ大したこと、なのか？ 俺とレイが君たちの保護責任者になるんだ」

「ほごせきに、え？」

「要は君たちの親代わりだな。俺がルートとフラッシュ、レイがフェイナの面倒を見る。君たちが15歳になるまでだがな」

「と、いうことはお父さんになる、ってこと？」

「ん、この場合レイがフェイナのお父さんになるな。まあ、呼び方など意味を持たんが。今まで通りでも構わんだろ？」

レイが頷く。

フェイナは、少し混乱しているのか、頭をグルグルと回す。時折、「お父さんが2人」などという不吉な言葉が聞こえてくるが、マッ

クはあえて聞かなかったことにする。2人が誰を指しているのか考
えると恐ろしくなる。是非ともフェイナの実の父親とレイを指して
いることを切に願った。

「フェイナ、これからは俺が君の面倒をずっと見る。子供を持った
隊員は広めの部屋をもらえるからな。一緒に暮らすこともできる」
そうレイが言うと、心底嬉しそうな顔をして、レイに抱き着いた。

「やった！ これからは家族だね、お父さん！」

ピシッと、空気が凍ったのはマツクの気のせいだろうか。レイが固
まっている。

「れ、レイ？」

「機械人が『お父さん』と呼ばれるとはなあ」

「りよ、旅団長！？」

いつの間にか背後にミフネがいた。そしてどこか嬉しそうな表情で
固まったレイとフェイナを眺めている。

「大方、処理が追いつかないんだろう。機械人にとって親という概
念は無意味だからな」

「！」

マツクがハツとしてレイを見る。

機械人は工場で作られた。それゆえ、親という概念はないのだ。そ
んなレイが突然お父さんと呼ばれれば、処理機能がどう反応するべ
きか困ってしまうのも無理はないだろう。

すると、ようやく動き出したレイがフェイナを抱きかかえて、その頭を優しく撫で始めた。フェイナも嬉しそうに笑っている。

「どうやら、問題なさそうだな」

「の、ようですね」

「あとは、君だな」

ふと振り返ると、1枚の紙が差し出された。見るのは2度目となる、請求書。

「……なんですか、これ」

「ここ3カ月でルートとフラッシュが壊した備品の修理費だ。君の給料から引いておく」

「ええ!？」

「保護責任者としてこれくらい当たり前だろう。しっかりしつけてくれよ?」

「そ、そんな……」

一介の傭兵であるマックにはあまりにもきつい金額が請求書には書かれている。

「安心しろ、あの時とは違って数年分の給料が全体的に減るだけだ。その間に2人が新たに壊せば追加されるがな」

面白そうに笑うミフネに、マックは何も言い返すことができなかつた。

「マツクはどうしちゃったの？」

「物を大事にしないと、お父さんが困る、ということだ」

「……………」

「フエイナ？」

「……………ごめんなさい」

「……………冗談だろう？」

マツクは3年間の減俸。レイは1年間の減俸が命じられた。

第十四話 <過去?> 非日常の中の日常(後書き)

マト○ツクスみたいな厳しいミフネさんじゃありません。

どちらかと言うともっと柔らかい、そうですね……、司令官ポストにいるような人ですとジ○ングの梅○艦長クラスですかね。締めるところは締めます。

このころのルートたちは年相応のやんちゃな子供たちです。さすがに保育施設全部トーチカみたいなコンクリ建造物じゃないですから、子供でも壊せるものはあります。

次回一気に10年くらい飛ばします。

理由は簡単、書くことがないからです。あまり過去編引きずると本編忘れそうでした……。

10年経てば、15歳ですね、皆。

そろそろ動き出します。それぞれが将来を考え始め、動き出します。

誤字脱字でも構いません。

感想をお待ちしております。

第十五話 <過去?> それぞれの覚悟(前書き)

だあああああああ、過去編が終わらない!!!!!!

出来れば次回から戻りたかったのに…………… (TAT)

ですが、終わりは見えました。あと少しだけお待ちください。

フルボッコまであと少し……………これってネタバレ?

第十五話 <過去?> それぞれの覚悟

「俺も旅団に入る!!」

時間が止まったかのように、いや、事実マツクの時間は止まったのかもしれない。隣にいるレイも目を閉じて黙って腕組みをしている。

なぜ、こんなことになってしまったのか、マツクはそのことばかり考えていた。

時間は少し遡る。

「なに、話がある?」

食堂でマツクが夕食を取っていると、ルートとフラッシュユがやって来た。それにフェイナもいる。

あれからもう、10年も経った。

今ではマツクは旅団の戦闘部隊としては最強を冠する401部隊の

隊長を務めている。仲間からの絶大な支持もあり、次期旅団長最有力と目されている。本人は遠慮しているが、ミフネすらマツクの支持に回っているようで、ほぼ確実視されている。

とはいえ、相変わらずハードなのは変わらない。むしろ、高度な戦闘を要求されるような任務を引き受けることが増え、いつの間にか大きくなっていったルートとフラッシュとこっぴどくやっつけてと話すのも久しぶりだ。2人はそんなマツクでも育ての親として見てくれている。

普段笑顔の絶えない2人が妙に神妙な顔をしてマツクの前に座るので、マツクも食べるのを止めて皿を横にどかして2人を見つめる。

「で、話とは？」

「あ、待って、これはフェイナも話したいことだから、レイさんと連絡とれる？」

「ああ、少し待ってくれ」

マツクはそう言って端末を取り出すと、レイに繋げて食堂に来られるか聞いた。レイからはすぐに行くという返事が返ってきて、通信を切った。

「今から来るそうさ。しかし、3人が揃いも揃って真面目な面していると、調子が狂うな」

「父さん、俺たちは真面目な話をしに来たんだ」

「うん？」

マツクが顔をしかめる。妙なイントネーションがあった。

保護責任者を引き受けてから、今に至るまでルートもフラッシュも

マツクのことは「父さん」と呼んでいる。最初はレイ同様に何とも言えないむず痒さがあつたが、今となつては慣れ、日常化していた。

「その、なんていうか、俺たちの将来のことなんだ」

「あゝ、そういうことが、確かにレイもいた方がいいな」

マツクは来るべきものがようやく来たか、という思い半分、来て欲しくなかったという思い半分が頭の中で錯綜した。

マツクはルートとフラッシュの、レイはフェイナの保護責任者ではあるが、本当の親ではない。自分の事が自分で決められる年、15歳前後で、本人たちが望めば艦を降りて自立することができる。

「そうか、お前たちももう15歳か……。あつという間な感じがするな」

「父さん、仕事で忙しかったじゃないか。レイさんが僕たちの面倒まで見てくれてたんだよ？」

フラッシュが少し不満そうに言う。マツクは苦笑するしかない。

「そうだったのか。レイには世話になりっぱなしだな。それはそうと、フェイナ、調子はどうだ？」

そうマツクが聞くと、フェイナが右腕を持ち上げて手を開いたり閉じたりさせる。機械的な音がわずかに聞こえる。

「悪くないわ。ルートたち相手に組手ができるくらいだから」

ニツとフェイナが白い歯を見せる。

フェイナの義手義足は、ここ数年で大きく改良されている。これは本人の意向でもあつたのだが、神経と電子回路を繋ぐジョイント手

術を受け、それまでとは比較にならないほど細かい動きができるようになった。手術後は神経が常に異物に接触するという激しい痛みに襲われ、1週間まともに寝られなかったらしく、レイがつきつきりで看護していたのをマックも覚えている。

それよりも、若干気になる単語にマックは目を細めた。

「組手？」

「「「あ……」」」

3人が物凄くばつの悪そうな顔をする。

「すまん、待たせた」

「レイか」

その時、食堂にレイが現れ、マックの視線がそちらに向く。それを3人が安堵のため息をついて見ていたが、それにはマックは気づかない。レイは逆に気づいていたが、話が分からないのであえて何も言わなかった。

「なんでも3人が今後の事について話し合いたいそうなんだ」

「今後？ そうか、もうそんな歳になったのか」

レイは物思いに耽るかのような仕草を見せ、マックの隣に座った。そして、フェイナを正面に見据える。

「で、今後どうしたいんだ？」

マックが聞くと、ルートが立ち上がって宣言した。

「俺たちは旅団に入りたい!!」

そして、話は冒頭に戻る。

「ほお、レイはともかくとして俺は2人を戦争屋にするために引き取ったんじゃないんだが？」

マックが感情のこもっていない冷たい声がフェイナを含めて3人を委縮させる。

「俺たちは父さんの仕事を見て育ってきた。この旅団がただ金を稼ぐために人殺しをやってるわけじゃないってことは身を以て知ってるつもりだ。だからこそ、父さんのような強い人間になって、俺と同じような境遇の子供たちを助けたいんだ」

「俺の人生の半分も生きていない若造が知ったような口を利くもんじゃないぞ。いいか、この仕事は子供を救うためにやっている、これは確かに事実だ。だが、だからと言って人殺しが正当化されているわけではない。都市によっては傭兵を禁止している場所だってあるし、何より俺が2人が人殺しになることを望んでいない」

マックは静かに言う。

するとレイが身を乗り出してフェイナに向かい合う。

「フェイナも、同じなのか？」

「う、うん。あたしはこんな体だし、今の世の中がこんな体のあたしに温情じゃないことも知ってる。出来る事が限られてるなら、あたしはこの体を最も有効活用できることをしたい。ここなら、いつも皆といられるし、父さんとマックさんの役にも立てると思う」

レイはそれを聞いて何度か頷く。

確かに、戦後、今では『大崩落』と呼ばれる戦争後、確かに人間は機械人と和解した。だが、戦後10年、あの戦争を小さい頃に経験し、両親を戦争で失った人たちが大人になり、社会を牽引する力となった最近では、機械人や体の一部が機械の人間はあまり良い目で見られていない。

そういう風潮になるのも分かるし、理解もできるが、やはり、やりきれない思いになる。

だが、

「この際だからはっきり言うが、フェイナ、お前の身体は中途半端だ。四肢は機械だが、身体は生身だ。前線に出すにはあまりにお粗末な身体なんだ。全身機械の俺と違い、お前は頭、心臓に1発貫えれば即死だ。だが、通常の任務ではお前は満足しないだろう？ それではその四肢が機械である意味がないからな。つまり、何が言いたいかというと、ここにお前の働く場所は無いってことだ」

最後の言葉をやや強く言うと、フェイナがビクツと震えた。これまでになく、レイも厳しい目をしている。血は繋がらなくとも、自分が育ててきた子が戦争屋になると言い出して、はいそうですか、と

言う訳がない。

「レイさん！ そんな風に言わなくなつていいじゃないですか！
俺たちはちゃんと考えた上でここにいるんだ。小さい頃から父さん
たちの仕事を見てきて、俺たちに出れることなんて、これぐらいし
かないって思つたんだ！」

ルートが食い下がる。

「ほう、いろいろ考えた、か。それは人を殺すこと、人に殺される
ことも考えたんだな？」

「あ、ああ！」

「では、目の前で助けられたかもしれない人が死んでいくのを見る
覚悟は？」

「……え？」

「仲間を見捨てて子供を助ける覚悟は？ 逆に子供を見捨てて仲間
を助ける覚悟は？ 1を捨てて10を助ける覚悟はあるのか、と聞
いているのだ」

「そ、それは……」

レイは畳み掛ける。15歳程度の覚悟など、たかが知れている。そ
んな覚悟で、この世界に入っていいものではない。

「レイ、下手にいつて上面だけの覚悟をされても困るんだが」

「それもそうだな、すまん」

マックはそう言うと、大きくため息をついた。

「だが、レイは良いことを言った。覚悟は大事だ。生死の狭間で生
きる覚悟があるのなら、俺はもう何も言わんし、言っても聞かんだ

るう？　だが、生半可な覚悟で俺たちの世界に入ろうと言うのなら、敵に殺される前に俺がお前らを半殺しにしてここからたたき出してやる」

3人がビクツとして、縮み上がる。

それだけ言うと、マックは立ち上がり、まだ残っている皿をそのまま返却口を持って行った。食堂の人が若干不満そうな顔をして、マックは詫びを入れる。

そして戻ってきたマックは3人を見下ろして言い放った。

「もう1度考え直せ。お前らは若い。これからいくらでも生き方を選べるんだ。今からこんな生き方に進まなくてもいいんだ」

先ほどとは違い、悲しそうな顔をするマックに3人がハツとなる。マックは心配でならないのだ。我が子同然のルートとフラッシュに死んでほしくないのだ。レイも同じ気持ちだろう。

レイも立ち上がり、マックの言葉を継いだ。

「明日、10時に俺たちは用事で旅団長の所へ行く。覚悟があるのなら、そこに来ると良い」

2人は子供3人を食堂に残して食堂を去った。

後に残された3人はその後ろ姿を見つめるしかなかった。

部屋に戻ったルートは2段ベッドの下のベッドに飛び込んだ。うつ伏せのまま、先ほどマックが言った言葉を反芻する。

「覚悟、か」

「ルートはある？」

後から入ってきたフラッシュがベッド横の椅子に座り、机に頭を押し付ける。

「分からない。傭兵だから、殺すこととか死ぬことだけが覚悟だと思ってた。でも、父さんたちはもっと過酷な世界を生きてたんだな」

身体を捻って仰向けになると、真正面の上のベッドの下部に貼つてある写真を眺める。

何時だったか、マックが部隊の仲間と共に撮った写真だ。

皆泥だらけでボロボロだったが、皆笑っている。

ルートはそんなマックに憧れていた。

強くて、優しく、時には厳しくて、そんなマックが羨ましかった。そしてルートはそんなマックを目標にして、今まで頑張ってきたのだ。マックがいない時でも若い隊員に声をかけてはマックの仕事の話をしてもらったり、組手の相手をしてもらったりしていた。レイ

が来たときは、さらに詳しい話を聞くことができたし、それを積み重ねるうちに、旅団に入ろうと志していた。

「僕たちには、それができるかな？」

フラッシュも同じだ。

あんな、最強で、正義の味方みたいなのが保護者では、憧れるなという方が無茶である。フラッシュの机にも、写真立てに入った1枚の写真が飾られている。そこには、レイと2人で写るマツクの姿がある。レイと肩を組んで、顔にも迷彩を施して表情は分かりにくい、白い歯が妙に強調されて笑っていることは分かる。

「それを決めるのも、俺たち自身だ。だけど、俺は父さんのようになりたい。それがどんなに厳しく、苦しい道だとしても、俺はその道に行く。父さんは1を捨てて10を助ける覚悟、と言っていただけ、逆に10を捨てて1を助けたことだって、父さんたちはあるんだ。命に格差はない、なんて言う人はいるけど、どんな時でも命の取捨選択はされているんだ。俺は、そんな時迷いたくない。自分が信じていることができるようになりたい」

「それが、覚悟なんだろうね」

「ああ」

「それじゃあ、話は決まったね」

「そうだな、確か10時って言ってたな？」

「それじゃ、8時に起きよう。お休み」

フラッシュは立ち上がると、電気を消してベッドの上に着がった。つた。

「お休み」

ルートもそう言つと、自分の目覚まし時計の設定を8時にして眠りについた。

覚悟をする覚悟など、とうの昔に済ませたさ、とルートは心の中で思った。

「ただいま」
「お帰り」

夜遅く、艦内をぶらぶらしていたフェイナは自室へと帰ってきた。部屋にはいつもと変わらないレイの姿があった。

フェイナはルートたちと違い、レイと共に暮らしている。フェイナの身体の事もあるし、2人部屋なら何とか都合がついたのだ。3人部屋は1人がハンモックで寝ることになるので却下になった。

フェイナはあの後部屋にレイがいると思うとなかなか帰れずにいた。しかし、何とか勇気を振り絞って帰ってきて、ただいまと言つと、

いつも通りの返事が返ってきた。

「何も、言わないの？」

「何にだ」

「入隊のこと」

声を振り絞る。

レイはそれを聞くと、読んでいた本を置いてフェイナに向き合った。

「確かに、言いたいことは山ほどあるし、力づくでもお前を止めたい気持ちもある。だがな、覚悟のできた人間に何を言っても無駄なんだ。それは、覚悟を決めようとする人間も同じだ。だから、俺はお前の覚悟を見守ることしかできない。そして、答えを聞くことしかできない。俺は今からルートの所へ行くから、一晩一人で考えてみると良い」

レイは立ち上がると、上着を取って部屋を出ようとする。それをフェイナは呼び止める。

「反対しないの？」

「しないさ。だが、生半可な覚悟で来る奴は追い返す。たとえそれがお前でもな」

それだけ言うと、レイは部屋を後にした。

後には棒立ちのフェイナが残された。

フェイナは机の上に先ほどレイが置いていった本に視線が行った。

その本は『機械化』と書かれている。

その本を手に取り、パラパラとめくると、何か所にも付箋が挟まれており、所によっては書き込みもされている。

機械化手術のリスク。手術後のリハビリについて。手術にかかる費用、など、様々なことについて書かれている。

そして、フェイナは思った。

レイは、常にすべての選択肢をフェイナに提示しているのだ、と。

フェイナには、都市に降りて生きる選択も、ここで生きる選択も示されている。

しかし、ここで生きていくためには今のフェイナの身体では役不足である、とも言っている。だから、それをなくす選択肢も提示した。何をどうするのも、全てフェイナの意志になるが、レイは可能な限りの選択をフェイナに与えているのだ。

本を眺めていると、フェイナが笑みを浮かべた。

「もう、遅いよ、父さん。あたしは、父さんのいる世界で生きるって決めたんだから」

それだけ呟くとフェイナは部屋の照明を消して眠りについた。

第十五話 <過去?> それぞれの覚悟(後書き)

それぞれが入隊の覚悟を決めました。

次回、ルートとフラッシュがマックと直接口論する、予定。

それが終わったら現代に戻ります。

書きたかったネタを幾つか飛ばしてしまった……。

- 1：レイの年齢ネタ
- 2：マックの苦悩(主に金銭的な)過去編において
- 3：マックの苦悩(主に体型的な)現代において

マックは弄る箇所が多いので、そのうちやろうと思いますが、やらないかもしれません。期待はしないでください。

ユーモア欠乏症の作者に出来るかわかりませんので。

頑張つて過去編を終わらせます。次回、悪くても次々回には……。

ふと思いついて、何も言っていなかったことに気が付いたので補足

しておきます。

レイとフェイナは一時的ではありますが親子の関係にありました。それがどうして恋愛の関係（一方的）になってしまったのか、ということですが、年齢的なこともあった、ということにしておいてください。そのうちこれに関しては書きたいと思っていますので。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第十六話 <過去?> 新たな一歩(前書き)

過去編が終わります。

次回に少しだけ持ちこされてますが、ほとんどありません。

ようやく現在に戻ります。

第十六話 <過去?> 新たな一步

8時に目覚ましをかけたが、ルートは30分も早く起きてしまった。なかなか濃い出来事があったルートはあまり寝たという実感は湧かないが、逆に眠いというわけでもない。

むくりとベッドから起き上がると、時計を確認して再びベッドに倒れこむ。昨夜も眺めていた写真が視界に入ってくる。

「もう、決めたんだ」

頭の中でマックが渋い顔をするのが容易に想像できた。

「……ルートも起きてたんだ」

上から声が聞こえてきた。

2段ベッドの上で寝ていたフラッシュが上からヒョコツと顔を覗かせる。目元に酷い隈が出来ているのが、影になってはいるが分かる。

「寝てないのか？」

「ルートはよく寝られたね……」

「寝られる時に寝ないで何時寝るんだ？」

ごもつとも、と情けなくフラッシュは笑うと、ベッドから飛び降りた。そして大きく伸びをして、同時に大きな欠伸が漏れた。

「シャワー浴びてこい。眠気覚ましてきた方がいい」

「ん、だね。早いけどご飯食べに行っちゃおうか」

「ああ」

そう言うとフラッシュは風呂場へと消えていった。

2人部屋には小さいながらも風呂がある。1人部屋の場合は共有の浴場へ行かなければならない。マックはいつもそっちに行っている。これが男女で2人部屋を使っているなら大問題なのだが、幸いルートもフラッシュも男、何の問題もない。因みにレイは風呂には入らないからフェイナが自室の風呂を独占している。

ルートも若干名残惜しいがベッドを這い出して、着替えを取り出して手際よく着替える。

いつも着ている普段着ではない。

旅団で支給されている軍服だ。まだ旅団の隊員を示す部隊章が付いていないため、希望すれば誰でも着ることができる。成人が着ていると隊員と間違えられるので注意されるが。

今まで、1度も着なかったのは、ある意味今日のためであったのかもしれない。着ることもなく押入れの中で若干埃を被っていた感はあるが、問題はない。

「……………」

ふと、袖の長さに違和感を感じて、両手を横に大きく開いてみる。ピッタリのサイズだ。

「貰ったのは3年前くらいなんだがなあ」

「父さんが入れ替えていったんじゃないかな？」

シャワーを浴びて頭からタオルをかぶっているフラッシュがにこやかに言う。

「そうなのかな？」

「いや、確証はないけど、……あ、やっぱり前のじゃないよ」

フラッシュはルートの後ろに回り込むと、裏側の襟下にあるサイズ表を引っ張り出して確認する。そして納得の表情をする。

「買ったときSだったけど、Mだよ、これ。あ、じゃあ僕のもそうなのかな？」
「だろうな」

フラッシュも押入れに顔を突っ込み、奥の方にあった服を引っ張り出す。そしてそれを広げてサイズを確認すると、やっぱり、と少し嬉しそうな表情をした。

「……なんか、全部見透かされている気分がしてならないんだが」
「育ての親だよ？ やっぱりそういうもんなんじゃないかな」
「はあ、何時入れ替えたんだろう……」
「聞いてみる？ 後で」
「入隊したら問い詰めよう」
「りよ〜かい」

冗談交じりにフラッシュが敬礼して、服を着替え始める。

ルートは机の上に置いてある書類を手に取り、しげしげとそれを見つめた。

そこには入隊志願書と大きく書かれており、その下にルートの名前とサイン、そしてその下の保護者欄にはマックの名前が書かれている。だが、当たり前だがマックのサインはまだない。何が何でもルートは貰う気ている。それはフラッシュも同じだ。

旅団の入隊資格は、15歳以上であれば得られる。だが、保護者が

いる場合は保護者の同意が必要である。さらに15歳になって入隊したとしても、実動部隊である部隊に配属される前に訓練課程を修めなければならない。艦内にある射撃場での実弾訓練や、訪れた都市の訓練場を借りて部隊行動を学んだりする。

そして何より、大型兵器などの所謂運転免許を取らなければならない。こればかりは座学をしっかりと修めたうえで実際に試験も受けなければならない。傭兵として、扱える兵器が多いことに越したことはない。実際、マックもヘリ、戦車などの免許は持っているし、レイはさらに大型艦の操縦免許、航空機の免許も持っているらしい。操縦しているところを見たことが無いので確かではないが。

ともかく、入隊しても決して楽な道ではない。よっぽど都市で仕事を探す方が楽なのかもしれない。

それでも、ルートは決めた。この道を行くと。

「ルート、飯行こうよ〜」

扉の前でフラッシュが腹に手を当てて手招きしている。ルートは書類を折りたたんでポケットに入れて、上着を手に取り部屋の扉を開けようとした。

ルートがドアノブを掴もうとした時、ガチャっというドアノブが捻られる音がしたと思ったら、扉が開いてルートを強襲した。

「2人とも、今大丈夫、ってルート、顔押さえて何してんの？」

「っ、……自分の胸に手を当ててよく考えてみる……」

「？」

扉を開いたのはフェイナだった。内向きの扉は無防備なルートの鼻を強打し、ルートは大きくのけ反って蹲っていた。まったく事態が

呑み込めないフェイナは素直に胸に手を当てて考えているが、どうやら扉に当たった時の嫌な音も聞こえていないのだろう。頭の上にはマークが浮かんでいるような気がしてならない。

「フェイナ、君が扉を開けた時、ルートは扉の目の前にいたんだ。それで、顔面強打したってわけ」

「ああ、そういうこと……、って傭兵になろうってんだったら人の気配くらい掴めなさいよ。一応ノックもしたのよ？」

「「いつ？」」

つい、ルートとフラッシュは声を揃えて聞いてしまった。少なくともルートはノックの音を聞いていない。この様子からだと、フラッシュも同じのようだ。それなのに、フェイナは何を言っているのだ、という表情をしている。

「入る前に決まってるじゃない。それ以外に何時するのよ」

「すまん、今度からもっと大きくノックしてくれないか？」

「そう？　じゃあ蹴り破ってあげるわ」

「父さんに請求書が行くから勘弁して。というか、レイさんにも迷惑かかるよ？」

ルートとフェイナが言い合いを始める。それをフラッシュは傍でため息をついて眺めているが、さすがにほっとくわけにも行かないので仲介に入る。

「まあまあ、2人とも、今日がどういう日かわかってるでしょうが、フェイナも、何か用事があったんでしょ？　言い合いしてる場合じゃないんじゃないかな？」

「うっ、それを言われると……。仕方ないわね、話っているのは、他でもないけど入隊のことよ」

フェイナは部屋に入ると扉を閉める。そしてルートの机の横にあった椅子を手繰り寄せるとそこに座る。

「2人は、どうするの？」

「もちろん、決意は変わらないさ。フェイナは？」

「あたしもよ。ただ、そっちと違ってややこしそうだね」

「ややこしい？」

フラッシュが怪訝な顔をする。

するとフェイナは1冊の本を取り出して、フラッシュに渡した。昨晩フェイナが読んだ、というか眺めていた機械化についての本だ。

「今のあたしじゃあ、ろくな戦力にもならない。だから、あたしは機械化手術を受ける」

「それが、どうかしたのか？」

「手術自体は問題ないのよ。体中切り刻まれるのはいい気分じゃないけど、我慢できるわ。ただ、手術に半年以上かかる上に、慣れるまではるくに歩ける状態でもないらしいの。だから、もし入隊できたら、1年ぐらい会えないかも、と思って」

フラッシュがルートに本を渡す。バラバラと見るだけだったが、どれだけ危険な手術なのかはよく分かった。脊髄、頭蓋以外のほぼすべての骨を補強、四肢は義手義足だからあまり関係ないが、肋骨などの骨は1本ずつ骨の外向きの側を薄い金属で覆うという処理がされる。また、スキンと呼ばれる表面装甲で体を覆われることになるらしい。その上を人工皮膚で覆い、手術は終了する。

「まるで機械人みたいじゃないか……」

どれほど危険か、詳しくないルートでも気分があまり良いものではない。

「正確にはサイボーグよ。まあ、あたしには変わりないわよ。どんな体になっても、それで父さんたちの役に立てるなら、我慢できるわ。お金は仕事で稼いで返すしかないけど」

「なんか、随分と話が進んでるね。まだ入隊したわけでもないのにフラッシュがすでに勝った気にいるフェイナに言う。するとフェイナは当然のように言い放った。

「え？ もうあたし入隊したわよ？」

「「え？」」

「いや、だから入隊したって。正確には入隊することに決まったってこと」

「なぜ？」

これから、ルートとフラッシュが決死の覚悟でマックに直談判する直前にすでにフェイナが入隊したと聞かされて、2人の表情がとてつもなく怖くなる。あまりの気迫にフェイナが椅子から離れて後ずさる。

「だ、だから朝父さんの所に行つて、あたしの思いを言ったのよ。そうしたら、『分かった、後でルートと旅団長の所に行く時に志願書を提出しよう』って言つてサインくれたのよ、ほら。だから、後は旅団長のミフネさんに出すだけ」

フェイナが自分の志願書を取り出して2人に見せる。そこには確かにレイのサインがすでにしてあつた。それを見て2人が震えだす。

「レイさん、あの娘が重大な決心したのに軽すぎないかな……」

「あ、フラッシュ、それにはあたしも激しく同意するわ」

「父さんは、無理だな。激しく反対するだろうな……」

「が、頑張れ……」

「はあ……」

フェイナの応援は、2人の耳には届かなかつた。

「ほう、ではレイはフェイナの入隊を認めるのか」

所変わって、旅団長ミフネの執務室。

今年で70歳のミフネは意外そうな顔をしてレイを見る。さすがに70年も生きると、身体が思い通りに動かないらしく、ミフネは事務処理に徹するようになった。だが、その目は曇ることなく、今もしっかりとレイに焦点を合わせている。

その様子を見る限り、マックにはミフネが70歳とは到底思えないほどである。

「まあ、そういうことになります。マックはどうするんだ？」

「あゝ、あいつら次第だな」

「相変わらずマックは堅いようだな」

「自覚はしています」

ミフネに言われて、マックは苦笑する。

「しかし、君たちの育てた子が……。成長ぶりを見たかった気がするんでもないな」

ミフネがどこか達観した表情をする。

「何を言ってるんですか、旅団長。あなたはまだまだ現役じゃない

ですか」

「いやいや、迫りくる年の瀬には敵わんよ」

「この間も射撃場で見かけましたが？」

「たまには動かんと体が鈍るからな、仕方なかるう？」

「……それが現役だって言ってるんです」

レイがマツクの言いたいことを継いでくれた。マツクは大きくため息をついた。

「まあ、長くはないことは自覚している。育て上げたこの旅団を信頼できる仲間に遺せることはうれしいものだ」

「最近、旅団長も老いましたね……」

あまりにミフネがいつもと違うので、ついマツクは口を滑らし、慌てて口を塞ぐ。

だが、時すでに遅し。

ミフネは何時の間に取り出したのか手に持った紙に何か書き留め始めた。

「マツク、減俸3カ月」

「ま、待ってください！ この間ルートとフラッシュが壊して修理に回ってる車の修理代差っ引かれたばかりじゃないですか！！」

「自業自得」

「レイ！ 頼むから何も言っんじゃない！！」

マツクが照準をレイに変更してその胸倉に掴みかかる。その目は「今月はヤバいんだ！」と告げている。まさしく目は口ほどに物を言っている状況だ。

『旅団長、入隊志願の者が3人来ました』

不意に執務機の通信端末から声が入り、マックとレイは押し問答を終わらせ、一瞬表情を強張らせる。

「そうか、来たか。よし、通せ」
『はっ』

ミフネがそう言うと、ほどなく執務室の扉が開かれ、ルート、フラッシュ、フェイナが現れた。全員が旅団の隊服を身に纏い、直立不動の体勢で敬礼している。マックは自分がここに始めて来た頃の自分とダブって見えた。

「……失礼します！！！！」

3人が大声を上げる。

ミフネが許可すると、3人は部屋に入り、執務機の前に立つ。マックとレイは横に避け、その様子を立ったまま見つめる。ルートとフラッシュは若干緊張しているか、表情が硬い。フェイナもどこかしら動きがぎこちない。

「さて、入隊したいという若者が3人やって来たわけだが、保護者の許可はあるのかね？」

ミフネは本人も知っていることを言う。
だが、言わなければ話が始まらない。

「これから、父さんを説得しますので、少し待ってください」
「もちろん、待つさ。時間はある」

そう言うと、ミフネは右手でマックを指す。マックは慄然とした態

度で2人を見据える。2人が今まで見たことのない、厳しい表情だ。昨日の表情も厳しかったが、2人を心配しての表情だった。だが、今のマックは違う。

2人が兵士として生きていけるか、その資格があるのかを見極めるための、同情無き目をしている。今ここに立っているのは、ルートとフラッシュの保護者としてのマックではなく、新兵の適性検査でもする歴戦の傭兵として立っている。

「さて、昨日の答えをもらうとするか」

「はい」

フラッシュがマックの前に立つ。そして、精一杯胸を張って身長の高いマックを見上げた。

「僕は、父さんたちの住む世界から助けられた。だから、他の世界を知らない。テレビの中で平和そうな映像を見ても、そこに行きたいとは思わないんだ。平和な場所には平和な生活があるかもしれないけど、僕はここで平和を求める人たちをそこに送り届けたい。父さんたちが今までやって来たことを、僕もしたい、いや、する覚悟を決めてきた。人を殺す覚悟も、殺される覚悟もできてます。取捨選択する覚悟も。それだけの価値があると、僕が決めたから!」

「……ルートのも、一緒に聞こうか」

じっと目をつむり、マックは目を閉じたままそう言う。

「俺は、父さんに憧れた。戦場からたくさんの人たちを救い出してきた、そんな父さん、いやこの旅団に憧れたんだ。深い理由なんてない。殺す覚悟なんてとつくの昔に済ませた。俺は、俺の意志でここにいる。だから、頼むよ!」

ただ、それだけだ。

それだけ言うと、ルートは勢いよく頭を下げた。フラッシュも後から頭を下げる。だが、マックは動かない。腕を組んで、瞑想でもしているかのように目をつむり、立っている。

そして、大きくため息をつくとき、両手を大きく2人の顔の横に広げ、2人の顔を上げさせる。

ルートとフラッシュが顔を上げると、そこにはいつもの穏やかな表情をマックがいた。何も言わず、2人の頬を撫でている。

「まったく、何時からそんな風に育ったんだ……」

ニコリと笑う。それを見て、ルートとフラッシュが喜ぼうとした時、マックの指が2人の頬をつまみ、そして思いっきり引つ張り始めた。

「イダダダダダ!?」

「痛い痛い痛い!!」

突然の出来事に2人が慌てふためいてじたばたと暴れ始めるが、がっちり摘ままれた頬からマックの指は引きはがされない。見ればマックの顔は阿修羅の如く怒り狂っている。

傍で見ているミフネとレイ、フェイナもあまりの出来事に茫然としている。てっきり認めたものかと思っていた。

「何が覚悟だ！ お前らは何も知らん赤子同然だぞ、覚悟なんて言葉は殺した奴だけが言っているいい台詞だ、気安く使ってるんじゃない！ 憧れ？ そんな軽い気持ちでここに来るんじゃない！ いいか、俺たちは人殺しだ！ その事実を絶対に変わらん。戦時の英雄は平時の犯罪者と言うだろう、戦後の今、犯罪者はいらんだよ!!」

マックが耳をつんざくほどの大声で2人に怒鳴りつける。

「ぶはっ、だから俺たちは後ろ指指される覚悟も出来てる！ それで救える命があるなら、それでいいじゃないか！」

「馬鹿もん！！ 1人助けるために10人殺すことが正しいと言っ
のか！？」

「そうじゃない！ 取捨選択するんだ、そう言ったのは父さんじゃ
ないか！」

「人を殺したこともないお前が言っ
ていい台詞じゃない！」

「じゃあどうしろと言っ
んだ！」

「1年間訓練でしごかれて来い！！」

「「え？」」

「聞こえなかったのか！？ お前らみたいなのひよっ子が生き死に語

るのは許さん。せめて半人前になるまで泥水啜って汚く生きる術を叩き込まれて来い！」

マツクは2人から志願書をひったくると、それをミフネの執務机に置き、ペンを取り出してサインし始めた。

「え、結局、反対じゃなかったの？」

訳が分からないフェイナがレイに小声で尋ねる。

「俺から言えることは、1つだけだ。ああいうのを世間ではツンデレと呼ぶらしい」

「レイ、どこでそういう知識を仕入れるんだ」

マツクが不思議そうに言う。

「フェイナ経由ですが」

「意味ない気がするんだが」

「一見落着いたんですから、深いことはなしで」

第十六話 <過去?> 新たな一歩(後書き)

ふと思ったんですが、残酷描写ってどの程度からなのでしょうかね

……

私の小説はいわばシューティングゲーム程度の残酷描写な気がしますし……

一応殺しがあるのでつけてますが……

次回、時系列は現在に戻り、大規模な戦闘へ向けて旅団が動き出します。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第十七話 始動する翼（フリユージェ）（前書き）

冒頭に少し過去編が入っていますが、すぐに現代に戻ります。

ちょっとした補足が行われるだけです。

第十七話 始動する翼（フリーユージェ）

「あ、そうだ、ルート、フラッシュ、言い忘れた事があったんだ」

ルートとフラッシュが狂喜乱舞し、それに強烈な拳骨を食らわせた後、悶える2人をしり目に思い出したように人差し指を立てた。

因みに、ツンデレ発言したレイはあの後強烈な回し蹴りを食らった。

「な、なに？」

「まあ、これはフェイナにも言えることなんだが……」

「あたし？」

突然名前を呼ばれ動揺するフェイナ。自分もあの拳骨を食らったのかとつい後ずさってしまふ。

「今日で、俺はルートとフラッシュの、レイはフェイナの保護者じゃなくなる」

「……え？」

3人が茫然とした表情でいるので、呆れた表情でマックは3人に向けて言った。

「当たり前だろう。これが実の親子だったら話は別だが、俺たちは違う。お前たちが独り立ちした時点で、俺たちは保護責任者じゃなくなる。これからは、ただのマック、ただのレイ、だ」

「父さん、て呼んじゃだめなのか？」

「そつだ。これから俺たちは上官、部下の関係になる。まあ、仲間には変わりない。だが、今までのように気安い関係でなくなることは確かだ。上官として示しをつけんといけないからな。お前たちもそのつもりでいてくれよ?」

「いいさ、父さ、マツクと同じ世界にいられるんだ。大したことじやない」

ルートがニヤリと笑う。それを聞いてマツクはホッとため息をついた。さすがに戦闘時まで「父さん」などと呼ばれたらその場の全員がずっこける気がしてならない。

「レイ、そういうわけだから……」

「分かっている。今日中に荷物をまとめておく」

「え、どうして?」

フェイナが首をかしげる。

「保護者でもない男が一緒ではお前も窮屈だろう。これからは広々と部屋を使つと良い。まあ、隣くらいにはなると思つが」

「そつ……」

残念そうにフェイナが俯く。その様子にミフネがおやつと首をかしげ、何かを察したのか表情を変えずに何度か頷いている。

「では、3人とも」

一通り終わった後に、ミフネが立ち上がって机に3枚の部隊章を並べた。

「これからは本当の意味で我々の仲間だ。頑張ってくれたまえ」

「「はい！！」」

「旅団長、どうしたんですか？」

不意に背後から声をかけられ、マックは振り返った。そこにはへりの整備を手伝っていたレイが工具箱片手に立っていた。見れば後部甲板から見える日が傾いている。存外長い時間ここにいてしまったようだ。

「レイか、いやな、久々に昔のことを思い出しているな」

「というと、『ブラン・コーリア』の……？」

「そこから今に至るまで、のだな」

「随分と懐かしいことですね」

レイが工具箱を脇に置いてマックの隣に座った。

「レイが実はルートたちよりも年下だと言った時の3人の顔を思い出すと、今でも吹き返す」

「フェイナの驚きようが印象的でしたね。『まだ可能性はある』と

か意味の分からない言葉を呟いていたのが気になりますが」
「……そういうのは忘れて良いと思うぞ」

未だに、レイはフェイナを育てた娘のように見ているのだろう。傍から見てればこれほど鈍感な男はいないだろう。恋愛とは無縁の種族なのだから仕方のないことなのだろうが。

「もう、5年ですか、3人が入隊してから」

「速いものだな。あつという間にレイを追い抜いて部下に従えてしまった」

わずか5年だった。

ルートとフラッシュが部隊長までのし上がるのにかかったのは。

フェイナが情報部隊のエースとしてマツクの片腕のようになったのにかかった時間は。

「あれだけ優秀な隊長に連れ添えるのは、いい気分だ」

「語尾が昔に戻ってるぞ」

「おっと、機械人らしくないと思っただろう？」

わざとらしく口元を隠すレイ。

男がやっても面白くもなんともないぞ、とマツクは心の中で思うが、口には出さない。存外レイは手が出やすい男だ。回し蹴りを食らわした時も、その後やり返されたのを今でも覚えている。部屋を出ようとしたところを背後から強烈なものをやられて、半日腰痛で動けなくなった。よくよく考えてみれば、機械人に蹴りなど効かないと、どうしてあの時気が付かなかったのだろう、とマツクは悩んだ。

「2日後には偵察機を飛ばす。敵勢力を把握次第、状況を開始するぞ」

「分かっている。俺たちのあまり良くない思い出だが、踏みにじることは許さん」

マツクたちにとってすべてが始まった場所だ。

内容の良し悪し関係なく、思い出の場所を心無い者たちの居城にされるのは良い気がしない。

「しかし、どうやって接近するつもりだ？ 視界良好すぎて危険だと聞いているが」

「なあに、ちよつと巣穴を突けば蟻のように飛び出してくるさ。たとえそれが軍隊蟻であろうと、戦力を分断すれば恐れるに足らん」

まだ正式な作戦は練りあがっていない。おおざっぱなアウトラインは出来上がっているが、要所要所の詰めが終わっていないのだ。敵勢力の不明瞭さもあって、正面から行くか、搦め手で行くかで意見が割れているのも事実だ。

「俺たちの出番のようだな」

「もちろんだ。先陣切って行ってもらう。それに今回は俺たちも戦うからな、この艦で」

甲板を拳で軽く叩く。

「随分と長い間、眠らせてしまったからな。たまには、な」
「ふっ、楽しみだ」

ニヤリと笑うとレイは立ち上がり、工具箱を持ち上げた。

「ではな。この後403部隊の集まりがある」

「そうか、頑張れよ」

「お前もな」

そう言うと、レイは手をヒラヒラと振りながら格納庫の中に消えていった。

マツクはそれを見送ると立ち上がり、腰に手をやって軽く体をそらす。腰が曲がっていたためか若干痛みが伴った。

翌日、マツクの部屋に大勢が集められた。

「傾注！」

マツクの副官である女性が、その細い体のどこから出しているのかも分からないほどの大声で言った。

偵察機の出動の前に、概ねの作戦を伝えるために、戦闘部隊である全ての隊長がマツクの執務室に集められている。

402部隊から410部隊の隊長と、ヘリ部隊、戦車部隊、輸送部隊、航空部隊、等の隊長が思い思いに雑談をしていたが、彼女の凜

とした声に全員が口を閉じ、前を向く。

そこにはマックが立っている。その手には何かのリモコンらしきものが握られており、マックは副官に合図を送ると、副官の女性が部屋の隅へ行って部屋のライトを2つほど残して全て消した。執務机の上のライトは点いており、マックはその下で何かの装置を操作している。

「まずはこれを見てくれ」

マックが何かのボタンを押すと同時に、部屋の天井から薄い垂れ幕のようなものがスルスルと降りてくる。そして、その幕に向けて映像が映し出された。

円形の地図がそこに浮かび上がる。

「これが、今回の目標『血の盟約』が潜伏している廃都市『ブラン・コリア』の戦前の見取り図だ。現在はかなり崩落しているが、俺が覚えている範囲で補足は行う。細かい状況は明日の偵察機の画像を待つしかないから、我慢してくれ」

そう言うと、マックは手元のコンピュータを操作して、地図のいくつかの場所に赤いバツマークをつけ始める。

「まずは南門、ここは15年前の戦争で吹き飛んで跡形もないから使用不可。西門は俺の記憶では無事だが通りのビルが倒壊していたように思えるからまず入っても進めないだろう。北門も無事だが、ここは中央まで大きな通りで結ばれている。しかもところどころに開けた場所があるから敵が陣取るならここだろう。東に門はないため、確実に入れると思われるのは、ここだ」

都市の外壁の一部、そこに赤い丸を書きこむ。

「ここには俺が昔いた軍が撤退するとき爆破して作った爆破口がある。大型の戦車が十分通れるだけの幅がある」

「敵も気が付いているのでは？」

聞いたのは戦車部隊の隊長だ。突撃に際して一番槍を務めるだけに、待ち伏せを受けてしまったては話にならない。

マツクもそう言われることは分かっていたようで、頷きながらさらに赤い線を引き始める。

「実はな、ここは真正面に巨大なビルがあるのが分かるな？ この1階に穴を開けて地下駐車場に降りられる戦車橋が架けられているんだ。地下に車両を隠す時に使っていたんだが、上部のビルも頑丈だから、十中八九まだ残っていると思われる。しかも、ここは北から中央にかけての場所からかなり離れている上に、本来の地下駐車場の出入り口は撤退時に爆破封鎖したから、爆破口側の入り口を見つけない限りまず見つかることはない。1個戦車部隊と401部隊をここから潜入させ、内部から攻撃する」

1個戦車隊、つまり3台の戦車と共に突入するということだ。

「先制攻撃はおそらく『血の盟約』から行われるものと思われる。近づいた時点でデカいのであるこの艦が集中攻撃されることは目に見えている。この艦は主砲の射程に入り次第攻撃を開始、とにかく派手に撃ち続ける。その間にヘリと戦闘機の援護を受けて残りの部隊が北から攻撃を行う」

「旅団長、401部隊って、存在したんですか」

聞いたのは407部隊長のフラッシュだ。とはいえ、今の質問はこの場にいた全員の総意のようなものだった。全員がマツクの方を見

る。

そこでマックは目を皆の方に移し、口を開いた。

「401部隊とは、旅団長権限により全部隊から選出された選抜部隊の事だ。俺が旅団長になってからは1度も召集していないが、先代の時は何度か召集されていた。既存の部隊では対応が困難な任務を行う部隊だ」

「つまり、遊撃部隊みたいなものですか？」

「まあ、似たようなもんだな。人員は明日の偵察の情報も含めた上で作戦開始前に発表する。隊長が選ばれた場合は、副隊長が代理を務めて部隊をまとめる旨を伝えておいてくれ」

そう言うと、マックはコンピュータを閉じ、ライトをつけるよう指示する。

ライトが点灯して、視界が明るくなる。

「実を言うとだな、こんなものがあるんだ」

マックは机の引き出しから1枚の紙を取り出して、近くにいた男の1人に手渡した。男がそれに目を通して、しかめっ面をした。

「契約書、ですか」

それは契約書だった。外部の雇い主が旅団を雇う時に使用する正式なものだ。

「これはある意味弔い合戦であり、私闘でもある。だが、我々は傭兵だ。雇用主もいないのに動けば百害あって一利なしだ。よって俺が旅団を雇う」

「……いや、旅団長がトップですし、問題ないと思いますが」

「俺のけじめだ」

マツクは今回の戦闘にかかる全ての費用を自分で払うと言っているのだ。

旅団長として、もちろんマツクは給料を受け取っているし、指揮官としてそれなりの金額を受け取っているだろう。だが、それでも全旅団を動かすとなれば冗談抜きで天文学的数字になりかねない。特に主砲の弾は量産されていないため、特注で作らせている物だ。しかも、雇い主は修理費や治療費も負担しなければならぬ。人数に比例してその金額も跳ね上がる恐れがある。

「安心しろ、伊達に節制してきたわけじゃない。1回旅団全部を雇っても大丈夫なくらいの金は貯めてる」

ニヤリと笑うマツクに、誰も何も言えない。

思えばマツクは旅団長にしては私物が恐ろしいほど少ないし、趣味で集めている本にしても何にしても金をかけたと聞いたことはない。

「とにかく、そういうわけだ。雇い主である俺を満足させるだけの戦果を頼むぞ」

第十七話 始動する翼（フリユージェ）（後書き）

いよいよ、旅団が始動します。

401部隊とは選抜された特殊な部隊でした。

そりゃあ、幽霊部隊と呼ばれてもおかしくないですよ。

雇い主はマックということになります。

まあ、傭兵だからタダで動くことはないのですが、身内関係では動くこともあります。ですが、それでは利益が出ない。そこでマックが自腹を切るわけです。

マックは旅団長になってからの5年間分の給料を使って旅団を動かすわけです。

誤字脱字でもかまいません。
感想をお待ちしております。

第十八話 フリーフィンゲ(前書き)

まあ、どうぞ

第十八話 ブリーフィング

廃墟と化した都市の遙か上空に、黒い鳥が飛んでいる。

いや、地上からは鳥に見えるが、近くで見ればそれがジェットエンジンを搭載した黒い機体だと分かる。

「こちらブラックキャット。現在目標上空に到着、映像を送ります」
『了解、ブラックキャット、敵の動きに注意せよ。敵はミサイルでも戦闘機でもあってもおかしくない連中だ』
「了解」

機体下部に取り付けられた光学センサーと電子センサーにより雲の上からでも地上を確認できる上に、高高度を飛行しているため並大抵の戦闘機では要撃することすら困難である。唯一の天敵は対空ミサイルといったところだ。地上の監視に集中している故に、反応が遅れる可能性がある。

「さてさて、憎き敵はどれだけの兵力か……」

パイロットが映像を食い入るように覗き込む。そこには拡大、明瞭にされた地上の映像が映し出されている。

昨日航空部隊の隊長が言っていたように、確かに廃都市は至る所で道路が寸断されている上に、ビルが倒壊して瓦礫の山を築いている場所もある。

そして映像を睨み付けていると、そこに驚くべき光景が入ってきた。

「な、なんだこれは……」

想定されていた通り、北門から中央にかけての大通りに『血の盟約』のものと思われる大量のトラック群が止められている。その数は尋常じゃない。軍において優に1個軍、それも歩兵だけで換算できる量だ。さらに要所要所にバリケードが構築されており、戦車と装甲車ご配置されており、廃都市が難攻不落の要塞と化していることは火を見るより明らかだ。

そして中心街とも言える地区に、巨大な影が映りこんだ。

「これは、『グランドフリーユージェ』!？」

真上から見たそれは、まるで我が家のような姿をしていた。

しかし、目を凝らしてみると、後部甲板が無く、後部にも砲塔が設置されており、周囲にヘリが駐機している。

「陸上戦艦……、他にも現存していたのか……」

パイロットの男は『グランドフリーユージェ』以外に陸上戦艦を見たことが無かった。そのため、一瞬2つの艦を混同してしまった。

「敵勢力は1個軍超、陸上戦艦を保有、あの大きさからすると航空機も乗せられる大きさだが……」

『ブラックキャット、作戦所要時間ギリギリだ。すぐに帰還しろ』

遠出しているため、どんなに燃料の消費を軽減できる高高度を飛んでいても限界は早い。おまけに、あまり長いこといれば、さすがの敵も気が付いてしまう。レーダーに何時まで経っても同じような場所にいる鳥が映っていては、鋭い者なら気が付く。

「了解、すぐに引き返すでしょう、……うわ!？」

突然、今この状況下で最も聞きたくない音が響き渡った。

耳をつんざく不快な警告音と共に、赤い警告灯が点滅し始め、隣に文字が浮かび上がる。

『MISSILE WARNING』

レーダーを覗き込むと、2つの光点が後方から急上昇してくる。

「くそっ、ウソだろ!？」

操縦桿を引き、急旋回を始める。

機体がミシミシと悲鳴を上げるほどの旋回で、身体がコックピットの側面に押し付けられそうになる。操縦桿から手を離さないよう必死に拳に力を入れ、空が1回転するほどに操縦桿を引く。

「ぐ、おう」

一瞬背後を振り返ると、2本の白煙が雲の下から伸びてきている。

パイロットは即座に振り切るのは無理だと判断して、チャフをばら撒きながら回避運動を継続する。高高度を飛ぶ偵察機を戦闘機以外で迎撃しようとするなら、地上に設置された対空ミサイルによるものになる。地上レーダーで捕捉した敵機を迎撃するため、レーダーを攪乱されると迎撃は困難、最悪撃ったミサイルが敵を見失うこともある。パイロットはそれを狙っていた。

「は、外れる!」

2発の対空ミサイルはチャフにより敵を見失い、チャフの中を突っ

切って偵察機を飛び越える。それを見てパイロットは安堵し、次弾が来る前に逃げ出そうと速度を上げつつ、通信を行う。

「こ、こちらブラックキャット、敵に見つかって攻撃を受けた！被害はないが、映像はしっかり届いているか！？」

この時点で、重要なのは自らが撮影した偵察映像がしっかりと送り届けられているかどうかであった。無線が1度雑音を響かせた後、返事がすぐに帰ってきた。

『大丈夫だ、しっかり受け取った。速く帰ってこい！』

「ああ、分かってっ、くそ、次が来た！！」

無線の最中に再びミサイル警告音が響く。

レーダーを覗くと、やはり2発のミサイルがこちらを補足して突貫してきている。すぐに機体を翻ひるがして高度を下げる。下げると言っても雲より下には行かない。高度と方位をとにかく変え続け、ミサイルを回避しなくてはならない。

「くそっ、チャフ間に合え！！」

チャフを再び散布する。

高度を下げたことで偵察機の機動性は大きく下がっていた。もとより高機動飛行などするべき機体でもない偵察機で派手な回避機動を取っていたこと自体がとんでもないことなのだが、少なくともその時までは偵察機に軍配は上がっていた。

しかし、敵は同じ轍くわを踏むつもりはなかった。ミサイルの発射間隔を若干広げていたのだ。よって1発目がチャフに引っ掛かり外れて、チャフが薄まったところに2発目が飛び込んできた。

後方下部から飛来したミサイルは、右の主翼とエンジン、垂直尾翼を吹き飛ばし、次の瞬間燃料に引火して偵察機は火の玉と化した。破片をばら撒きながら、砕け散りながら機体が雲の下へと消えていった。

だが、彼の送った映像は確かに届けられていた。彼にとっては、それで満足であった。

「状況を説明する」

後部格納庫に隣接する作戦室。

そこに今回参加するほぼ全ての隊員が集められている。ルートと403部隊の11人も戦闘用のボディアーマーを装着している。

「これから映す映像は、航空部隊偵察隊のパイロットが命と引き換えに手に入れた現在の『ブラン・コリア』の状況だ。これを元に

作戦の細部を埋めて、立案された」

映し出された映像は、拡大されて都市の内部を隈なく見ることができるところになっている。そして、そこに映る巨大な影に全員が息を飲んだ。

「『大崩落』の時に使用されていたゴライアス級戦艦の1隻だ。主兵装は38センチ連装砲、対地ミサイル発射筒4連装16基、細かいのまで言うときりがないから一言で言うと、ハリネズミ並みに兵器を搭載している化け物艦だ。『グランドフリーユージュ』同様艦内に大型の兵器も積載可能、どうやらそのままのようだ」

映像の端の方に敵艦のスペックが映し出された。『グランドフリーユージュ』より一回り、いや二回りは大きい艦に、これでもかと言うほどに砲とミサイルが搭載されている。

「敵はやはり都市北門からの道に集中している。また、無事な高層ビルの屋上には対空砲が配備、都市の外縁部にもミサイル群が置かれている。確認できる戦車は20。トラックの数からして多くても35くらいのはずだ。これ以上は艦に入らないからな。また、ヘリが4機確認されている。機種が分からないが、戦闘ヘリが含まれていると考えるのが妥当だろう。それから、これは北の通りから1本ずれた通りなんだが……」

映像を止めてマックは映像の一部を拡大する。

北からの通りと同じくらいの太さの通りが拡大される。

「見ての通り、何も無い通りなのだが、何も無いのだ。瓦礫も、壊れた車も、何もだ。そして、ここに見えているこの車両、おそらく牽引車だ。滑走路として使用されている可能性がある。近くのビル

を掩体壕代わりにして隠していると思われる。突入と同時に攻撃したいところだが、どこにあるのか分からん。支援に上がる航空部隊は敵の航空機の攻撃に注意、味方を撃たせるな」

パイロットスーツに身を包んだ隊員に向けてマックが強い口調で言う。

「では、401部隊として敵陣に浸透する者をこれから呼ぶ。なるべく同一の部隊から複数人が出ないようにはしたが、文句は聞かん。403からルート、レイ、404からカナナ、405からラーキン、407からフラッシュ、408からフィリップ、以上だ。戦車1個小隊と共に都市内部に潜入し、最高のタイミングで背後から殴りかけ」

「「「「「了解！！」「」「」「」

呼ばれた6人が敬礼して声を揃えて言う。

「本艦と共に突撃する残りの部隊は統合、402部隊が指揮を執る。戦闘開始と共に侵攻し、敵を灰塵と化すぞ。本艦からの艦砲射撃は作戦開始と同時に敵艦を狙って行う。間違っても射線に入るんじゃないぞ。ヘリ部隊は地上部隊を掩護、敵戦車を確認した際は最優先で撃破、進撃の足を止めさせるな」

最後に、マックは1人の男の写真を写しだした。

片目に眼帯をしていて、髭を蓄えていて、悪人面全開の男。

「こいつが今回のターゲットであるボヘミアンだ。こいつを捕え、マガスとの関係を吐いてもらう。抵抗した場合は痛めつけてでも連れてこい。間違っても殺すんじゃないぞ」

今回の作戦はボヘミアン率いる『血の盟約』の殲滅が目的だ。だが、本当の目的はボヘミアンと手を組んでいるジャック・マガスのやろうとしていることと居場所を聞き出すことだ。

仲間を直接殺したのはマガスの方、しかも、マックはまだ他の誰にも教えていない1つの情報を掴んでいる。

そして、その情報をマックは画面に映し出した。

「そして、マガスがやろうとしていることに、十中八九関わっているとと思われるのが、これだ」

以前、マックが入手した1枚の写真。

ボヘミアンが部下と共に写っている写真だが、ボヘミアンの背後にあるものを見て、その場にいた全員が凍りついた。

「『大崩落』の遺物だ。発射されなかった弾頭のうち、少なくとも3基がボヘミアン、もしくはマガスの手にある」

「ば、馬鹿な。全て廃棄されたはずじゃ……」

誰かが呟く。

その場にいた全員が、信じられないという表情をしている。

「マガスがやろうとしていることは、我々旅団で片付けられる問題ではなくなりつつある。すでにいくつかの都市に対して協力を申し出ている。確たる証拠がある以上、彼らも動かざるを得なくなる。だが、彼らが動き出すまでには準備期間が必要だ。我々の任務はボヘミアンの確保と共にマガスの計画を中止または延期に持ち込むこと。ボヘミアンの軍が壊滅状態になれば、マガスも計画を立て直すことになるはずだ」

最後の言葉には、マックの希望的観測が含まれている。

もし、マガスがボヘミアンの助力などなくとも事を起こせるとい
のなら、全てが水の泡となる。だが、誰もそのことを口にしようと
は思わなかった。

いつの間にか、自分たちの敵討ちが、世界を巻き込む巨大な陰謀に
首を突っ込むことになっていた。だが、誰も文句など言わない。疑
問を心に閉じ込め、マツクの言葉に耳を傾ける。

「401部隊出動は0200時、作戦開始は明朝0700時。全
ての銃口を以て奴らに地獄を教えてやれ！」

「「「「「イエス、ボス！！！！」」」」」

第十八話 フリーフィンゲ（後書き）

次から戦闘開始です。

キャラが増えますが、別段単発の出番はありませんので、
個性的キャラであることに間違いはありませんが。

誤字脱字でも構いません。
感想をお待ちしております。

第十九話 『ブラン・コーリア』

『グランドフリユーゲ』がその動きを止めた。

故障したわけでも、前方に障害物があるわけでもない。

しばらくして艦後方の巨大なハッチが開け放たれ、ハッチ自体がスロープの役割を果たして高低差のある艦と地上とを繋ぐ。

『出動許可が出ました。キュプロクス隊、発進してください』

「了解。キュプロクス小隊出撃する、レディスアンドジェントルメン、本日はキュプロクスタクシーをご利用頂きありがとうございます」

「戦車長、作戦前つすよ」

戦車1個小隊の隊長車両内で、戦車長と呼ばれた中年の男が、軽口を叩くと、砲手の若い男が忠告する。その様子をルートは戦車の後部にある兵員室で苦笑いしながら聞いていた。

「久々に客が乗ってるんだ。少しぐらい遊ばせるや」

「ダメつすよ、任務つすから」

「無線切れてるし問題ないと思うが」

「あゝ、レイさんも戦車長を甘やかさないでくださいつす」

現在、この1号車には戦車長と砲手、操縦士の3人、兵員室にルート、レイ、フラッシュが乗っている。2号車には残りの3人、カナ、ラーキン、フィリップが乗り込んでおり、3号車は誰も乗せていない。戦車の後部に強引に兵員室を取り付けたこの戦車は、後部が不自然に膨らんで見えるため、仲間内では「デカ尻」という呼び名がたかないあだ名を付けられている。

既製品ではなく、旅団において兵員輸送に使える車両が少なく、戦

車も少人数でもいいから乗せられるように、というコンセプトで改造されたもので、後部にあったエンジンが前部に移動するなどの改造も加えられている。

戦車は砂漠仕様に変更されており、カーキ色に塗り替えられた戦車は砂漠の景色の中に溶け込んでいる。そうじゃなくとも、ほとんど沈みかけている太陽の明かりでは、何も無い砂漠でもこの3台の戦車を見つげ出すのは困難だ。ゴムタイヤを使用しているため、駆動音はいくらか騒音も少ない。

「目的地到着は明け方5時だ。若い連中は一眠りしておくといい」「寝たくても、ここじゃ寝られないが」

ルートが兵員室の座席を叩きながら苦笑する。詰めて4人乗れる程度の広さしかない兵員室ではルートとフラッシュが同じ座席に、向かい合って逆の座席にレイが座っている。レイは身体が大きい上に現在多数の兵装を装備しているため隣り合って座ることができない状態にある。愛用の巨大な狙撃銃は戦車の外部に縛り付けられている。

「はっはっはっ、手厳しいな。じゃあ、雑談でもして時間を潰していてくれ」

戦車長は豪気に笑いながら言うが、そんな様子を見ていた3人はこんな人が戦車長で大丈夫なのだろうか、という思いが脳裏をよぎった。

「……はあ、あゝ、こちら1号車のルートだ。そちらは問題ないか？」

ルートはやりきれなさが残るが諦めて無線を使って2号車に乗っている3人と連絡を取ろうとする。

『こちらカンナ、なんで私がこんなむさい2人と狭い部屋にいなきやいけないのか説明を求めます』

無線から酷く不機嫌な声が響いてきた。404部隊から選抜されたカンナは選抜隊員の中で唯一の女性隊員だ。一般の隊員であるため、403部隊の隊長であるルートに対して敬語を使ってはいるが、明らかにその声は怒りに満ちている。

「じゃんけんで負けたんだから仕方がないだろう。それに2人も良い奴だろう？」

『男は顔8割なんですよ』

『ひどっ!?!?』

無線の反対側で男が2人情けない声を上げたのがこちらまで聞こえてきた。

ラーキンとフィリップは確かに見るからに軍人という体型をしており、顔も確かに中の下ぐらいなのかもしれない。女性隊員の中でも比較的小柄なカンナにとっては居づらいことこの上ないのだろう。

「かといって、こちらに乗せても同じだろうが」

『まだマシです』

「……はあ……」

ルートとレイ、フラッシュは漏れてくるカンナの文句に耐えきれずに無線を切った。切る寸前に何かが聞こえたような気がするが、聞かなかったことにする。大方、純情なフィリップがカンナに泣きついたのだろう。それをカンナが一蹴する、といった感じか。確かに

大男が突然泣きついてきたら反射的に殴り返すだろうなあ、とルートは心の中でフィリップに同情する。

「なぜ、この面子なんだろうね」

「マツクの人選だからどうしようもないだろう」

フラッシュの疑問をそれで片付けるルート。

戦力的には確かにバランスの取れた人選ではある。遠距離のレイ、ラーキン、中距離のルート、フィリップ、中近距離のフラッシュ、カンナと、攻防のバランスが取れているのだ。全員各部隊でも特に優秀な隊員だし、素行に問題があるわけでもない。だが、少なくとも2号車の3人の気が合っていないことは確かだ。

「まあ、皆優秀だし問題ないだろう。戦闘となれば背中を預け合う仲間だしな」

「それはまあ、そうだけど……」

「フラッシュ、あまり悩みすぎるな。マツクだって何も考えなしでこの人選をしたわけじゃないだろうさ」

レイがフラッシュの肩をポンと叩く。

フラッシュも諦めたらしく小さくため息をつくと言った。そして背中を壁に預けると仮眠を取り始めた。

「ルートも寝ておけ。昨日からあまり寝ていないだろう？」

「なんだ、気が付いていたのか」

「目の下に隈作ってれば気づく」

レイに指摘されてルートは苦笑する。

抱えていた銃を壁に立てかけ、ルートも仮眠を取ることにする。この乗り心地最悪の戦車と堅い座席で眠れるかという心配は目を閉じ

て数分で霧散し、ルートは眠りについた。

突如、車体が大きくつんのめる様に停車し、ルートが頭を壁に打ち付けた。寝ていて無防備だったルートはかなり強く頭を打ち、否が応でも目を覚まされた。

「な、何事……、フラッシュ、さっさとどけ」

隣のフラッシュが停車の勢いでルートの半身にのしかかっているの
で、それをどけながら言った。重装備であるため、起き上がるのも
一苦労である。フラッシュがレイに引つ張られながら狭い兵員室で
背中を曲げて立ち上がり、後部のハッチを開ける。

「後ろの3人、仕事だ、降りとくれ」

戦車長の声が聞こえてくる。出発時の軽い口調ではなく、冷静で低い声になっている。

「着いたのか」

時計を見ると、朝の4時50分を指している。

「ああ、レイさん、入り口を案内してくれ」

「了解した、先導するからついてきてくれ」

暗闇の中にレイが躍り出る。

暗視ゴーグルを装着してルートも外に出ると、一瞬砂漠の砂に足を取られる。わずか15年で、『ブラン・コーリア』周辺の森は枯れ、広大な砂漠となっていた。

レイは戦車の前に出ると、操縦席から見える位置に立ってやや離れた所に見える砂丘を指差す。

「方角で言うとおの砂丘を超えた場所に都市外壁に廃艦があるはずだ。その陰にある」

「廃艦？ 戦艦が打ち捨てられてるのか」

「ああ、俺とマツクの昔の家だ」

砂丘の陰に隠れながら、戦車3台が傾いたまま進む。砂丘のおかげで都市からこちらは見えない。高台で監視している敵がいるだろうが、砂丘の裏では見つけようがない。夜の砂漠では音が響くため、戦車は細心の注意を払って無駄な音を立てないようにする。

砂丘の頂上にレイがうつ伏せになって頭だけを出す。そして手を振って戦車を招きよせる。

「下り坂だ。速度が出過ぎないように気を付けてくれ」

戦車の前半分が上り坂を超えて車体下部のさらすが、すぐに重力の法則で後部が浮かび上がり、急な下り坂へと進み始める。レイが注意したにも関わらず、戦車は結構な速度で滑り落ち、砂丘の尾根のあたりでようやく停車した。続く2号車、3号車も同様で、キャタピラでもこの砂では制動が利きにくいようだ。

「降車する」

無線に短くカンナの声が入り、2号車のハッチが開いて小柄な影が降り立ち、その後ろから比較すると巨人のような影が2つ降りてきた。

「先に降りておけばよかつたわ」

額を抑えながらカンナが呻く。どうやら砂丘を滑り降りる時にぶつけてしまったようだ。

「2人は大丈夫か」

「問題ない」

ラーキンが親指を立ててきた。頑丈さが売りの2人にこの程度では傷1つつかないようだ。

「さて、あそこが入り口だ」

少し離れた所でレイが目の前に見える外壁の1カ所を指差す。巨大な影が闇夜に浮かび上がっている場所のすぐ脇、1カ所だけ壁がない場所があり、ポツカリとその部分だけくり抜かれているように見える。

1号車が静かに動き出し、ゆつくりと前進を開始する。レイとフラッシュが1号車の斜め前方に立ち、1号車と2号車の間、その左にルート、右にカンナ、最後尾にラーキンとフィリップが立ち辺りを警戒する。

暗視ゴーグルの視界は狭い、見ている目が多いに越したことはない。それぞれの戦車の戦車長が砲塔上のハッチから上半身を出して機関銃に手を添えながら辺りを見ている。

穴に近づくと、レイが駆け出して先の安全を確認する。幸い今のところ敵に気が付かれた様子はなく、順調に進んでいるが、都市内には何があるか分からない。

「戦車長、これぐらいは乗り越えられるな」

穴の下には瓦礫が積み重なっていた。長い年月で穴の周囲の壁が崩れ落ちたのだ。決して小さくない瓦礫が行く手を阻んでいる。ルートたちは瓦礫をよじ登れば済むのだが、戦車は下手をすると瓦礫がキヤタピラの中に入り込んでしまう危険があるため、慎重にならない。

聞かれた1号車の戦車長は暗視ゴーグル越しに瓦礫を見つめ、若干思案した後、ゴーサインを出した。

「これくらい登れないでは、な」

などと言いながら下にいる操縦士に発進の指示を出し、戦車がゆつくりと瓦礫を登り始める。瓦礫が崩れ落ちる音がする度にヒヤヒヤしながら、戦車が瓦礫の障壁を乗り越え、都市内に滑り込む。レイが先に都市内に入って目の前のビルの上の1階部分に開いた穴を指差し、戦車はそのままビル内へと入っていく。

「これは、すごいな……」

戦車長が息を飲む。

ビルの中には床に巨大な穴が開いていた。そしてそこに3本の戦車橋がスロープ代わりに架けられており、地下に降りられるようになっている。

「ちょっと待っていてくれ、フラッシュ、行くぞ」

「お、おう」

スロープをつたって地下にレイとフラッシュが降りていき、安全を確認しに行。ほどなく無線で大丈夫という報告が入ってルートとカシナが1号車に飛び乗り、しっかりとしがみ付くと戦車がそろそろとスロープを下り始める。スロープはそれほど長くない代わりに傾斜が大きく、並みの車両では上るのも一苦勞に思える。それだけ当時は急務だったのだろう。

「暗いですね」

「戦車長、ライト」

「合点」

戦車のライトが点灯され、暗い地下を照らす。

地下駐車場は広々としている。支柱が整然と並び、内部の損傷はあまり大きくないようで、至る所に撤退時に持っていた軍用品が打ち捨てられたままで残っていた。古い銃や、損傷したミサイル発射筒、はては野戦テントがそのままの状態に残されていた。中は幾つかのベッドが並べられており、野戦病院として機能していたようだ。死体はないが、至る所に血が飛び散っているのが暗視ゴーグル越しでも黒いシミとなって分かる。

「戦車は1列に、レイ、都市内部への出口は？」
「こつちだ」

レイが手招きして先へ進む。50メートルほど進むと駐車場の真ん中付近に地上へと登る坂が現れ、そこを登り始める。そして地上まであと少しというところで瓦礫の壁に阻まれた。

「塞いだ、と言っていたな」

「厚さは大体3メートル程度だ。撤退までの時間が稼げればよかったから2階部分の外壁を崩したんだ。戦車砲でも穴は開く」

「そこを突破するんだな」

「ああ」

それを確認するとルートとレイは来た道に戻り、戦車を止めた場所に行く。

戻るとフラッシュがルートに何かを放り投げてきた。

「腹ごしらえしとけて、戦車長が」

「そうか、今度は俺の分も残していたんだな」

「……………根に持つね」

フラッシュが顔をひくつかせるのをニヤニヤしながら見つめつつ、真空処理されたレーションを破って開けて、中からクラッカーを取り出して口に入れる。

「作戦開始は2時間後だな。最後の確認をしてから少し休憩しよう」

ルートは小さなランプを地面に置き、その隣に偵察写真を元に作り直された都市内の地図を広げた。どこが瓦礫で通れないのか、や敵

勢力の配置などがこと細やかに記されている。

「0700時、『グランドフリーユージェ』がミサイルと艦砲による攻撃を開始、それまでに敵が気が付いて先制攻撃を開始するものと思われるが、俺たちは艦砲の着弾を待つて出動する。爆発音に紛れて出口の瓦礫を戦車砲で破壊、俺たちはここに出る」

ルートが地図のとある場所を指差す。先ほどの出口が繋がっている部分で、見晴らしのいい通りに出ることができる。そしてその道は北門と中央を結ぶ大通りと交差する位置にある。

「そして出動するであろう敵勢力を横合いから思い切り奇襲、敵勢力の注意を引き付けつつ後退、市街戦を展開して敵をジリ貧にするぞ」

「こちらにはこの都市のプロがいるしね、頼むよ、レイ」

「ルートもフラッシュもこの都市の出身のはずだが？」

「もう覚えてねえ（ない）よ」「」

見事にはもってしまい、辺りから苦笑が漏れる。

「それはともかくとして、隠れられそうな場所は大体チェックしてある。絶対にこちらから向かっては行くな。それと、これを全員に渡しておく」

そう言うと、ルートは戦車の荷台から大きな箱を引っ張り出し、それを皆の前に置いた。そして開けると中には発煙筒が大量に入っていた。

「戦車の発射筒にはすでに装填されている。色はオレンジ、上空の航空部隊はオレンジの煙が上がれば優先的にその近辺を攻撃する。」

また、航空部隊の観測機が見つければ艦砲射撃も行われる。間違っても自分の近くで焚くなよ」

発煙筒を1人3本ずつ渡す。レイとラーキン、フィリップは余裕があるので5本を受け取った。

「都市内の敵は戦車隊が引き付け、その間に俺たちは敵の旗艦と思われる戦艦に向かう。作戦開始から1時間後にはこの艦にも大規模な攻撃が行われる予定だ。それまでにボヘミアンを確保、今度はこちらの発煙筒を焚く」

今度はあまり大きくない箱が取り出される。中には先ほどと同様の発煙筒が入っているが、巻いてある帯の色が違う。

「ブルーだ。これでヘリが近くまで来てくれる。ブルーを焚いたら戦車隊にも連絡を入れるから、それを合図にここに後退、都市の外へ脱出してくれ」

ブルーの発煙筒は1人1本計6本だ。多く持っていて意味がないため、最小限にしておく。誰か1人が焚ければいいのだ。

「では、全員装備を整え、1時間半後にここに集合、警戒は俺とレイで行う」

「「「「「了解」」」」」

第十九話 『プラン・コリア』（後書き）

作者「え、今回は多くの作者さんがやっていらっしやる対談方式で後書きたいと思います」

ルート（以下道男）

「おい、これはなんだ……」

作者「2字にしようとしたらそうなった」

道男「ふざけんな！ ていうかすでに固定されているだろ!？」

作者「はいはい、とりあえず話の流れを説明していきたいと思います。今回は新キャラが出てきましたね」

道男「3人出てきたな」

作者「はい、この3人は主要キャラとまでは行きませんが、エイジス隊のように今後も出てきます。もしかしたら登場人物紹介に軽く説明を入れるかもしれませので」

道男「おい、俺いる必要あんのか？」

作者「主人公でしょうが」

道男「この後書きに必要があんのかと聞いているんだ」

作者「今回は作者の出来心でこんな形を取っていますが、次回もこうだとは限りません。でもこういう形も悪くないかも……」

道男「な、何恍惚な笑みを浮かべてんだ……」

作者「ここなら何しても大丈夫じゃね？ とか考えていたら、笑いが止まりません」

道男「具体的に何やろうとしてるんだ？」

作者「ルート弄りとか？」

道男「すでに弄られてるわ！ さっさとこの道男を書き換えろ！！」

作者「無・理」

道男「くたばれえええええ！」

作者「おっと、それでは私はこの辺で、戦場からエスケープだけい
！！」

道男「ヨルム○ガンドか！ ここは二次創作じゃねえぞ！！」

作者「プロローグ込みでただかだか20数話のこの作品を見てくれて
いる人など多くはない！ 故に分かる人だけ分かることをやるんだ
！！」

え、今回は乱心しましたが、次回は普通に後書きたいと思っ
ています。
まことに申し訳ありません。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第二十話 開戦（前書き）

なんだかんだで二十話まで来ました。

これからもよろしくお願いします。

登場人物にカンナ、ラーキン、フィリップを少しであります。載せておきました。

第二十話 開戦

「時間だ」

艦橋内、双眼鏡を手に持ったマツクが短く言い放った。腕時計は丁度7時を指している。

「作戦行動を開始する。航空部隊を出撃させ、戦車隊を支援、これより我が旅団は戦闘を開始する！」

艦が揺れる。

巨大な『グランドフリーゲ』が立て続けに起こる振動で人にも分かるくらい揺れだしている。

後部甲板ではカタパルトが立て続けに機体を大空に投げ出し、後部ハッチからは断続的に車両が吐き出される。

その様子をマツクは備え付けられたカメラの画像を見つつ、次々に指示を飛ばす。

『全対空兵装使用可能、主砲初弾装填完了、ミサイル諸元入力を開始します』

艦橋下にある戦闘艦橋、戦闘指揮所では薄暗い部屋の中で無数のモニターを覗む隊員が、兵器の使用準備を次々と整えていく。

主砲は装填、照準、発砲、排莢が全てコンピュータ制御されている。戦闘指揮所の主砲管制を行う隊員が諸元を入力して、引き金を引けばその度に発砲される。

『エイジス隊、出撃しました。続いてフランキスカ隊、カタパルトへ移動してください』

『こちら402部隊、全戦車の揚陸を確認した。これより隊形を整え前進を開始する』

『シャイアン隊出動、ホバリングして待機する』

戦闘指揮所では情報がすべて一元化されており、無線も必要な部署にしつかりと送られているが、艦橋では全ての無線が聞こえてくる。マックが艦橋から下を覗き込むと、戦車と兵員輸送車が整然と並び、その上をヘリが滞空している。見上げれば3機編隊の戦闘機が飛行機雲を引きながら都市へと向かっていく。

『レーダーに感有り、『血の盟約』が航空機を飛ばし始めました。数は、……3、4、まだ増えます！』

『ミサイル諸元、まだか！』

『諸元入力完了、間もなく観測機が都市上空に到着します』

ミサイルも、主砲も、標的となる敵の居場所が分からないと使えない。そのため、都市上空に観測機が常に滞空し、敵の位置情報を逐一伝え続ける必要がある。

『こちらブラックスイーパー、上空に到着した。これより座標を送る』

『エイジス隊、エンゲージ！』

『対空ミサイルだ！ ブレイク、ブレイク!!』

都市上空で陸上戦に先んじて戦闘機同士の空戦が開始された。ほぼ同時に放たれたミサイルが白煙を引きながら交錯する。

『旅団長、座標来ました。発砲の許可を』

戦闘艦橋を取り仕切る砲雷長がやってきた。

一瞬、艦橋の全ての視線がマックに集まり、マックはしばし瞑目する。鼓膜を遠くで起こるミサイルの爆発が僅かに揺らしているのが分かる。

「許可する。艦砲射撃を開始しろ」
『了解』

巨大な主砲がその砲身を持ち上げる。砲塔が若干回転し、微調整が行われる。

そして今まさに撃とうとした時、レーダーが無数の光点を捉えた。ほぼ同時に観測機からの情報が至急で入ってくる。

『レーダーに感っ！ ミサイル4基、低空で接近中！！』
『迎撃急げ！』

白煙が真上に上がり、それがぐるりと旋回して地面スレスレを飛び、『グランドフリーユージェ』へと一直線に飛んでくる。

『1番迎撃開始！』

砲雷長が叫ぶと同時に艦前部にあるミサイル発射筒からミサイルが発射され、迫りくるミサイルへと飛翔する。

放たれたミサイルは4発、そのうち3発は敵ミサイルが高度を上げる前にその細長い弾頭に命中して大爆発を起こす。だが、撃ち漏らした1発がまっすぐ突っ込んでくる。

「2番迎撃開始！」

マックが叫ぶのと時を同じくして艦側面部に多数搭載されているガトリング砲が火を噴き、無数の曳光弾と共に高度を上げて艦に斜め45度で突っ込もうとする敵ミサイルを襲う。1発の砲弾がミサイルに命中し、艦上空で派手な火花が上がり、マックたち艦橋にいた者たちの目を焼こうとする。

『迎撃成功、反撃を開始します、旅団長』

「1番、2番、主砲発射用意」

マック越しにマックが言う。同時に艦橋にいた全員が手身近なものにしがみつく。

「ファイア!!」

『オープンファイア!!』

轟音。

艦内にいるにも関わらず、その音は容赦なく艦橋にいた全員の鼓膜を破らん勢いで襲いかかった。

撃ち出された4発の砲弾が弧を描いて都市へと向かい、消えていく。

「前進!」

「全速前進、目標、廃都市『ブラン・コーリア』!」

旅団の戦いが始まった。

「っ！ 聞こえたか!？」

地下駐車場出口付近、上り坂まで戦車を移動させ、瓦礫を破壊する用意を整えて作戦開始の合図を今か今かと待っていると、遠くから遠雷のような低い音が断続的に響いてきたのをルートの耳は聞き逃さなかった。

「ミサイルだな。近い、敵の艦からだ」

「頼むぜ、撃ち落とせよ……」

先ほど、頭上でジェット戦闘機が通過する音が幾つか聞こえ、マツクたちが作戦行動を開始したことは分かっていた。後は合図となる主砲の着弾を待つのみ。だが、主砲を撃つためにはおそらく今のミサイル群を撃ち落とさなくてはならない。

暗闇でじっと待機していたルートたちはただミサイルを迎撃し、主砲による宣戦布告が行われることを切に願うだけだった。

再び遠雷の音が響く。ほぼ同時に幾つか、その少し後にもう1回。迎撃に成功したと考えたい。

「迎撃に成功したのなら、もうすぐのはず……」

無意識に全員が上を見る。暗闇の向こう側には屋根しかないが、その上を飛んでいくであろう砲弾の音を聞き漏らさんと耳を澄ます。

「……っ！ 来るぞ！」

言ったのはレイだ。その瞬間全員が姿勢を低くして衝撃に備える。すぐに爆発音とはまた違う独特の重低音が響き、遠くから風を切る甲高い音が聞こえ始める。

「……5……4……」

発砲からの時間を計算し、レイが秒読みを開始する。戦車内にいる戦車長、砲手にも聞こえるぐらいの声だ。着弾と同時にこの壁を吹き飛ばすのだから、必要不可欠である。

「3……2……1……」

「着弾！！」

「ファイア！！」

発砲。

暗闇に突如太陽が生まれ、目の前の瓦礫に吸い込まれて大爆発を起こす。猛烈な土煙が発生して視界が悪くなるが、外気が入ってくる風を感じ、同時に視界が明るくなるが分かった。

「動け（ムーブ）！」

ルートが大声を上げ、1号車が瓦礫を踏みにじって駐車場の坂を猛然と上り、通りに飛び出す。ルートとレイが戦車の左右を確認し、後続に合図を送る。

「見る」

ルートが出てきた全員にある方角を指差して言った。

全員がそちらに目を向けると、黒々とした煙が濛々と上がっている。ミサイルの発射煙でも、主砲の発砲煙でもない、弾着による爆発、炎上による煙がビルの間からでも確認できるほどまで立ち上っている。

「第1波は着弾した。上空に友軍機を確認、作戦が開始されたのを確認した」

「よし、戦車長、敵の戦車をお願いします」

「任せとけ！ そっちもしっかりやれ」

戦車長はハッチから顔を出すと短く敬礼した。ルートたちが返礼するのを待たずに戦車が動き始め、3台の戦車は敵を求めるハイエナのように狭い路地へと入っていった。後には6人が残された。

「よし、レイ、道案内を頼む。フィリップ、荷物を頼むぞ」

「おう」

フィリップは重機担当と共に爆破担当でもある。敵艦への潜入で必要になるであろう爆薬を背中に背負ったバッグに詰め込んでいる。

レイの先導で一同は戦車隊が入っていった路地へと入っていく。

途中までは戦車隊の後を追う形で、ほどなくして戦車隊のキャタピラ跡が路地を左折しているのを確認して、ルートたちはその道をまっすぐ進む。

戦車隊は大通りを行く敵を待ち伏せるが、ルートたちは大通りの最深部にいる敵艦を目指している。北門から2本ほどずれて並行している路地を進み、戦車隊に敵が引き付けられている間に敵本拠地を

襲う。

6つの影が路地奥へと消えていった。

「状況を報告せよ！」

何時まで経っても姿を現さない離反軍、そしてその代りと言わんばかりに姿を現した傭兵旅団『フリーユージェ』に、『血の盟約』旗艦である『ブラッディスカル』内は混乱していた。

情報が錯綜し、怒鳴り声だけが響き渡っていた艦橋に、ボヘミアンの射殺するような鋭い声が響き渡った。

その一言で艦橋内で言葉を発する者は誰一人いなくなり、全員がボヘミアンに顔を向けた。

「副長、敵勢力は」

「はっ、敵は傭兵旅団『フリーユージェ』です。現在航空機が発艦、こちらに向かいつつあります」

「迎撃機を上げる、他は」

「陸上戦力が多数揚陸されています。ビル屋上からの報告では戦車2個小隊6台、兵員輸送車が多数砂丘を盾に接近中、支援のヘリも同伴しています」

「戦車を出せ。ありったけの戦力で敵を叩け。敵艦の動きは」

「現在高高度を敵の航空機と思われる機体が飛行中、おそらく偵察機かと。こちらの座標を送り、艦砲射撃の用意をしていると思われます」

「先手を打て。対艦ミサイルだ」

「りよ、了解!!」

ボヘミアンは一切の躊躇いなく指示を下した。

その自信たっぷりの姿勢はその場にいた全員から不安と恐怖を拭い去り、眼前敵へと立ち向かわせる勇気を与えた。

ボヘミアンは艦内マイクを取り、全艦放送に切り替えた。

「諸君、ボヘミアンだ。待ちに待った時が来た。敵は『フリーユージュ』、戦争屋だ。敵は組織化され、機械化された軍隊だ。一切の油断をせず、全力を以て、無差別に、無慈悲に、虐殺するのだ!」

無線からの返事はない。

その代わりに、艦全体を揺るがすほどの歓声が聞こえてくる。

「ボス! 敵艦艦砲をこちらに向けたとの報告が入りました!」

「ミサイル撃て!」

「ファイア!」

『ブラッディスカル』後方、後部主砲背後、つまり艦橋と主砲の間にある発射筒からミサイルが4発発射される。

「迎撃機上がりました！」

「敵戦闘機3機、発進した迎撃機に向かいます！」

「そいつは足止めだ。俺たちの戦闘機を近づかせないための陽動だ！」

敵機が発射したミサイルが離陸して速度の出ない友軍機をとらえる。搭載した兵器に誘爆し、大爆発を起こしながら近くのビルに突っ込み、ビルが倒壊する。

「ミサイル迎撃されました！」

「撃ってくるぞ！ 迎撃用意！」

刹那、敵艦が煌めいた。

そしてほどなく4発の砲弾が『ブラッディスカル』の周囲に降り注いだ。1発は艦右舷の地面を穿ち、1発は近くのビルを貫通して大量の瓦礫と共に停まっていたトラック群を巻き込んで爆発した。

残り2発は艦直撃コースを飛来していた。迎撃しようと機関砲が無数に撃ち上げられるが、砲弾相手では分が悪い。ミサイルと違って直線で飛んでこない砲弾を捉えることは例えコンピュータ制御だとしても生半可なことではない。それでも1発を撃ち落としたが、最後の1発が艦前方に着弾した。

着弾と同時にハンマーで殴られたかの衝撃を受け、艦内での火災を知らせるサイレンが響き渡る。

「ダメコン急げ！ 撃ち返すぞ！」

ボヘミアンの声が艦橋に響き渡り、全員が呼応したかのように動き出した。

「では諸君、戦争を始めろぞ」

ニタリと、ボヘミアンの口元が吊り上ったのを見た者は誰もいなかった。

第二十話 開戦（後書き）

作者「はい、どうも作者です」

道男「おい、これはもうやらないんじゃないか。というか前回やらないと言っていたじゃないか」

作者「後書きで何も書くことがない時はこれで行こうかなあ、と思ってます」

道男「はあ、こんな適当な奴がよく小説書けるな」

作者「まあ、いろいろありまして……。それはともかく、二十話突破しました」

道男「頑張ってはいるな」

作者「どうも。まだまだ続きますので、読んでいただけると嬉しい限りでございます」

道男「同感だな。こんな駄作を読んでもらっている時点で奇跡なんだが」

作者「ありがとうございます、ありがとうございます。次回から激しい戦闘が始まります。作者も無い文才を振り絞ってでも頑張りたいと思います」

道男「俺からもよろしく頼む」

道男「それより、これは はどうにもならないのか？」

作者「無理。お仲間増やすなら聞かないでもない」

道男「なに？」

??「……………え、僕？」

後書きは適当です。とにかく適当です。

気まぐれで書いてますから。

ただ前回と言っていることが違ってしまって申し訳ありません。

本当は書くつもりもなかったのですが……………。

ここで止めたら2度とやらないだろうなあと思い、本編にはない笑
いを少しは入れられたらなあと思っています。

とはいえ、適当ですのでご了承ください。

第二十一話 進軍(前書き)

第二十一話 進軍

「来よる、来よるぞ〜」

「戦車長、頭引っ込めてくださいよ、丸見えっすよ」

双眼鏡を片手に路地から顔を出す戦車長はその双眼でしっかりと敵の姿を捉えていた。

「敵は砂漠仕様戦車……、随分と数がいる。20は下らんか」

「戦車長〜」

「うるさい、少し黙ってる!」

砲手を黙らせると戦車長は再び双眼鏡を覗く。

「だが、数だけおつても無駄だ。……2、3号車準備はできているか」

『いつでも』

『どござ』

今、路地から大通りに砲塔を向けている1号車とは別の場所、正確には2つ3つ隣の路地からも大通りに鎌首もたげている戦車が待機している。

「数はおよそ20、こちらが撃つと同時に撃て」

『了解』

「よし、弾を込める。最前と最後尾を攻撃して閉じ込めるぞ!」

「分かりましたから、さつさと戻って下さいっすよ！」
「分かった分かった」

ほどなく戦車長がハッチから車内に滑り込み、砲手に合図を送る。すでに初弾が装填され、後は引き金を引くだけだ。最高のタイミングまで待つことが大切だ。

『3号車、先頭が通過した』

敵の戦車部隊が3台の戦車の鳥かごのような待ち伏せポイントに差し掛かった。そして遠くからキュラキュラと言うキャタピラの音が聞こえてくる。

姿が見えず、戦車長は生唾を呑み込んでその時を待つ。

『2号車、先頭が通過した』

もう間もなくだ。2号車のいるポイントは1号車のいる場所からおおよそ50メートルほどの位置にある。とすれば、すぐに敵が現れるはずだ。

「すぐに来るぞ、発砲用意」
「了解っす」

砲手が引き金に手を添える。そして照準器を覗き込み、現れるであろう敵を待ち伏せる。

そして、路地の外に巨大な影が現れる。
砲身、車体と姿を現し、砲塔がその姿を照準器のど真ん中に差し掛かった時、砲手が引き金を引き、装填された砲弾が至近から敵の戦車の横っ腹に突き刺さった。

突き刺さった砲弾が内部で爆発し、穴と言う穴から火を噴き、砲塔が吹き飛んで空高く舞い上がると同時に巨大な火柱となって動きを止める。

後続がつんのめる様にその動きを止め、ハッチから大声をあげながら男が顔を出して燃え盛る戦車をどかす様に指示を飛ばそうと背後を見て、その目を見開いた。

それもそのはず、最後尾でも同じように火柱が上がり、おまけに中ほどの辺りの車両すら隊は炎上、出撃しようとしていた戦車部隊は動きを止められた上に二分され、閉じ込められてしまっていたのだ。即座に攻撃をした敵を探し出そうと路地に戦車を滑り込ませるが、そこに残っていたのはキャタピラの跡だけ。すでに戦車は姿を消していた。

ゲリラ戦。

決して出しゃばらず、1人1人敵の戦力を削っていく。それと同時に敵に脅威を与えることで敵の目をこちらに引き付ける。ルートたちの潜入を支援する目的で敵を一手に引き受ける必要があったのだ。

それが戦車隊に課せられた任務である。

それゆえ、動きを止めた時点で戦車3台は路地の奥へと姿を消していた。

次なる獲物を求め、彼ら戦車隊が敵の背後を脅かす存在となるまでにそう長い時間はかからなかった。

「上空の観測機から報告！ 401部隊が無事作戦を開始した模様です！」

その報が艦橋に入った瞬間、歓声が上がった。

「まだ作戦が始まったばかりだ。その歓声は作戦終了時に取っておくんだ」

マツクはそれを静かに諫め、士気を落とすことなく隊員たちの歓声を抑え、作戦に集中させる。

そう言ったマツク自身、無事にルートたちが潜入できていたことを確認できて、内心飛び上がりた気持ちであった。敵に傍受される危険があったため、無線の使用を控えていたため、外部から都市内部の動向は一切分からなかった。

幸いにして作戦は上手く推移しているようで、観測機からは戦車隊が狭い路地を器用に移動して敵の背後へ回り込んで一撃、回り込んで一撃を繰り返している状況が逐一入ってくる。

『ミサイル第2波、迎撃開始！』

目の前で花火が上がったかのように視界が白く塗りつぶされ、ミサイルが爆発する。

『こちら402部隊！ 都市外壁に部隊が到達！ これより突入す、ぐわあ！！』

意気揚々と入電してきた男の声が雑音にかき消される。

慌ててマツクが都市に目をやると、北門周辺に無数の黒煙が上がり始めている。北門は外に向かって大きくひしゃげ、今まさに突破しようとしていた戦車に瓦礫が命中しているようで、戦車が一旦後退しているのが見える。

『北門に敵戦車多数！ 突入は困難だ、支援を！！』

『了解、フランスス力隊、北門内部を爆撃せよ』

『了解、エイジス隊、突入を掩護してくれ』

上空で地上からのミサイルと敵機を掻い潜りながらフランスス力隊が北門上空に到達、黒い糞のようなものを幾つか落として行き、即座に高度を上げ始める。ほどなく北門内部に着弾、強烈な衝撃波が全方位に波紋となって広がるのが、艦橋からでも見て取れた。

北門内部で待ち伏せていた戦車は真上からの爆撃で大破炎上、横転しているものや味方を巻き込んで爆発を起こすものなど、到底反撃の態勢を取れる状態になかった。

『道が開いた！ 戦車隊前へ！！』

北門に蟻のように戦車が集まっていき、次から次へと内部に突入し、断続的に発砲を繰り返す。

「401部隊の状況を」

マックは戦闘指揮所の向かって呼びかける。
ほどなく返事が返ってきた。

『現在敵艦から約5キロの地点にビーコンが確認されています。問題なければあと15分もすれば到達します』

「よし、戦車隊を全面に押し立てて敵に主力はこちらだと思込ませる。絶対に401部隊の存在を悟られるな」

『了解』

マックはそれだけ言うと上着を脱いで艦長席の背もたれにかけた。そして足早に艦橋を後にしようとして、副長に呼び止められた。

「どこへ行かれるの?」

マックはニヤリと微笑む。それは旅団長としての笑みではなく、1人の傭兵としての笑み、そう副長は理解した。ため息をついて道を譲り、マックが通り過ぎる時にポツリと呟いた。

「回収へりは機体番号56のへりです。すでに甲板待機していますから、見れば分かるはずですよ」

「すまん、副長、留守を頼むぞ」

「お任せ下さい」

副長が敬礼し、マックもそれに返す。そして艦橋を飛び出して後部甲板へと向かうため階下に駆け下りていった。

「むっ、まずいな」

ルート以下401部隊は目の前の大通りを見つめてその足を止めた。

「隠れるものがないですね」

「……敵勢力は？」

北門から数本ずれた細い道を進んでいたルートたちであったが、作戦前からあった唯一の懸案事項であった事に遂にぶち当たった。

『ブラン・コーリア』は円形の都市で、同心円状に数本の大通りが都市を一周するように構築されている。そのため、中心部へ向かうとすれば必ず広く、見晴らしの良い道を横切る必要がある。

それが今現在目の前にある広々とした道である。

瓦礫が少なく、廃棄された車といった隠れる場所が少なく、路地から通りを覗くと案の定少し離れた所に陣地が構築されていた。都市の外側に向かって土囊が積まれていて、戦車が砲身を覗かせている。兵士の姿は少なくとも5人ほど。全員がすでに臨戦態勢に入ってお

り、おそらく旅団の襲撃に備えているのだろう。

「戦車1、歩兵5から6、戦車長らしき男が戦車のハッチから上半身乗り出してるな」

「そのくらいなら、自分で行けます」

カナナが路地脇から外を覗くルートに小声で言う。

「どうやって近づく？ 透明人間にでもなるか？」

「ルートさん、屋上からつてのはどうですかい？」

ラーキンが真上を指差す。

路地を形成する左右の建物は15階建てのビル。そこからほぼ同じ高さのビルが並び、それは陣地の正面まで続いている。ルートはそれを見つめて、陣地正面のビルから陣地へと視線を移す。

「……悪くない。レイ、カナナを陣地の真ん中まで案内してやれ」
「了解」

「ラーキン、フィリップ、ロケット弾を出してくれ。歩兵を排除したらぶっ放せ。フラッシュ、背中を任せる」

「待つてました」
「了解」

大男2人がニカツと笑い、さっそくバッグから細い筒を数本取り出す。決して口径は大きくないが、量で質を補うことができるだけ持ってきている。大男2人がいるだけはある。

フラッシュが銃を担いで作業をする2人を掩護する。ばれてはいないと思うが、警戒は不可欠だ。

「よしカナナ、いっちょお得意のナイフ捌きをお見舞いしてやれ」

「了解、レイさん、お願いします」

「任せる。ルート、5分でやる」

「3分だ」

「なら急ぐとしよう」

そう言うとレイは小柄な体躯のカンナを肩に担ぎ、真上のビル屋上めがけてワイヤーを撃ち出す。ワイヤーの先に取り付けられた鉗がコンクリートに刺さり、即座にレイはワイヤーを巻き上げる。レイの身体が浮き上がり、鉗の刺さったビルの壁に叩き付けられそうになるが、足をクッションにそれを防ぎ、そのまま壁を軽々と走り昇って行った。

ルートはそれを見上げ、ラーキンからロケット弾を1発受け取る。

携帯式ロケットランチャーに装填し、陣地とルートたちを唯一遮ることができると小さな地面の窪みに滑り込む。大男の2人は隠れられないので、物陰から合図と共に飛び出してくることにした。

フラッシュは物陰から3人の背後、通りの逆を監視する。

チラッと屋上に目を向けると、すでにレイはカンナを担いだ状態で5メートルはあるビルとビルの間を飛び越えて陣地真正面のビルに飛び移ろうとしていた。

乾いた音が遠くから聞こえ、一瞬頭を下げた敵襲かと警戒するが、続いて断続的な爆発音、銃撃音が響き渡ると、それが仲間たちが迫ってくる音だと察して胸をなで下ろした。

だが、その音は敵にとっては死神の足音なのかもしれない。

ここは北門から中央部へと伸びる道から外れているが、敵にとってはどこから来るか分からないのだ。事実今の音で陣地の土嚢の外にいた兵士は土嚢の陰に飛び込み、辺りの様子を伺っていた。

「ダメだな、1カ所に固まっちゃあ……」

5人か6人か知らないが、全ての歩兵が1カ所に固まったのは確かだ。これを見逃すほどルートたちは甘くない。土嚢に隠れてこちらが見えなくなった好きにラーキンを呼び寄せ、通りの反対の路地に向かわせる。そして手を少しだけ上げて小さく地面に向けて振る。

それを合図に、レイがカナナを抱えて大空にジャンプした。

ロケットランチャーをうつ伏せに構えてその時を待つ。

第二十一話 進軍（後書き）

ふと、思い出したので補足しておきますね。

旅団が保護していた難民、孤児は戦闘領域からかなり離れた場所で一時的なキャンプを張っています。護衛の隊員が若干名いますが、それ以外はすべて一般人です。一週間程度の食糧と水を与えて、旅団の帰りを待たせているわけです。その描写を完璧に忘れていましたので、補足しておきました。

道男？

だれですかそれ？

お仲間が出る頃には生きて帰ってくるでしょうね、なにせ今中ボス戦の最中ですから……。

決して忘れていたわけじゃありません。適当と言ったのはそういうことなのです。

誤字脱字でも構いません。
是非ご感想をお願いします。

第二十二話 突破

レイは屋上に上がると即座にワイヤーを切り外し、走り出した。

これが生身の人間だったら人一人担いで走るなんて無理だろうが、レイは機械人だ。荷物を落とさないように運ぶことなどお手の物だ。

「レイさん、重くないですか？」

「機動性が若干落ちるが、問題ない」

そう言いながらビルとビルの間を軽く飛び越える。着地しても足を止めることはなく、ルートと約束した3分を切る勢いで陣地正面のビル屋上にたどり着く。

遠くで激しい戦闘音と黒煙が上がっており、それが北門の方向だと察知してそちらを見やる。

断続的に様々な銃の発砲音が響き渡り、真上から戦闘機が黒い糞のような爆弾をばら撒いていく。都市内には突入しているようだ。

それを確認してレイは下を覗き込む。はるか下にコの字型の陣地が構築されており、そこに先ほどまで陣地外にいた兵士たちも姿勢を低くした状態で固まっていた。

「6人か。カンナ、任せるぞ。俺は戦車に乗っている男を」

「了解です」

ふと視界の端を動く影があった。

見ればラーキンが道を横断して反対側の路地へと入っていった。ラーキンも身を屈めているのだが、大男な上、巨大なバッグを背負っ

ているため、腰を折ってもレイが直立した態勢の時の身長ほどある。だが、陣地の中に潜り込んでいる敵兵は気づく様子もない。

そして道路の真ん中辺りに小さなくぼみがあり、そこにうつ伏せで隠れているルートを確認した。ラーキンが路地に入ったと同時に小さく手を振ったのを確認してレイはカンナを支える手に力を入れて、落とさないようにして、屋上の淵に足をかける。

「カンナ、ナイフを出しておけ」

ふと視線をカンナに向けるとすでにカンナは2本のナイフをホルダーから取り出していた。

「何時でも、お願いします」

「では、行くぞ！」

レイは思いっきり足に力を入れて陣地真上に飛び出した。

そして重力の法則に則ってレイの身体が真下に落ちていく。フワリとした浮遊感に襲われ、レイの身体は陣地へと猛然と落下、地面に迫る。だが、レイは着地の音を敵に聞かせるつもりなど毛頭無かった。着地と同時に足を曲げ、着地の衝撃を極力抑えてまさしく舞い降りるように敵のど真ん中に降り立った。降り立ったのに気が付いたのは真正面にいた男だけで、それ以外の兵士は皆よそ見をしていたために誰一人レイがカンナを抱えて降ってきたことに気が付かなかった。

目の前にいた兵士が何かを叫ぼうとするが、それをカンナのナイフが許さない。

思い切り突き出されたナイフが兵士の喉を抉り、頸動脈を切断して血が噴水のように吹き出し、カンナを返り血で真っ赤に染める。

「なんの音、な、なんだお前おごおっ?!」

ナイフが喉にズブリと突き刺さる。最初の兵士を挟ったカンナは返す刃で背後にいた男を襲い、ナイフを横に切り抜く。それを合図に全員の敵がこちらに気が付いた。しかし、あまりにも遅かった。

「ほら、脇ががら空きだぞ」

レイが銃をカンナに向けようとした男のこめかみに拳銃を突きつけ、引き金を引く。男がもんどりうって横に吹き飛ぶが、残されたのは何か擦れるような音だけ。サイレンサーを付けた拳銃は戦車内にいるであろう敵にすら聞かれずに男を葬る。

残り3人。

カンナは戦車を挟んで反対側にいて、こちらに向かって飛び掛かってこようとした男の右腕をカウンター気味に切り上げ、振りあがったナイフを横に払って男の首を飛ばす。背骨を無理やり切ったせいで刃こぼれを起こし、カンナはそれを見てまだ立っている男に向けてナイフを思い切り投げつける。

まるで曲芸のように回転しながらとんだナイフは男の眉間に寸分の狂いもなく刺さり、男はその衝撃で首が折れるほど真上を向きながら仰向けに倒れた。

「うおおお!!」

「叫ぶんじゃない。耳障りだろっ」

目と鼻の先と言うほどの距離では、長さのある小銃は逆に不利だ。それを知った男は拳銃を抜こうとするが、それよりも速くレイに足

を撃たれ、跪き、腹を撃たれて前かがみになり、眉間を撃たれて足を曲げたまま仰向けに倒れる。

「な、何事だ!？」

叫び声に気が付いたのであるうか、戦車の中から物音がして誰かが出てこようとしている。それに気が付いたレイはカンナに合図をして素早く陣地から飛び出して、視界の端にいるルートに向けて合図を送る。1秒も経たずにルートが飛び上がってロケットランチャーを構える。

レイとカンナは陣地の前の地面にダイビングするように伏せ、直後に3つの弾頭がそのほぼ真上を通過した。

レイとカンナが敵陣に飛び込み、一方的な虐殺を行い、最後の1人がレイに撃ち殺された同時に、戦車の中から声が聞こえた。敵兵に1発も撃たせず、排除してくれたおかげで戦車内の音すらルートの場所まで聞こえてきていた。

そして声が聞こえたとはほぼ時を同じくしてレイとカンナが立て続けに陣地から飛び出してきて、レイが戦車に向けて親指を向けた。

「了解！」

それを合図にルートが窪みから姿を現し、ルートが立ち上がったのを皮切りにラーキンとフリリップが物陰から姿を現し、ロケットランチャーを戦車に向ける。そしてレイとカンナが地面に伏せたのを確認してルートは引き金を引いてロケット弾を発射、軽い反動を肩に覚えながら即座にしゃがむ。

ロケット弾が若干の放物線を描いて戦車に飛び込んでいく。着弾直前に上部ハッチから男が出てきて、ロケット弾に気が付いて驚愕の表情をするが、それも一瞬の出来事だった。1発が砲塔側面に直撃、爆発して男の上半身を爆風で吹き飛ばす。2発目と3発目がキヤタピラを保護するスカートを直撃、爆風で車体が大きく浮き上がり、横転する。そして弾薬に誘爆して派手な爆発を起こす。

「無事か、2人とも」

ルートはうつ伏せになっている2人に駆け寄り、呼びかける。2人はすぐに起き上がって自分たちが飛び出してきた陣地の惨状を見て拳をぶつけ合った。

そこにラーキン、フリリップ、フラッシュがやってくる。ラーキンとフラッシュが親指を立て、ニカッと笑顔を見せる。

「問題ない。絶好のタイミングで撃ってくれたな」

「6人を10秒弱だ。相変わらずだな、カンナ」

「掩護があったからです。1人だったらもう少しかかります」

「できないとは言わないところは相変わらずだ」

「フリリップ、黙りなさい」

頭ごなしに黙らされたフィリップが頂垂れるのを、カンナ以外の全員が同情の目で見つめる。傷つきやすいのが玉に傷の男で、それが無ければ屈強な男として旅団を支えるほどの隊員になれるのだろうが、今のところ改善の余地はない。

「と、とにかく、先を急ぐぞ」

「了解、フィリップ、気を落とすのは構わないけど荷物を落とさないですよ？」

「カンナもいい加減にしておけ……」

レイが忠告するが、カンナは全くこたえた様子もなく、しれっとしている。

「その顔で打たれ弱いとか、ある意味すごいとは思いますがね」

「だから……」

フィリップの隣のラーキンですら、若干顔色が悪くなっている。ラーキンもフィリップに負けず劣らず中と外のギャップが激しいことで知られている。

誰がやったか知らないが「旅団内でギャップのある隊員ランキング」で上位2位は常にこの2人である。フィリップの気持ちやラーキンには痛いほど分かるのだろう。

「ほら、今は任務に集中しろ。あと少しで敵艦のいる中央部だ」

「カンナ、ナイフを1本消耗しただろう。フィリップのを使え」

「フィリップのは無駄にデカくて重いんです。ルートさん、貸してください」

「だから、どうして傷口に塩を塗るような真似を……」

「相変わらずカンナさんは容赦ないね……」

フラッシュが苦笑いしながら頬をポリポリとかく。
フィリップが真剣に立ち直れなくなる前に任務に戻ろうと思い、ルトは仕方なくナイフホルダーごと腰から取り外して投げ渡す。
それをカンナは受け取って腰に取り付ける。

「では、行くぞ」

「了解」

「今の爆発は……」

艦橋にいたボヘミアンは不意に顔を上げて外を見やる。北門方向では激しい戦闘が続いており、ここまで爆発音や振動が伝わってくる。その中でボヘミアンは1つだけの、異質な爆発音を聞きつけた。

「北門の戦闘音ですか？」

近くにいた男が聞くがボヘミアンは静かに首を横に振った。

「違う。北門とは逆の、南に近い方向だ。あっちから敵襲の報は受けていないはずだな？」

「はっ、10分前の定時連絡では異常なし、と」

「すぐに全陣地に確認を取れ」

「りよ、了解」

慌てた様子で男が走り出し、近くの端末から各陣地へ向けて交信を開始する。そしてその表情がしばらくすると凍りついた。

「ボス、第4陣地と連絡が取れません！」

「敵は本艦を狙っているぞ！ 先ほど出撃途中の戦車隊が敵の伏兵に襲われたと言っていたな。敵の正体はわかったのか！」

ボヘミアンは声を荒げて怒鳴り散らした。

「そ、それが、敵はヒットアンドアウェイを徹底しているらしく、戦車ということしか分かっていません。も、もしら奴らは、囷？」

「そうだ！ こちらの目を北門と小規模の戦車隊による奇襲に向けさせ、歩兵単位で本艦に切り込んでくるつもりだ。艦内の全員に告ぐ、敵がこちらに向かって背後から接近している可能性がある。警戒を厳にせよ。それと北門にいる部隊には徹底抗戦させる。敵を本艦に一切近づかせるな！！」

艦内に非常事態を告げる警告灯が灯り、けたたましいサイレンが鳴り響く。

「敵艦に向けての攻撃はどうなっている。ミサイルの装填にいったいどれだけ時間をかけるつもりだ！」

「て、敵弾が断続的に降り注いでいます。新たに装填する隙を与えないつもりです！」
「くそっ！」

ボヘミアンは目の前の端末を力の限り叩き付ける。ミシツと言う嫌な音が響いて端末にヒビが入った。

マツクはボヘミアンたちに再装填の隙を与えるつもりなど毛頭なかった。廃都市内にあった『ブラッディスカル』は艦砲を撃つことができない。それゆえ、敵艦への攻撃は対艦ミサイルに限られてしまっていた。大型の対艦ミサイルは艦の甲板に斜めに取り付けられた発射筒に装填される。再装填するには備え付けのクレーンを使って発射筒ごと取り換える必要がある。そのためには艦の外に出なくてはならないのだが、敵の攻撃を受ければ目も当てられない被害を受ける。

マツクはそのことを読み、一斉射撃を行うのではなく、単発ではあるが常に敵の頭上に砲弾が降り注ぐように撃っているのだ。そのためボヘミアンたちは敵弾の直撃を恐れて外へ出られなくなってしまったのだ。

それが理解できるだけに、ボヘミアンの悔しさはより一層高まった。

「ボ、ボス、個人装甲機を使えば強引ではありますが何とかかなると思います！」

1人の男が鬼の形相をしているボヘミアンに恐る恐る進言した。それを聞いたボヘミアンは最初は反応も薄かったが、不意に動きが止まり、男にいきなり目を向けた。

その顔は鬼の形相のまま笑みを浮かべていた。

「良い事を言ったな。個人装甲機を準備しろ、俺が出る」

「ボス！ 危険すぎます！」

副長の男が慌てて艦橋を飛び出そうとするボヘミアンの行く手を遮る。

「あれは俺しか扱えんようにマガスが設計した。それにあれを使えば再装填などものの数秒だ」

ボヘミアンは副長を片手で押しつけて艦橋を飛び出した。

その様子を茫然と見つめていた副長は、すぐに気を取り直して指揮を継承した。

「ボサツとするな！ 格納庫に連絡、個人装甲機を用意しろ！ 再装填が終わり次第敵艦への攻撃を再開する！！」

『血の盟約』はまだ本気を見せてはいない。

第二十二話 突破（後書き）

ボヘミアンの影が徐々に迫ってきました。

そして、新しい兵器が出てきました。

個人装甲機、です。まだ名前しか出てませんが、少しばかり説明をば。

まあ、名前の通り個人レベルで装備できる、……ガ○ダムじゃないですよ？

イメージとしてはマト○ックスのAPUか、ア○ターのAMPスーツ（大佐が最後に乗ってる奴）あたりを想像していただけるといいかと。作者もこれを想像しながら書いてます。

APUのうおーっも良いですけど、大佐のナイフ捌きもかつこいいんですよね、悪役なのが残念です。それがカッコいいのかもしれないが。

そんなこんなで、この機体がいろいろキーパーツになるかも、いやならないかも。まあ戦況の力ギを握ることは確かなんですけどね。ネタバレはここまでにしておいて、これからもこの駄作を読んでいただけると、ありがたい限りであります。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第二十三話 怒涛の突撃

『グランドフリーユージェ』艦橋は次から次へと指示を飛ばしつつも、戦況がこちらに傾きつつあることを確信していた。

上空を飛ぶ敵の戦闘機はことごとく味方の戦闘機に追い払われ、『グランドフリーユージェ』に近づくことすらできないでいる。廃都市内に突撃した部隊は激しい抵抗にあってはいるが、徐々に押している」と報告があった。そして敵艦も、断続的に攻撃を加えているのが功を奏しているのか、目立った反撃を行っていない。最初の攻撃以降はミサイルすら撃ってこない。せいぜい都市上空を飛ぶ味方機に発砲する程度だ。

『こちら402！ 敵戦車群が一部後退を開始している。徐々にではあるが前進できている！』

『こちらエイジス隊、上空からも敵勢力の後退を確認できた。だが敵艦から増援が出現したのも確認した。観測機、詳細を頼めるか……、なんだあれは？』

不意にエイジス隊のパイロットが異変に気が付き、無線から動揺した声が入ってくる。

「エイジス隊、どうした、何があった？」

『敵艦の甲板に、人型の何かが動いている。なんだあれは……』

「人型？ 人間ではないのか？」

副長が首をかしげる。

『こちら観測機、映像をそちらに送る』

艦橋の大型モニターが切り替わり、敵艦を真上から映す映像になった。画素数は荒いが、何か大きなものが甲板で蠢いているのが分かる。

マックは目を凝らしてモニターを凝視する。

「まさか、あれは……」

「副長、あれを知っているのですか？」

だが、副長は首を振った。

「いや、違うだろう。あれがここにある、いや、いるはずがない」

「と、言いますと」

「15年前の戦争時に機械人が作り出した奇襲用の機体に似ていたんだ。巨大な2足歩行兵器でな、艦に取りついて艦内部に突入して内部から艦を破壊する厄介な奴にな。あれは機械人の作った人工知能を積んでいるから、人間なら誰でも殺す恐ろしい奴だ」

副長はマックと同じく『大崩落』を生き抜いた兵士だ。彼自身、その兵器は何度と目にした。

巨人のような姿をした兵器が地面から飛び出したかと思ったら、艦の装甲を突き破って艦内に入り込み、重要なエンジンや、弾薬庫を強襲するという、その図体に似合わず素早い行動をする機体だ。人間程度の力ではもちろん倒せないし、大口径の砲は狙いを定める前に接近されるという、いわば八方塞がりの機体なのだ。

「で、では、副長はどうやって奴らを？」

「友軍艦が襲われているところを、残りの艦で味方ごと攻撃したのさ」

一瞬、艦橋が静寂に包まれる。

「だからこそ、個体数の少ないあいつらを根絶やしにすることができた。戦後回収された製造番号から裏を取って、全機体の破壊を確認したんだ。最後の1機など、生き残った核弾頭を持ち逃げしようと考えていたほどだ」

「そ、それほどなのですか」

男が息をのむ。

副長が無言で頷く。機械人たちの最終兵器でもある核弾頭を単機で持ち運びできる上に、個々の戦闘能力は陸戦型としては無類の強さを誇る。

「たとえあれを人間が作り出して操縦しようとしても、それは所詮偽物。15年前の奴らには到底及ばん。恐れるに足らん相手だ。観測機、数は分かるか」

『今のところ、1機のみです。どうも何か作業をしている様子です。長い筒状の物を持っています。あれは発射筒？』

それを聞いて副長は飛び上がった。

「いかん、奴らミサイルを再装填している！甲板での作業を妨害するために主砲を単発にしていたことがばれたんだ！こちらが艦に直撃させていないことに気が付いて、大型の重機でミサイル発射筒を取り付けているんだ！主砲管制、次から当てて行け！迎撃ミサイル用意！！」

副長の声が艦橋に響き渡った。

だが、一瞬遅かった。

次の瞬間、レーダーが敵艦から放たれたミサイルを捉えた。

運の悪いことに、丁度主砲が発砲した直後で、ミサイルの諸元入力が遅れ、ミサイルに低空に高度を下げる時間を与えてしまった。そのため、レーダー捕捉出来ず、迎撃する間もなくミサイルは艦に迫ってきた。ミサイル迎撃が間に合わず、五月雨式にガトリング砲が火を噴き、ミサイルを叩き落とそうとする。

『敵ミサイル、か、数8！ 迎撃追いつきません！！』

「全員対シヨック態勢！！」

弾幕を潜り抜け、高速で接近したミサイルは、寸分の狂いもなく『グランドフリーユージュ』に吸い込まれていった。

「ミサイル！？」

敵の警戒陣地を強襲、攻略したルートたちの正面の空に、白煙が昇っ
つていき、急激に針路を変えて視界から消えていった。

「方角からして『グランドフリーユージェ』に向かったようだな」

レイが方角を確認しつつ、空を見上げる。

「8発も？　まずい、艦の迎撃が間に合うか……」

「迎撃ミサイルは同時に4発、ガトリング砲は計16基、内半分は後部だから使えるとしたら前部8基、おまけにミサイルはロツクオンされる前に高度を下げられてしまえば、失探^{ロスト}する可能性が高い」

「艦が沈むことはないだろうが、支援砲撃が……。速く終わらずに越したことはないな。フラッシュ、無線に気を付けていてくれ」
「分かった」

フラッシュは401部隊内で唯一大型の無線受信器を持っている。戦闘中、周囲を飛び交う無線を傍受、または味方の無線を聞くために持ってきたものだ。受信しかできないが、その代わりにわずかな無線信号も受信することができる感度の高いものだ。

フラッシュは聴覚をフルに使って無線に集中する。ヘッドホンを取り出して耳に近づけている間、残りの5人は足を止める必要がある。遠雷のような音が断続的に聞こえるが、それが味方によるものか、敵のものなのか判別することはできない。北門方向からの発砲音にかき消されて聞き取るのもやっとの状態だ。

「……、2発」

フラッシュがポツリと呟き、全員がフラッシュの方に顔を向ける。先ほど、レイはミサイルを8発確認した。そこから、その2発が撃ち落とした数なのか、当たった数なのか、そのことに全員の関心が寄せられた。

「2発、命中した」

「なんてことだ……。被弾箇所は？」

「……エイジス隊が、艦首に煙が上がっていると言っている。艦橋、後部甲板は無事のようだよ」

「被害は最小限、と言いたいところだな」

「でも、着弾の衝撃で射撃管制が不能になったって言ってる。艦砲射撃はもう行えない」

辺りは激しい戦闘を行っているにも関わらず、6人の周りの空間は静まり返っていた。

「艦砲射撃がない、敵艦が動き出すのも時間の問題だな」

「やりやがったな、あの野郎ども、俺たちの家を！」

「あら珍しい、フィリップ、今はあなたの考えと同じよ」

そして、空気は闘争のものへと変わった。

彼らにとって、『グランドフリーユージュ』は家だ。家を孤児だった者にも、都市から入隊した者にも、共通する大切な我が家なのだ。それを撃たれて黙っていられるほど、彼らは優しくはない。

普段、あまり激昂しないフィリップとラーキンがこれ以上にならないほど血管を浮き上がらせ、手に持つ機関銃がフルフルと震えてる。

「ルート、目標はボヘミアン1人だったよね」

「そうだが」

フラッシュがヘッドホンを外してルートに顔を向ける。その顔も怒りに震えている。

「僕たちの家を撃った代償は彼の部下に払ってもらおう」

フラッシュは銃を持ち上げて言った。

「何を言っている」

ルートはやや口調を強めて言った。

「そんなことは、言われるまでもない」

ルートは身を翻して先へと進みだす。

5人は間を開けずにルートの後を追いつ、進みだす。

目指すは我が家を撃つた男の居城。その行く手を塞ぐあらゆる物を、薙ぎ払つてでも進む気概が今のルートたちには十分以上にあった。

「レイ、敵艦はまだか？」

「慌てるな。まだ敵は逃げていない。その路地を曲がれば、北通り最深部、中央ロータリーに出られるはずだ」

それを聞くとルートは歩く速度を若干速め、路地を素早く曲がると突き当りの路地出口の脇に体を寄せ、大通りを覗き見る。

「見つけた」

巨大な灰色の影が、コンクリートを穿ってロータリーを占領している。『グランドフリーユージュ』より一回り大きい戦艦が、そこに佇んでいた。エンジンを始動したらしく、下部の巨大なキャタピラが若干動いている。すでに必要な物資は積み込んだのか、周囲に航空写真で確認されていたトラックやヘリは見当たらない。

この様子では、北門から通りにかけて展開している敵の戦車部隊は

置き去りにするようだ。

ルートは周辺を見渡し、屋上に視線をやる。そして狙撃手がないことを確認すると、通りに飛び出して敵艦目掛けて走り出した。それに全員が続く。

「ラーキン、ハッチをこじ開ける！」

「合点！！！」

兵員用の昇降口であるハッチはすでに固く閉ざされていた。敵艦は少しずつ旋回しており、速く開けないと轢き殺される危険がある。ラーキンはハッチに取りつくと、ポーチから粘土状の物体を取り出す。それをこねくり回してハッチの取っ手にへばりつけ、そこに細い導線を差し込む。ラーキンの合図で全員がハッチから離れ、ラーキンは導線を巻いた筒を転がしながら少し離れ、ルートの方に顔を向け、指示を仰ぐ。

「やれ！」

ルートが声を張り上げ、キャタピラの音に負けないように叫び、それを聞いたラーキンは導線に電気を流す。

刹那、ハッチに閃光が生まれ、爆発を伴ってハッチが宙を舞う。舞ったハッチが地面に叩き付けられるよりも速く、ルートたちは敵艦目掛けて走り出していた。

「突入する！」

「つつつ、どこに食らった、副長!？」

ヘリのコックピットで暖機運転をして待機していたマツクは、突如対シヨック警告の警報が鳴ったと思ったら、直後に艦前部から来た強烈な揺れでヘリのフロントガラスに頭をぶつけ、ぶつけた部分に手を当てながら無線で艦橋に繋げる。

『艦首に食らいました！ 幸い航行には支障ありません。しかし、艦砲射撃が不能になり、現在支援攻撃が行えていません!』

「ミサイルは!？」

『敵戦車部隊と味方が乱戦しており、戦車隊に対して支援は現在航空支援のみです。敵艦への攻撃は、401部隊のビーコンが敵艦付近で途絶えたために迂闊に撃てません!』

「消えた、だと」

『おそらく、敵艦に突入したものと思われます。ビーコンの電波が届かないのかと……』

それを聞いたマツクは胸をなで下ろした。

そして、すぐに冷静を取り戻してヘリ内から指示を飛ばし始める。

「敵艦の動きは？」

『ゆっくりではありませんが、動いています。おそらく廢都市を脱出するものだと思います』

「戦車隊は？」

『圧倒的に優勢になりつつあります。敵戦車のほとんどは航空支援により壊滅、残敵処理と言っても過言では……』

「油断するな。追いつめられた敵は何をするか分からんからな。深追いはさせるな。敵艦に注意し、安易に突撃するなと伝える」

『了解！』

マックはそこで無線を切ると、後ろに向き直って搭乗している隊員に顔を向ける。

「皆無事だ。迎えに行こうじゃないか」

「聞いてたわ」

ヘリ内で使われるヘッドセットを頭に装着したフェイナは機体側面ハッチに機関銃を取り付けながら返事をした。

「敵艦が動き出したのね。妨害するためには機関銃じゃ足りないけど？」

「分かっている。ロケット弾を山ほど積んでいこうか」

「景気のいい花火を上げるのね？」

フツとフェイナが笑みをこぼし、ヘリから降りる。そして近くにいた甲板員に声をかけ、格納庫へと向かった。

その足取りはどこか焦っているようにも感じられるほどに速く、甲板員は慌ててその後を追って格納庫へと入っていった。

「彼らがそう簡単に死ぬわけがないじゃないか……」

態度には出していないが、フェイナも気が気ではないのだ。長い付き合いの仲間たちが最前線に立っているのに、自分は家でぬくぬくなどしてられないのだろう。

今回の作戦には情報部隊は出動していない。

今後の事も含めて、これ以上の情報部隊の損耗は許されない状況にある。

ただでさえ人数の少ない情報部隊は量より質、まさしく一騎当千並みの戦力であると同時に、替えの効かない貴重な戦力である。だからこそ、作戦前にフェイナが401部隊に志願した時も、マックはそれを突っぱねたのだ。

言い方は悪いが、フェイナは替えがないのだ。ルートたちが消耗品と言っているわけではなく、ルートたちにはできない仕事をフェイナは行える、そういうことなのだ。

「俺も、甘いのかな、レイ」

ふと、長い間共に旅団で肩を並べた戦友の名が口から洩れた。

フェイナの元保護者であり、本人は一切、まったく、微塵も気がついてはいないがフェイナが想いを抱いており、今回の作戦の最前線で今まさに戦っているレイに向けて、聞こえないと分かっているが、ついに呟いてしまう。

「押し負けたわけじゃない。彼女の意気込みに呑まれたわけでもない。純粹に彼女の手助けをしたかったのかもしれない」

誰に言う訳でもなく、マックは呟く。

その時、機体後部に何かが置かれるドスンという音が響き、機体が少し揺れる。マックが振り返れば、フェイナが先ほどの甲板員と共にロケット弾を装填した筒をハッチ外に取り付け始めていた。

「10分かならないわ。すぐに出ましょう」
「分かった」

マツクはそれまでの思考を頭から投げ出し、戦闘用の思考に切り替える。

「さあ、久々の戦場だな」

第二十三話 怒涛の突撃（後書き）

別にマックがない艦橋が無能なわけではありません。

タイミングが悪かっただけです。

いよいよ『血の盟約』旗艦ヘルトたちが突入します。

そしてマックとフェイナが皆を迎えに飛び立ちました。

前半、地味に副長のターンが長かったですね。

まあ、いろんな人がいると言うことで流してください。個人装甲機の説明も入れたかったですし。

誤字脱字でも構いません。

感想をお待ちしております。 m ((m

第二十四話 『ブラッディスカル』

「ボヘミアンはどこにいますか？」

艦最下層、壁越しにキヤタピラの音がする細い通路をルートたちは一列になって走っていた。ルートが曲がり角で足を止めると、後方のカンナが聞いてきた。

「指揮官としては、艦橋を離れることはないだろうが、相手はあのクレイジー」ボヘミアンだ。常識は当てにならない」

「そう言えば、作戦会議の時も誰かが言っていましたけど、”クレイジー”とはいっただい……」

ラーキンが背後を警戒しながら聞く。

カンナ、ラーキン、フィリップはこの401部隊に選抜されて初めてボヘミアンに関しての情報を受け取った。だが、それは時間の都合上かなり端折られたもので、ルートやレイ、フラッシュがマガスとの関係でボヘミアンを知った時に比べれば、かなり情報量が少ない。

「ボヘミアンの名前はそれ以前から知っていたとしても、”クレイジー”の由来など、知る由もないのは仕方のない事だった。」

「あいつは、自ら敵を殺すことを楽しむ癖がある。部下に任せずに自分で殺すんだ。先頭に立って敵陣に突っ込むことなど日常茶飯事、仲間であっても、何か失敗すれば彼が直々に首を刎ねる。それほどまでの奴だ。それで人類至上主義ヒューマンイズムなど掲げているんだから、お笑い種だな」

「それほどまでですか」

「ああ、あいつは殺すことに至上の幸福を見出す。人間ながらに殺^{キリ}人^シ人^マ形^シのような奴のようだな」

手信号でカンナ、ラーキン、フィリップを通路の奥へ行くよう指示する。

「3人は後部へ、格納庫から機関部へ進んでくれ。ラーキン、残りの爆薬を機関部に設置、このデカブツの足を止める」

「了解した」

「フラッシュ、レイ、俺たちは上に向かう」

「了解」

艦後部へと3人が狭い通路の先へと消えていった。

それを確認してルートは通路を曲がり、通路脇にある梯子に手をかける。梯子の先にはハッチがあり、現在は開いており、上のフロアが少し見えている。周囲に人の気配が無いのを確認した上で、ルートは銃を背中にして梯子を駆け上がる。上のフロアに這い上がって素早く銃を構え、周囲を警戒する。敵の姿が無いことを確認してフロアの下にいる2人に声をかけ、昇ってくるよう合図を送る。

「人の気配がなさすぎる」

フロアを上がり、レイが周囲を見渡しながら呟く。それにルートも小さくうなずく。

「ああ、いくら戦闘中とはいえ、ここまで人の気が少ないのはどうもおかしい……。そもそも、ハッチ爆破に気づかれていないはずがないんだが……」

結構派手に爆発させたおかげで、すでに敵に気づかれているものだ
と思っていたが、敵が一向に現れない。まるで3人をどこかに誘っ
ているかのように、無人の通路が目の前に伸びている。

「フラッシュ、無線は拾えるか？」

「無理だね。この周囲は電波妨害されている。十中八九僕たちを対
象にしたものだと思うよ」

「やはりか……。敵の襲撃に注意しろ」

「了解」

このフロアは、どうやら居住区のようなようだった。

『血の盟約』のメンバーが過ごしているであろう部屋がいくつも
あり、狭い通路の両脇には段ボールが積まれていたりして、さらに
狭くなっている。

ここにはどう考えてもボヘミアンがいる要素がないので、ルートは
先ほど上がってきた梯子の脇にある次のフロアへと続く梯子に視線
を向ける。

軍艦というものには、要所要所に指標が設置されてる。この艦も御
多分に漏れず、梯子の隅に小さい字でこの上が何なのか書かれたプ
レートが取り付けられている。

「第2艦橋、ということ、その上には第1艦橋があると考えてよ
さそうだな」

「何かしらの情報も得られるかもしれんな」

「無線も拾えるかも」

第2艦橋は第1艦橋の補助を行う。第1艦橋が健在な時はあまり使
いどころのない場所ではあるが、緊急時の臨時艦橋として必要不可
欠な場所だ。そして、第1艦橋が使用不能な時に迅速に操艦機能を
継承するために、そこには常時リアルタイムの情報が送られ続けて

いるのが、軍艦として当たり前のことだ。もちろん、それに伴う艦橋要員もいるはずだから、ルートは今一度安全装置が無効になっており、弾が装填されていることを確認する。

「第2艦橋を制圧、ボヘミアンを探し出すぞ」

「了解だ。フラッシュユ、後ろに」

「分かった」

前から、ルート、レイ、フラッシュユの順に並び、ルートは梯子に手をかける。そして手早く階段を駆け上がり、先ほどとは違って閉まっているハッチの取っ手を掴む。固い取っ手を力を振り絞って回し、ガコンという音と共にハッチが少し浮き上がる。

それと同時にハッチの向こうから物音が聞こえ、慌ててルートはハッチを静かに閉じる。明らかに、誰かがいる。下を向いてレイとフラッシュユに敵がいることを知らせ、激しい閃光と音をまき散らすスタングレネードを取り出し、安全ピンを抜く。

そして2秒待ってからハッチを少しだけ開け、そこからスタングレネードを転がし、すぐさまハッチを閉める。それを見て下の2人が耳を塞ぎ、ルートも梯子を飛び降りて耳を塞ぐ。

刹那、乾いた爆発音が響き、ハッチ1つ挟んでいても耳にくる甲高い音が響き渡り、上から悲鳴と激しい物音が聞こえてくる。

「行くぞ！」

ルートはすぐさま起き上がり、梯子を駆け上がってハッチを思い切り押し開ける。銃だけをハッチから出して、内部に向けて弾をばら撒くように発砲する。悲鳴が聞こえて、何度かドサリという何かが落ちたような音が聞こえ、ルートはハッチから顔を出す。

「クリアー」
「お見事」

第2艦橋に通じる広い踊り場には、5人ほどの男が倒れ伏していた。ルートは5人の喉元に指を当て、死亡を確認してから先へと進みだす。

「第2艦橋の要員か？」

レイが後を追いながらルートに聞く。

「おそろくな。戦闘員といった感じではない。だが、だとしたらどうしてこんなところにいる？」

「畏に飛び込んだ気がしてきたんだけど……」

「おそろくその通りだぞ、フラッシュ」

そうレイが言うと、フラッシュがため息をついて項垂れる。

第2艦橋に通じるハッチはそれほど梯子のあった場所から離れておらず、少し歩くと重厚なハッチが3人の行く手を阻んだ。だが、口ツクはされておらず、3人はお互いの顔を見合って小さく頷き合った。

ルートがハッチの取っ手を掴み、レイとフラッシュが銃を構える。そして、勢いよくルートがハッチを開き、ルートとフラッシュが艦橋に飛び込み、固まった。

「……無人だ」

後から入ってきたルートもその言葉に銃を下した。

第2艦橋はもぬけの殻だった。計器は動いているが、それを操作、監視する人間は誰一人いない。どうやら先ほど倒した5人が実質の

艦橋要員だったようだ。

レイがもう1つある出入り口を確認しつつ、計器に近寄るルートとフラッシュを掩護する。

「ロックもされていない。ここから敵の情報は取り放題だぞ……」

画面を見て、ルートは茫然とした。

現在、この艦が何を狙い、何を撃っているのかの情報から、端末を経由することで艦内の監視カメラなどにアクセスすることもできるほどであった。いかに第2艦橋とはいえ、戦闘時に人がいない場所でロックが無いのはどう考えてもおかしい。それに気が付かないほどルートたちも馬鹿ではない。

「だが、どういうことだ……」

理由が分からない。畏だというなら、とっくの昔に敵がここになだれ込んで来ていてもおかしくない。

「これが理由だよ、ルート」

別の端末を操作していたフラッシュが声を上げる。フラッシュは画面を操作して1つの映像を映し出した。ヘリがローターを回転させており、そこに大勢の人間が乗り込んでいる様子が分かる。

「逃げ出すのか、この艦を捨てて？」

「そのつもりなのかな。北門は旅団の戦車群がいる。他の門は使用不可。ビルを押しつぶし、外壁を破壊して逃げ出すなら話は別だけど、どうもヘリで逃げ出す気のようなね」

「まさか、この艦はまだ戦闘能力のほとんどを残しているはずだ。

ボヘミアンがこの程度で諦めるとは到底思えない、っ……」

その時、艦を揺るがす巨大な振動が3人を襲った。ミサイルが直撃した時のような揺れを受け、3人がバランスを崩して床に膝をつく。だが、揺れは上からではなく、足元から来た。それが表すのは、機関部の爆破。

「向こうの3人は上手くやっているようだな、っと、フラッシュ、今の画面を拡大しろ!!」

何かに気が付いたレイがフラッシュに向けて大声を上げる。

フラッシュが画面を戻して拡大すると、そこに巨人のような影が映っていた。ヘリの脇に佇み、何か筒状の物体を抱えているのが分かる。

そして、その筒に3人は見覚えがあった。

「あれは、まさか……」

「そのまさかのようだな」

レイが苦々しく言う。

巨人が持つのは、3本の筒。1基あたり推定4メガトンの核弾頭をその巨人は抱えていた。

「この画像の場所は?!」

「ちよつと待つて! ええと、艦橋後部のヘリポートみたいな場所だよ! ここから遠くない!!」

「行くぞ!!」

銃を抱えてルートは第2艦橋を飛び出し、2人もその後が続いて艦橋を飛び出した。

「ボス！ 本当にこれでいいんですか？」

ボヘミアンは自らの操る個人装甲機、『スカル』の操縦席で目を閉じていた。

そこにヘリのパイロットが駆け寄り、声を張り上げてボヘミアンに叫んできた。

ボヘミアンはパイロットの方に顔を向けた。

「この艦は、マガスの計画のためのスケープゴートの役割を果たす。艦を捨てることは惜しいが、この艦よりも重要なものがあるのだ。マガスの現在の最大の懸念材料は傭兵旅団『フリーユージェ』の存在、それを排除することが我々の任務なのだ」

ボヘミアンはそう言うと、『スカル』の腕を器用に操って抱える核弾頭を軽く叩く。一瞬パイロットの表情が凍りつくが、すぐに気を取り直してボヘミアンに敬礼してヘリに戻っていった。

そして、艦内に残っていた主要な人間を乗せて飛び立った。艦に残っているのは、操艦に必要な最小限の人間のみと、ボヘミアンだけとなっていた。

へりを見送りながら、ボヘミアンは怖気の走る笑みを浮かべていた。

「くくく、さあ、ハイエナども、羊が野に放たれた。せいぜい追いつがるがいい」

へりが高度を上げ始めたのを確認して、ボヘミアンは大きく手を広げた。

「そして、『フリーユゲ』は翼をもがれて抗うことも出来なくなるのだ！」

『ブラッディスカル』と核弾頭による自爆。

北門周辺の戦車隊は灰塵に帰し、距離のある『グランドフリーユゲ』も爆風で大損害を受ける。

そうなれば、旅団には到底マガスを追う力は残されない。

「先ほど敵が突入して来たとき、甲板に出ていたために情報を奪われたかもしれないが、それも無駄に終わる。なんせここで死ぬのだからな」

一人で不気味な笑みを浮かべるボヘミアン。

『スカル』に乗るその姿は悪魔のように見えるほど邪悪だった。

「そうはいかないぞ、ボヘミアン」

ボヘミアンの背後から、声が響いた。

第二十四話 『ブラッディスカル』（後書き）

ついに、ボヘミアンと直接対決！ です。

まあ、そこまで長くもありませんでしたけど……。

ボヘミアンの駆る巨人機、ガダム、じゃなかった、『スカル』を
いかにしてルートたちは倒すのか……、そんな感じに次回は進めた
と思っています。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第二十五話 巨人機『スカル』（前書き）

本日2本目。

1話丸ごと対『スカル』戦で行きます。

第二十五話 巨人機『スカル』

「そうはいかないぞ、ボヘミアン」

たどり着くには、そう時間はかからなかった。

梯子を駆け上がり、たまに姿を見せる敵を一撃で倒し、艦橋後部の小さなヘリポートのような場所にたどり着いたのは、数分と経っていないかった。

ルートは巨人を前にして銃を構える。レイとフラッシュはそのすぐ後ろに立っている。

巨人がぐるりと身を翻し、正面を向く。胴体の部分はコックピットになっており、眼帯をした男、ボヘミアンが座っている。その口元は面白い物を見つけた子供のように吊り上っているが、目はこれ以上にならないほどの殺気を放っている。

「貴様らか、俺の艦に土足で踏み入ってきたのは」

ボヘミアンはコックピットで腕を組んでいる。足のギアで巨人の足を動かす、大きく1歩を踏み出す。地鳴りのような音がして、ルートたちの足元を揺るがす。

「お前にはいろいろ聞きたいことがある。命までは取るつもりはないから、投降しろ！」

「おいおい、そんなことで俺が投降するとも思っているのか？」

貴様らは3人、ああ、後3人下にいたか、たかが6人で俺を止められると思っているのか？ この俺を？ 距離を取ってこいつを撃てば貴様らと戦う必要さえない俺が？」

ボヘミアンは心底滑稽だと言わんばかりに天を仰ぐ。
そして巨人の腕を操り核弾頭を指差す。

「マガスと何を企てているか知らんが、罪もない人を殺すのであれば、今ここで貴様を止める」

レイが銃を向ける。
すると、それを見たボヘミアンは目を細めてレイを睨む。

「機械人だな、貴様のような人間もどきが命を語ることは俺が許さ
んぞ」

「レイは人間もどきなんかじゃない！ お前なんかよりもよっぽど
人間らしい！」

フラッシュが声を張り上げるが、ボヘミアンは耳を貸さない。

「前言撤回だ。貴様らを殺す動機ができた。今ここでこの『スカル』
を以て俺が殺してやる」

ボヘミアンは組んでいた手を解いて操縦桿を握った。そして核弾頭
を背中に回して、戦闘態勢に入った。

「レイ、フラッシュ、常に敵を囲むように戦うぞ。決して固まるん
じゃない！」

「了解」

「死ねええええっ！！」

ボヘミアンが操る『スカル』が狭いヘリポートの端から勢いよくレ

イに向かって突撃する。レイが銃で牽制するが、その程度で『スカ
ル』は止まらず、その巨大な腕を振りかぶってレイを吹き飛ばそう
とする。

「させるか！」

「ぬうつ！？」

ルートが『スカル』の胴体目掛けて銃身下のグレネードを撃つ。弾
速は遅いが、当たればそれなりの威力がある。真横からグレネード
を食らい、『スカル』の動きが一瞬止まった隙に、レイが『スカル』
の足を潜り抜けて背後から『スカル』のふくらはぎ目掛けてグレ
ネードを発射する。駆動部に命中して黒々とした煙が『スカル』の
下半身を覆う。

「どれだけ頑丈でも、駆動系をやられればいくらかは……っ！？」

フラッシュの声が驚愕のものに変わる。

「効かんわああああっ！！！」

煙の中から無傷の足が姿を現し、フラッシュを踏みつぶそうと大き
く足を上げる。勢いよく下ろされた足をギリギリで避け、ヘリポー
トを転がりながら距離をフラッシュは取り、『スカル』の頑丈さに
茫然とした。

「グレネードを食らって無傷なんて……」

「フラッシュ、この程度であいつは止まらんぞ」

レイがグレネードで『スカル』を牽制しながら、フラッシュに声を
かける。その声にフラッシュが振り返る。

「あいつは『大崩壊』の時に機械人が使った陸戦兵器『ジャツカル』の後期型を人間でも操縦可能にしたものだ。35センチクラスの主砲弾の直撃にも耐えられる耐久性と、最高速度80キロを超える敏捷性を備えた化け物だ！」

「んなもんどつやって倒すの!？」

「ボヘミアンを狙え! グレネードで動きを止め、銃で仕留めろ！」

1発や2発であいつは死なん!!」

「くくく、ここでは狭いな。どれ、戦場を移すでしょうか」

ボヘミアンが不気味に微笑むと、艦橋付け根の方に走り出し、ヘリポートの隅に置かれていた巨大な銃を持ち上げた。『スカル』の両手に収まった銃は、ごつごつとした無骨な砲身を持ち、銃身下には巨大な丸いマガジンが取り付けられていて、形からしてマシンガンクラスと思われる。

ボヘミアンはそれをヘリポートの床目掛けて乱射し始めた。

「な、なにを！」

「ルート、足元！」

最初、何をしているのか理解できなかったルートはレイの言葉で地面を見た。そこには無数のヒビが入り、それは『スカル』が撃つて開いた銃創から蜘蛛の巣状に伸び始めていた。

「あの野郎、ヘリポート落とすつもりか！」

ルートは走り出した。ヘリポートは艦橋後部、地上50メートルはある場所に取り付けられている。そんなところから落ちれば間違いなく死ぬ。

「レイ、俺とフラッシュを！」
「分かってる！！！」

レイが走ってルートの腰のベルトを掴み、フラッシュの襟首を掴んでヘリポート端まで走り出す。すでにヒビはヘリポートを埋め尽くしており、何時崩れてもおかしくない状況にある。

そしてボヘミアンはそこまでいって引き金から指を離した。そして腕を振り上げて『スカル』の太い腕でヘリポートの地面を殴りつけた。

ビシッ

何かが折れる嫌な音が響き、ヘリポートが傾く。そして重力の法則に則って艦の側部を崩れ落ちていく。

「無茶苦茶だ、あいつは！」
「だから、”クレイジー”なんだって！！！」

ヘリポートの地面をすべり、すぐに宙に投げ出されたルートは、そう叫んでいた。レイが抱えているため死ぬことはないが、紐無しバネをやって楽しい人間などいない。

瓦礫がルートたちと共に降り注ぐ中をレイが器用に空中で姿勢を変え、瓦礫を避ける。50メートルなどあつという間の距離だったため、レイが2人を自分の腰に抱えると、足から地面に着地、衝撃でコンクリート製の道路にひびが生じる。

レイは着地するやすぐに2人を放り出し、自分もその場を飛び退く。コンマ5秒後にそこに巨人が降り立ち、ヒビが入っていた道路が砕け散る。

「やはりリングは広いに限るな」

「くっそ、ここだとあいつのスピードが生かされちまうな。しかも今は武器装備だ……」

「何とかしないと、背中の中核を撃たれる。ここで止めるぞ、……ん？」

レイが足元の地面に広がり始めたオレンジの煙を見て凍りつく。振り返るとフラッシュの足元に発煙筒の細い筒が転がっている。

「ごめん、ミスった」

「馬鹿野郎!!」

煙は徐々に高度を上げ、あっという間に周囲を覆った。幸運にもそのおかげで『スカル』から姿を隠すことができたが、煙の中にいることは非常にまずい。

3人が慌てて走り出すと、遠雷のような爆音が轟いてきた。それが意味するのはただ1つ。

「逃げろ!!」

「言われなくとも」

「分かってる!!」

甲高い音が上空から聞こえてくる。

上空からオレンジの煙を確認した旅団の戦闘機が爆弾を投下、黒く細長い物体がオレンジの煙目掛けて降り注ぎ、その一帯を爆発が覆い尽くした。

ルートたちは済んでのところまで近くのビルに飛び込み、爆発から逃

れることができたが、ルートは起き上がるとフラッシュの頭にきつい1発をお見舞いした。

「阿呆！ お前は どうして そんなに 投げる のが 下手 く そんなだ！」

「殴ら なくな った っ て いい じゃ ない か！ 誰 だ っ て 失 敗 は す る よ！」

「今 す る な、 今！」

「2人とも、敵を前に喧嘩をするんじゃない」

外を睨むレイが一括すると、ルートとフラッシュは黙りこくった。

「あの爆撃でボヘミアンが生きているとは思えんが……」

「お生憎だな、奴はピンピンしているぞ」

「嘘だろう……」

煙が晴れていくと、巨大なクレーターの中に巨大な影が姿を現した。コックピットを両手で守った『スカル』が体を軋ませながら動いていた。

腕がどかさされると、そこには相変わらず口元を吊り上げているボヘミアンが煤にまみれながらも心底面白そうにしていた。

「開幕の花火は上がった。さあ、人類の敵ども、戦争をしよう」

『スカル』が銃を構え、3人のあるビル目掛けて弾をばら撒き始める。分厚いコンクリートの壁の陰に隠れ、そこから銃で応戦するが、戦車砲並みの弾を連射する『スカル』相手には役不足だ。甲高い音と共に弾き返されてしまう。ボヘミアンは『スカル』の身体を捻るようにして、ルートたちにコックピットを狙われないようにしている。左腕と盛り上がった肩のおかげで、ルートたちからはコックピットはほとんど視認することができない。

「レイ！ 屋上から狙撃しろ！」
「分かった、5分持たせろ！！」

レイがビル奥へと走っていく。それを見送りルートはビルの窓目掛けて銃を撃ち、ガラスを砕く。

「フラッシュ、掩護する！」

大声を上げて、フラッシュの背中を押す。フラッシュが腰を曲げた状態で砲弾の雨の中を走り出す。ルートはフラッシュを狙われないように派手に『スカル』目掛けて銃を撃つ。

「隠れているだけでは俺は倒せんぞ、戦争屋！！」

外でボヘミアンが叫んでいるが、その声はルートには届かない。あまりに強烈な発砲音で耳がどうにかなりそうになる。

ルートに引き付けられた間に、フラッシュが窓から外に飛び出し、グレネードで『スカル』の腕を撃つ。爆風で一瞬攻撃が止んだ隙を逃さず、ルートもビルから飛び出す。

「馬鹿が！ 自らのなりに飛び出してきたか！」

ルートが飛び出してきたのを見て、ボヘミアンが銃をルートに向けてる。そして間髪入れずに発砲、巨大な銃に相応の薬莢が銃側面から排出され、地面に音を立てて落ちる。砲弾はコンクリートの道路を穿ち、砕き、吹き飛ばす。その瓦礫の中をルートは走り、決して距離を広げず、狭めずに『スカル』の周囲をグルグルと回り始める。そして『スカル』を円の中心にしてルートとフラッシュの射線が『スカル』で直角に交わるように十字砲火を加え、足止めする。

「牽制程度で何ができる」
「ぐおっ！」

『スカル』が突貫し、ルートの目の前に来ると思い切り拳を振り下ろしてきた。一瞬前までルートがいた場所に穴が開き、腕が地面にめり込む。そしてその腕を力任せに振り払うと、地面が抉れて無数の瓦礫が弾幕となってルートを強襲した。無数の瓦礫が身体を襲い、ルートが吹き飛ばされる。

「ルート！」

フラッシュが一瞬ルートに気を取られた隙を、ボヘミアンは見逃さなかった。最高時速80キロの『スカル』が銃を構えてフラッシュ目掛けて突っ込んでくる。そして目の前で体を捻って強烈な回し蹴りをフラッシュにお見舞いした。反射的に銃でガードをしようとするが、巨大な鉄の足は銃をいとも簡単に折り、勢いを衰えることなくフラッシュの全身を打ち、ビル目掛けて蹴る。窓ガラスを粉碎してフラッシュがビルの中に消えていった。

「くくく、弱すぎる。所詮は生身の人間だな、貴様らは。この『スカル』の前には貴様らが扱えるような武器は無意味、俺を殺したければ戦艦でも連れてくるんだな」

ビルに蹴り込んだフラッシュを確認もせず、ボヘミアンはルートの方に向き直った。

「うん？ 機械人がいないな。逃げたか？」
「そんなわけがないだろう」

ルートが痛む身体を叱咤して起き上がる。

そしてボヘミアンを睨み付けるが、今のルートの状況では虚勢にか見えなかった。

「くくく、では貴様を倒した後にゆっくり探し出すとするか。それと上を飛ぶうるさい八工も叩き落とさなければな」

ルートを目の前にしてボヘミアンは突如空目掛けて巨大な銃を発砲した。無数の薬莢がルートの真上に降りかかり、ルートは慌てて距離を取る。

ドウンツという何かが爆発するくぐもった音が空から聞こえ、ルートが見上げると黒い煙を吐いた戦闘機が通過するところだった。主翼をもぎ取られて錐もみ状態で高度を下げつつ、ビルの合間へと消えていった。

「マガスも良いものを作ったな。機械人の物だというのが癪だが、これぐらいは我慢せんとな」

銃を下げてルートを侮蔑の目で見つめるボヘミアン。

「もう少し、お前が理性的だったら、俺の前にたかだか3人では現れなかっただろうがな。恨むなら自分の非力を恨むがいい」

これで最期だと言い、ボヘミアンは銃をルートに向けた。

そしてボヘミアンが引き金を引こうとした時、ルートは不意に笑みを浮かべた。

そして、言い放った。

「バースト」

真上から銃弾が寸分の狂いもなくポへミアン目掛けて放たれたのを、
ルートは見逃してはいなかった。

第二十五話 巨人機『スカル』（後書き）

はい、やっぱり、ルートたちって頑丈ですね。

常人だったら瓦礫食らった時点で意識飛んでると思います。

さて、ボヘミアンが駆る巨人機『スカル』ですが、ものごっついで
す。

以前、本文でも書きましたが、『大崩落』時には人間を最も苦しめ
たとも言われるほどの兵器です。そんなのに3人で立ち向かうんで
すから、どんな鬼畜ゲーというか無理ゲーというか……。

書いている本人が言うのもなんですが、主人公たちってある程度チ
ート入りますよね。単純に打たれ強いのはまあ置いてもらうと
しても、そんなやり方で倒せるのかとか、ありえない速度で戦って
いるんじゃないかとか、書いてても思いますから。

で、でも、こういう作品って、大概主人公が戦場に立つと戦況ひっ
くり返りますよね！ そうですよね！？

そうですね！？ そうなんですもん！！ （、へ、）エヘンパイ

威張れることじゃないですよ。某少し前の芸人コンビの女装して
ない方風に言ってみましたけど。

でもまあ、エスコンなんてその極みですよ。好きですけど、とうかミサイル切れ起こしたらダメなゲームですしね、あれ。

AC6とかホライズンとかやってみたいですけどX箱が無かったりと嘆いてますよ……。

どうせ私は04からXまでの人間ですよ。キースさんは別ですけど

ww

はっはっはっ、挟まっちま(以下略)

話が逸れました。

まあ、それが楽しみで書いているわけですから、これからもこんな感じでいきます。

20数話書いておいて今さらとか思われるかもしれませんが、そういう文句は聞こえませんので。

レイが放った弾丸の行方はいかに！

そんな感じの回に次回はする予定です。

次回ぐらいで対『血の盟約』戦は一段落する予定ではありません。

誤字脱字でも構いません。

感想お待ちしております。

第二十六話 隻眼の最期（前書き）

ふい〜、対『血の盟約』戦落着ということで……。

後は大学のテストの結果を待つばかり……、大丈夫な、はず。

前日まで小説書いてましたけど……。

第二十六話 隻眼の最期

「バースト」

おそらく、屋上のレイがそう呟いたのと、地上でルートがボヘミアン目掛けて言ったタイミングはほとんど一緒だっただろう。屋上から真下に『スカル』を見据え、放たれた銃弾は寸分の狂いもなくボヘミアンのいるコックピットを襲った。

ボヘミアンも、瞬時にルートの言った意味を察知したのだろう。ルートから銃口を屋上に移そうと操縦桿を引き、真上を見た。

だが、ボヘミアンの反応はどんなに急いでもレイには追いつくことはできなかった。放たれた銃弾はレイに向けられた銃、腕の合間を縫うようにしてボヘミアンのいるコックピットの防弾ガラスを貫通し、ボヘミアンの太ももの肉を抉った。

「ぐ、おおおっ！」

ボヘミアンの苦悶の声が彼の口から漏れる。

「指揮官たるもの、いついかなる時も全周に注意を払うべし。指揮の基本だ」

ルートがそんなボヘミアンに冷たく言い放つ。

それが癪に障ったのか、ボヘミアンは痛みを耐えながらも『スカル』を操縦して銃をルートに向けようとして、レイの弾丸に阻まれた。

コックピットにもう一つ穴が開き、ボヘミアンの右腕に直撃、骨を

砕き、肉を穿つて貫通、血飛沫がコックピットの防弾ガラスに飛び散る。

「阿呆、そんなことをうちのレイが許すはずがないだろうが、……と、無事か、フラッシュ？」

瓦礫を乗り越えながら、ビルからフラッシュが咳き込みながら出てきたのを見て、ルートは安堵のため息をついた。

「あのね、デカブツに蹴られて、無事な、はずがない、でしょうが……」

フラッシュは頭から血を流してはいるが、足取りはしっかりとしている。

「ば、馬鹿な。『スカル』に蹴られて死んでいないだ！？」

腕を抑えながらボヘミアンが呻く。

「旅団ちゆうだんの装備をなめんじゃねえぞ。俺たちのボディーマーは頑丈なことで評判なんだぞ。言っておくが戦車砲でも貫通しねえからな、爆発とか衝撃で死ぬだろうがな」

「ば、馬鹿な……」

ボヘミアンが絶句している。戦車に撥ねられたのと同様か、それ以上の衝撃を受けて生きていられるアーマーなどあるはずがない、という思考に埋め尽くされているのだ。

「やっ、と」

ルートは腕をグルグル回しながら『スカル』の腕を回り込み、コックピットの前までやってくる。

「大人しく捕まりやがれ」

コックピットの防弾ガラスを強引に開け、コックピット内で血まみれになっているボヘミアンを正面に見据える。ボヘミアンはルートを睨み付けるが、それ以上の痛みに襲われているらしく、表情が曇っている。

「ルート、無事のような」

そこにレイが到着した。狙撃銃でもない通常の小銃で狙撃などできるのは機械人ぐらいだろう。おまけに動いている相手の急所を外すという芸当を成し遂げている。こういうのは、急所を外そうとすると急所に当たってしまうというジレンマがあるが、そんなものはレイには関係ないようだ。

「ぐつ、人間もどきに後れを取るとは……」

ボヘミアンはコックピット隅に隠されていた拳銃を撃たれていない方の手で抜き、めがけて撃とうするが、そんなことをルートが許すはずもなく、一瞬のうちに拳銃を弾き飛ばされた。腕が衝撃で痙攣し、ボヘミアンは小さく呻いた。

「さて、洗いざらい吐いて貰おうか。この核弾頭、マガス、全てな
「ふん、俺が吐くと思っているのか？ たとえこの命が果てようとも『血の盟約』はどんな人間の心にも宿っている闇だ。戦争で家族を失った人間もどきを恨まないはずがないんだよ。『血の盟約』はそうして生まれた。俺を殺したところで、その事実が変わら

ん。俺たちがやるうとしていたことはすべてマガスが引き継ぐ！」
「ご高説ありがたいが、そんなことを聞いているんじゃないんだ。
マガスはどこにいる」

ルートが感情の籠っていない口調で喋る。

久方ぶりに、ルートが真剣にキレているらしく、フラッシュとレイも何も言わないで黙っている。

「そんなに聞きたいのか？　なら、もつと良い物を、くれてやる！

！」

「なっ！！」

一瞬の出来事だった。

ボヘミアンの眼帯がハラリと落ちると、そこにあつたのは、小さな穴。そして火花が散った。

ボヘミアンは失った目の代わりに、目の中に1発限りの銃を仕込んでいた。そして、目の前にいる敵を確実に殺せる、必殺の距離までルートが近づいてくるのを待っていたのだ。

距離は1メートルもなかった。到底、避けられるはずがない。だが、ルートが避けなくても、守ってくれる仲間がいた。瞬時に近づいてきたレイはその手をルートの顔の前に置き、放たれた弾丸をその手の平で受け止め、弾き飛ばした。火花が散って、弾かれた衝撃でレイの腕が本人の意思に反して大きく振られるが、それをルートが止める。

「そこまでして、殺したいのか」

「いかにも。俺の仕事は殺すことだ。それは貴様らと何一つ変わらん。そして、殺しに正義も糞もないのは知っているはずだ。勝ち残

つた者のみが正義となり、敗者は虐げられる。俺はそんな屈辱を味わう気は毛頭ない!!」

ボヘミアンがコックピット内の赤いレバーを引いた。

止める間もなく、引かれたレバーに連動して、コックピットのディスプレイが真っ赤になり、そして何かのタイマーが作動し、カウントダウンを開始した。

「貴様、自爆する気か!」

「何を今さら、もとよりこの核を撃つつもりだったのだ、死ぬ気だったのだよ、俺は。貴様らに倒されるという誤算はあったが、これで俺の生涯に幕を下ろすでしょう」

「レイっ、こいつを止められるか!??」

ルートのコックピット内にレイを呼び寄せる。レイは急いでコックピットの計器を操作してカウントを止めようとするが、カウントに関する操作をしようとするとディスプレイに「エラー」の文字が浮かび上がり、それ以上は操作ができないようになってしまう。

「くそっ、このままじゃ核が……!!」

「何を言っている、核は爆発せんよ……」

ルートの問いに答えたのは、なんとボヘミアンだった。3人の視線がどこか達観としているボヘミアンに注がれる。

「どういうことだ」

「あれを見る」

ボヘミアンが空の1点を指す。すでに遠くへと行ってしまっているヘリの姿が僅かに見える。こちらの戦闘機、ヘリが艦と戦車、そし

て『スカル』に気を取られている隙に、離脱をしてみましたようだ。

「俺はあれを罠に使う気だった。だが、お前らは迷わずに俺に狙いを定めてきた。あれが撃ち落とされていたら何の後悔もなく核を起爆させていたが、あれには同志が乗っているのだ。あれを巻き込む気はない」

3人が意外そうな顔をする。

殺人を至上の喜びとしている男が仲間のために行動するなんて、信じられなかったのだ。ボヘミアンもそれを3人の表情から窺い知ったのか、わずかに口元を吊り上げる。

「俺は人類至上主義者だ。同じ考えの元に集った、優秀な同志を殺すほど、飢えぢやない。さあ、ここにいると爆発に巻き込まれるぞ？」

すでにカウントは20秒を切っていた。ルートはコックピットから飛び降り、距離を取り始める。そこに、ボヘミアンが声をかけた。

「もし、貴様らが俺たちの野望、そして悲願を打ち砕こうと思うなら、『デルジャナ』へ行くがいい！　そこでもって、マガスが貴様らを完膚なきまでに打ち砕き、貴様らの信念を打ち砕いてやるだろう！　そして、俺たちの悲願は達成される！　地獄で貴様らの足掻きを見物してやろう！！」

カウントがゼロになり、コックピット下にあつた自爆用の火薬に火が入る。そして巨大な火の玉と化し、『スカル』はボヘミアンの肉體もろとも爆発四散し、後には何も残すことはなかった。

衝撃で地面に倒れ込んだルートたちは土煙が晴れるとゆっくりと起

き上がり、先ほどまで『スカル』があつた場所に来た小さなクレーターを見つめた。

「……核は誘爆しなかつたか」

「もとより、核弾頭は熱では爆発せん。起爆コードが必要だからな」
「なんか、最後はあつけなかつたね……」

『デルジャナ』。

ボヘミアンは最期にそう言った。

『大崩落』最後の戦場となつた、機械人、『始まりの機械人』たちの本拠地にして最後の要塞であり、その市街地では人間と機械人が血で血を洗う激戦を繰り広げ、泥沼化した。そして、泥沼化した戦況を打破するために、『始まりの機械人』から離反した機械人による彼らの暗殺作戦が決行され、見事に戦争を終わらせることに成功した。

その後、『デルジャナ』は復興されることもなく、1級危険区域に指定され、今は何人たりとも立ち入りを許されていない。内部には未だに無数の兵器が眠っているとされ、その中には、核弾頭も含まれているという。

そんな場所に、マガスは根城を構えている。

「ボヘミアンは捕えられなかつたが、必要だつた情報は得ることができた。それで十分だ」

「それじゃ、今度はこいつを焚くよ」

フラッシュが青い表示のある発煙筒を取り出し、安全ピンを抜いて少し離れた場所に放り投げる。そして勢いよく青い煙が吹き出す。なぜかそれを見てルートとフラッシュが安堵のため息をつく。それに気が付いてフラッシュが顔を真っ赤にする。

「ちょ、僕だつていつもドジるわけじゃないよ!？」

「オレンジだつたら爆弾が落ちる前にお前をボコボコにしておくところだ」

「だから、やらないって!」

ルートがさも当たり前のように言い放つのに対して、フラッシュがむきになって食い下がっている。

それをルートが華麗にスルーしつつ、迎いのへりを待っていると、北門へと通じる通りから土煙と共に『血の盟約』の戦車が怒涛の如く突っ込んできた。

そして砲塔のハッチから上半身を出した男が機関銃を乱射しながら大声を上げている。

「レイ、頼める?」

あいにく、ルートは銃を持っていない。フラッシュも同様、今銃を持っているのはレイだけだ。だが、持っているのは小銃で、戦車を相手取るには厳しいものがある。

だが、レイは至極冷静で、口元が少し歪み、戦車の背後の空を見上げている。

「心配はご無用だ」

「……あゝ、理解した」

戦車の砲身がこちらに向けられる。おそらく、内部では狙いをつけ、引き金に指をかけているのだろう。

だが、発砲することは出来なかった。

『おーし、401の残り3人、その場を動くんじゃないぞ』

フラッシュのもつ無線から聞き馴染んだ声が聞こえ、戦車の背後の空から白煙が伸びてきた。そして無数の白煙を生み出していたロケット弾が戦車に吸い込まれ、砲塔を吹き飛ばし、男の首を引きちぎり、砲身が宙を舞い、車体が浮かび上がってキャタピラが空転、1回転して地面に叩き付けられる。

「派手だな」

「マックらしくないな」

「むしろフェイナだね、これは」

「「同感だ」」

徐々にその姿が大きくなったヘリが3人の頭上までやってきて、ホバリングしつつ徐々に高度を落とし、戦車の残骸の避けながら着陸し、側面のハッチが開かれる。

「ルートさんたち、ご無事で何よりです！」

ヘリにはすでに401部隊の残りの3人、カンナ、ラーキン、フィリップが乗っていた。そしてルートたちの姿を見ると声をかけてきた。

「そちらも無事回収されていてよかった。そして旅団長、なぜあなたが前線に出てきているんですか。それもフェイナ連れて」

コックピットを覗き込むと、笑顔のマックと不愛想なフェイナに迎えられた。フェイナは機外にレイを確認して小さくため息をついていたが、それに気が付いたのはマックとルートだけで、2人もあえて何か言おうとは思わず、スルーすることにした。

「いやなあ、久々に戦場へ出てみたくなっとな。回収作業だけだったし、まあ問題はなかるう?」

「まあ、そうですね……」

マツクの行動は、ある意味ボヘミアン並みに読めない、と思っただルートであった。

「その様子だと、ボヘミアン確保は失敗したようだな」

後から乗り込んできたレイとフラッシュの姿を確認し、マツクは少し声のトーンを落とした。

「申し訳ありません、自爆されてしまい、確保できませんでした。」

ですが、マガスの居場所に関しては、有力な情報を手に入れました」

その言葉に、マツクとフェイナが目を見開き、後ろにいたカンナ、ラーキン、フィリップが飛びつき、後ろではレイとフラッシュが質問攻めにあい始めた。大男2人に詰め寄せられたフラッシュには後で飯をおごろうとルートは思いつつ、話を続ける。

「ボヘミアンは、マガスは『デルジャナ』にいると言っていました」

その台詞に、マツクの表情が凍りつく。

「馬鹿な、あそこは立ち入り禁止領域のはず、都市軍が警備しているはずだ」

「その都市軍がマガスの手の者という可能性があります。この間の反乱軍は表だって反抗しましたが、あえて何も情報を上げないという反抗の仕方もあります」

「まさか、そんなことが……」

マックが座席の背もたれにドサリと身を任せる。

「ボヘミアンは、起爆こそしませんでしたが3基の核弾頭を所持していました。おそらく『デルジャナ』にあったものの内の3基かと。だとすれば、マガスがやろうとしていることも自ずと……」

「みなまで言うな。これは世界規模の危機になった。都市レベルの話じゃないぞ……。帰ったら都市政府と連絡を取って対策を検討する必要があるな」

マックは操縦をフェイナに任せ、ルートとの会話に集中することにした。

フェイナが操縦桿を引き、ヘリがフワリと宙に浮く。そしてあっという間に高度を取って通りを北上し始める。眼下に無数の戦車の残骸と死体が積み重なっている光景が広がる。そこにはもちろん旅団の隊員や戦車もある。無傷では済まされず、こちらも出血を強いられたことが一目で分かる。

「死者19名、負傷者32名。軽微では済まされない被害を受けてしまった」

苦々しく言うマックの表情は暗い。戦争になれば、死者が出るのは世の摂理とまでは行かないが仕方のないことだ。だが、やはり家族同然の仲間が逝くのにはいつまで経っても慣れるものではない。

「もし、マガスのやろうとしていることが実現したら、旅団どころじゃないわよね……」

操縦桿を握るフェイナがポツリと呟く。

それにマックが大きく息を吐きながら頷き、ルートは少し俯く。

「ここから『デルジャナ』は遠い。『血の盟約』の残党がたどり着くより速く行けるとは思えないが、全速力で向かう必要があるようだ。近辺の都市には支援を申し出ておこう。幸いあの近辺には得意先がいくつもあるから、多少耳を傾けてくれることを祈るばかりだ」
「了解」

ルートはそれを聞いた後、後部に戻り、隅に1つだけあいていた座席に滑り込み、誰かに声をかけられる前に眠りにつくことにした。

戦いは、まだ始まったばかりなのだ。
今からへばっている訳にはいかない。

第二十六話 隻眼の最期（後書き）

作者「はい、ボヘミアンとの戦いが一段落したので、また『これ』やろつとか考えた作者のハモニカです」

道男「もう諦めたルートだ。というより、気が少し楽になったから諦めた」

作者「そして、本日はルートをなだめる為にもう1人お越し願いました」

フラッシュ（以下照男）

「激しく納得のいいないフラッシュです」

作者「いや、ルート良かったですね、仲間が増えましたよ？」

道男「まあ、な」

照男「僕の意志完全無視だよ！？ ていうか、本当になんなの、これ！？」

作者「まあ、漢字は輝男でも良かったんだけどね」

照男「是非そつちにして！」

作者「無理」

道男「諦める、フラッシュ、こういう奴だ……」

照男「ていうか、どうして僕なの！？ レイとかフェイナとかいるじゃん、むしろそっちの方がいいんじゃない……」

作者「あ、それも却下。レイは二文字だからいじれないし、フェイナは下手すると殺されるから」

照男「それって僕なめられてる？」

道男「まあ、確かに一番インパクトは薄いよな。主人公、アンドロイド、サイボーグ、エトセトラ……、何も属性かかって無いのフラッシュくらいか？」

照男「そ、そんな……orz」

道男「それに、対『血の盟約』戦書してる時、確か作者、401部隊にフラッシュいたこと忘れてたろ」

作者「ちょ、内輪ネタをほじくらないで……ってフラッシュが再起不能並みのダメージ受けてるから！ 確かに『ブラッディスカル』に乗り込む辺りでようやく人数合わないなあ、とか思ってた見返したけどさ！ 大男2人がインパクト強すぎて完全に忘れてたんです！」

道男「ちょ、おま、トドメをさすんじゃない！」

照男「ぼ、僕だって、僕だってえええええ！」

照男さんがログアウトしました

道男「……なんだこれは」

作者「気にしないでね」

道男「結局2人でやることになっちまったじゃないか」

作者「まあ、ここはただ単に私がキャラをいじりたいが為にやっているだけですし」

道男「……、歯あ食いしばれ」

作者「ちょ、落ち着こう。今日は君は弄ってないよ？ むしろ君もこっち側だったでしょ？」

道男「はああああああっ!!」

ゴベシッ!!

作者がリアルの世界に旅立ちました。

道男「……分かる人間いるのか、これ……」

ゲフツ、油断しました。あそこまで手癖が悪いとは……。

それはともかく、大きな山場が1つ終わりました。まあ、中ボスの存在でしたから、ボヘミアンさんは。

最期の眼帯攻撃とか、雰囲気的には『ロケットピース！』的な感じでお願ひしますね？

MGS・PWのあの人は。人間パチンコやってみたいな……。

さて、リアルでレポートが立て続けに降臨なされた為にコンピュータをそつちに使用しなければならぬ比率が徐々に大きくなっていく今日この頃、

『私はそんなこの世のすべてを憎む！ 熱力学第二法則を憎む！』
って感じですよ。これ分かる人いるかな……。

あ、私文系ですけどね。

まあ、小説書きが結構大学生生活の重要なサイクルに組み込まれているので、これからもあまり目を開けずに頑張りたいですね。亀更新になると忘れそうで怖い……、違った、忘れられそうで怖い……。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第二十七話 目指すは『デルジャナ』（前書き）

マツクの世代の人間が新たに登場します。

これから結構出番がある予定。

第二十七話 目指すは『デルジャナ』

被害は決して小さくはなかった。

マックが言っていた通り、402部隊に率いられた戦車隊と隊員は結果的に『血の盟約』の主力であった部隊を壊滅させたが、手痛く反撃されたのも事実だ。

大破して都市に廃棄してきた戦車は5台、搭乗員15名が死傷した。そして何より、被弾した『グランドフリーユージュ』の修理が急がれた。何しろ、ミサイル2発の直撃のおかげで、艦首付近はめちゃくちゃに破壊され、装甲がめくれあがって内部が露出してしまっている。幸い弾薬庫まで届かなかつたため、誘爆して艦が真っ二つになる、ということとは免れた。

しかし、その代わりに『グランドフリーユージュ』の主力兵器である主砲の遠隔使用が不能になってしまった。着弾の衝撃で戦闘指揮所からの遠隔操作が出来なくなってしまったために、戦艦の醍醐味であり、十八番、必殺である一斉射撃が出来なくなってしまったのだ。各砲塔に隊員が入り、個別に発砲することはできるが、狙いを定め、誤差を修正することなどもすべて手動で行うため、著しく命中精度が下がってしまうことになる。

航空部隊は、被弾機は多かったが撃墜されたのは『スカル』に撃ち落とされた1機のみ。その1機にしてもパイロットはあの錐もみの中脱出し、無事生還した。

「マガスを仕留める前、随分と痛い目に合ってしまったな」

マックは、損害解析が記された報告書に目を通して頭を抱えている。多少の被害は想定していたが、『グランドフリューゲ』がミサイルをもらうとは思っていなかった。修理のためにはかなりの時間がかかるため、どう急いでも『デルジャナ』に到着するまでに全回復することは望めない。この艦の攻撃手段はミサイルとガトリング砲という、情けないことになってしまった。これが軍隊の艦だったら主砲を小さくした副砲という対地対空の両用砲といった兵器が搭載されているところなのだが、あいにく出費を抑えるために中途半端な威力の副砲は取り外されてしまっている。

つまり、現在『フリューゲ』の戦力は実動部隊が実質の最終戦力となってしまうている。

これは痛い。『グランドフリューゲ』からの支援砲撃ができない状況では、どうしても戦場での出血が増す。マガスとの戦いは、『血の盟約』以上の激しい戦闘が想定されているため、何とか戦力の補てんをしなければならぬ。

マックはすでに、繋がりのある都市に対して今回の世界規模の危機に対しての共闘を申し出ている。普段だったらまず信じてもらえない一大事なのだが、『血の盟約』との戦闘、これまで得た情報の一部を提示することによって、信じない政治家を黙らせることに成功し、有力な都市からは都市軍の派遣を検討するとの連絡が返ってきた。

だが、それが間に合うかは分からない。

『大崩落』後、残存する兵器の危険性を理由に『デルジャナ』近辺にあった都市は遠くへ移ってしまった。もちろん、これは残されていると思われる核弾頭が爆発した際、影響がないと思われる位置までの退避であったため、ほとんどの都市が大した反対もなく住み慣れた都市を離れて新たな都市を建造するようになった。

そのため、現在『デルジャナ』近辺には『デルジャナ』を監視するための軍しか残っていない。『デルジャナ』までの道のりはとにかく遠いため、陸上兵器の輸送は空輸となるわけだが、一定以上の数が揃うのにはある程度の時間を要する。かといって、航空戦力だけでは足りない。最終的に要塞のような地上基地は陸戦によつて勝負が決する。あくまで航空戦力はその支援であり、それだけでは敵を打ち倒すことはできない。

『旅団長、『デルジャナ』の警備にあたっている軍の所属である』『二スローグ』から連絡が入りました』

マツクの執務機の通信端末から副官の声が入り、ディスプレイに初老の女性の顔が浮かび上がった。

『久しぶりね、マツク。景気はどう？』

「今聞いても皮肉にしか聞こえないですよ、ミス・ジゼル？」

品の良い笑みを浮かべた女性、ジゼルは『デルジャナ』警備を引き受けている都市『二スローグ』都市軍の最高司令官だ。女性ながらその圧倒的な指揮能力と人望から、都市外でも軍関係者で彼女を知らない者はモグリ扱いされるほどである。

『そうね、『血の盟約』とは1度やりあったことはあるけれど、厄介な敵なものね。話は聞いているわ、『血の盟約』を壊滅させたことには、感謝と、敬意を』

「どうも。それでは、本題に入りましょう。先刻送った質問の回答を願いますか？」

帰還してすぐに、マツクは『デルジャナ』に関係のある都市にいる

知り合いに片端から連絡を入れ、個人的に情報をかき集めている。都市政府の公式報告を信じていないわけではないが、やはり個人的な繋がりからの情報は信ぴょう性が高い。それが軍高官ならなおさらだ。

『結論だけ言えば、ノーよ』

ジゼルは表情を曇らせ、画面の中で小さくため息をついた。

「やはり、ですか……」

『ええ、先ほど『デルジャナ』駐留軍に連絡を入れたのだけれど、まったく通じなかつたわ。おまけに偵察に出た機が通信を絶つたわ。十中八九私の軍の仕業よ』

「あなたの責任ではないですよ、ミス・ジゼル」

『『デルジャナ』の指揮官は、私が送り出したのよ？ 責任を感じないわけではないじゃない』

ジゼルとは、1度『ニースローグ』に立ち寄つた際に都市軍の教導を頼まれた事をきっかけに知り合った。お互い指揮官として何か同じ雰囲気を感じ出していたのか、すぐに親しくなり、何度か一緒に飲みに行ったこともある。とはいえ、旅団は同じ場所には留まれないため、お互いに連絡先を教えあい、マックは都市を後にした。

『はあ、どうやら私の目も節穴になってしまったようね……』

「あいにく様ですが、あなたの目は未だに猛禽類の目ですよ」

『ありがとう、そう言ってもらえると助かるわ』

純粹に褒めていたわけではないのだが、とマックは内心で思うが、おいそれと口外するわけにはいかない。

「それで、政府の反応は？」

『ニースローグ』には公式な筋で、つまり政府に対しても打診しているが、一向に返事が返ってこない。こういうのは時間が命なのだが、『ニースローグ』からは丸1日経っても返事が来ない。

業を煮やしたマックは、軍司令官であるジゼルに内密に政府内部の様子を聞いていたのだ。ばれればジゼルは反逆者並みの扱いを受けるのだろうが、その程度で怖気づく人間ならマックの友人リストには入らない。

『どうもきな臭いわね。政府内部には危機感のある人間もいて、あなたたちに協力するよう申し出ている人もいるのだけれど……。ここの話、そのことを大統領が知らないのじゃないかという噂が政府内で囁かれているの』

「都市のトップが知らない？ どういうことだ……」

『おそらくだけれど、政府高官にマガスの手の者がいるのよ。そいつが情報をそこでストップさせて大統領まで情報が上がらないということは考えられるわ。今都市の諜報機関とも協力して怪しい人間をリストアップしているから、目星がつくにはもう少し時間がかかるわ』

マガスが都市政府に太いパイプを持っていることは随分前から分かっていた。それが今、形となってマックの前に立ちふさがっている。

「分かりました。何か分かったら連絡を」

『いいわ。ああ、それと私の軍だけれど、動くわよ？ たとえ政府が断っても』

不意にジゼルが笑みを浮かべる。

「いいのですか？ 最悪職を解かれますよ？」
『それについて来なくなるような部下は持つちゃいないわ』

ジゼルがウィンクして見せ、自らが育て上げた兵士を誇った。彼女の指揮は、ただ命令を上から下に伝達するだけではない。もともと彼女自身が戦場で銃弾の雨を潜り抜けてきた経験があるため、現場の意識をこれ以上理解できている司令官は存在しないだろう。それゆえ、ジゼルは決して現場の兵士をないがしろにするようなこととはしなかったし、それに反対するような輩はことごとく軍から追いやられていった。それに反感を持つ人間も少なくはないが、圧倒的に支持する者が多いため、ジゼルはかなり強引な軍改革を行ったにも関わらず、未だに現職として軍を引っ張っている。

『それじゃ、何か分かったら連絡するわ。交流のある都市にも声をかけておくから、期待して待つてなさいな』
「期待させていただきます、ミス・ジゼル」
『いい加減それ止めてくれないかしら。無理しているのが丸分かります？』

含み笑いをしながらジゼルはマックに敬語を止めるように言った。

『一応、これだってオフレコみたいなものよ？ 昔みたいにマック、ジゼルで呼び合いたいわ』
「また今度ということ。こちらも今は執務モードみたいなものなので、部下に示しがつきませんし」

仕事と私事の分別ぐらいはつける。相手方がラフでも、こちらが仕事ならそのままでいく。そうでないといざという時に困る。仕事中にはなるべく素が出ないように心がけているのだ。

『はあ、相変わらず固いのね。そう言えば、かわいい子供たちは元気？』

「相変わらず無茶やってくれますよ。『ジャツカル』の改良型に3人で挑んで、勝ちましたし」

マックが一際大きなため息をついた。

ヘリでフラッシュとレイが倒したボヘミアンの搭乗機について語っているのを耳にして、それが『ジャツカル』の改良型と理解した時は、怒鳴りつけようかと思っただほどだ。

フル装備の兵士を中隊規模で差し向けてようやく倒せるかどうかの化け物だ。そんなものにグレネードと小銃だけで立ち向かうなど、マックにしてみれば愚の骨頂であった。本物の『ジャツカル』であれば決してルートの行った作戦は成功しなかつただろう。結局、最後に勝敗を分けたのはボヘミアンが人間であったことが。

『あら、それはすごいわね。今度来たらあの子たちに教導を頼もうかしら』

「良いですけど、すり潰さないでくださいね？ あいつらも今じゃ旅団の要かなめなんですから。ああ、それから、先刻こちらから貴女あなたに人を送りました。夕方には着くでしょうから」

『あら、どうして？』

「情報に関しては旅団でも屈指の隊員です。情報収集の手伝いが出ればと思ひまして。貴女も知っている隊員です」

『それは楽しみね。もしかして、あの子たちの1人かしら？』

「それは到着してからのお楽しみ、ということだ」

マックが愛想よく笑う。

『そう、分かったわ。それじゃ、懐かしい顔を首を長くして待つとするわ。じゃあね』

そう言うとジゼルは通信を切った。
通信が切れたことを確認して、マックはディスプレイを閉じて背もたれに寄りかかった。

「……これで大体の根回しは終わったな。後は出張ってくれるかどうかだが」

ジゼルはほぼ確実に来るのだろう。

男に二言はない、という格言があるが、ジゼルは女性ながらその類の人間だ。言ったことは絶対に行う性格なのだ。それに公私の隔たりはない。だからこそ、信頼できるのだ。逆に変な約束をさせられると、後が恐ろしいのだが。

マックはディスプレイに地図を映した。

そこには現在位置が赤い点で示され、画面の端の方に小さく『デルジャナ』と示された青い点が光っている。そして、赤い矢印が赤い点から青い点へ向けて伸びており、最短の針路を映し出している。

それを見つめながら、マックは黙って腕を組み、小さく呻く。

マガスの勢力を考えると、旅団単独で勝利を収めることは絶望的だ。だが、応援を待っている時間もあまりない。ギリギリまで待つが、最悪ボヘミアンの時のように401部隊を招集し、マガスの首を取りに行くしかない。その際には旅団をすり潰すぐらいの覚悟が必要となるだろう。

「あいつら次第、と言ったところか……」

すでに、単独で動く場合の草案はマックの脳内に出来上がっている。

それが形にならないことを切に祈りながら、マックはディスプレイの画像を消した。

第二十七話 目指すは『デルジャナ』（後書き）

はい、新キャラ、ジゼルさんでした。

これもまた次の話を投稿する頃には登場人物紹介に載せようと考えている人物です。この小説では数少ない女性キャラなので、大切にしたいなあ、とは考えています。

まあ、この時期に出てくるわけですから、案の定と言いますが、当たり前と言いますか、終盤にかけて出番が増えるわけなのですが……。

第二十八話 ジャック・マガスという"個";(前書き)

登場人物紹介にジゼルを加えておきました。

少しですが、よろしければどうぞ。

後書きでちょっとしたお願い。

お願いでもないですけど……。

第二十八話 ジャック・マガスという " 個 " ;

「よお」

ルートの部屋に入つての最初の台詞はそんなものだった。

ここは『グランドフリーユージュ』内にある医務室だ。患者用のベッドが細長い部屋にずらりと並び、今は2日前の『血の盟約』との戦闘のおかげでそのベッドがほぼ埋まっている状態だ。ルートも戦闘後は1度この世話になつたのだが、軽傷だったので昨日の夕方には医師の許可が出て普通に出歩いている。

しかし、『スカル』の回し蹴りを食らつたフラッシュは折れてはいないが肋骨の何本かにヒビが入っていることが分かり、その治療も兼ねて出勤待機を命じられ、今はルートの前にあるベッドで横になつている。

「ルートも瓦礫をたくさんぶつけられたのに、1日で出歩けるなんて……、差別だ」

どこかふて腐れたフラッシュが憎たらしげにルートを見つめる。だが、ルートは鉄面皮の如き表情を崩さずに、ベッド脇の椅子に腰かけた。

「あんな大振りの蹴りをもらつてお前が悪い」

「ルートなら避けられた？」

「おそろくな」

ここで中途半端な答えを言つと付け入られるので、あえて避けられると言ひ切る。今となつては確かめようのないことだが、フラッシュも反論する隙を与えられずに悔しそつに歯ぎしりする。

「はあ、それはともかく、調子はどうなんだ」

ルートが胸を指差して聞く。患者服を着ているが、その隙間からは包帯が覗いている。外傷はそこまで大きくないのだが、裂傷は長く伸びていて、ボディーマーを脱いだらアーマーの裏生地は血で真っ赤に染まっていた。慌てた医師がフラッシュを医務室に担ぎ込むのを、ルートとレイは何も言わずに見送つたのをよく覚えていゐる。

「大丈夫だよ。骨が直るのにはしばらくかかるだろうけど、『デルジャナ』に着くまでには銃ぐらい撃てるようになっておきたいな」
「頑張るこつたな。お前も部隊を預かる身なんだからな」

「うつ、ルートに言われると反論できない……」

がつくりと項垂れるフラッシュ、そしてそれを面白そうに見るルート。

しばらくニヤニヤしながらフラッシュを見ていたルートがふと何かを思い出したように人差し指を立てた。

「そう言えば、今朝フェイナが出動したらしいぞ」

「フェイナが？ 『デルジャナ』へ!？」

いきなり「出動」と言われて、フラッシュの思考は目的地である『デルジャナ』に直結した。

「違う違う。なんでも『デルジャナ』の警備を任されてる都市の軍

に出向して、いろいろ手伝うらしい。まあ、要は裏で何やかややらかすつもりなんだって。覚えてるかジゼル婆さん」

「ルート、あの人まだ婆さんという歳じゃないよ……。ジゼルさんか、1回立ち寄った都市でマックが僕たちを引き合わせたよね」

しみじみと思い出に耽っているフラッシュをルートはジト目で見つめる。

「……どうしてそんなに気楽な表情をしていられるんだ？」

「なんでって……、ああそうか、ルートは確かジゼルさんを婆呼ばわりして2、3日ジゼルさんの訓練に付き合わされたんだっけか」

「あれは、地獄だ。15歳の子供にやらせるものじゃない」

今度はルートが項垂れる番だ。そしてフラッシュがその様子を面白そうに見つめ、さらにルートの心にダメージを与えようとする。

「なんだっけ、確かフル装備40キロの背囊担いで100キロ行軍、だっけ」

「言うな!! 思い出させるな!!」

ぐおおっと頭を抱えてのた打ち回るルートをざまあみろという表情で見つめるフラッシュ。

「おまけに、終わったと思ったらジゼルさんに近接戦闘の指南も受けてたしね。おかげで今のルートがあるんじゃない？」

「やめるおおお!! あれは訓練という名の新兵いじめだ! あんの婆終始笑ってたんだぞ!？」

「愛ある拳ってやつ？」

「んなわけあるか!!」

「……何をしているんだ、ルート」
「へぶっ?!」

フラッシュに掴みかからんばかりの勢いだったルートの脳天に金属製の拳骨が降り注いできた。

「あれ、レイも僕に何か用？」

見れば頭を押さえてうずくまるルートの背後にレイが立っていた。その腕はルートに1発入れた高さで止まっているが、目はルートではなくしっかりとフラッシュに向けられている。

「様子を見に来たんだが、騒がしいから何かと思ったら……。ルート、怪我人相手に何をやっているんだ」

「つつつ、俺も一応怪我人なんだけど?」

「今朝も射撃場でお前を見たんだが、旅団の規定では怪我人は基本訓練も禁止のはずだが?」

「……すみませんでした」

「よろしい」

反論するのを諦めたルートは大人しく引き下がり、頭を下げる。

「で、こんな馬鹿に付き合っているみたいだから、フラッシュも調子はよさそうだな」

「ははは、一応言っておくけど、ルートは君の上司だよ?」

「場数が違う」

「くっ、15歳のくせに……ふっつ?!」

今度はまともに腹に拳が入った。

「一時的とはいえ、一児の父にそれはないと思うよ、ルート」
「事実だろう……あ、やめい！ それはヤバい！！」

レイが真剣に拳を引いて強烈な正拳突きをお見舞いしようとしたのに気が付いてルートが大真面目に謝り始める。いかにルートと言えども、機械人の本気の1発を食らえば肋骨の2、3本は覚悟しなければならぬ。

「歯を食いしばるがいい」

「顔なのか！？ いろいろヤバいからあああああ！！」

医務室にルートの声がこだました。

ルートがレイに手痛い一撃をお見舞いされている頃、『グランドフリューゲ』から遠く離れた場所、巨大な尖塔が立ち並ぶ都市に、無数の戦車が入っていく。本来、その都市を監視するべき、彼らは勝手知ったる都市の道を迷うことなく進み、中心にあるドーム状の建

物の前で止まった。

戦車から1人の若い兵士が降りると、ドーム状の建物の入り口から内部に入ると、階段を上って内部の巨大な空間が見える場所に出る。何かのスポーツを行う屋内競技場らしく、観客席がぐるりと競技場を囲むように配置されており、そこへ通じる通路を兵士は進む。そして長く窓のない通路を進むと、空間が広がり、観客席に兵士は出た。

そこからの景色を見て、兵士は息を呑んだ。

「ハルマゲドン
終末……」

並ぶは30基を優に超える移動式発射機。

1基につき2発の大陸間弾道弾を発射することができる発射機がそれだけ並んでいる様相は、異様としか表現できない。

「良い例えだが、若干違う」

不意に背後から声がして、兵士は振り返る。すると、そこにはマガスが手下を引き連れて立っていた。兵士はその気配の無さに驚いた。本当に何時からいたのかと思うほど気配を消していた。兵士も一部隊を率いる身、人の気配ぐらひは察することができるという自負はある。だが、マガスとその手下2人は、声をかけられるまでまったくいた事に気が付けなかった。

兵士はその異様に怖気が走った。

「正しく言えば、これは神話に伝わる大洪水なのだ。全てを1度ゼロに戻し、再び世界を創造する。我々はその礎いしづえとなるのだ」

段々になっっている観客席をゆっくりとマガスが降りてくる。

兵士は我に返ってマガスに敬礼する。

「『二スローグ』都市軍『デルジャン』駐留軍以下2000名、あなたの指揮下に入りました！」

「見ない顔だな。会合の際はいなかったな？」

「はっ、あの時は会場場所の外の警備をまとめていました」

「あの時の隊長はどうした？」

「どこの世の中にもいるんですよ、いざとなるとビビってしまう奴は」

兵士の口が吊り上る。

それが意味するのは、それまでの指揮官は殺されたということだ。

そして若いこの男が指揮官になりあがったということ。それを理解するとマガスは少し残念そうな表情を浮かべた。そして何事かを手下の男に伝えると、手下の1人が観客席を後にしてどこかへ行った。それを確認してマガスは男に向き直り、ニコリと笑みを浮かべる。だが、纏う空気はこれ以上にならないほど緊張している。あまりの雰囲気には男は苦笑いをすることしかできなかった。

「そう、か。あの男は死んだか。ということは、彼に従っていた男たちも殺したのか？」

「え、あ、はい、抵抗する者は全員殺しました。今残っているのは、あなたに忠誠を誓っている猛者のみです」

「……………いかなあ」

空気が凍りついた。

マガスはまだ笑みを浮かべている。だが、その目は獲物を前にした猛獣のものだった。男は近寄ってくるマガスに恐怖を抱き、後ずさりする。だが、マガスは男が後ずさりした分だけ前に出てくるので、距離は取れない。それどころか、観客席の最前列、フェンスにまで追い込まれ、結果的に逃げ場を失うことになった。

「私はあの男の能力を買っていたのだよ。後先考えずに戦うような素人は望んでいないのだよ。まったく余計な真似をしてくれた。彼が反抗するなら、我々で処理をしたものを……」

先ほど出ていった手下の男が戻ってきた。その背後には何かを運んできた同じような服装の男が4人現れ、運んできた直方体の箱をマガスの横に置いた。

マガスはその箱の天蓋を取り外すと、中を男に見せるように箱を持ち上げた。4人がかりで運んでいた物を、マガスは1人で持ち上げたのだ。それも初老の男が、だ。男は目を見開いてその光景を見た。

「そ、それは……」

「まだ造られて間もない、機械人の素体だよ。人工皮膚も取り付けられていないほどの、いわばまだ人形の状態のものだ」

「そんなものを、どうするつもり……」

男の質問に答えているかは分からない。マガスは明後日の方角を見ながら男以外の誰かに語りかけるように喋る。まるで、何か天から啓示でも受けているかのように手を広げ、ドームの天井を見つめている。

「世の中便利になったもんだ。今じゃ人工皮膚の代わりに生身の皮膚で覆っても防腐処理が行える」

手下が茫然とする男を素早く羽交い絞めにする。そして、1人の手下がナイフで手早く男の服を切り裂き、鍛え上げられた肉体が露わになり、男の表情が凍りつく。

「お、俺を殺せば軍は動かないぞ！」

「それは問題ない。死ぬのはお前だが、お前の皮を被ったこいつが指揮を引き継ぐ」

ニタリと嗤うと、マガスは男に向き直って虫でも見下すかのような目で男を見る。いや、マガスは男を男として見ていなかった。手下どもに動きを封じられた、ただの蟲。それがどうなるうと知ったことではないという、感情の無い目だった。

「貴様あ、貴様機械人か！！」

事ここに至り、男は事態の深刻さに気が付いた。別に男を求めているわけではないのだ、マガスは。有能な指揮官フレイムに率いられる1個の機械人形キングマシーンを求めていたのだ。今、彼の前には腐った脳の指揮官がいる。ならば、それを直すのに1番手っ取り早いのは、指揮を機械人に執らせることだった。

「い、いったい何をしようというんだ！」

「だから言つたらう？ 世界をゼロに戻し、我々の世界を創るのだ。徹底的に管理され、組織され、統率され、隔たり無く平等な世界、人間は我ら『始まりの機械人』の管理下に入るのだ！」

「貴様、『大崩落』を繰り返すつもりなのか！ 双方にどれだけ死者が出たと思ってるんだ！ そんなことをしなくても、『血の盟約』の信念は達成できる！ 機械人である貴様も、その対象だぞ！！」

男は手下の腕を振りほどこうと暴れるが、手下どもも機械人らしく、梃子でも動かない。むしろさらに締め付けが強くなり、男の骨がミニリと軋む。

「『血の盟約』など、もとより我々は仲間だなどと思ったことは1

度もない。我々の計画では、『血の盟約』もその任務を終えた時点で肅清対象となる。どうも、ボヘミアンはそのことに薄々気が付いていたようだが。人間にしておくには勿体ない逸材だな、あれは「き、貴様ああああ!!」

「もう、貴様という個は必要ない。我々に必要なのは貴様の外面、安心しろ、痛みは最初だけだ。死んでから手早く貴様の皮を剥いでやる」

マガスは人間のものとは違う、無機質な笑みを浮かべた。それは男だけでなく、人間すべてに向けられた嘲笑だったのかもしれない。だが、男がそれに気が付く前に、男は心臓に深々とナイフを突き刺された。

「服を汚すなよ。皮膚もなるべく1枚のまままで摘出するのだ」

「はっ」

観客席の一角で、人間の解体ショーが始まろうとしていた。

第二十八話 ジャック・マガスという"個"; (後書き)

ようやく、マガスの正体を書くことが出来ました。

どこで出そうか迷ってたんですが、何とか流れるに大丈夫そうな場所を書くことが出来ました。

作者「それはそうと、「なるう」内でやっている勝手にランキングとかたまに覗いているんですが、この間見たら二桁台に入っていたんですよ」

道男「いきなりだな、おい。それはともかくとして、良かったじゃあないか」

作者「こんな駄作でも評価されるもんなんですねえ、と涙がちよちよぎれる思いをしている最中でありませう」

道男「まあ、上位の作品との差はあるがな」

作者「それは言わないでください。上位と言うか、私より上の作品の方との間にはきつと越えられない壁的なものがあるんですよ。私自身自覚はしてますし、「なるう」内の作者の皆さんはすべからく尊敬の対象になっていきますので、私は今の状態でも十分うれしいですよ。まあ、感想いただければそれ以上にうれしいんですけど……」

道男「未だに一通も来ていないな」

作者「……是非、感想をお聞かせください。めちゃくちゃな批判とかはさすがに心にドスツて来ますけど」

道男「それも含めての感想だ」

作者「ですね。悪い点などありましたら、どうか柔らかく教えて下さるとうれしいです。それ以外はもつと嬉しいですので、ぜひ、お願いいたします」

道男「お前つて撃たれ弱いもんな」

作者「打たれ弱いんです。誰だつて撃たれたら弱いですよ……」

第二十九話 裏でうごめくはマガスの影（前書き）

頑張つて次話投稿に前書き、本文、後書きを書き、やっとの思いで次話投稿のボタンを押して、

エラーが出て、

戻ったら全部消えていて、

泣きたくなりますね……………。

第二十九話 裏でうごめくはマガスの影

都市『ニースローグ』。

15年前の『大崩落』時には『デルジャナ』攻略の根拠地となり、終戦宣言が行われた都市でもある。そのせいもあってか、戦後『ニースローグ』は軍事都市としての側面と、観光地としての側面という、到底共存しそうにない2つの産業が相容れている。戦争の最前線となり、人的被害も甚大、にも関わらず驚異的な発展を遂げられたのはそういう背景がある。

軍事都市としての知名度は世界屈指であり、現にジゼル率いる『ニースローグ』都市軍は、都市軍としては異例の海外派遣すら可能な能力を持つ。自らの都市を守るだけでなく、他都市を守って余りある軍力を備えているのだ。練度も高く、兵器も都市独自の発展を遂げ、砂漠戦においては比類無き戦闘能力を発揮する。これは『ニースローグ』と『デルジャナ』を砂漠が隔てているという理由によるが、それ以外でも塗装さえ変えればどこでも通用する一級品の製造が行われており、他都市からの受注も多い。

それゆえ、『ニースローグ』は軍事国家として一面が強い。とはいえ、それだけで社会が回るわけではない。観光業による外貨の取得都市郊外における農業の促進など、都市の人々に直接影響するような政策もかけ合わせり、政局も安定している。

言ってみれば、世界でも稀に見る高度な技術と平穏を手に入れた都市なのである。圧倒的な武力に裏付けされたことによる外敵の侵入の皆無、安定した生活による平穏、これほどまでに理想的な都市は

片手の手で足りるほどしかないと言われている。

「そういう都市の司令官をやっていると、どこか平和ボケしてしまうのかもしれないわねえ」

「ジゼルさん、いきなりどうしたんですか？」

ここはジゼルの個人的な執務室。

さすが、司令官にもなると執務室の広さも段違いである。スペースに限界のある『グランドフリーユージュ』ではマツクの執務室もそこまですくはなないが、ジゼルの執務室はとにかく広い。壁一面の本棚と窓から見える都市の風景だけ見ていると、ここが軍の最高司令官の部屋とは思えない気分になる。

「ああ、ごめんなさいね、フェイナ。ちょっと考え事していたもので……」

ジゼルは物思いに耽っていて、つい目の前の来客用のソファに座っているフェイナの事を失念してしまっていた。

「それにしても、あの小さかったフェイナが、今じゃ情報部隊のエース……。長生きはしてみるものね」

「ジゼルさんこそまだまだそんなお歳じゃ、っていうか今が最盛期なんじゃないですか？」

「最盛期を迎えたということは、後は落ちるだけじゃない。私はまだまだこれからのつもりよ？」

クスツと笑ってジゼルは紅茶をすする。

「それで、マツクの使いとして来てくれたわけだけれど、マツクは今回の事をどう考えているのかしら？」

カップを机に置くと、ジゼルは柔和な表情を消し、目つきも鋭くなる。

フェイナも、もとよりその事で来たのだからと、姿勢を正して持ってきた書類を取り出して机に広げ始めた。

「これは、旅団からでも入手できたこの都市の政府高官の情報です。その中から我々は最近の行動に違和感を持った人物をピックアップしてきました。この都市の情報機関の情報はどうでしたか？」

書類の写真に目を通しながら、ジゼルは机の引き出しから種類の束を取り出し、フェイナに手渡した。フェイナが持ってきた物と同じように、怪しい人物のここ最近の行動や金回りなどが詳細に書かれている。

「こっちも似たようなものね……。つまり、外と中で同じものが手に入れられるってことね。情報統制が甘いわね」

「それはまた後程。我々が最も憂きしているのは、書類の最後の人物の関連です」

「ええと、ってちよつと!？」

ジゼルが書類の最後の一枚を見て顔色を変えた。そこには髭を丁寧に切りそろえ、選挙カーのような車の上で手を振っている男の姿が写されている。どう見たとしても良い印象しか持てない。

「都市の大統領じゃない! あの人マガスと繋がっているというの!？」

「最悪、そうなります。情報が大統領まで上がっていないと聞いてまず、政府高官の裏切りを考えましたが、旅団が得た情報によると、どうも高官の1人が大統領と共謀して情報が上がらないように仕向

けていたという可能性が浮上しました。大統領は知らぬ存ぜぬで済まされるし、最悪高官がばれたとしても処断するトップが敵なのですから、処分などたかが知れています」

「……なんてこと」

ジゼルがシヨツクのあまり言葉を失う。

「とはいえ、これはまだ可能性の段階です。そちらの情報と併せて精査する必要がありますから、協力をお願いします」

「他ならぬマツク、そしてフェイナの願いとあれば拒む理由はないわ。けれど、大統領がマガス側だとなると、この都市の根幹に関わることよ。知ってると思うけど、あの人は『大崩落』で終戦宣言をした本人、都市内だけでなく、世界からも尊敬されている人、そんな人が敵だとなると……」

「確か、『デルジャナ』で『始まりの機械人』の残骸を最初に確認した指揮官でしたよね。あたしは小さかったからあまり覚えていませんけど、旅団長がそんなことを言っていました」

あの頃の旅団は小さい子にあまり重い話題を聞かせぬようにとそう言った知らせはあまり子供にまで伝わってはこなかった。フェイナも入隊して、この都市に始めて来た時にマツクに説明されて以来である。

「そうよ、そんな人がマガスの内通者？ これは最悪私の首を覚悟する必要があるわね」

「失職^{クハシ}ではなく、ですね」

「ええ」

ジゼルは小さなため息をついて書類を机に置いて、背もたれに寄りかかる。

「マックには言ったけれど、事態がどう動くかと私はあなたたちを助けに行くつもりよ。内部の敵を一掃したら、特急便で『デルジヤナ』へ行く予定、すでに関連部署への根回しは済んで、いつでも動ける態勢にはあるわ。けれど、大統領が敵となると、大統領命令で止められる可能性があるわ。私は気にしないけれど、他の人は違うだろうし。フェイナ、この情報の詰めは私に任せてくれないかしら？ 身内のことは身内で片付けるのが道理だと思うのだけれど」

ジゼルが言いにくそうに表情を歪める。

だが、フェイナはそれまでの穏やかな表情を変えない。

「もちろん、そちらの問題はそちらでやってもらうつもりです。けれど、あたしも力添えはしますよ？」

「それは、願ったりよ」

ジゼルが笑みを浮かべると、手を差し伸べてきた。

フェイナはその手を握り返し、笑みをこぼした。

「それじゃあ、フェイナ。これからは仕事仲間ね」

「よろしく願います」

小さな都市の傍に、『フリーユージェ』の家である『グランドフリーユージェ』が停泊している。
高層ビル建設に使われる大型のクレーンに囲まれ、『血の盟約』との戦闘で被弾した艦首付近には修復用の機材が置かれ、溶接に使われる工具が放つ火花が至る所で輝きながら雨のように降り注いでいく。

ルートの様子はこの都市で最も高い都市政府の建物の窓から眺めていた。

「いやあ、こんな辺境の都市では、このような大口の契約が出来る事自体ありがたいですよ」

「応急処置で構いませんよ、こちらにも急ぎですので」

ルートの背後、ガラス製の机を挟んでマックとこの都市のトップの男が今回の契約について話し合っている。

この都市に寄ったのは、旅団を雇うとかそういうものではなく、ただ単に『デルジャナ』に行く道中でまともな修理と補給を受けられそうな都市がここしかなかったからだ。

規模は『ブラン・コリア』の半分ほど、工業よりも農業の方が盛んな様で、窓からの景色も田園が広がっている。都市中枢部は建造物が集中しているが、郊外へ行くほどのどかな風景になっていき、そのど真ん中に『グランドフリーユージェ』はいるのだ。そしてその周辺だけ妙に工場が立っているという、田園とは似合わない光景が広がっている。

「いえいえ、正直申しますと、最近はこのような場所まで来て、修理と補給を頼んでもらえることなど皆無でして……。ぜひ我々の都市を助けるつもりで契約の上乗せなど、頼めませんか？」

都市長、このでっぴりと太った男はそう名乗った。

都市によってトップの呼び方は違うが、この都市ではそう呼ぶそうだ。

都市長はポケットから葉巻を取り出すと太い指で器用に挟むと火をつけて大きく煙を吸い込んだ。

正直、ルートのこの男に対する第一印象は最悪、その一言に尽きる。田園をこの男の迎いの車で通ってきたが、市民は決して裕福とは言えない生活を送っている。都市の表通りこそ小奇麗に清掃され、市民が往来していたが、それが違和感を覚えるほどに整頓されていたことに気が付いていた。

外面だけを良くした、という感じで、都市中心部はある程度栄えていたが、あまり見られない郊外との格差は誰が見ても明らかなものだった。

にも関わらず、この男は不健康なほどに太り、高級そうな服に身を包み、葉巻を吹かしている。これで印象が良いはずがない。

「ご厚意はうれしいのですが、急いでますので、応急処置だけでお願いします」

「まあまあ、そう言わずに……」

この部屋に通されて3時間。

延々待たされた上に、話していることは契約の上乗せによる『グラ

ンドフリーゲ』の大規模修理についてなのだが、それも都市長が一方的にやらせてくれ、とせがむばかりでマツクの言葉に耳を貸す気配は全く見られない。

都市長は口を開いては「修理させてくれ」の一点張り、何とか引き下がってもらおうとマツクも遠慮しているのだが、そのやり取りは傍から見ているイライラさせられるほどのものであった。

「とにかく、もし必要だと思いましたらこちらから要請しますので、今は応急処置でお願いできますか？」

「まあ、そういうことでしたら……。予定では2日もあれば修理はできます。その後また再契約という形でお願い……」

「旅団長、そろそろ艦に戻りませんか……」

「お、おおそうか、もうそんな時間か。では都市長、我々はこれで失礼します」

ルートが助け船を出してマツクを無限ループから救い出す。そして足早に部屋を後にし、出口へと長い通路を歩きだす。

都市長の部屋がある通路を曲がり、視界から都市長の部屋が消えると、マツクは小さくため息をついた。その顔には疲労の色が濃い。ルートは心配そうにマツクの顔を覗き込む。

「すまん、助かった」

「まあ、俺もイライラしてましたから……」

若干無理やりであったし、おそらくあの男もこちらが逃げ出したことには薄々気がついてはいるだろう。とはいえ、それでもしなければあの場から逃げ出すことは不可能ではないか、と思うほどにあの男はこちらを引き留めようと必死になっていた。

「2日か。『ニースローグ』へ行ったフェイナからの連絡が来るまでは急いで行っても仕方がないからな。幸い、都市内は見回るのは丁度良さそう場所が幾つかあったし、見て回るのもいいんじゃないか？」

「暇ですしね。レイでも誘って行きますよ」

他愛のない会話が行われているように見えるが、それは口元のみ。目は目まぐるしく通路を走査し、監視カメラの有無を確認し、人の気配に神経を尖らせている。

それもそのはずで、旅団内では初めての場所での警戒は怠らないよう常日頃から心がけるよう言われているのだ。こちらが相手を知らなくとも、あちらがこっちを知っていることは多い。『フリーユージュ』はそういう傭兵集団であるから、それには慣れている。問題は、知らなくてもいいような輩にまで自らの存在を知られていることだ。

『フリーユージュ』のような集団を快く思わない組織など、この世に「まん」といる。

それは犯罪組織に限った話ではない。時には都市ぐるみで旅団を襲おうなどと考える都市すらある。もちろん、そんなに軽々しく銃を向けてはいけない相手だと理解していない愚か者が行う行為ではあるが。

だから、マックとルートはいつも通りの動作を行っているにすぎなかったのだ。

だが、あの部屋に通され、あの男を見て2人の脳内ではアラームが鳴り響いた。

少し考えれば分かる話だ。あまり収入が多そうではない都市、それも都市内ですら表向きのみ整備された都市、言い方は悪いがいわゆる貧乏都市のトップがあのような恰好であることに違和感を抱かないわけがなかった。そして、それは危険なほどに見えてきた。

都市の税収以外からの収入。

それが、あの男を醜く太らせている可能性がある。

そしてこのご時世、こんな貧乏都市に金を流す物好きなど、限られている。

「ルート、出歩くなり……」

そこまで言つてマツクは耳たぶを指でつまむ。通信機を表す隊内の符号だ。そしてその手が腰に置かれ、小さく2度マツクは腰を平手で軽く叩いた。

それが示すのはただ1つ。

「了解した」

ルートは小さく返事をした。

第二十九話 裏でうごめくはマガスの影（後書き）

いわゆる、ネットワークという奴ですね。

マガスは世界中の都市の高官にパイプを持っています。つまり、網の目のように自分のネットワークが構成されているのです。

もちろん、それが本拠地に近づけば近づくほど細くなるのは、言わずと知れたことなのでしょう。

次回、ルートたちが休養のために都市に出かける予定。

果たしてゆっくり休めるのでしょうか、はたまた……、的な感じで行きます。

誤字脱字でも構いません。
感想お待ちしております。

第三十話 わずかな休養（前書き）

第三十話 わずかな休養

小さな都市の大通りを見慣れないジープが疾走している。

この農業で生計を立てている人間の多いこの都市で、軍用の、荒地仕様のジープなどめったに見ない代物だ。道行く人はチラリとそのジープに視線を向けるが、中の様子を窺い知ることはできない。

都市の道路脇には制限速度が書かれた標識があるが、ジープはその速度ギリギリで走行している。そのため傍から見れば猛スピードで走っているのだ。

「へえ、話は聞いていたが、中はそれほどひどいわけじゃないみたいだな」

助手席に座るレイは、通りの左右に店舗を構える飲食店や衣料品店を眺めながらポツリと呟いた。

「まあ、郊外に比べれば文明的な生活を送っているようではあるね。一応車が走ってるし」

後部座席にはまだ包帯の取れないフラッシュユが乗っている。ルートとレイが出かけると聞いたフラッシュユは医師の静止を振り切ってジープに乗り込んできた。ジープが舗装されていない道を走り、デコボコの道で跳ねる度にフラッシュユが苦悶の表情をしていたが、前に座るルートとレイはそれを笑ってスルーしていた。

ハンドルを握るルートは片手にマックから貰った都市の地図を見ながら車を運転している。道と地図を見比べて、丁寧にハンドルを切

つて交差点を曲がる。

主観だと分からないだろうが、ジープはかなりの速度を出している。ほぼ速度を落とさずに直角に曲がる様はさながらスポーツカーと言ったところだろう。

旅団の人間は入隊してすぐにほぼすべての乗り物の操縦資格を旅団内で取らなくてはならない。配属される部署にも影響を与えるもので、航空機の操縦が得意ならもちろん航空部隊に、自動車や二輪車の運転が上手い者は通常の実動部隊や戦車隊に配属されることが多い。

ルートの場合には広く浅く資格を取っているため、突出した操縦技術などは持ち合わせていない。

だが、必要に迫られて技術は磨かれ、本業のそれには及ばないにしてもルート of 自動車の運転センスはかなりのものになっている。

「で、ルート、行き先は決まっているのか？」

黙々と運転をするルートにレイが問いかけた。

ルートは手に持つ地図をレイに渡し、赤い丸が付けられた場所を指さす。

「『ドルシエ』、カフェか何かか？」

「そんなもんらしい。艦を出たのが昼過ぎだったのもあるし、軽く済ませようと思ってな」

「観光名所と言えるような場所もなさそうだね」

地図を後ろから覗き込んだフラッシュは残念そうにため息をつく。

この都市は、世間から随分と隔絶されているようで、外部の情報が入ってこないように外部に情報が出ていかない。

ルート自身、この都市の名は聞いたこともない。おそらく、名もな

いのかもしれない。

「農業で生計を立てる人間が多いということは、それなりに料理もあるだろうと思ったんだが、どうだ？」

地図をレイから返してもらい、ルートは再びそれを見つつ運転をする。

地図が逆さまだったことに気が付いてひっくり返すと、目的地までそう遠くない場所まで来ていることを確認した。

「構わんぞ。もとより俺はお前の付き添いだしな。フラッシュも久しぶりに病院食以外も食べたいだろう？」

「1日か2日だけどね……。旅団の病院食って味気ないから……」
「そついうもんだらう？」

しばらく進むと、目的の店が視界に入ってきた。

店は通りに大きく張り出した天幕を持ち、その下には丸いテーブルが幾つか並べられている。ルートはその脇にジープを止めると、エンジンを切ってジープから降りる。周囲を見渡すと、物珍しさからかこちらに視線を送る人間が何人もいる。

中を覗くと、数人の客と店員がいるだけで、丁度3人が座れる席があった。それを確認してからルートは店の扉をくぐって店に入る。

「いらつしゃいませ」

「3人だ」

指を立てて店員に人数を教えたと、窓の近くの席に通され、メニューを手渡される。

「仕事中だし、酒は無理だな」
「当たり前だよ、ルート……」

少し残念そうにアルコール系の飲料の欄を飛ばすと、適当な物を選んで注文する。料理ができるまでの間、ルートたちは今後の事と現在の状況について小声で話すことにした。

「つまり、この都市の上層部はマガス繋がり……？」
「おそらくな。町は貧しいとは言わないが別段栄えているわけでもない。にも関わらず豪勢な生活を送っているようだからな」

フラッシュが考え込む。

そして、気まずそうな表情を浮かべて辺りを窺う。

「こんなところにおいても大丈夫かな」

それを聞くとルートが何を今さら、といった表情を浮かべ、先に来た紅茶に口を付ける。

「もとより、俺は気晴らしだけにこの町に出てきたわけじゃないぞ？ 仕事も兼ねてる」
「来るんじゃないかった……」

頭に手をついて項垂れるフラッシュを隣のレイが慰める。

仕事というのは、もちろんマガス関係だ。

この都市の上層部が敵に通じているのなら、十中八九旅団が来たこととはあちら側に伝わっている。そして、こちらの動向を知ろうと斥候を放ってくるはずだ。そして、その斥候が狙うであろう獲物をルートは買って出たのだ。街中だから大っぴらに仕掛けてくると思

わないが、こちらの常識だけで物事を考えるのは危険なことだ。

ルートたちは偵察と敵に対する囿となり、町を移動し、こちらの尻尾を掴ませるのが目的だ。フラッシュが付いてきてしまったのはルートにとって予想外でもあり、想定内でもあったが、ジープを使えばさほど支障はないだろうと判断することにした。

「敵が仕掛けてくると決まったわけじゃない。その時まではこのわずかな休暇を楽しもうじゃないか」

「10分で終わるとか言わないでね……」

フラッシュの力のない声が店内に響いた。

しかし、フラッシュの思いとは裏腹に、その様子を店の外の物陰から見つめる影があることに、3人はまだ気が付いていなかった。

通信越しのジゼルの顔は憔悴しきっていた。あまりのショックに感情を制御できていないようで、言葉の節々にトゲがあり、いつにも増して表情が強張っていた。

ジゼルは頼りになる人物ではあるが、1度怒り出すと目も当てられない事態になる。それだけは避けなければならぬと、マックは言葉を慎重に選びながら会話を続けようとする。

「と、いうと？」

『フェイナと共に調べたら、大統領は限りなく敵だつたのよ。調査していることがどこから知られて全ての調査を大統領命令で止められたわ。おかげでこっちは動きが取れなくなってしまったわ』

ジゼルが調べ上げた情報では、当初の懸念通り、大統領はマガスに繋がっているだろうことが疑われた。決定的証拠に欠け、100パーセントではないにしても、その可能性は限りなく高いものだった。おまけに、大統領は裏切ったわけではなく、最初からマガスに協力していたようなのだ。つまり、『大崩落』後、終戦宣言をした男はずっと人類を裏切り続けてきたのだ。そんなことが公になれば、世界各国での混乱は避けられない。『ニーススローグ』に至っては存続すら危うくなる。

『フェイナが動いてくれるおかげで調査は続けられているけれど、私への監視は強くなったわ。大統領直属の人間が軍に出向してきたのも、そのせいね。この通信はプライベート用だから大丈夫だけれど、公用のはおそらく盗聴されているわ』

「証拠は上がりそうですか？」

『大丈夫、とは言い難いわね。監視が強くなったということはあちらの警戒も強くなったことよ。フェイナにも極力出過ぎるなどは言っているけれど、正直心配でしょうがないわ。戦場にいたとき

だってこんなに不安にはならなかったのに……』

ジゼルがいつもは見せない弱気な感情を表に出している。

マックはできれば慰めてやりたいと思うが、事態はそれを許そうとはしていないのが現状だ。

「ミス・ジゼル、もしあなたの身に危険が迫ったら我々のことなど気にせずに身を引いてもらっても構いません。他の都市にも協力要請はしていますし、あなたの軍には敵いませんが精鋭を揃えてもらうよう言っています」

『そうは問屋が卸さないわ。私だって言ったからにはそれなりの責任があるわ。必ず大統領をとっ捕まえてあなたたちの所に行っただげるから、期待して待つてなさいな』

ジゼルは無然として言い放った。

先ほどの弱気はどこへやら、まっすぐにマックを見据え、鋭い眼光をを向けてきた。

それを見てマックは小さく微笑んだ。

「それでこそ、『ニースローグ』の女帝ですよ。あなたほど弱気の似合わない女性はいないですよ」

『フフ、褒め言葉として頂いておくわ。それはそうと、話を続けましょう？ まだ話さなければならぬことがこの一晩でたくさん起こったのだから』

「お願いします」

『では……』

そして、ジゼルは語り始めた。時間が経つにしたがってマックの表情が強張り、凍りついていくのが、目に見えて分かるほどの内容だった。

『ニースローグ』の大統領は、調べによれば非常に真面目で、感じの良い、熟練の政治家であった。にも関わらず、戦後数年はおかしな言動が目立ち、一部には機械人ひいきと取られるような政策、言動が見られるようにもなっていた。それらも今では完全になくなり、至って普通の政治を送っているのだが、そこにジゼルは疑問を持っていた。

戦後のあの宣言の時は、当時の部下でさえ驚くほどの饒舌だった。それを間近で見ていたジゼルはそれをよく覚えていた。

あの、口下手で、純真で、真面目な男が、まるで独裁者かのような演説を行ったのだ。彼を個人的に知っている人間でそれを不審からない人間はいなかった。

そして、それを大統領は察知したかのように、今まで自分の周りにいた側近を左遷したり、失職に追いやりたりし、新たな人材を政府に呼び込んだ。中には外部の人間すらいる。

まるで、昔の自分を隠すかのような行為は、ジゼルの元にも及びそうになったのだが、ジゼルは彼を貶めようなどは考えずに彼の指示に従うことを選択した。それにより、世界がどう変わったかは分からないが、少なくともそれをしていなければ今こうしてマックと話し合っていることなどなかっただろう。

戦後の突然の変容、そして親しい者の左遷と失職。

それが指し示すことはあまりにも突拍子の無いものであり、最も説得性の高いものであった。

「……、『ニースローグ』大統領、終戦の立役者は、機械人」

マックが小さく呻くように言う。

それが、最も懸念されていた事態であった。人間であれば説得するという可能性が残されているが、機械人相手に話し合いは無意味だ。実行使用しか残されていないのが実態だ。だが、彼を機械人とは知らずに彼を守る人間も数多い。もとより信望厚い男なのだ、取り巻きは多い上に、悪い人間は少ない。最も相手にしたくない敵だ。

『事態が動くことは確実。あなた方が動くと同時にもし彼が何かしらの動きを見せたら、私が潰すわ』

「期待してまず、ミス・ジゼル」

『はあ、なんでこんなに面倒なことになっちゃったのかしら……』

「それは違いますよ」

マックが表情を変えずに言うと、ジゼルが首をかしげる。

「これからがもっと面倒な事態にあるんですよ」

第三十話 わずかな休養（後書き）

作者「どうも、作者のハモニカです」

道男「ルートだ」

作者「え〜、というわけで、この駄作もついに三十話です。なんと
いうか、戦闘描写がマンネリ化している気がして不安でしょうがな
い今日この頃です」

道男「まあ、ボキヤが少ないのはもともとだしな」

作者「高校でも英語に関して言えばボキヤが無いのでフィーリング
でどうにかしてしまう人間でしたので……。でも戦闘描写はそれと
はまた別の難しさですね。それも銃とか砲とかだと、必殺！ 的な
ことができませんで」

道男「映画とかでも、いざとなると頼りになるのは銃ではなく己の
肉体、的なイメージが強いよな」

作者「私は『沈黙』シリーズとか、アイルビーバツ、じゃなか
ったイルビーバツクな元州知事とか、マトックス、最近だとア
クターとか好きなんですけど、やっぱり最終決戦で格闘ですよな」

道男「銃が無くとも強いおじさんたち……、渋いの好きなお前らし
いな」

作者「邦画だと、『相○』シリーズとか、アニメですけどファース

トガ○ダムだと青い巨星とか好きですし……、二ト志望の主人公
なんかよりよっぽど人間臭くて好きです」

道男「最近のは見ないのか？」

作者「ガ○ダムですか？ 友人に見せてもらったダブルオーの話
程度ですよ。後はゲームですかね……ガンガンネクストは大学入っ
てから再燃した感があります」

道男「好きなキャラは？」

作者「ガトーさん」

道男「『沈黙』繋がりを意識したか……？」

作者「いや、『ソロモンよ（以下略）』がカッコ良かったもんですか
ら……。他だとノリスさんとか？」

道男「また渋いところを……」

作者「あれは珍しくアニメも少し見ましたけど、あの人の献身度は
半端ないですね」

道男「最近のは中年以上は敵でしか出てこない気がするの俺だけ
か？」

作者「少なくとも種以降仲間で渋い人ってあまり見ないですよね。
あ、オーブに髭の人がいたような気がしますけど」

道男「いたな。死んじまうが」

作者「って、何を話しているんですか、私たちは。そんなことを話すつもりでやってるわけじゃないんです」

道男「じゃあ聞くが、ネタはあるのか？」

作者「ぐっ、そう言われると困りますが……」

道男「……………どうしてこれ始めた」

作者「かつこいいじゃん」

閑話休題

照男「え〜。ルートが作者を連れて訓練場に行ってしまったので、ここからは僕がやりますね。あまりやることもないですが、とりあえずこれを読んでくれる方に無上の感謝を。これからもよろしくお願いいたします。大抵後書きでフルボッコされる作者に労いの言葉などかけてあげてくれると助かります」

道男「随分と奴の肩を持つじゃないか」

照男「うわっ、ルート?! さ、作者さんはどうしたの？」

道男「遠いところへ行つたよ。遠いところへな。それはともかく、お前、何か下心があるんじゃないだろうな？」

照男「べ、別にはないですよ！？ 別に出番増やしてほしいとか、待遇改善を求めている訳じゃないよ！？」

道男「……………ちょっと逝こうか」

照男「ちょ、字が、字が間違つて……………アーーーーーッ！！」

道男「誤字脱字、感想などお待ちしている」

第三十一話 追手（前書き）

カーチエイスがこれほど難しいとは思わなかった……。

『A-10奪還』という小説でカーチエイスの素晴らしさを知ったのですが、やはり自分で作るのは大変です……。

もっと軽い小説でも次は書きましょう……

第三十一話 追手

「……はあ」

「気づいたか」

「下手だね、隠れるの」

頼んだ料理が出来上がり、それを頬張りながら傍から見ればただ談笑しているようにしか見えない表情で物凄く難しい話をしていた三人は、視界の端で不審な動きをする男を見つけて、そんな感想を呟いた。むろん、表情も変えず、視線もそちらには向けていないが、神経はすでにその男を包囲しているも同然の状況だった。

「俺の休暇……」

「あれ、仕事兼ねてるって言ったのはルートだけど？」

ルートが近くで見えていないと分からないくらい小さくため息をつく。そしてあまり不審に思われない程度に食べる速度を上げて、席を立った。

「お勘定は……？」

レジへ行き、店員である女性に代金を聞くと、値段を言われ、細かいのが無かったために大きいので渡すと、お釣りとレシートをルートに手渡した。そして、ルートは眉をしかめた。

「……傭兵の方ですね？」

女性は静かに言った。

事態を呑み込んだルートは表情を変えずにお釣りとレシートと財布に入れると、そばの椅子に座って、フラッシュの会計を待つ間にその女性の「独り言」に耳を傾ける。

「あれは政府の秘密警察です。一般人に紛れ込んで外部の人間を見張っているんです」

ルートはジープを見るふりをして再び先ほどの男を見る。新聞で顔を隠して監視しているようなのだが、傭兵のルートにしてみればあまりにお粗末なスパイで、つい苦笑が漏れてしまう。

「それで、あなたは、いやあなたたちは何者？」

女性に向けてにこやかに言うと、女性が驚いたような顔をして手を止めた。そして感心したようにおどけてみせるとフラッシュにお釣りを返しながら答えを呟いた。

「私は『ニースローグ』諜報機関の者です。この店の店員とサクラも」

「げっ、よりによってあんの婆の手の者かよ……」

「そのお言葉、しかと伝えておきますね」

フラッシュが「相変わらずだね」と言っているが、その言葉はルートの耳には入らない。ジゼルが絡んでいるとルートにとってろくなことがないのだ。

「で、どうすればいいんだ？」

「このまま、都市外へ出てください。絶対に車は止めない方がいいですよ、止めたら最後、囲まれますから」

「まるでマフィアの手口だな。到底政府のやることとは思えん」

「ええ、この都市の政府はバックにかなり大きな組織が絡んでいるらしく、裏の権力はかなりのものなんです。そしてその組織の1つにはあなたたちの『お友達』もいらっしやるようです」

その言葉に3人の視線が女性に集まる。

「詳しいことは総司令から直接行くと思います。私はただのしがない店員です。あ、これはお土産です。みなさんで召し上がってくださいね」

そう言うと女性は一礼して店の奥へと消えていった。後に残されたのはレジの横に置かれた小さな包み。それをレイが持ち上げると、ニヤリと笑みを浮かべてそれをルートに投げ渡した。

そのズシリとした重みと固い感触で中身が何なのか理解したルートも、レイに釣られて笑みを零す。唯一フラッシュだけが、「仕事できかないからよろしく」と言って先にジープへ戻っていった。先に戻ったのは言うまでもなくジープの無線で事態を艦に伝えるためである。

その間にルートとレイは上着の下に収めてきた拳銃の安全装置を密かに外し、そのまま店の外へ出た。周囲を見渡す仕草も見せずに敵を目視し、その数が若干増えていることに気が付く。

「ジープ6時に2人、4時に1人」

「6時の黒塗りは敵のだな」

通りを挟んで反対側に先ほどの新聞を持った男、そしてジープを止めた通りのやや距離のある所に帽子を目深に被った男が2人、こちらを気づかれないように見ている。とつくにはばれているのだがあえて気づかない振りをする。2人の男の隣には運転席にすでに男が乗った黒塗りの自動車が止まっている。それを確認してルートは助手

席に乗り込む。

「レイ、運転を任せる」

「了解した。フラッシュ、連絡は？」

「大丈夫、都市の入り口まで応援が来るって」

後部座席で無線機を操作していたフラッシュがそう言い、ルートは運転席に乗り込んだレイにキーを放り投げる。バックミラーを確認しつつ、上着の下から拳銃を取り出すと一発目が装填されていることを確認してそれをギア横にあるボックスに隠しておく。

レイがエンジンを始動して、焦ることなくゆっくりとスピードを上げると来た道を戻る様に黒塗りの横をすれ違う。一瞬運転席の男とルートは目が合った気がしたので、あえて手を振ってみせると、男が顔を真っ赤にして睨んできた。それをルートは面白そうに笑いながら見ていた。

「あまり敵を挑発するなよ？ 馬鹿は怒りやすいんだ」

呆れた様子で運転するレイだったが、その顔もまんざらではなさそうであった。

「それじゃあ、怒り出す前にこの都市から逃げ出そうか」

後ろのフラッシュもなぜか楽しそうな声で言う。

奴らがどれほどの相手に喧嘩を売ったのか、思い知らせてやる必要がある、という意見でその場の3人の意見は一致していた。それは怪我人のフラッシュもであった。

「スパイとか言いつつ、ジゼルさんのスパイに気づけなかったよう

な奴らだ。たかが知れているが、精々あがいて貰おうじゃないか」

「レイ、悪役っぽいぞ、その台詞」

「わざとだ」

レイは片手で器用に拳銃をスライドさせると1発目が装填される。

そうこうしている間にも車は通りを郊外へ向けて走っており、ジープはほどほどの速度で一直線に郊外を目指す。そして大きな交差点に出た時、事態は動き出した。

「来たか」

交差点のど真ん中に巨大なトレーラーが停止して、ジープの行く手を阻んでいた。レイは慌てることなくブレーキを踏んでトレーラーの手前で停止した。それが合図だったかのように、物陰から複数の男が飛び出してジープを取り囲んだ。全員が黒いサングラスをしており、それなりの訓練を受けた体つきをしている。そしてその腰が妙に膨らんでいるのが一目で分かる。

「あの〜、動けないんですけど」

あえてルートは丁寧な物腰で助手席に近いところにいた男に話しかけた。男は助手席の窓に近づくと、外からは分からないように、だが車内の3人にははっきりと聞こえる声で話しかけてきた。

「大人しく我々について来い。そうすれば手荒な真似はしない」

あまりに安直な脅し。つい吹き出しそうになるのを何とか堪えながら、ルートは男に目を合わせる。そして物腰は柔らかいまま、ルートは口を開いた。

「あまり火遊びが過ぎると痛い目にあいますよ？ さっさと失せた方が身のためですよ」

「な、なんだとお!？」

男が激昂してルートの胸倉に掴みかかろうとしてきた。だが、その手がルートの服を掴む前に男の胸に小さな穴が開いた。そして男が仰向けに倒れると、他の男がその男に駆け寄り、残りが拳銃を抜いて腕で銃を隠しながらルートたちに向けてきた。

「おや、貧血ですか？ 何なら救急車を呼びましょうか？」

後部座席からフラッシュが妙に大きな声で言った。車内からフラッシュを見れば、その手にサイレンサー付きの拳銃が握られていることに気が付くだろう。だがあいにく、男たちはドア越しでそれを見ることはできない。

この場合、発砲して困るのはルートたちではなく、男たちの方だ。

「くつ、貴様ら、生きてここから出られると思うなよ」

「何の事だかさっぱりですね。それでは失礼しますね、お大事に」

終始にこやかに対応したルートはレイに出すよう合図を送り、男たちの合間を縫ってジープを発車させた。バックミラーに男たちが撃たれた男を担いでどこかに走り去っていくのが見え、ルートはジープのポケットから拳銃を取り出す。

「白々しいにもほどがあるだろう、フラッシュ」

「他の人にも聞こえるぐらいとなると、あれくらいが丁度良いんだよ」

「お、速い、もう来たようだぞ」

振り返ると黒塗りの車両が軍用のジープを引き連れてトレーラーの脇をすり抜けてこちらに迫ってきた。ジープの天井のハッチが開け放たれて先ほどの男が現れたが、今度は隠すつもりもなく、大型の機関銃を持っている。銃身下の大きなマガジンを天井に置いてこちらに狙いをつけてくる。そして容赦無く引き金を引いて発砲してきた。防弾のガラスに無数の蜘蛛の巣状のヒビが入り、車体に弾丸が当たって弾かれる甲高い音が車内に響き渡る。

「ちよ、重いよ！　これ重機関銃だよ！」

後部座席のフラッシュがその音を聞いて悲鳴じみた声を上げる。

「くっそ、下手すると貫通するぞ。フラッシュ撃ち返せ！」

「うわっ、！　無茶言わないでね！！」

後部ガラスが割れて破片が座席にうずくまるフラッシュに降り注ぐ。それを見てすぐさまルートはドアの窓から身を乗り出して拳銃で応戦する。

何発かが当たって火花を散らす、効果があるようには見えない。12発の弾丸はすぐに弾切れを起こし、ルートは車内のフラッシュに投げ渡す。代わりにフラッシュが持っていた拳銃をルートに渡すとフラッシュは弾切れの銃のマガジンを取り出して弾の入っているマガジンを再装填する。

「ルート！　タイヤ狙え！」

「やってる！　まっすぐ走ってくれ！！」

「無茶言つな！！　八子の巣だぞ！」

走っている上に、レイが回避行動をとっているために狙いは定まら

ない。それでもルートはタイヤを狙って撃ち、そのうちの1発がタイヤに命中し、パンクして破裂音が響くが、車体は傾かず、黒い破片が飛び散る。

固形タイヤを使っているようで弾が当たっても別段ダメージがあるようには見えず、諦めてルートは重機関銃を街中にも関わらず遮二無二に撃つてくる男を狙って引き金を引く。男が自分が狙われていることに気が付いてルートを狙うが、もとより反動が強く、狙って撃つよりば撒くと言った方が正しい重機関銃では車に乗っているルートを撃つことなどまぐれ当たりを期待するほかない。ルートは逆に落ち着いて狙いを定めると、1発ずつ丁寧に狙って撃つ。

だが、動局的を撃ちにくいのはこちらも同じで、なかなか当たるものではない。それどころか、背後のもう1台のジープと黒塗りの車に視線を向けるとルートは目を見開いた。

「なんて奴らだ、レイ、あいつらロケット弾持ってるぞ!!」

「何を考えてるんだ、あいつら!!」

レイはハンドルを大きく切って細い道に入った。身を乗り出せばビルの壁に擦れるほどの狭い路地にジープが入ると、後ろからすぐに追手のジープが入ってくる。だが、細いおかげで後続のジープはルートたちの車両を味方のジープ越しに見ることになったため、ロケット弾を撃ちたくても撃てない状況になってしまった。

角を曲がって一瞬敵の銃撃が止んだ隙に、うずくまっていたフラッシュが起き上がって割れてしまった窓から銃を覗かせて発砲し、運転席と助手席の隙間から後部座席に乗り移ったルートがその隣でマガジンを交換して撃ち続ける。

「路地は長くは続かない。何とか打開策を見つける!」

路地にあつたドラム缶をレイが跳ね飛ばし、ドラム缶が内容物をぶちまけながら散乱する。スピードをさらに上げながらレイが叫び、ルートは銃を撃ちながら脳をフル回転させて何とかしようと思考する。

「迎えは出口まで来てる！　そこまで持てば良い！」

「あのロケット弾、避けられるか!?!」

「形は!?!」

レイの質問にルートは窓から顔を出して後続のジープの合間から2台目のジープに乗っている男が持っている筒に目を凝らす。そしてその筒の特徴を克明に記憶してそれを言葉にする。

「ダークグリーン、照準器は八角形、太さは……20センチもない奴だ！」

「『フォールス』か、赤外線誘導だ」

「フラッシュ、照明弾出せ！」

「分かった!?!」

座席下の赤い箱をフラッシュは取り出すと、その中にあつた照明弾用の銃を取り出す。

「『フォールス』は再装填するタイプだ。再装填に時間があるから、その間に逃げ切るぞ！」

赤い照明弾を銃に込めて、フラッシュは座席に伏せた。ルートは頭を出さないでジープの背後に向けて銃を撃ち、背後の重機関銃を牽制する。

「ああもう、1日の休養すら許されないのか」
「マガスを倒したらたまってる有給消化してやる！」

妙な決意が3人の中で芽生えた瞬間だった。

第三十一話 追手（後書き）

作者「いわゆる1つの労災が適応される一歩手前ですわ」

道男「いきなりミスターやるんじゃない……。とはいえ、旅団に労災があつたらよかつたのにな……」

作者「出てきませんが一応残業手当の延長線みたいなものはあるはずなんですけど、たぶんこの小説が完結するまではおそらく適応されません」

道男「というか、それまで入っていける隙間ないだろう？」

作者「いや、番外編でも作ればいいんですが、番外編のネタが今のところ少ないので5000字も書けない気がするんですよ」

道男「レイの年齢ネタはどうしたんだ」

作者「いやあ、本編で少し使っちゃったからボツにしようかなと思います。かといってフェイナのレイへの想いとかやるにしても、私に恋愛を語らせようなんて100年早いですよ」

道男「……、そういう小説読んでいたことないよな。「なるう」では読んでるだろうが」

作者「まあ、ファンタジーものとかは大体そういうもんでしょ？でも、いざそれを自分で書くことと思うと、どうしても筆が止まるんですよ……」

道男「つまり、ネタに困っているわけだな」

作者「番外編の、です。本編はまだ脳内にストックがありますから
ちよんたい
無問題です」

道男「それならいいが……」

作者「はい、これからも頑張って本編だけは更新続けたいと思っています。番外編とかは、終わった後にいくつかやるか、いつそのことやらないということもありますので」

道男「そういえば、最近新しい小説の構想を考えているらしいな」

作者「……余計なことを言わないでよろしいですよ。この小説が終わったならそれで終わりたくないのです。まったく違うファンタジーものでもやるうとか考えてますけど、まだ構想の段階です。いつそのこと後書きはルートさんと私でやっちゃいます?」

道男「同じ作者とはいえ、それは駄目だろう」

作者「ですよねえ。まあ、ネタに困ったらそういうのもありですね」

道男「だから……」

作者「ともかく、それはこの小説が終わったらの話ですから、それはもう終いにしましょうか」

道男「次回予告でもして終わるとしようか」

作者「はい、え、追手に追われるルートたちが都市を脱出するお

話にする予定です」

道男「感想などお待ちしている」

作者「是非 m () () m

第三十二話 カーチェイス（前書き）

第三十二話 カーチェイス

小さな都市の郊外と中央部を隔てる外壁、そこにある都市唯一の出入りに物々しい恰好をした男たちが都市の中を見据えて立っている。そのあまりの圧迫感に出入りを監視する都市の監査官や警備の兵士は近寄ることもできずにその様子を見守るしかなかった。

彼らにしても、戦車と装甲車を引き連れたこの男たちが現在では都市に修理を要請している、いわば客なのだということは知っている。だから出入り口を半ば封鎖するような行動にも、表だって警告することができない。ただの客ならばともかく、彼らは世界屈指の傭兵組織なのだ。いかに辺境とはいえ、その名前ぐらいは軍や政府に仕える者なら知っている。

「都市が騒々しいな」

「最後の通信では、『尾行されている』とのことでしたけど」

ルートたちが接敵したとの知らせを受けた旅団は、すぐさま戦車と装甲車に出動要請を出し、マック自らも装甲車に乗り込み都市まで出向いている。

何事もなければ、マックはジゼルの手の者がいる店に行つて情報収集をしようと考えていたのだが、これではとてもじゃないが出来るとは思えない。ルートたちから知らせを受けた直後、修理の名目で艦に乗り込んでいた都市の人間を有無を言わせず艦から追い出し、艦はすでに臨戦態勢に入っている。

懸念していた通り、この都市はマガスと繋がっていたようだ。

「さすがに戦車を連れて都市に押し入るわけにもいかんからな。こ

ここで待機するしかないんだが……」

「まあ、ルートさんたちが簡単に死ぬとは思えませんが」

装甲車の上部ハッチから上半身を出し、車載の巨大なグレネード発射筒の引き金に手をかけているカンナは都市の中を睨み付けながら言った。

「あの音を聞け、重火器の発砲音だ。街中でそんなものをバカスカ撃つような奴にろくな奴はいないんだ。大事に至っていなければいいんだがな」

「そんなに心配ならバイクかジープを持って来れば良かったですね」

「人手が足りんのだ。都市の人間を追いだしたから修理にも人を回さなければならんし、食糧や弾薬の補充に人を出していて、その積み込みも大急ぎでやってるわけだから、動ける人間があまり多くないのだ。お前たちを引っ張ってきたのは401部隊に選出されて、他の任務から外れていたからだ」

後ろを振り向き、戦車の前で一服しているフィリップとラーキンに目を向ける。2人が慌ててタバコを地面に落としてもみ消すのを見て、マックは苦笑する。

戦闘態勢の時に一服するとは、いい度胸だ、とマックは内心で思ったが、それよりも大事な事が起きているのであえて何も言わないことにした。

「音が近づいてきているな……。フィリップ、ラーキン、持ち場に付け」

「了解」

2人が装甲車の陰に身を隠し、銃を都市の中に向ける。

それに気が付いた警備の兵士たちが慌ててそれを止めに来る。

「ちよ、何をしているんですか!? 今すぐ銃を下しなさい!!」
「拒否する。我々はこれより起こる戦闘に対する防御を行っているだけだ。貴様たちに危害を加えるつもりはない。それでも止めると言うのなら、ここにいる全員を相手にしてもらおうことになるが?」

駆け寄ってきた、まだ青年と言っても過言ではない若い兵士に向けてどすの効いた低い声で言い、思い切り睨み付けると、兵士は完全に尻込みしてしまったらしく走って出入り口横にある詰所に走っていき、同僚を連れて都市の中へと消えていった。そのただならぬ様子に監査官も逃げ出し、出入り口はマックたちを除いて無人になっってしまった。

それを見てマックは呆れてため息をついた。

「なんだ、腰抜けどもめ。まあ、あの様子じゃあいつらはマガス繋がりにゃなさそうだが」

「腰抜けは生き残る、とも言います」

「蛮勇は早死にする、とも言っな」

もつともだ、とマックは無言で頷く。

あの兵士たちはそんなことを考えてもいなかっただろうが、それが結果的に彼らの生存に繋がったであろうことは疑う余地もない。

マックは戦車の砲塔上部ハッチに滑り込み、上半身だけを外にさらす。ハッチ横に置いておいた無線、耳当て、バイザーが一体化したヘルメットをかぶると、バイザーを下す。視界が暗くなり、強い光にも耐えられるようになったマックは車内に弾込めを伝えて都市の通りを見据える。

すでに都市内でも事態に気が付いた市民が建物内部に避難を始めて

いる。通りには誰もおらず、心置きなく戦えると、マックは内心でニヤリと微笑む。

「路地抜けるぞ！ フラッシュ、準備は良いか！？」
「いつでも！」

細い路地の先が開けている。大きな通りに戻ってきたのだ。ジープが路地を抜けると同時にレイはハンドルを切って素早く方向転換し、頭に叩き込んだ地図を頼りに出口を目指すべく速度を上げる。

後続のジープが路地から飛び出してきたところをルートが狙い撃ち、重機関銃をばら撒いていた男にその1発が命中し、男が車上でのけ反りながら倒れ込んだ。

そして、問題の2台目のジープが姿を現した。ハッチから上半身を出している男の手にはロケット弾が握られており、すでに照準器を通してこちらを狙っていた。

「出口はあとのくらいだ！？」

「5分もかからん！ 曲がりが多いから揺れるぞ！」

再び思い切りハンドルが切られ、車体が遠心力で大きく傾き、外側にルートの身体が押しやられる。曲がったためにロケット弾の照準から逃れ、直線道路で距離を取ろうとレイが最大までアクセルを踏み込む。

「直線が続く、ここで撃ってくるぞ！」

「ルート、タイミングは合わせるよ！」

腕だけ窓から出し、照明弾を握るフラッシュは風を切る音とエンジン音に負けないくらいの大声で言った。

1台目のジープは、重機関銃を撃つ男は死んだが、助手席の男が窓から半身を乗り出してマシンガンを乱射してくる。身を伏せながらも反撃し、敵がマガジンを交換している隙などを見ては顔を出して発砲する。

と、1台目の運転席の男が助手席の男が助手席の男に何かを叫ぶ仕事をすると、ハンドルが切られて大きな通りでルートたちの乗るジープの真後ろから斜め後ろへと位置を変える。そして開いたスペースに2台目のジープが入り込み、その後ろに黒塗りの車が続く。

「撃ってくるぞ、フラッシュ、行くぞ！」

「いいよ！」

ロケット弾の砲身がこちらに向けられ、それを持つ男の口元が歪む。そして、引き金が引かれ、細い対戦車ミサイルが砲身から解き放たれ、高速でルートたちめがけて飛んでくる。

「今だ！」

ルートが合図すると同時にフラッシュが窓から後方に向けて照明弾を放つ。放たれた照明弾は赤外線誘導のミサイルとジープの間に入り込み、ミサイルのロックを照明弾に強引に変更させる。そして照明弾が地面に向けて落ちると、ミサイルもその後を追うように地面に着弾、大爆発を起こしてコンクリートを砕く。2台目のジープは砕けて到底走ることできなくなった道路に飛び込み、瓦礫でバランスを崩すと回転しながら地面に叩き付けられ、逆さまになったまま勢いで地面を滑り、路肩に止まっていた車に激突した。後続の黒塗りの車はそれを間一髪のところまで避け、1台目のジープと共に追撃を続ける。

「後少しだ！　ここを曲がれば出口まで一直線だ！」

大きく左にハンドルを切り、ジープが曲がると、突き当りに入ってきた時と変わらない出入り口が姿を現した。そしてその先には見慣れた車両が2台、こちらに正面を向けて止まっている。それを見てルートが笑みを浮かべる。

「旅団長、随分と連れてきたな」

運転席のレイも、感心したように言い、それまで後ろを向いて応射していたフラッシュも前に振り向くと、口笛を吹いた。

「戦車と装甲車の間を突っ切るぞ！」

そうレイが言った瞬間、戦車の砲口が火を噴いた。シュツと言う飛翔音が前から横、後ろへと過ぎていき、ジープのボンネットを直撃、ボンネットが吹き飛んで車体が宙を舞う。落ちてくるジープを黒塗りの車が巧みに避けるが、これ以上の追撃は無理だと判断したのか急ブレーキをかけて引き返そうとするが、それよりも速く装甲車の

脇から放たれた無数の銃弾がエンジンを穿って動きを止めると、そこに向かって装甲車からグレネードが放たれ、黒塗りの車のフロントガラスを貫通して内部で爆発、血潮が窓を染めるよりも速く車が爆散して破片が空高く舞い上がり、天井部が紙のようにヒラヒラと空を舞うと地面に叩き落とされた。

「お見事」

ジープからその様子を見ていたルートはそう呟き、ジープの速度が落ちてきたことに気が付いた。振り向くとレイはジープを装甲車の脇に停車させようとしていて、そこには見慣れた顔ぶれが集まっていた。

「おいおい、修理代は誰が出すんだ？」

戦車から飛び降りてきたマツクはジープの惨状を目の当たりにして天を仰いだ。

「ご無事で何よりです、3人とモ」

ラーキンが銃を下して後部のドアを開けようとするが、銃弾で開閉機構がいかれたのか軋む音だけでなかなか開かない。業を煮やしたラーキンがドアを文字通り引きちぎると、マツクの表情も引き裂かれんばかりに歪んだ。

「なんだ、401部隊の面子で来たのか」

車を降りて、ラーキンの後ろにいるフィリップ、装甲車から降りてきたカンナを見てルートは言った。

「動ける奴がこいつらしかいなかったんでな。とにかくこの都市を出るぞ」

「政府はマガスに繋がってる。入った店の店員が教えてくれたよ」

そうレイが言うと、マックが意外そうな顔をする。

そしてポケットから一枚の紙を取り出すと、それをルートたちに見せた。

マックの文字で短い単語が書かれているだけだったが、それを見て3人はその意味を理解した。

「そう、その店だ」

「やはりか、ジゼルの『支店』でな。俺も行くこうとしていたんだが、行く手間が省けたな」

「これは、『お土産』だ」

ルートは店員の女性から受け取った袋をマックに手渡した。中身はほとんど戦闘で使ってしまったが、袋の一番底に小さなディスクが入られており、それを取り出してマックはニヤリとした。

「マガスの現在想定される戦力が入ってるんだ。これで作戦が立てられる」

ディスクをポケットにしまうと、マックは戦車に戻り運転席付近の装甲を強く叩く。それを合図に戦車がエンジンをかけ、黒い排気ガスが後方に吐き出される。

「では、戻りましょうか。短い休暇、楽しめましたか？」

おそらく、カンナに悪気、皮肉など毛頭もなかったのだろう。

だが、それを聞いた3人は物凄くいい笑顔でカンナに振り向いた。

「「仕事だ」」

ワーカホリック
仕事中毒者は休養を望む。

第三十二話 カーチェイス（後書き）

いよいよ、最終決戦の地へ、行こうとしているのに3人の新たな事実が発覚！！

そう、彼らは仕事中毒者だったのだ！！

どうでもいいですよねえ。

それはともかくとして、こんな作品ではありませんが、初めて評価いただきました。しかも両方5ptも頂けるなんて、感謝の極みであります。

本当にありがとうございます。

これからも精一杯書いていこうと思っていますので、よろしく願います。

何しろ、作者は打たれ弱いというか、メンタルが弱いというか、弄られると簡単にへこんでしまうので、いろいろ評価と違ってビクビクしてるんですよ。

だから、とてもうれしいです。

ルートたちをハッピーエンドに導けるよう頑張りますので、今後ともよろしく願います。

感想などお待ちしております。

第三十三話 裏切りには裏切りを……（前書き）

ハンムラビ法典みたいなこと言ってますが、気にしないでください。

そう言えば、エジプトかどこかで目に硫酸入れた人に対する刑がそのまんまだったんですってね。延期とかになったそうですけど、怖いですねえ……。

犯罪を容認する気はさらさらないですが、自分がされてもつらくないことすればいいのよ、って思ってます。あ、それじゃ犯罪にはならないか。そうだ、そうすればいいじゃないですか……。

とか、考えている今日この頃。

第三十三話 裏切りには裏切りを……

「状況を説明する」

いつものように、集められた隊員たちの前で、マイクを手に持ったマックは巨大なスクリーンを指示棒で軽く叩いた。

「我々は現在、『デルジャナ』南方190キロのこの地点にいる。

『デルジャナ』までの行程はほぼ無事に消化し、先日立ち寄った都市での修理は途中で止めることになってしまったが、ほぼ全快に近いほどまでになっている。我々はこれより都市『デルジャナ』へ侵攻、敵勢力を殲滅しつつ今回のターゲットであるジャック・マガスを目指す」

マガスの顔写真がスクリーンの端に映し出される。

「『ニースローグ』の仲間により敵の現在の戦力が概要ではあるが、掴めた。戦車、航空機、ヘリ、どれを取っても我々では到底相手取ることのできない数だ。概算ではあるが、戦車100、航空機80、ヘリ40、歩兵戦力に関しては方に達している可能性すらある」

辺りをどよめきが支配する。

桁が違いすぎるのだ。旅団は非戦闘員を含めても2000人になんとか届く程度で、数の上で圧倒的に負けている。戦争は数ですべて決まるとは言わないが、重要なアクターであることに変わりはない。5倍以上の差があつては少なからず戦う前から結果が見えていると思われても仕方がないの無いことだ。

「ご存知の通りだが、我々は少数精鋭を気取っているわけではない

が人数が少ない。正面切つて戦うことはまず不可能だ。そのため、我々は古い仲間のやったことを再びやるうと思う」

『デルジャナ』の地図が拡大され、円形の都市の詳細が表示されたものに切り替わる。そして、そこに1本の青い矢印が南から伸び始め、都市内の入り組んだ迷路のような道を進み、中央付近にあるドームのような建物に吸い込まれていった。

「15年前、『始まりの機械人』を倒すために機械人だけの部隊が組織され、見事彼らを打ち砕いた。あの時の目的地はここではなかったが、我々の目指す場所はここ、『デルジャナ』最大の屋内競技場だ。内部には80基以上の核弾頭が配備されていると思われる」

「発射時には、外に出すのですか？」

暗闇から声が響き、それにマックは小さく首を横に振ることで返答した。

「この天井は開閉式だ。ドーム自体が巨大なサイロの役割を果たしている。『大崩落』時に軍事転用されたため、ミサイルの直撃程度では破壊することは叶わん代物になっている。そのため、『血の盟約』戦と同じく、少数による潜入工作と大規模な主力による戦闘となることに決まった」

スクリーンに映し出されていた映像が切り替わり、『デルジャナ』の地図が縮小、周囲の地形が姿を現す。

「出入口は3つ、東西、そして南だ。本艦は南より突撃、敵の陣地を乗り越えて中枢を目指す。それを航空部隊1個小隊が掩護、戦車隊は2隊に分かれて東西から部隊を率いて突入する。これはあくまで時間稼ぎだ。『ニースローグ』都市軍の派遣隊到着を待ち、絶

対に無闇な先行はするな。突入するのは401部隊、メンバーは前回と同じで行く。リーダーのルートは作戦までに必要と思われる物をすべてリストアップして提出しろ。レイ、全ての武装を換装するから後で俺のところに来い。カンナ、お前の十八番を存分に発揮できるよう体調を整えておけ。ラーキン、フィリップ、とにかく出来るだけ多くの武器弾薬を運べるようにしておけ。弾が多いに越したことはない。これは大柄なお前たちにしかできないことだ。」

ルートたちに手早く指示を飛ばすと、マックはスクリーンを消す。照明がついて目が明るさに順応するまで目を瞬かせる。

「『ニスローグ』都市軍の到着は明日の1500時を予定している。だが、敵の動き次第ではそれを待つことは不可能だ。その場合は、先ほど通り時間稼ぎに徹する。401部隊はヘリで途中まで輸送する。掩護3個小隊と共に上空から突入し、浸透、ドームを目指せ。絶対に死に急ぐんじゃないぞ!」

マックがその場を締めて、作戦会議は終了した。

「な、なんだお前たちは!」

「あら、私を知らない人がこの建物にいたとは驚きね」

ジゼルは行く手を遮った男を押しつけて通路を進む。その後ろには武装した兵士が顔を隠してついてくる。そしてジゼルの横にはマスクで口元を隠しているフェイナがジゼルの背後を守る様に寄り添っている。

「こ、これは越権行為だ！ 軍のクーデターは極刑だぞ！！」

「残念、裏切られたのは我々なのよ？ そこをお退きなさいな」

ジゼルが自らの持つ拳銃を男に向けると、撃鉄を起こす。

「これより我々『ニースローグ』都市軍は世界に仇を成す敵、マガスへの共謀容疑で大統領を逮捕する。法規に基づき、現役の大統領と言えども逃れることは許されない！」

ジゼルは男の足元を拳銃で撃つ。男は飛び上がって逃げ出していく、ジゼルは男に目もくれずに拳銃をしまうと階段を上って大統領の執務室を目指す。

「フェイナ、大統領が妙な動きをしたら、分かっているわね？」

「はい、皆さんの代わりに……」

もし、大統領がジゼルたちの手を逃れて逃亡した場合、悪者になるのは確実にジゼルたちである。何しろ、相手は大統領だ、しかも人望厚く、彼がジゼルたちが裏切り者だと言えば、市民は大統領に味方するだろう。自分たちが支持していた男が何者かも知らずに。

だから、何があるうとも大統領を逃がすわけにはいかない。逃げようとしなくとも、妙な動きを見せればフェイナが大統領の動きを止

めることになっている。これは、双方の同意のもとで決まったことで、いざとなればジゼルは全ての責任をフェイナに被せることになっているのだ。申し出たのはフェイナで、そうすることで少しでも失敗時のジゼルに対する責任が軽くなれば、とのことだった。

最初は、ジゼルは猛反対した。

だが、結局ジゼルが折れてそういうことに決まった。失敗時は、フェイナが単独で都市を脱出、旅団と合流することになっている。それを追撃するのはジゼルの役目だが、本気では追わない。それどころか、フェイナが『デルジャナ』に向かっていると口実をつけてでも『デルジャナ』へ向かう腹積もりだ。

もちろん、失敗など考えていない。

そのためにこの大統領公邸を軍の車両で包囲し、敷地内も完全に封鎖したのだ。

だが、大統領たるものいつ何時も造反に備えなければならない。歴代大統領が造った、大統領のみが知る脱出口の1つや2つ、あってもおかしくない。

「いつそのこと最初に1発撃っちゃいましょうか」

「ジゼルさん、それは駄目ですよ……」

「冗談よ。さあ、行くわよ」

豪奢な木製の両開きの扉。

その目の前にジゼルとフェイナは立ち、ジゼルが背後の兵士に待機するよう指示する。

そして扉を丁寧に2回ノックした。そして中からの返事を待たずに扉を開け放ち、大きな執務机の向こう側で外を眺める男を見据える。

「……まさか、このようなことになるとはな」

男、大統領は静かな口調で囁くように言った。そして顔を2人に向け、柔らかな笑みを浮かべたまま椅子に座ると、背もたれに寄りかかって腕を組む。

「大統領、国際的犯罪者、ジャック・マガスに対する共謀容疑で身柄を拘束させていただきます」

「今ならまだ間に合う。すぐに引き返すがいい。私もそれくらいを許す度量はあるつもりだ」

「残念ながら、主導権は我々にあります。裁判所に書類を提出し、すでに逮捕状を請求しました。大統領、いえ、大統領の偽者、あなたの悪事は露見したのよ」

ジゼルが合図してフェイナが持っていた拳銃を大統領に向ける。

だが、大統領は臆する気配も見せず、笑みを崩さない。

「ならば、冥土の土産に君の推理を聞こうじゃないか。どうして私が偽物だと思うのかね？」

「……、いいわ、教えてあげる。あなたが15年前の終戦前に、機械人たちの残骸を最初に確認したのはあなただったわね。あなた、いえ、当時の彼はその時あなたたちに殺されたんでしょ。そしてあなたがその座について、見事にあなたは大統領に就任してこの都市の行政を握った」

そこでジゼルは一息つき、大統領の反応を窺うが、笑みを浮かべたまま動かない。だが、その目は先ほどと違い、こちらを見定めるような目になっっている。それだけでも、ジゼルにとっては彼が偽物である証拠になっているのだが、それだけでは足りない。圧倒的な証拠がある。反対派すら賛成に回すような、決定的なものが。

それすなわち、大統領自らの言質。

「続けて」

大統領が静かに促す。その手が妙な動きをしないかフェイナが監視していたが、今のところ逃げるそぶり、何かをしようというそぶりは一切見せない。

「……………そしてあなたは『デルジャナ』の監視と管理を申し出て都市軍から選抜するよう私に申し出た。まさか私が選んだ人間が裏切るとは思わなかったけれど、裏であなたが手を引いていたのなら領けるわ。トップが言えば決意も揺らぐわよね。それも尊敬しているのだから、なおさら、ね。そして見事あなたは『デルジャナ』にマガスたちを招き入れることに成功し、今まさに巨大な災厄を引き起こそうとしている」

言い終わると同時に大統領が拍手をし始めた。

今銃を向けられているにも関わらず、大統領は余裕綽々、緊張している様子もなく2人を見つめ、口を開いた。

「お見事、と言いたいところだが、あいにく間違いが含まれている。監視部隊の指揮官を誘ったのはマガス本人だ。そして、私はマガスを『デルジャナ』に招き入れたのではない。彼はずっと昔から『デルジャナ』にいたのだ」

「なっ!!! それじゃ、まさか……………!!」

フェイナが驚いて声を上げると、大統領はジゼルに向けていた視線をフェイナに移して、小さく頷いた。

「いかにも、ジャック・マガスという男は機械人だ。『デルジャナ』

においてナンバー2の権力を持っていた、な」

「馬鹿な！ 『始まりの機械人』 たちはすべて殺されたはずだ！」

だが、その問いは大統領の高笑いに遮られる。

「この男の身体は『始まりの機械人』が殺された場所で奪い取った。そんな場所では、敵が1人生き残っていてもおかしくあるまい？」

「『始まりの機械人』が生きていたとなると……、あなたにはもっと聞かなければならないことがありますね」

執務机を回り込んで拳銃を大統領にジゼルは向けるが、大統領はまったく動じない。

「おかしなことを言うのだね、ジゼル。私がここまで追い詰められておきながら、君たちにこれ以上話すと思っているのかね？ 機械人たる私が、貴様らのような人間に、屈するとても？ あいにく、そうはいかないのだよ！」

大統領の手がジゼルの持つ拳銃に伸びる。

フェイナが大統領の腕を撃ち、片手は弾き飛ばしたが、もう片方の手はその陰からするりと伸びて、引き金に手を添えるジゼルの手を握りしめた。

「なっ！」

「せいぜいあがきたまえ、人間諸君」

引き金に指を滑り込ませ、大統領、いや偽者は自らに向けられた拳銃の引き金を引いた。

乾いた破裂音が響き渡り、偽者の脳天に小さな穴が開く。だが、血

が嘔き出すこともなく、偽者は衝撃で椅子からずり落ちて執務室の床に横たわった。予想外の行動にその状態で固まってしまうジゼルとフェイナは、倒れた偽者に視線を集中させる。

「司令、大丈夫ですか!!」

そこに発砲音を聞きつけた兵士がなだれ込み、大統領の死体、いや残骸を見て絶句する。血も流すことなく脳天に穴の開いた顔を兵士に見せつけるかのように倒れている偽者を見て、兵士は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「ほ、本当に大統領が機械人だったなんて。それでは、我々は一体何のためにこの都市を……こんな奴のために!」

後から入ってきた兵士も、あまりの衝撃に言葉を失っている。それを見たジゼルは彼らに向き合って静かに口を開いた。

「あなたたちはこいつのためにこの都市を守っていたわけじゃない、あなたたちは市民を守ってきたのよ。それは誇るべきものであって、決して軽蔑されることではないのよ。だから、自暴自棄にはならないで。私たちには、まだやらなくてはならないことがまだ残されているのよ、フェイナ?」

背後にいたフェイナに向き直ると、フェイナが微動だにせずジゼルに向き合った。

「懐かしい面子に会いに行くわ。案内を頼めるかしら」

そう言うと、フェイナは顔をほころばせてジゼルに敬礼した。

「お任せ下さい、
閣下」

第三十三話 裏切りには裏切りを……（後書き）

作者「はい、どうも、作者のハモニカです！」

道男「ルートだ。どうした、今日のご機嫌じゃないか」

作者「はい、私、初めての感想を頂きました！！ 笑人様、ありがとうございます！！」

道男「感想というよりはご意見に近いな」

作者「どっちだって良いんです！ 私の作品を見て感じていただいたことを教えてもらおうということは、とてつもなくうれしいことなんです！」

道男「まあ、俺としても作者が元気になってかくペースが落ちないことはうれしい限りだが」

作者「……………」

道男「……………おい」

作者「いや、違いますよ？ 書いてますよ？ ただ、なんか台詞ばつつかの話になっちゃって……………」

道男「会話が多いと切りにくいことはあるだろうが、それは多少工夫しろよな？」

作者「あれ、今日のルート妙にとげとげしくない……。これは、雨

が降るか、いや天地がひっくり返るのですか!？」

道男「んなわけないだろうが。素直に喜んでやってるのに、なんだその言いぐさは」

作者「あ、あなた本当にルートですよ、マスクしたフラッシュとかじゃないですよ?」

道男「どうして、そう思う?」

作者「いや、彼、私に『属性が欲しい』とか、『特殊技能が欲しい』とかせがむ前におべっか使ってくるから」

道男「……この間のだけでは足りなかったようだな……」

作者「あれ、どこ行くんですか? まだ終わってませんよ? って、行っちゃった。よく分かりませんが、フラッシュは前にも何かやらかしていたようですね……。まあ、それはともかく、これからも感想などはいつでも、というか是非お願いいたします。ご意見でも構いません。お待ちしております。それでは今日はこの辺で……」

道男「小便はすませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋のスミでガタガタふるえて命ごいする心の準備はOK？」

照男「え、ちょ、いきなりなに……、うわあああああああああ
あっ！！！！」

第三十四話 舞台は整う（前書き）

大学のプレゼンの用意で忙しくなるので、今日、6月14日から更新が遅れることが予想されます。

読んでくださっている方にはまことに申し訳ないのですが、次回は少しお待ちください。

更新できない間にストックを作っておきたいとも思いますので。

第三十四話 舞台は整う

「ボス、レーダーがこちらに接近する大型艦を捉えました」

『デルジャナ』中央部にある巨大なドーム、その地下にある薄暗い部屋の中に、機械的な声が聞こえ、暗闇で影が動いた。

「おそらく、先刻来た『血の盟約』の生き残りが言っていた通り、『フリーユージェ』が来たのだろうな。時間的に頃合いのようだ、全核弾頭の準備はどうなっている？」

「全体の39パーセントが目標設定を完了しました。いかんせん数が多いのでAIが処理に追われています」

「想定内だ。『フリーユージェ』がここに来るまで撃ち上げることは無理だな……、都市内部に『ジャッカル改』を放ち、対空、対地ミサイルを展開しろ」

「了解」

部屋には数人の男がいる。その全ての男が頭にヘルメットのような物を装着し、目を覆うほどにかぶっている。そして、その手は何かの操縦桿のような物を握っており、それぞれの座っている席の前には青空が映るモニターが設置されている。そのモニターの中を赤い点が目まぐるしく動き回り、空を監視している。

「『ニースローグ』の動きは？」

「先刻、SM 01との通信が途絶えました。最後の送信により、『ニースローグ』の軍がこちらに動き出そうとしていることは確実です」

「あの都市にも切れ者がいたようだ。予想到着時間は」

「現刻よりおよそ6時間です」

そこまで聞いて、マガスは考え込むように顔を俯けて、顎を手で撫でる。

「それまでにどれだけ設定が終わる」

「妨害が無ければ89パーセントが終わる予定です」

「ギリギリだな。『グラディオン』は使えるな？」

「いつでも。ですが、使用すれば外部にいる『ジャッカル改』はもとより、防衛兵器も多大な被害を受け、実質都市地表は制圧されま
す」

「ドーム内の兵器が無事なら問題ない。タイミングは私が指示するから、常に回線を開けておけ」

マガスは薄暗い部屋で独り言のように話している。その場にいる機械人は誰一人口を開いていない。にも関わらず、どこからともなく声がマガスの問いに次々と答え、指示に従っていく。

「反乱軍の配置が完了しましたが、彼らにこの事は伝えますか？」

「ふうむ、指揮官はCM-09だったな。奴だけに伝える。所詮、反乱軍も人間だ、我々の粛清対象に当たる。防衛に関しては貴様の好きにして構わんから、問題があれば私に連絡しろ」

マガスが話している相手は、この都市『デルジャナ』の中枢を担うAIである。15年前の戦争で大きく損壊したが、15年の年月をかけて完全なまでに修復されたもので、機械化された全ての都市機能、防衛兵器の統率を引き受けている。後付けで設置したミサイル群や対空砲群はAIとは独立しているためにこの部屋の機械人たち
が操作するわけなのだが、それ以外の兵器、特に『ジャッカル改』
に関しては情報処理などの全ての作業を『ジャッカル改』のAIが

ら情報を受け取り、処理して、それを返すという、いわば母機の役目を果たしている。

そのため、本来独立して動き回る『ジャツカル改』は統率された動きをして、いわば人間らしく動き回ることが出来るようになるのだ。連携など考えることもないほどのAIが母機によって歴戦の部隊として作り直されたようなものだ。

「南から来るな……、反乱軍は南門を守らせる。東西の門はそれぞれ『ジャツカル改』4機ずつ、私の配下の戦車を防衛に回せ。FMシリーズは敵艦への攻撃を第一優先とし、『ジャツカル改』は敵の戦車隊とへりを狙え」

最も大きいモニターには『デルジヤナ』の地図が映し出されている。それと連動している巨大な平面図が机の上のモニターに映し出されており、それに手を触れてマガスは使用可能な戦力を次々と各防衛拠点に割り振っていく。北部にある飛行場には無数の航空機のマークが映し出されており、それがゆっくりと滑走路に移動していく様子が映し出され、ドームからは『ジャツカル改』のシルエットが四方に散らばっていく様子が手に取るように分かる。

南門付近には、膨大な数の戦車とへりが配備されているが、それは指揮官を除きすべて人間、それを示すかのように反乱軍のみ色違いで表示されている。

「『フリーユージェ』、来るがいい。『血の盟約』は見事に打ち破ったようだが、私はそうはいかんど。全ての人間をこの世から排斥するまでは、死ぬつもりはないのだよ」

「それも持っていくの、か……？」

格納庫の一角、401部隊が必要な物をリストアップしてそこに集めているのだが、それを見てマックが頬を引きつらせている。

それもそのはずで、ルートがリストアップしたものの中には、対戦車ミサイルや重機関銃はもとより、旅団でまだ研究段階のはずのレールガンすら持ち出していたのだ。重量30キロを超え、持って走ることすらままならないほどの大きさのもののだが、ラーキンが持ってきたようだ。

「レイに使ってもらうことにしています。『ジャッカル』が出てきたら通常の兵器では倒せないですから」

「それは、そうだが、電源はどうするつもりだ」

「レイの主電源からもらおうと思っています。というより、ラーキンたちでも反動で吹き飛びかねないので」

平然と言っただけのけるルートにため息をつきながらマックは頭をかく。

確かにマックは必要な物なら何でも使えと言ったが、実射試験も行っていない武器を持ち出されてはたまらない。

「はあ、一応言っておくが、安全性は保障されてないぞ？ 弾だつてそこにある30発だけで、弾切れを起こせばお荷物になるだけだぞ」

「捨てていきます」

想像はできていたのだろうが、できれば聞きたくなかった台詞にマックは頂垂れる。旅団内で武器を開発したり、改良するのには金がかかる。特にこのレールガンに関しては、その貫徹力から次期主力兵器としての採用を検討しているもので、そのプロトタイプを捨てられるとマックとしてはかなり懐が痛いのだ。

「……言っても聞くお前じゃあないよな……」

「何を今さら言っているんですか、『お父さん』？」

ニヤリと笑みを浮かべるルートに、これ以上何を言っても無駄だと判断してこの件については話を終わらせることにした。

「さつきジゼルから連絡があった。『ニースローグ』大統領は機械人、おまけにマガスの手下だった。ジゼルがそれを制圧、すでにこちらに向けて飛び立ったそうだ」

「速いですね、昨日の今日でしょう？」

「ジゼルはやると決めたらすぐに動くタイプだからな。ちんたらしていて先手を打たれては目も当てられないからな。お前の時もそうだっただろう？」

「……………言わんでください」

ばつの悪そうな顔をしてルートが目を背ける。

このままルートを弄り倒してやりたかったマツクであったが作戦前にそれをやるわけにもいかないの、ほどほどにしておき、ここにいない残りの仲間のことに話題を変える。フラッシュが医務室で検査を受けていることは知っているのだが、残りの面子がここにいないのでふと聞いてみたのだ。

「ああ、レイは旅団長に言われて装備の換装しにいつてるし、残りの3人は、……ああ、あそこだ」

ルートは格納庫を見渡すと3人を見つけ出して指差した。見るとラーキンとフィリップを相手にカンナが格闘の練習をしている。大男2人に囲まれて、どう見ても犯罪現場にしか見えないような光景なのだが、カンナの無双っぷりを見ればそんな考えも霧散してしまう。

ゴム製のナイフを手に大立ち回りをするカンナは、殴りかかってくるラーキンの腕を最小限の動きで回避するとその腕にそってラーキンに急接近、その腹目掛けてナイフを突き立て、そのまま動きを止めずにラーキンをフィリップ目掛けて投げ飛ばした。フィリップといえども、同じくらいの図体のラーキンを受け止めては耐えきれずにラーキンの下敷きになって格納庫の床に叩き付けられて苦悶の表情を浮かべる。

と、同時に外野から拍手やら野次が飛ぶ。

「作戦前だったのに、何をやってるんだか……」

「良いじゃないですか。あの3人はなんだかんだで仲が良いんですから。格納庫（こく）の連中にもいいストレス発散（はつさん）になってるんじゃないですか？」

「それは、まあそうなんだろうが……、傍から冷静に見てるとあの

「2人が残念でならないのは俺だけか？」

投げ飛ばされて重なり合って倒れる2人を見てみると、マックにはどう見ても、コントか何かに見えてしまうのだ。しかも投げた本人はすました表情をしているのだから、何の冗談だと疑いたくなる。

「出発までまだ時間があるし、フラッシュとレイの戻りも遅いし、やることはないですね」

「これで仕事がつっかりできていなければ文句の言いどころが山ほどあるんだがなあ……と、通信か」

マックの通信機が着信音を響かせ、マックは手早くポケットから取り出すと耳に当てた。

「何事だ」

『目標都市で動きがありました。上空に航空機多数、都市全体の熱源が増増しました。おそらく敵が戦力を配置し始めたものかと思われます』

「動いたか。こちらを全力で叩き潰すつもりだろうな。警戒を厳にして何かあったらすぐに知らせろ」

『了解』

「動き出したようだな」

マックがポケットに通信機をしまうと、ルートは銃を手に持ったまま立ち上がった。

「ああ、潜入などと生易しいものではない。強行突入することになりそうだ」

「まあ、2度も同じ手を通じるとは期待していなかったがな」

「後でレイとフラッシュを連れて俺の部屋に来てくれ。話したいこ

とがあるのでな。今は13時か……、出発は14時を予定しているから、それまでに来てくれ」

「了解」

ではな、と言い残してマツクは格納庫から出て行った。それを見送り、ルートは通信機を取り出してレイとフラッシュに連絡を取り始めた。

「まずいわね……」

『ニースローグ』都市軍の総司令官、ジゼルはたった今聞いた情報に唇を噛む。その顔には焦燥の色が窺える。

「どつしたんですか」

ここは『ニースローグ』都市軍が所有する大型の輸送機の中だ。格納庫は2列に戦車が格納できるほどの広さを持ち、現に今もこの機

体の中には4台の戦車が積み込まれている。

ジゼルは機体のコックピット、副操縦士席に座って送られてきた情報に目を通していった。

後ろにいたフェイナが顔を出すと、ジゼルは後ろを振り向いて、1枚の紙をフェイナに手渡した。

「たった今、私の『支店』のある都市から来た連絡よ。『デルジャナ』周辺の都市から無数のゲリラが『デルジャナ』目指して移動し始めたそうよ。おそらく、マガスが分散させていた戦力を再集合させているのよ。このままだと、旅団が背後から攻撃を受けるわ」

そう言うと、フェイナの顔が豹変する。あわてた様子でその紙を食い入るように読み始め、その様子を見ながらジゼルは話を続けた。

「各地で同じような動きが相次いでいるわ。けれども、それは私とマックが要請を出した都市ではないわ。どこもかしこも裏でマガスと繋がっていた都市のようね」

「総勢、12万……」

「概算よ。それも、これから増えることが予想されるわ。彼らが合流したら、私たちがたどり着いたとしても勝てる見込みは大きく下がるわ。機長、高度を上げて加速なさい」

「了解しました」

機長の男はそう言うとかさず重い操縦桿をゆっくりと引いて機首を引き上げる。徐々に高度が上がリ、雲を突き抜けるとスロットルをさらに押し込む。エンジンの音がより鮮明に聞こえるようになり、加速したことを実感することが出来る。

「私たちが出発したことで、すでにマックは動き始めているわ。前にだけ集中していたら、背中を刺されるわ」

「そんな、急がないと!」

食いつくフェイナを落ち着かせつつ、ジゼルは話を続ける。
今、この機体には4台の戦車、そして燃料を抑えるために牽引して
いる戦闘機が2機ある。総勢20機の輸送部隊のそれぞれが似たよ
うな状況のため、これ以上はなかなか速度を上げられない。

「それじゃあ、どうすれば……」

「そこで、1つ聞きたいことがあるのよ、フェイナ」

ジゼルはフェイナの前で人差し指を顔の前で立てて笑みを浮かべた。

「戦闘機、飛ばせる?」

第三十四話 舞台は整う(後書き)

脚注を幾つか……

S M …… スパイマシナリー S p y M a c h i n e r y

C M …… コマンダーマシナリー C o m m a n d e r M a c h i n e r y

F M …… ファイターマシナリー F i g h t e r M a c h i n e r y

の略ということになっております。

ルビにしにくかったのでこちらに書いておくこととしておきます。

意味は何となく分かりますよね？

ほぼ確実に分かりますよね？

まあ、今後もたまにこの単語が出てくるとかと思うのですが、その際にラジオだとか誤解を招かないようにと思ひまして……。

それはともかくとして、前書きでも書きましたが、一身上の都合で2日に1回か連日の更新だったので、少し遅くなります。

まあ、1週間も空かないとは思っておりますが、一応お知らせしておきます。

誤字脱字、感想、ご意見などお待ちしております。

第三十五話 激励（前書き）

余裕ができたので投稿再開……。

土日に余裕が出来るのは当たり前ですが……。

第三十五話 激励

「おう、来たか」

ルートが、フラッシュとレイを連れてマツクの執務室に行くと、マツクが待ちかねていたようで立ち上がって執務机を回り込んでやって来た。

「で、どうしたんですか、いきなり」

「いやなあ、大事な作戦の前にこんなことを言うのも何なんだが……」

マツクは何かを言おうとしているようだが、渋っているのは、恥ずかしいのか分からないが言いあぐねている。ルートとフラッシュはそんないつもの彼らしからぬ行動に首をかしげるが、レイだけは笑いを堪えているのか肩が若干震えている。

「言いたい事があるならさっさと行ってやれ、マツク」

「ちよつと待て、こういうのは結構勇気が……、っておい、なんで昔に戻ってるんだ」

レイが普段のように敬語を使わず、ニヤニヤしながらマツクに言うと、それまでグズグズしていたマツクがレイを睨み返した。しかし、レイはその持ち前の鉄面皮のおかげか、憎たらしげなマツクの視線はレイの表層で弾き返される。

「レイが旅団長にタメ口とか、久しぶりだな」

ルートが意外そうな顔を隠そうともせず、レイを見つめる。フラッシュも、普段そついうことにつるさいレイのいわば暴挙のような行動に驚いている。

「こういう時のマックはな、むしろ弄つてやるべきなんだよ」

「レイ、ためえ何勝手な事をぬかしてやがる……」

「あ、旅団長が素に戻った」

うつかり素が出たマックはしまった、という表情をしてレイを睨み付ける。レイが口元を抑えて笑いを堪えていることをワザとらしく見せつけると、マックは今にも飛び掛らん勢いになってしまったため、ルートとフラッシュが慌ててマックの両手にしがみ付いてそれを押しとどめる。

「それで、旅団長、何を、言おうと、してたんですか！」

「ちゃっちゃと言って、レイと出てきますから！」

暴れるマックを2人がかりで来客用のソファに押し込むと、反対側のソファに2人は座り、まっすぐマックを見つめる。レイはあえてマックの背後に回り、そこからルートとフラッシュを眺める位置に立った。

「はあ、まったく、レイ、いつからそういう性格になった？」

「少なくとも、この2人が入団した頃からだと自認しているが」

「……あの発言、随分と広まってたな、お前の仕業か？」

「フェイナだ」

あの発言、ルートとフラッシュは知らないが、マックの中では黒歴史に真っ先に送られたレイの一言。それを思い出してマックに黒い

影が差したように目の前の2人は感じ、それが聞いてはいけないことであると、本能的に感じ取った。

「あゝ、この年になってこういうのも何なんだが、育ての親として言わせてほしい。絶対に死ぬんじゃないぞ」

「えっ」

見ればマツクの顔が僅かに赤くなっている。恥ずかしいのを隠すかのように頭をかくと、そっぽを向いてしまう。

「ツン d 「言わせるかあ!!」ガフツ」

何かを言おうとしたレイの顎にマツクの強烈なアッパーが入り、きれいな放物線を描いて床に落着して、以前ではまず聞かなかっただろうドスンという大きな音がしてレイは倒れ込んだ。

「相変わらず手が速いな、今の俺を浮かすとは……」

「10キロほど重くなったな。総重量はどのくらいだ」

殴ったマツクがその手を撫でながらソファの背もたれ越しにレイに振り向く。ガチャガチャと聞きなれない音を響かせながら立ち上がると、レイは袖をめくって人工皮膚で覆われていない腕をマツクに見せた。

「95キロだ。レールガン用の配線を取り付け、専用の装置が幾つか増えたし、後は今までの古い武装を新しい物に変えたから若干重量が増えたな」

「おいおい、重すぎるだろう。動けるのか」

「まあ、問題ない。固定砲台役でも引き受けるさ」

顎を摩りながら袖を元に戻すと、レイはソファの横に移動してマックを見下ろす。

「すまん、ルート、フラッシュ。こいつはお前らを親として心配してるんだ。素直に受けてやってくれ」

「素直も何も、俺はいつもこの調子だ……」

照れくさそうに頭をかくマックはルートたちにはあまりに新鮮で、懐かしいものであった。いつもの「旅団長」としてのマックではなく、1人の男、親としてのマックがそこにいたのだ。それが分かる、と、ルートとフラッシュはお互いの顔を見合わせ、苦笑した。

「旅団長、いえ、父さん、任せてくれ。俺は、絶対に死なないよ」

「死亡フラッシュ、レイ、少し黙ってようか」、すまん、フラッシュ……」

妙な事を口走ろうとしたレイにフラッシュが釘を刺す。

「ま、言いたいことはそれだけだ。それ以上言うべきことはないだろうからな」

「えっ、それだけですか？」

「まあな。そら、さっさと行け。これ以上ここにいられると俺が恥ずかしくてかなわん」

シッシとルートたちに出ていくよう仕向けるマックの図はあまりにも普段とかけ離れているがために、それを面白そうに見ていたレイは良い物が見れた、と呟いて背後からマックの飛び蹴りを食らったのはまた別のお話。

「そつえば、フェイナには言ったのか？」

執務室から強引に追い出されて、格納庫へ戻ろうとしていた時、ルートはマックに飛び蹴りを食らって仕返しにその足を掴んで放り投げたレイに対してそう言った。

ちなみに、3回転半ほどしてマックは見事に尻から床に叩き付けられ、「またやってしまった……」と呟いていたとかいなかったとか……。

「ああ、フェイナが『ニースローグ』に発つ前に一言かけていたが、まあ、あいつはもう子供じゃないからな、どこかの誰かさんと違って」

「……どういう意味だ、15歳児」

「正直言つて、15歳児は悪口になって無い気がするのは僕だけかな？ 5歳児とかならまだしも……」

レイにはからかわれ、フラッシュには掩護してもらえず、両サイドを敵に回したルートは大きく肩を落としてため息をついた。

「……それで、親としてのお前からは、俺たちはどう映ってるんだ？」

今まで聞く機会もなかったので、ついでに聞いてみる。レイは今ではルートの部下ではあるが、少し前まではルートを教える立場にいた。ルートの得意なことも、苦手なことも、ちょっとした癖も、ほぼ全てを把握していると言っても過言ではないだろう。

「ふむ、指揮官としては随分と成長したな。やはり未成年でこれだけの事が出来るというのは大したものだ。若干周りへの意識が足りないこともあるが、正直問題ないだろう。少なくともお前がよっぱどのとんちんかんをしない限りは敵はいない。フラッシュは、……もう少し強気になった方がいいと思うぞ」

「やっぱり、そう思う？」

フラッシュががっくりと肩を落とす。

もとより、フラッシュは人を怒鳴りつけたりするのがあまり好きではない。今でこそ命令という形で指示を飛ばせるようになってはいるが、少し前までは年上の旅団の人間に命令するのは気が引けるとか言って部下に敬語を使うということをしていた。マツクの聞き及ぶところになって矯正されたようだが、やはり原点である丸い部分はそのまま、どうしてフラッシュが指揮官になれたのか、レイは心底不思議だった。

「……よく面接通ったな」

「頑張ったんだよ、いろいろ……」

「まあ、自分の道を行くのも良いんじゃないか、レイ？ 確固たる自己を持つことは大事だと旅団長にも言われた気がする」

「よく覚えているな。お前らが入隊する前の話だぞ、それ」

「そうか？」

ルートは自分でよく覚えていたな、と思いつつも、今自分で言った言葉を自分に照らし合わせてみた。

己が道を行く、それは言うが易し、行いが難し、である。

マックは自らが正しいと思うことならたとえ非難されようとも絶対にやり遂げる。

フラッシュは自らの心に嘘はつかずに、下手に体裁を整えようとはせず、素の自分を貫いている。

レイは自分のすべきことを心得た上で、それを実行するだけの実力が無ければ動かない。要は勝てない戦いは仕掛けない主義だ。ルートの部下になってから随分と変わってきたようだが、やはり絶対に勝てる戦いしかやりたがらないのは確かだ。

では、自分は？

ルートは自問する。

レイに支えられ、マックに憧れて指揮官を目指した。そして、フラッシュとフェイナと共に旅団内でも屈指の猛者に成長した。

ルートの主義は、マックから受け継いだものだとルートは考えている。それは、まず第一に仲間の生存を優先すること。第二に、命の無駄使いはしないことだ。当たり前前の事なのだろうが、ルートにとってそれは心がけであり、規則であり、法であった。仲間を消耗した戦いは例え結果的に勝ったとしても、ルートにとっては負けなのだ。

指揮官になってまだ2年と経たないが、やはり戦場に出れば味方にも死者が出る。ルートも何度となく仲間の死に立ち会ってきた。戦場では、死亡がしつかりと確認されないこともある。行方不明にな

り、遺品も回収できずに終わることも少なくない。むしろ、穏やかに死ねる方が珍しいのだ。

その点で言えば、先代旅団長、ミフネ・マツケインの死に様は穏やかだった。あれだけ戦場に立っていたにも関わらず、彼は老衰で逝去した。医務室のベッドで、部下に看取られながら、逝ったのだ。傭兵をしていてこんな死に方、出来るのかと思わせるくらいのものであった。

死を目の当たりにして、ルートの覚悟も確固たるものになっていた。絶対にこれ以上の犠牲は出さない。仲間を1人守ることは敵を10人殺すことになる、とはマツクの言葉だったか。

「俺は、立派な隊長か、レイ？」

ふと、聞いてみると、レイが意外そうな顔をするが、すぐに笑みを浮かべて首を縦に振った。

「これ以上になく、優秀な隊長だ。上にはマツクとミフネしかない」

「あの2人と比べるなよ……」

育ての親にして、憧れであり、上司であり、尊敬する人であるマツク。それはフラッシュシユにとっても同じことだ。彼を見て、育ってきた彼らにとって、ある意味マツクはヒーローなのだ。たとえ人殺しだとしても、理解できるのだ、自分たちを死から救ったが為に、彼自身が死を振り撒いていることに。

「まあ、あの2人は別次元だよ」

「旅団長なんてストレスしかない場所で生きていけてるんだ。やっぱりそうだよな。ところでレイ、さっき言っていた追加した装備に

ついでになんだが、どういふものなんだ？」

レイの腕を指差して聞くと、レイは袖と裾をまくり、換装のために人工皮膚が剥がされ、そのままになっている箇所を指差しながら言った。

「腕には給電用の連結部、体内に電気変換用の装置、脚部に反動を抑えるストッパーが格納されている」

「本気で固定砲台にでもなるつもりか……？」

「撃つ時は、な。それ以外は移動砲台だ」

レイは引き金を引くそぶりをすると、足のストッパーを展開してみせる。

腱に沿って格納されていた鋼鉄製のストッパーが勢いよく展開されると、思い切り床を叩き付けた。そして横から少し細いパーツが出現すると、左右への衝撃に対するストッパーの役目を果たした。

「これだけか？ レールガンの衝撃を受けるには少しちやちやないか？」

「腰から背中にかけてにもう2本大型のストッパーがある。ここじや見せられないから、実戦でのお披露目だ」

「そいつは楽しみだ」

「カメラ持つてこうか」

ルートとフラッシュがレールガン片手にド派手な砲撃をするレイを想像しながら、3人は格納庫へと続く通路を歩いていった

第三十五話 激励（後書き）

作者「どうも、おはよう、こんにちは、こんばんわ。作者のハモ二カです」

道男「どっかのゾンビ教師みたいに言うな。ルートだ」

作者「俺は挨拶を欠かさない、そんな男だったあ、でしたっけ？」

道男「はいはい、分かったから。それよりもプレゼンはいいいのか？」

作者「はい、仕事分担が終わったので、資料調べという名の空き時間が出来たので」

道男「お前も調べろや……」

作者「調べてますよ？ ただ、こう言っちゃなんなんですが、私の得意分野なので、正直あとワードさんでまとめるだけなんです」

道男「はあ、そんなことをやっていると、結局×切ギリギリになるぞ」

作者「×切？ ナニソレ美味しいの？」

道男「いつぺん死んどくか？」

作者「すいませんでしたああああ！！」

ズザアアアッ

道男「うお、ジャンピング土下座」

照男「作者さんもルートの恐ろしさが身に染みてるんだよ……」

作者「あれ、照男さん、どうしてここに？ 今日の出番ないはず……、ってまさか、あなたルートがいる前で言おうというのですか？！」

照男「そんな命知らずじゃないから！ ってルート?! 違うから、あれからまだ1回も言っていないから！」

道男「まだ？」

照男「2度としませんから!!」

作者「え〜、と。照男さんが道男さんにジャンピング土下座しているのはおいておくとして、更新が遅れた事をまずはお詫びしておきます。これまでも1日抜けたりとかいろいろ不安定でしたが、プレゼンが終わるまでは忙しいので今までのようにほぼ2日に1回ペーすで投稿するのは厳しい状況です。一応ストックがある限り安定した投稿が出来ると思いますので、読んでいただくと嬉しいですよ」

道男「おい作者、ちゃんとその物語終われるんだろうな？」

照男「あ、それは気になるね。どうなの？ まさかと思うけど、終わりが見えないとかないよね？」

作者「そんなことあるわけないじゃないですか。なんたって私は始まりと終わりが見えているのに中身が作れない駄作者なんですから」

道男「胸を張るな」

作者「中身を必死に振り絞って30話ほど書いたんですから、一応終わりは見えてます。けれど、いつ終わるかはまだはつきりとはわかりませんね」

照男「最終決戦なんですよ、これから。なのに？」

作者「まあ、そうなんですけど、正確な話数はちょっと……。『血の盟約』戦以上の長さになっちゃいそうなんです」

道男「まあ、挫折しないだけましだな」

作者「ぐっ、まあ、挫折する気はさらさらないですけど……。実を言うと最終決戦でも新キャラが何人から出てきちゃうんで、台詞回しが大変なんですよね。忘れないようにしないといけないから。いつぞやの誰かさんみたいに」

照男「……………」

道男「あの時の倍か、同時に動かすキャラ」

作者「そんなくらいですね。描写されていない部分を視点変えて書くわけなんです、忘れないように頑張ります」

照男「2度と、僕のような犠牲者は出さないでね……………」

作者「おおっと、照男さん立ち直り早かったですね」

照男「それはともかくとして、今書いている続きに出てくる、これって……」

道男「どれどれ、……おい、いくらなんでも酷くないか？ 俺を殺す気か？」

作者「大丈夫！ 本編では死なせないから！」

道男「俺の頭をグラウンド・ゼロにする気か！！？」

照男「あの人、ルートにとって核並みなんだ……」

作者「まあまあ、死にやあしませんよ。っと、これ以上はネタバレになっちゃいますね。それではまたそのうちお会いしましょう」

ノシ

道男「だから、こんな、終わり方は嫌だっって言ってんだよ！！」

(Ⅲ) (Ⅰ)

作者「げほのおお!!??」?

第三十六話 役者は舞台へ上る（前書き）

本日2つ目

第三十六話 役者は舞台へ上る

ヘリのローターが空気を叩く音が後部甲板に響き渡る。

決して広くはない甲板には、計4機のヘリが離陸できる体勢に入っていた。甲板の端から1号機、格納庫に最も近い位置にいるのが4号機となっており、それぞれに1個の部隊が乗り込んでいる。その中でも、1号機のヘリは、タンDEMローターと呼ばれる、機体前後にローターを持つ大型の機体で、機内には他のヘリには積み込めないような大荷物を格納し、動かないようにしっかりとロープで固定されている。

2号機から4号機のヘリにはすでに部隊が乗り込んでいるが、1号機の後部、広い貨物室にある後部ハッチは未だに開け放たれたままになっており、401部隊、ルートたちもまだ乗り込んではいない。出撃予定時刻まではまだ少し時間があるのだが、やはり時間通りに出撃できるか心配なようで、1号機のパイロットはしきりに格納庫内にいる401部隊の様子を気にしている。

当のルートたちと言えば、荷物を積み込み、ヘリに乗るかと思いきや格納庫に戻り、最後の確認を行っていた。作戦概要、目標、道筋、落下傘の具合などである。特に、常人以上に重くなってしまったレイは、人用の落下傘ではロープが切れてしまう恐れがあるとのこと、急遽車両を降下させる時に使用する専用の物に切り替える羽目になった。

フル装備になったレイの重量は優に150キロを超え、やはりレールガンが異様な空気を醸し出している。そのレールガンから太い電

源コードがレイの腕に伸び、腕に新しく設けられた接続口に吸い込まれている。レールガンの太い銃身、いや、もう砲身と言ってもいいだろうほどの物の下には四角いマガジンが取り付けられており、1つのマガジンにつき5発のレールガン用の銃弾が入っており、レイが背負う背囊には残りの5個のマガジンが収められている。

また、背囊の上部には通常の小銃が縛り付けられており、レールガンが使用できなくなった際にはそちらを使用できるようになっている。

ラーキンとフィリップは、レイのと同等かそれより若干小さめの背囊を背負っている。この中にはロケット弾や、爆薬が山のように詰め込まれている。おそらく総重量は40キロを優に超えて、2人でなければ持ち運ぶことは容易ではないはずだ。

その逆に、カナナは必要最低限の物しか身に着けていない。近づいての格闘がメインの彼女には、大きな背囊や銃は足手まといではない。愛用の2本のナイフの他に、予備のナイフ、銃身を短くした小銃、手榴弾、煙幕弾などを腰につけ、ラーキンたちとは二回りほど小さい背囊も、小銃のマガジンと救急セット程度しか入っていない。

「ここが、着陸予定地点。あまり広くないうえに、ビルが乱立しているから、ビル風に注意が必要だ。着地後は合流地点に集合、全員が揃うまで合流地点を死守しろ」

小さく折りたたまれていたために、折り目が無数にできてデコボコになった地図を手でならしながら、ルートは南門から中央へと続く大通りからややずれた場所に書かれた赤い丸印を指差した。

ルートとフラッシュは、似たような恰好をしている。ルートは肩に小銃を提げ、腰にはマガジンと手榴弾などを取り付けている。フラッシュは小銃を背囊の上に縛り、軽機関銃を肩から提げていることぐらいが、2人の差異だった。軽機関銃は銃身下に四角いマガジンが取り付けられており、200発の銃弾を連射できる代物だ。また、旅団で使用されている小銃と同じ口径の弾のため、ルートが持っている小銃のマガジンを使うことも出来る。

「着陸したら、『ジャツカル』に気を付ける。どこにいるか分からんからな」

2足歩行兵器『ジャツカル』の改良型かそれに準ずるものが『デルジャン』にあるであろうことは、『血の盟約』戦後、自爆したボヘミアンの機体『スカル』に印字されていた製造番号から分かったことだ。『スカル』は人間が乗れるようにさらに改造されたものようだ。ある程度整った製造ラインで作られていたことが調査で分かった。そのような場所で、1機しか作らないはずがない。量産に成功したかどうかまでは分からないが、少なくとも複数の『ジャツカル』が存在するであろうことは容易に想像がついた。

「『ジャツカル』を見たらレイを呼べ。絶対に1人で引き付けようとか考えるな。複数による挟撃、その隙にレイが敵のAIを破壊する」

「『了解』」

レールガンを持っていく最大の理由がこれである。

ルートがマックに言ったように、『スカル』との戦いで『ジャツカル』シリーズとの戦闘に小銃では役不足であることは明らかになっている。おまけに、よっぽど当たり所が悪くないとミサイルでも防がれてしまうという厄介さを兼ね備えている。『グラントフリーユ-

「ゲ」の主砲を食らえば話は別だろうが、『グランドフリーユーゲ』も突入するため、都市内に入ったら直接の支援は受けられない。初速が速く、驚異的な貫徹力を持つレールガンに白羽の矢が立ったのは、自明の理なのかもしれない。

「俺たちが着陸するまでは、護衛の戦闘ヘリが俺たちを支援してくれる。着地予定地点は万遍なくならしてくれる。着陸したらそれも無理だが、上空で可能な限りの支援を継続してくれる。それと、支援の3個小隊も俺たちと共に侵攻し、状況に応じて俺たちの侵攻を掩護、陽動に回ってくれるから、その際には連絡を密にして、決してお互いが孤立しないように心がける」

「ラーキン、フィリップは的になりやすいから、常に2人1組ツーマンセルを心がけてね。レイは常に僕とルートで3人1組スリーマンセルを組んで行くから。カナナは遊撃して、突入の際にはルート、僕、カナナで最初に行くよ」

フラッシュがルートの後を継いで、細かい指示を飛ばしていく。401部隊を掩護する3個小隊は各実動部隊から選ばれた、準401部隊であり、それによる残りの部隊の戦力低下は避けられない。だが、今回は戦車隊がすべてそちらに回り、南門突入組は『グランドフリーユーゲ』にギリギリまで乗っていることになっているので、影響は少ないとされている。艦の対空砲なども、俯角を取れば地上掃射に使うことが出来る。

「ルート、レールガンを撃つ時は合図をする。いちいち展開する羽目になるから、発射までの支援を頼む」

「分かってる。それも、ラーキン、フィリップの役目だ。残りの部隊も、場合によっては掩護に回る」

「了解」

レイは他の人間と違い特殊なボディアーマーを着込んでいる。レイ

ルガンの反動で壊れないように強化されたもので、小銃の弾程度では穴も開かないのだが、狙いを定める時間は一切の反撃ができないため、掩護が必要だ。

「じゃあ、私は行軍の際にはどこにいても良いということですか」

「まあ、そうなるな。先行して斥候になってもらう時もあるだろうから、その時はよろしく頼むぞ」

「分かりました」

カナナが小さく頷く。

「ラーキン、フィリップ、背囊がでかいから死角も多い。背後は常に仲間がいるようにしていけ」

「了解だ」

「よし、それじゃ行こうか」

広げていた地図を小さく折りたたむと、ルートはそれを胸ポケットにしまつて、格納庫から甲板へと向かう。

その後が続いて、5人が格納庫を出ると、すでに待機していた甲板員からすぐに出られる、とヘリのエンジン音に負けなくらいの大声で叫ばれ、ローターが巻き起こす強い風に顔をしかめながらも礼を言つてヘリへと向かう。

格納庫の方に機首を向けていた1号機のコックピットにいるパイロットに親指を立ててこれから出ることを知らせると、パイロットが首を縦に振って離陸の準備を始めた。その間に6人は後部ハッチから乗り込み、貨物室に向かい合つて取り付けられている座席に座り、ハーネスをしつかりと締めて、身体を座席にしつかりと固定する。

「全員乗ったか!？」

パイロットが貨物室に向かって大声を上げる。一応機内では無線を通じて普通に聞こえるのだが、やはりローターの音がすさまじいため、無線越しでもある程度の音量が無いと聞き取りづらい。

「大丈夫だ！ 離陸しろ！」

ルートが親指を立ててその手を上下に振る。それを見たパイロットが頷いて、艦と連絡を取り合う。

「こちらオウルエッジ1、401部隊を収容した。これより離陸する」

『了解、オウルエッジ1。離陸を許可します。幸運を』

無線でのやり取りはルートたちにも聞こえている。

パイロットがゆっくりと操縦桿を引き、機体がフワリと浮かび上がる。タンDEMローター式のヘリの特徴である振動の少なさから、安定して離陸した機体は滑らかな動きで甲板から離れていく。そしてある程度の高度を取ったら横滑りしながら位置を移動し、後続に道を開ける。

『オウルエッジ2、3、4。離陸を許可します。続いてゴールドンイーグル隊、甲板へ移動してください』

格納庫から3機の戦闘ヘリが引き出される。そして輸送ヘリが離陸した下に滑り込むように甲板を移動すると、すぐさまローターが回転を始めて、離陸準備を整えていく。

「総勢7機、ちょっとした都市ならたぶん僕らだけで拠点制圧できる戦力だね」

「ちよつとした都市なら、な。あいにく俺たちの相手は難攻不落の要塞都市だ。おまけに戦力では圧倒的に不利だからな」

「核弾頭の発射までの時間が分からないのが心配だな。ジゼルとフエイナが機械人で偽物だった大統領のAIから破損していない情報を抜き取って送って来たそうなんだが、今日午後3時以降ということまでしか絞れなかったからな……。『ニースローグ』都市軍が間に合ってくるといいんだが」

核弾頭の情報是最重要である。現在午後2時を回ろうとしているところだが、ここまで作戦開始がギリギリになってしまったのも、ジゼルたちの情報を待っていたからだ。最新の情報を待つがゆえに、作戦時間がギリギリになってしまったのだが、あいにく今さらそんなことを愚痴っけていてもしょうがないことだ。

「ジゼルたちが『ニースローグ』を出たのが確か0930頃だったと言っていたな。輸送機だとすると、少なくとも6時間、給油機がいたとしてもそのくらいはかかるだろうな」

「そつちもギリギリだね……。上空に到達したらヘリがドームの状況を逐一監視することになっているけど、ドームの天井が開いたらタイムリミットまでそう長くはないと思わないとね」

1号機を先頭に、輸送ヘリが三角形を描いて編隊を組む。そして1号機の前、後方のヘリ3機のさらに外側を攻撃ヘリが守ると、7機のヘリははるか遠方に見える。『デルジャナ』目指して高度を落としつつ接近を開始した。

「出たか」

マツクは、その様子を艦橋で見つめていた。そして、ヘリ群が高度を下げつつ『デルジャナ』に向けて飛行を始めるのと、すぐに艦橋で指示を飛ばし始めた。

「全速前進、目標『デルジャナ』。全火砲攻撃用意を整えろ」

そう言うと、戦闘指揮所から次々と報告が挙げられてくる。

『主砲、発射準備良し!』

『対艦、対地、対空ミサイル、準備良し!』

『対空砲、いつでも撃てます!』

「旅団長、戦闘準備整いました」

副長がマツクに向かって言う。

マツクは頷くと声を大にして言い放った。

「これより、旅団『フリーユージェ』は戦闘に突入する！ 各員奮闘せ

よー！ー！

マツクの声が無線を通じて全ての隊員へと伝えられる。

第三十七話 敵は強大（前書き）

3つ目

今日はこれで勘弁願います。

第三十七話 敵は強大

『デルジャナ』の巨大な都市の影に黒い点が7つ近づいていく。オウルエッジ隊とゴールデンイーグル隊は低空を飛ぶことでレーダーで見つかる危険性を下げつつ、だが、目視すれば一目瞭然の高度を一系乱れぬ編隊を組んで飛んでいた。

「突入まで1分！」

パイロットが叫ぶと、全員が銃の安全装置を外し、座席のベルトを外して後部ハッチへと向かう。背負った落下傘のパラシュートを展開する紐を再確認して、ルートが先頭となってハッチの前に並んでいく。貨物室内にいる搭乗員がルートに向かって合図をすると、ルートがそれに頷きを返す。全員が頭上にあるポールに命綱のようなロープを引っかけ、重心を低くして、来る衝撃に備える。

グオンという、急激にエンジンの出力が上がる音が機内に響き、機体が急上昇する。ヘリが落下傘降下に必要な高度を取るために、都市直前でパイロットが操縦桿を引き、高度が上がっていく。

それと同時に、遠くから遠来のような音が聞こえ、パイロットの怒号が耳に突き刺さった。

「くそつ、まるで対空火器の巢だぞ！！」

上昇したことで、都市内を一望できる位置についたが、それは逆に都市からも丸見えだということだ。コックピットではレーダーロックされた事を知らせる警告音が鳴り響き、窓から見える空には対空

砲が一定間隔で発射する曳光弾の眩い光が擦過していく。

「ハッチ開きます！ 予定降下地点まで30秒！」

金属が擦れる音がすると、ヘリの後部ハッチがゆっくりと解放されていく。猛烈な風が機内に吹き荒れ、重装備にも関わらず、風に体が持つて行かれそうになる。それだけ速度を出していることが窺える。

「全員、準備はいいか！？」

「いつでも行けるぞ！」

風の音に負けないくらいの声で後ろの面子に言うと、最も奥にいるレイから返事が返ってきて、残りの全員も首を縦に振る。

降下タイミングを計るためのランプがハッチの上には取り付けられており、赤いランプが青に変わったタイミングで飛び出すことになっている。ルートが来るタイミングに備えてハッチの端まで身を乗り出すと、後続のヘリの姿が見えてきた。輸送ヘリはどれも降下準備に入っているらしく、ろくな回避運動も取っていない。逆に戦闘ヘリは輸送ヘリの斜め下に移動し、落下傘の邪魔にならない位置から地上を牽制攻撃している。高射砲のものと思われる黒煙が空を多い、振動で機体がガタガタと揺れる。

『ゴールデンイーグル G E 2、右前方のビル屋上に対空ミサイルだ！』

『了解した！ つ、真下に対空砲！』

戦闘ヘリから次から次へとミサイル、ロケット弾が放たれ、降下を妨害する敵の対空陣地を攻撃する。

「降下まで15秒！」

そう言った瞬間だった。

ルートが見ている中、オウルエッジ2が爆散した。高射砲の直撃を受けた機体は真つ二つに折れたと思ったら燃料と弾薬に引火して大爆発を起こし、四方八方に破片をまき散らしながら墜落していった。

『オウルエッジ2がやられた！ くそつ、破片を食らった！』

下方を飛行していた戦闘ヘリが破片の直撃を受けて黒煙をたなびかせながら飛行している。

『GE3、撤退しろ。敵は俺たちが引き付ける』

『すまん！』

戦闘ヘリが1機、来た道に戻っていく。その間にも地上からの猛烈な撃ち上げは続いており、激しい振動がルートを襲う。

「降下5秒前、4、3……」

カウントが始まり、横にいる搭乗員が指を折りながらそれを教えてくれる。

「2……1……降下！」

「行くぞ！」

ルートは勢いよく走ってヘリから大空へと飛び出した。重力の法則に則って体が地上に向かって降下を開始し、独特の浮遊感に襲われる。それと同時に真下からの撃ち上げが視界一杯に広がり、風に耐えながら降下地点を探し始める。

ふと前を見れば、残りの輸送ヘリからも降下が始まっていた。他のヘリは側面にあるハッチから同時に複数の隊員が飛び出しては、次々と後続が吐き出されていく。

高度は落下傘を開くには十分な高さだった。

だが、今開けば間違いなく狙い撃ちされる。そのため、ルートはギリギリまで落下傘を開くつもりはなかった。後続もその意図を感じ取ったようで、ルートたちは空をカーブを描くように並んでビルの屋上にある対空火器がはつきりと分かるまで落下を続けた。

降下してくるルートたちを狙って対空砲が撃ち上げられるが、いくらコンピュータ制御でも追い撃ちは当たりにくい。至近弾はいくつもあつただろうが、命中することはなかった。

ある種のチキンゲームを行いながら高層ビルに衝突しそうなほどの高さまで降りると、そこに至ってようやくルートは落下傘を開いた。開くと同時にその制動で身体を支えるベルトが痛いほどに身体に食い込むが、それもすぐに薄れてゆつくりと高度を下げていく。左右のロープを上手く操作して高層ビルの合間を縫うように進み、屋上の対空砲を避け、コンクリートの地面に滑り込むように着陸する。

やはり、全員が同じ場所に着陸することはできなかつたようで、素早くパラシュートを切り離してビルの合間から見える空を見ても他のパラシュートは見えない。

「こちら、ルート、全員降りたか？」

無線で呼びかけつつ、ルートは近くの物陰に隠れ、ヘルメットに装着された片目だけのサングラスのような物を下して、ヘルメットに

ある小さなスイッチを入れる。するとバイザーに簡易ではあるが『デルジャナ』の地形図が映し出され、ルートがいる場所を中心に円形に地形が表示される。

『こちらフラッシュ、カンナと同じ場所に降りた』

『レイだ。合流地点から西に200メートルといったところだ』

『ラーキンです、うまく合流地点近くの物陰にいます。皆さんの到着を待ちます』

『こちらフィリップ、南に100メートルないです。今すぐ向かいます』

それぞれから返事があり、ルートも自分の現在位置を確認する。

位置は合流地点南西100メートル。直線距離だから近いが、目の前にはそれを遮る巨大なビルがある。

『こちらヴィクター隊、損耗無し、これよりそちらに向かいます』

『エレナ隊、1人殺られたわ。5人でそちらに向かうわ』

支援を引き受けた部隊からも無事連絡が入ってきたが、降下の途中に少なからず被害が出た。最も痛いのはオウルエッジ2に搭乗していた部隊が全滅してしまったことだ。現状動ける人数は17人のみとなってしまう。

「合流地点に全員が集まった時点で行動を開始する。妨害する敵はすべからず撃退しろ」

ルートは無線を切ると立ち上がり、物陰から飛び出して合流地点を目指して走り出した。

「突入隊、着陸しました！」

「2号機はやられたが、残りは降下したようだな……」

『デルジャナ』目指して疾走する『グランドフリユーゲ』。その艦橋で報告を受けたマックは胸をなで下ろした。2号機が撃墜され、護衛の戦闘ヘリが1機引き返すというアクシデントはあったものの、残りは無事に降下していく様子を、マックも艦橋で拡大された映像を見守っていた。

「戦車隊の行程は」

『A隊、B隊共に順調に前進しています。今のところ敵勢力による妨害はありません』

すでに、東西から突入する戦車を率いた部隊は出動している。ほぼ隠れる場所のない『デルジャナ』周辺を進むのは危険極まりないことなのだが、幸か不幸か今のところは敵からの攻撃は上空のヘリにのみ限られている。対空砲が撃ち上げられている中、任務を終えたヘリが回避行動を取りながら都市上空を脱出しようともがいている。

敵の対空砲のおかげで都市上空を飛ぶ敵戦闘機はへりに近寄れず、『グランドフリーゲ』を狙って攻撃を仕掛けてくるが、幸い修復成った『グランドフリーゲ』の主砲が轟然と発砲すると、上空で散弾となって飛び散り、敵の戦闘機を寄せ付けない。発射されたミサイルも、迎撃が間に合い、今のところ直撃弾は1発もない。

「『デルジャナ』までの距離は？」

「10キロを切りました、……っ、前方の地面に熱源多数確認しました！ 地中から何か来ます！！！」

「『ジャツカル』だ！」

叫んだのは副長だ。

マツクは慌てて艦橋から外を見下ろすと、『グランドフリーゲ』の前方の荒野が盛り上がり、土煙が上がっていた。

「主砲、前方を狙え！」

「主砲照準、撃ち方始め！」

上を向いていた主砲が前方に狙いをつけ、間髪入れずに発砲する。砲弾が土煙に吸い込まれて茶色の土煙の中に爆発を生んで、赤黒い煙になる。

「撃ち続ける！ 点で攻撃するな、面で攻撃しろ！！！」

上空を飛んでいたへりがロケット弾を撃ち込む。無数の爆発が連鎖的に起きて巨大な火柱が上がる。主砲が再装填するまでの時間は対空砲が俯角を取って攻撃を続ける。もう、煙の向こうに何があるかと関係ないほどだった。

だが、突如、煙の中から曳光弾がへりに向けて伸びると、それに導

かれた無数の銃弾がへりに吸い込まれてへりに大穴が開けた。

『くそつ、やられた！　メーデー、メーデー！』

尾を振りクルクルと回転しながらへりが高度を下げていき、地面に叩き付けられて大爆発を起こす。その眩い光に艦橋にいたマツクはつい目を覆い、その光から目を守ろうとした。爆発の振動で艦が少し揺れるが、すぐに収まりマツクは顔を上げた。

「やはり、この程度では無理か……」

煙が晴れると、そこには3体の『ジャツカル』がその手に持つ巨大な銃をこちらに向けて立っていた。マツクも、『大崩落』で幾度となく辛酸を舐め、苦戦の末に倒した『ジャツカル』。それが今、目の前で再びマツクたちの前に立ちはだかっていた。

ふと、『ジャツカル』の背後に何かの残骸があることに気が付いた。マツクが目を凝らしてそれを見ると、『ジャツカル』が大破して煙を上げていた。その巨大な胴体には大きな貫通痕が残されており、大きさからして主砲弾の直撃を受けたもののようなのだ。

「主砲弾でようやく、か……。上空のへり、艦に絶対に近づけるな。取りつかれたら対処のしようがなくなるぞ」

『了解しました』

へりが再び『ジャツカル』に向けてロケット弾をお見舞いする。だが、今度は『ジャツカル』も回避行動を取り、着弾点から素早く飛び退くと、猛烈な速度で『グランドフリーユージュ』目指して突進してきた。へりがそれを追うように攻撃を加えていくが、『ジャツカル』はその攻撃を小刻みな動きで巧みに避けると手に持つ銃でへり

を牽制し、攻撃が止んだ瞬間に『グランドフリーユージェ』に飛びつこうとした。

『撃てえええ！』

艦首横から飛び上がった艦に飛び乗ろうとした『ジャツカル』は動きを読んで狙いを定めた主砲の真正面に飛び上がった。艦の懐にもぐり込むと甲板の様子が分からなくなることを利用して、飛び乗る瞬間を狙っていたのだ。至近から放たれた砲弾を肩と胴に受けて吹き飛ばされた『ジャツカル』が爆散して破片を飛び散らせると、続いて乗り移ろうとしていた『ジャツカル』が急に動きを止めると、距離を取り始めた。

「撤退しますかね……」

「ありえん。何か考えているぞ……」

副長の淡い期待は『ジャツカル』の銃弾によって撃ち砕かれた。

『ジャツカル』は艦の正面に陣取ると、そこから艦橋めがけて攻撃を開始してきたのだ。艦橋の硬質ガラスが30ミリクラスの銃弾を無数に受けて蜘蛛の巣状のヒビが無数に発生する。

「い、いかん、貫通するぞ！」

そう言った直後だ。硬質ガラスが雨霰あめあらいのように銃弾を受けたために耐えきれなくなり、粉々に砕け散った。そして銃弾が直接艦橋を襲った。艦橋のデスクの陰にマックは飛び込んで難を逃れたが、銃弾は艦橋のみならず、上部に備え付けられているレーダーなどにも当たり、無数の破片が艦橋にも降り注ぐ。

「くっ、被害を報告しろ！」

銃撃が収まると、マックは大声で叫んで、艦橋を見渡して絶句した。艦橋は血の海だった。30ミリの直撃を受けた者は胸を引き裂かれ、腕を抉り取られ、壁に打ち付けられて動かなくなっていた。近くで呻いていた操舵手に駆け寄って抱き起すと、その顔は血で真っ赤に染まっており、無数の金属やガラスの破片が顔にとどまらず体中に突き刺さっていた。目に刺さった破片が、眼球の動きに合わせてピクピクと動き、その度に操舵手の男が言葉にならない悲鳴を上げる。

「旅団長！ 無事ですか！」

背後から副長の声がして振り返ると、頭から血を流し、足を引きずっている副長が息を荒くして立っていた。

「被害は艦橋からリーダー、無線に至って甚大です！ すぐに後部の予備に切り替えるよう作戦指揮所に命じておきました！ ここは危険です、直ちに退避を！」

「生存者を見つけ出せ。それと副長、お前も医務室へ行け！」
「了解！」

すぐさま艦橋に救急班が駆けつけ、副長以下生存者を担架に乗せて医務室へと搬送した。幸いマックは擦り傷程度で軽い応急処置だけですぐさま艦橋を駆け下りると階下の戦闘指揮所に駆け込んだ。

「りよ、旅団長、ご無事でしたか！」

その場にいた全員がマックの姿を見て安堵のため息をついた。それを聞く暇もなく、マックは指揮所にある机に表示されている地図を睨み付ける。

「兵装の被害は？」

「艦橋の対空砲がやられました。その他はすべて良好です。現在操艦は第2艦橋から行っています」

「『ジャツカル』は？」

「先ほど銃撃を行っていた隙に1機は破壊しましたが、最後の1機が地中に潜ってロストしました」

マツクはそこまで聞くと顔を上げ、モニターに映し出された外の様子を睨み付けた。

「被害は軽微だ。作戦を続行する！ 全周への警戒を厳にし、このまま突っ込む！」

まだ、ファーストアタックも貰っただけ。

『フリーユージェ』はまだ本気で戦ってもいないのだ。

「南門を吹き飛ばせ」

マツクの怒りに満ちた言葉が、戦闘指揮所に響いた。

第三十七話 敵は強大（後書き）

作者「どうも、作者のハモニカです」

道男「いきなりだが、こんな調子で大丈夫なのか？」

作者「まあ、大丈夫なんじゃね？ って感じですよ」

道男「軽いな……。しかし、まさか『グランドフリーユージュ』が初っ端にこんなことになっていたとは……」

作者「ああ、道男さんは出撃しちゃってましたから、気づかなかつたですよ。大丈夫です。どんなに攻撃を受けても、WB並みに頑張りますから」

道男「おい、それかなりのネタバレだぞ」

作者「ほえ？ 気にしたら負けです。きっと分かっている方も多いはずですよ。別に戦艦並みの武装を持つ輸送艦じゃありませんし、大気圏だって突破できませんし、人型機動兵器だって運用できませんし、二トト志望の主人公なんて出てきませんから」

道男「はい、今ので理解した奴、手え上げてみる」

作者「勝手に読者さんを巻き込まないでください。それはともかくとして、ストックした3話を何とか投稿することが出来ました。今日はこれで勘弁してください。ルトラッシュ、僕もう疲れたよ」

道男「俺なのか、フラッシュなのかどっちはつきりさせる」

作者「どっちでもありませんからね？」

道男「フランスの貨幣12枚の方が」

作者「今作らないでください、今。合ってそうですけど駄目です」

道男「分かったよ。ほら、それじゃ感謝を述べてしめるとしようじゃないか」

作者「いつもこれくらい平和だったら良いんですけどねえ」

道男「なんだ、また血が見たいのか」

作者「やめてください！ いい加減にしないと、レイカジゼルさん呼びますよ！？」

道男「ちょ、おま、婆だけはやめろ！！」

作者「予定より早いですが、道男さんの公開処刑を近いうちに決行したいと思います！」

道男「やめろおおおおおおおお！！！！！！」

誤字脱字、ご意見、感想など、お待ちしております！

第三十八話 401部隊、状況開始（前書き）

状況開始……、カッコいい台詞ですね〜

渋い人（戦うおじ様全般）が部下を前に静かに言ったりしたら……
ヤバい、マジでカッコ良すぎる……

燃える闘魂な人も良いですけど、クールなのも大好きな、映画の見
すぎなハモニカでした

第三十八話 401部隊、状況開始

「はっ、はっ、はっ、はっ」

規則的に息を吐きながら、ルートは合流地点を目指して走っていた。いつにも増して背中に重い荷物を背負いながらも、ペースは一定に保ち、決して足を止めることはない。遠くで爆発音が連続して起こる度に空を見やるが、狭いビルの間から見える空からは何も窺い知ることができない。

『デルジャナ』は『大崩落』の最終決戦の地だ。当然、何重にも防衛線が築かれ、そびえ立つビル群は全て防壁として機能するようなものばかりである。中央部にたどり着くまでには中心へと伸びる道に対して直角になる様に細長いビルが幾つも建てられており、それ自体が盾の役割を果たしている。

その巨大なビルを大きく回り込んでルートは合流地点を目指していた。ヘリ部隊が空域を脱出したようで、先ほどまで頭上から聞こえていた激しい戦闘音は薄れ、代わりに遠くでの激しい戦闘音が地面を伝って響いてくる。

「南から……、『グランドフリーユージュ』が攻撃を受けているのか？」
通りを走りながら、ルートは誰に言うでもなく呟く。作戦開始と同時に『グランドフリーユージュ』は『デルジャナ』を目指して侵攻を行っている。『デルジャナ』のメインストリートが南門に繋がっている以上、迎撃は必至、激しい抵抗が想定されていた。

だが、ルートは他人の心配をしている暇はない。

今は自分が仲間と合流することが最優先事項、401部隊が戦わなければ、『グランドフリーユージュ』の奮闘も無駄になる。

『こちらヴィクター隊、合流地点に到着しました。あと何人ですか？』

『エレナ隊はもうすぐ来るよ。残りはあと3人。ルート、レイ、ライキン、現在位置は？』

無線で常時仲間同士の動きは把握できるようになっている。無線からフラッシュの声が入ってくると、その無線越しでも他の仲間の声が入ってくる。順調に合流できているようで、ルートは走りながらも内心で安心する。

『こちらレイ。ライキンと合流した。まもなく……、そちらを目視したぞ』

『えっ？ ああ、こっちからも見えたよ。後はルートだけだね。今どこにいる？』

「あと少しだ。細長いビルを回り込んでいるから少し時間がかかるな……、少し待て」

『！ 了解』

突如ルートの声がトーンダウンされ、小声になったのに気づいてフラッシュも無線でのやり取りを小声にした。

物陰に隠れる間もなくルートの前方で無数に光が点滅し、ルートは反射的に地面に伏せる。頭の上を無数の銃弾が通過していき、地面や壁に当たって弾かれる甲高い音が響き渡る中、時間差で発砲音がルートの耳に届いてきた。

ヘルメットに手をやって深くかぶり、地面を這いずりながら近くの物陰に飛び込むと、金属の塊の反対側に弾が当たる音が聞こえ、背中越しにもその振動が分かるほどになった。

「敵に見つかった。装甲車と歩兵だけのようだが、頼めるか？」

「了解、すぐに助けに行くから、大人しくそこにいてね」

「見たところ……、ありゃあ『ニースローグ』の奴らだな。機械人の迷彩色じゃなかった」

「と、いう事は少しは戦いやすいな。レールガンを使わないで済みそうだ」

「レールガンを人相手に使ったら殺しすぎだぞ……」

苦笑しつつも物陰から顔を少しだけ出して敵の正確な数を計ろうとするが、顔を出した瞬間に無数の銃弾が襲いかかってきたので慌てて顔を引っ込める。そんなに目立つような恰好をしていたわけでも、顔を出しすぎたわけでもないのだが、妙に反応が良い、いや良すぎる。

「機械人がいるのか……。となると少し厄介だが……」

『ニースローグ』といえども、機械人は大勢いる。軍に所属して今回の件に関係している者もないと言いつ切ることはできない。だが、問題は、なぜ、反乱軍に与くみしているのか、という事だ。『ニースローグ』で軍隊にいた、という事は、つまり『大崩落』で人類に味方した機械人の可能性が高い。そうならば、『血の盟約』との関わりもある反乱軍が仲間にするとは考えにくいのだ。

「反乱軍ではなく、マガスの手の者……？」

だとすれば、機械人がいてもおかしくない。『血の盟約』の考えに賛同している反乱軍が承諾するかは別として、ではあるが。

結果、ルートは1つの答えにたどり着いた。

「……………マガスは彼らも切り捨てる気なのだ……………」

今の銃撃の反応からして、機械人がいることは確かだ。だが、『血の盟約』かぶれの反乱軍、マガスに釣られたとはいえ、『血の盟約』の意志はあるだろう。彼らが機械人を許すとは思えない。つまりマガスが彼らに黙って機械人を送り込んでいる、ということになる。機械人が紛れ込んでも気づかれないうようにする方法は限られている。

精巧な人工皮膚で人間そっくりに仕立てあげるか、人間の皮膚をかぶるかのどちらかである。おそらく、マガスがやることだ、後者に決まっているだろう。目の前にせっかくあるのだ、マガスが利用しないはずがない。

「レイ、機械人が紛れ込んでいる。気を付ける」

『了解した。間もなくそちらに到着するから、注意を引き付けてくれ。その間に叩く』

「分かった。外すなよ？」

無線を切って、障害物越しに敵の様子を窺う。顔を出さなければ攻撃はしてこないが、明らかに距離が詰まっている。装甲車のタイヤが地面を踏みしめる音とエンジン音、そして敵の足音の響きが徐々に大きくなり、こちらに近寄ってくるのが分かる。

ルートは腰から1つスタングレネードを取り出すと、安全ピンを抜いて空に向けて投げた。

投げられたグレネードは放物線を描いて地に落ち、乾いた音を立てて転がっていく。どこに落ちたかは問題ではない。ルートはすぐさま耳を塞いでうずくまる。

そして直後に強烈な音と光が一带を支配して、ルートの三半規管を手で覆っていたにも関わらず強襲してくる。耳の奥で激しく鳴る鐘の音に耐えながらルートは身を起こすと物陰から身を乗り出して目の前でもがいていた男に狙いを定めて銃の引き金を引く。

装甲車の中にいた敵はすぐさまこちらに気が付いて機関銃を備えた砲塔がぐるりと回転してこちらに狙いを定めると、重厚な音と共に火を噴き、無数の銃弾をルートがいた場所に送り込んできた。ルートは間一髪で物陰に頭を引っ込ませ、銃だけを物陰から出して遮二無二に銃弾をばら撒く。

『ようし、そこを動くなよ』

無線からレイの声が聞こえたと思ったら、聞き慣れた飛翔音が聞こえ、直後に強烈な爆発音と熱波がルートに襲いかかってきた。そしてふと視界が暗くなったと思つて上を見上げると、先ほどまでルートを狙つて攻撃をしていた装甲車が宙を舞つてルートの上を飛び越えて道路に叩き付けられた。

と同時に乾いた発砲音が連続して響き、身を起こすとこちらに視線を向ける。

フラッシュとレイが先頭に立つて装甲車の傍にいた敵を打ち倒していく。ラーキンとフィリップがロケット弾を再装填しながら移動し、カナがフラッシュたちの援護を受けながらナイフを振るつて敵をなぎ倒していく。

「グッドタイミングだ」

「隊長が合流地点に来られないとは、どういうことだ、ルート？」
引き金を引きながらレイに走り寄り、その背後で銃を構えていた敵兵に弾丸をお見舞いする。

「仕方ないだろう？ 世の中思い通りにはいかないってことさ」

装甲車を失った敵は無力だった。圧倒的な火力を失った敵兵は各個撃破され、次々とその数を減らしていく。そんな中、ただ1人だけ生き残った男がいた。最初のロケット弾の爆風を受けたのか腕が吹き飛び足がおかしな方向に曲がっているのだが、血を流すこともなく、悲鳴を上げることもなく、這いずりながらもこの場から脱出しようとして試みていた。

「悪いが、こちらは通行止めだ」

その目の前に銃を構えたオールバックの男が現れた。その背後には5人の男がその背後を守る様に周囲を警戒している。

「ヴィクター、そいつから情報を聞き出したいんだが、殺さないでくれよ？」

ルートが逃げようとしていた機械人の背中を思い切り踏みつけ、その脳天に銃口を向けるヴィクターに慌てて詰め寄った。ヴィクターはゆっくりと顔をルートに向けると、人懐っこい笑顔を浮かべて機械人の背中に銃弾を送り込んだ。機械人が何度かビクンと痙攣したあと、首から下が動かなくなり、その目だけが目まぐるしく動き回る。

「伝達系を破壊したから、もう逃げられないぞ」

「あの笑顔でそれをするな……。見てるこつちが怖い」

ヴィクターは押し付けていた足をどけて機械人を起き上がらせるとルートの方に強引に向かせた。ヴィクターがその首筋に手を持っていくと、首に指を押し込んで皮膚を強引に引きちぎる。機械人の無骨で光沢のある皮膚が露わになり、ルートが一瞬顔をしかめる。

機械人は何とかこの場から逃げようとするが、回路を破壊されて四肢が動かない状況ではどうしようもない。首から上だけは逃げようともがいているのだが、首から下はピクリとも動かない。

「貴様は、マガスの部下だな。奴はどこだ？」

「それを俺が言うとも思っているのか、人間？」

「いや」

最初の一言で、ルートはこの機械人が情報を吐くことはないだろうと素早く判断して、その眉間に銃口を押し付ける。機械人は臆する様子もなく、ルートをまじまじと見つめる。

「言い残すことは？」

「くたばれ、人間」

刹那、引き金が引かれて銃弾が発射された。即座に機械人の鋼鉄の頭蓋を貫通して、人間の脳に当たるAIを破壊、後方へと突き抜け、機械人が力なく首から上だけ頂垂れた。ルートは立ち上がると周囲を見渡し、人数が揃っていることを確認する。

「401部隊、全員いるな」

「ヴィクター隊、全員揃っている」

「エレナ隊、5名いるわ」

401部隊の後ろに女性が先導する部隊が現れた。女性は目つきが鋭く、長く赤い髪を頭の後ろでまとめている。戦闘にでもなれば邪魔そうなのだが、何故かヘルメットに上手く収まっているらしく、一見すると短髪にも見える女性、エレナは返り血を浴びた顔で立っていた。

「ウィルがやられたわ。降りてくるときに、弾が当たって……」

その手にはおそらく彼のであろう認識票が握られている。それを見て、ルートは彼女の肩に手を置いた。

「悲しむのは後にしてくれ。今やらなければならないことではないはずだ」

「分かっているわ。この償いは億倍にして返してやる」

エレナ隊の男たちが無言で頷く。

「よし、これで全員揃ったな。ヴィクター、後ろを頼む。エレナ、サイドを頼む」

「了解だ（よ）」

ルートは残弾を確認して、1発しか残っていないことに気が付いてマガジンを交換する。空のマガジンが地面に落ちて乾いた音を立てる。代わりにマガジンを差し込むと1発目を銃に装填して、視線を上げた。

「これより状況を開始する」

静かにルートは言葉を紡いだ。

第三十八話 401部隊、状況開始（後書き）

はれえ！？

若干だけどヴィクターがおかしな感じになってしまったぞ？

新キャラだから一応まともな奴を、と思っていたのに、いったい何が……

ハッ、これがいわゆる1つの「キャラの一人歩き」という奴ですか！？

怖いですね、ヴィクターは……、そうですね笑いながら敵の背中に銃弾送り込むような性格にする予定はなかったんですが……。

というわけで、2人ほど新キャラが出ました。

ヴィクターについては上で言ったので良いとして、あとはエレナですね。まあ、戦うお姉キャラが良いと思いますよ？

何故疑問形かといいますと、しっかりとしたキャラ設計が出来ていないからです。

さすがに6人ぐらいで最終決戦するのもおかしい、というより無茶苦茶だと思って数を増やすために出したんですが、脳内イメージもあまり固まっていないので、登場人物紹介に加えるのは少し先になると思います。

一応、強いですからいいんですけどね……。ヴィクターと比べて出番を増やせるかが不安なんですけど……。

ああ！

こんなに動かすキャラが多いと、大変ですね。ですが、妥協する気もさらさらない愚かな作者であります。

これからもよろしく願います。

誤字脱字、ご意見、感想お待ちしております。
是非ください！！

第三十九話 レールガン（前書き）

別にコインを弾いたりなんて一切、合切、無慈悲に、パーペキなままで、出てきませんのであしからず……

え、聞いてない？

そんなことこそ聞いてませんよ？

道男「さっさと始めるおおおお……！」

げばおおおおおっ！…？

つ、ついに地の文にまで、……そして前書きとついで安徳の地まで……
…ガクッ

第三十九話 レールガン

「くくく、愚かな人間どもが、足掻きに来たか……」

「ボス、敵艦に対して『ジャツカル改』が攻撃を開始、1機を残して撃破されました」

ドームを見渡せる観客席の最上部、その椅子に腰かけながら、マガスは着々と発射準備が整っていく核弾頭の発射機を眺めていた。

遠くから時折爆発音が振動を引き連れてやって来るが、まだ遠い。

「やはり、な。奴らも馬鹿じゃない、1度戦った相手にそう易々と負けるわけはなかったか」

「敵はへりによる浸透、東西から戦車隊、南から艦を突撃させてやってくるようです。東西の『ジャツカル改』と戦車はともかくとして、南門は突破される恐れがあります」

背後にいるのは、『デルジャナ』のAIと接続されている機械人だ。彼がAIの言葉を代弁している。その言葉に耳を傾けながら、マガスは核弾頭をしみじみと眺め、口元には若干の笑みを湛^{たた}えていた。

「まあ、発射の時間までもってこれれば構わん。私たちがやるはずだった仕事を彼らが代わりにやってくれるのだ、彼らには感謝せんとな、くくく」

反乱軍には、数体の機械人を潜り込ませている。指揮官であるCM-09だけでなく、一般兵も数名機械人に置き換わっている。反乱

軍の奴らは気づかないだろうが、戦っている本人、旅団の人間なら気が付くことはあるだろう。

「都市内に浸透した敵部隊の行方はどうなっている？」

唯一の懸案は、対空火器の雨の中を突っ切り、落下傘降下した命知らずな敵だ。拠点防衛に徹しているマガスの兵力は、都市内を遊弋ゆうよくしている敵に対しては不利な立場にある。反乱軍の部隊が都市全体に万遍まんべんなく配置されているとはいえ、1つずつの部隊の規模が小さくなってしまっているという事もあり、浸透した敵を撃破できるか微妙なところだ。

確認された降下戦力は、18名ほど。うち1人は降下中に殺されたようだが、あとの17名は滞りなくビルの合間へと消えた。その後、1度反乱軍の警戒網に1人が引つかかったようなのだが、装甲車1台、歩兵10名程度の戦力では敵をその場に押しとどめる事すらできず、交信と絶った。

その部隊には、マガスが送り込んだ機械人もいて、彼から独自のルートで情報をマガスに上げてきていたのだが、それも絶たれたため、部隊が全滅したことは言わなくても分かる。だが、彼の最後の交信で、敵がドームを指して着々と進んでいることだけは分かった。ドーム周辺は『ジャッカル改』が固めているが、戦況に応じては『ジャッカル改』を南門に差し向けなければならぬ可能性もある。そうなれば、マガスに残される手段は限られる。

「現在、敵は1つに固まって真っ直ぐドームこもを目指しています。『ジャッカル改』2体を個別操作スタンドアロンに切り替え、偵察を行っています。……、西門で戦闘開始を確認しました」

今までとは違い、遥かに近い場所で、発砲音が響き渡った。

「敵勢力を撃滅しろ。1人も通すな」

「了解」

「それから、『グラディオン』の出力を最大に設定しろ。あの邪魔な艦ふねを巻き込め」

「それではドーム内にも少なからず影響がでますが？」

「対電磁波ネットで核弾頭と発射機は覆われているのだ、問題なからう。それと『ドーントレス』に燃料を入れておけ」

マガスがドーム内にいる1体の『ジャツカル改』に目を向けた。核弾頭の隣に静かに佇むそれは、本来の『ジャツカル改』の大きさではなかった。高さにして2倍、足元にいる機械人が虫のように小さく見えるほどのそれは、背中に巨大なミサイル発射筒のようなものを備え、腕には巨大な大剣を握り、もう片手は銃を内蔵している。

「やはり、移動式に限るな、こつこつのは」

マガスの口元が一際吊り上ったのを見た者は、誰もいなかった。

ルートたちは、広い通りの端を腰を曲げて静かに移動していた。周囲の気配に意識を集中させ、些細な音にも敏感に反応し、目指すドームへと着々に近づいていた。

とはいえ、どこに敵がいるか分からない状況では、無闇に急ぐこともままならない。先ほども反乱軍の部隊に鉢合わせしてしまった。どうもマガスは都市内の遊弋部隊には反乱軍を使用しているようである。数は多いがそれを広く薄く延ばしたために、1つずつの戦力が小さくなってしまっている。

「あとどれくらいかな」

背後からフラッシュ音が聞いてくる。

ルートは視線は片目だけのバイザーに映し出された都市内部の地図を時々確認しながら進んではいるが、性能は決して良い物ではなく、地図の拡大、縮小ができない。そのため、バイザーの中に映っていないと目的の地までの距離も分からないのだ。作戦前に持ってきたあの地図を広げて、周りの景色と地図を見比べながら、ルートは地図を指差した。

「俺たちはここだ。あと、5キロといったところか」

「そろそろ戦車隊が突入する頃だ」

レイが近寄ってきて腕時計を指差した。見れば、各部隊の突入予定時刻に差し掛かるうとしていた。南からは依然として爆音が響いているが、東西からはまだ聞こえてきていなかった。

そこに、無数の発砲音が響き渡り、振動が地面を揺らしながらルートたちの周囲の窓ガラスを砕いた。

「始まったな」

明らかに近い場所での戦車砲の発砲の音、そこに断続的な乾いた破裂音がかぶせられ、爆発音が不規則に大地を揺るがす。

「こちらも、さっさと進まないとな………全員伏せる！！」

レイが不意に通りの反対側のビルを凝視して、大声を発した。瞬時に全員が頭を下げてそちらに銃を向けると、轟音と共にビルの壁が破碎されて巨大な影が通りに姿を現した。そこにはルートたちが以前見たものとは違い、コックピットが無く、代わりにそこでAIが不気味に赤く光っている、巨人が立っていた。

「散開！ レイ、無駄弾撃つなよ！」

脱兎の如くルートが巨人、『ジャツカル改』を回り込むように走り出し、フラッシュ、カンナ、ラーキン、フィリップがそれに続く。同時に逆方向をヴィクター隊が移動して、『ジャツカル改』の攻撃を誘う。

その間に、レイがレールガンを撃つ用意を開始する。手に持っていた小銃を傍にいたエレナ隊の男に渡すと、レールガンを手に取り、その給電コードを腕に差し込む。ふくらはぎのストッパーが展開されて、同時に腰から背中にかけて取り付けられていた大型ストッパーが地面目掛けて振り下ろされ、コンクリートの道路に少しだけめり込む。そしてレイはそれに体重を預け、レールガンに充電を開始する。

「ヴィクター、足を狙え！」

ルートたちはレイが撃つまでは足止めに徹する。グレネードで『ジャッカル改』の動きを鈍らせ、間髪入れずにライキンとフィリップがロケット弾を放ち足に攻撃を集中させる。金属が軋む音と共に黒煙の中から姿を現した『ジャッカル改』が両手の銃で左右のヴィクター隊とルートたちを同時に銃撃する。

「器用なまねを!!」

人間なら、狙ってもできないような事を、AIは簡単に成し遂げってしまう。腕に装備された照準用のカメラが敵を狙うと、『ジャッカル改』は同時に2方向への攻撃を行っているのだ。足元に無数の穴が次々と開き、ルートたちは『ジャッカル改』の背後に回り込もうとする。背後に若干見えている関節の駆動系を狙ってフラッシュがグレネードを発車し、ルートも『ジャッカル改』が手に持つ銃を狙ってグレネードを放つ。

銃に命中すると、何かが詰まったようなくぐもった音が響き、左腕に持つ銃が作動を停止した。銃は繊細な物で、それは大きくなり、装甲が厚くなっても変わることはない。グレネードの直撃を受けて強烈な爆風と振動を受けた銃は銃身が^{ひしゃ}げ空の薬莖を吐き出すのを止めた。

だが、『ジャッカル改』はその程度では攻撃の手を緩める気は無かった。

背中に装着されていた3メートルはあろう鋼鉄の剣を銃を捨てて左手で握ると、ヴィクター隊に銃を撃ちながらこちらに振り下ろしてきた。

「んな馬鹿な!!」

「避ける、フラッシュュ!!!」

片手で軽々と巨大な剣を振るう『ジャツカル改』に一瞬気を取られたフラッシュュが動きを止めた。それに気づいたルートの大声を上げながらフラッシュュを突き飛ばして、自分もその場から飛び退く。

そこに猛烈な勢いで大剣が振り下ろされ、コンクリートの道路をいとも簡単に切り裂いて無数の破片を飛び散らせる。濛々とした土煙に視界を塞がれるが、その中に、不気味な赤いAIの光が見えてルートは反射的に頭を下げた。刹那、何かがさつきまでの首の高さを通過する音が聞こえ、振り返ると大剣が横に振りぬかれていた。

「速すぎ、だるうが……」

「ルート、さつさとそこから逃げる!」

煙の先からヴィクターの怒号が聞こえ、ルートは立ち上がると不気味に光るAIに向けて闇雲に銃を撃ちながら後ずさって距離を取る。『ジャツカル改』は周囲をルートたちに囲まれているにも関わらず、その全てに対してほぼ同時に攻撃をかけるという離れ業をしていた。剣を振るう動作の中で反対の腕に持つ銃で反対側にいるヴィクターたち目掛けて流れるような動作で撃ち続け、決して攻撃の手を休めることなく、ルートたちを追い立てる。

「レイ、さつさと撃て!」

「もう少しだ!」

『ジャツカル改』の猛攻に耐えながら、レールガンを構えて狙いを定めるレイにルートが怒鳴る。だが、レールガンの充電には時間がかかる。そうすぐに撃てるような代物ではないのだ。おまけに試作機であるために取り回しがこの上なく悪い。激しく動き回る『ジャ

『ツカル改』に狙いを定めるのは容易なことではない。

ルートが再び振るわれた大剣を避けると、『ジャツカル改』から銃撃の音が止んだ。すぐに見上げると右手の銃から弾が放たれていなかった。銃身下の巨大なマガジンを片手で器用に外すと、腕が人間なら絶対に取り得ない方向にぐるりと回転して背中の子備マガジンを取り出そうとする。それに気づいたルートがヴィクターと目を合わせて小さく頷いた。即座にヴィクターが頷きを返し、ヴィクター隊がそれを理解して背中の子備マガジン目掛けて攻撃を開始する。ルートたちもマガジンの巨大な箱を撃つと、すぐにマガジンの薄い装甲を貫通して内部の弾丸に命中、炸薬に引火してマガジン内でも銃弾が飛び跳ね始めた。すぐさまマガジンの装甲を突き破って四方八方に『ジャツカル改』の銃弾が飛び散り、そこかしこに穴を開けていく。

それは、マガジンを背負っていた『ジャツカル改』も例外ではなかった。至近距離から大口径の銃弾を無数に受けて動きが鈍り、呻きのような金属の軋みが響き渡る。

「レイ、撃て！」

「了、解！！」

レイを囲むように守っていたエレナ隊の面々が横にずれ、レイの射線上に入らないように避ける。レールガンを持つレイがゆっくりとその銃口を『ジャツカル改』に狙いを定めると、間髪入れずに引き金を引いた。

銃身が電気を帯び、青白い放電に乗って強烈な光が発せられる。そしてその光に導かれるように銃弾が放たれ、タイムラグなく『ジャツカル改』のAIを貫通、背中から突き抜けて背後のビルの壁に突

き刺さった。反動でストッパーをしていたにも関わらずレイの身体がビルの壁まで押され、レールガンが電熱を冷ます冷却水に触れて蒸気を発生させる。

「バースト」

レイがそう呟き、レールガンを下す。

ルートが『ジャツカル改』に目を向けると、先ほどまで不気味に光っていたAIは鈍く点滅しており、振り上げられた剣はその場で静止している。ルートはそれに向けて銃を撃つと、剣が手から零れ落ちて地面に叩き付けられる。そして支えを失ったかのように『ジャツカル改』がぐらりと揺れ、ゆっくりと仰向けに倒れて轟然とコンクリートを砕く。

「ルート、無事か？」

ストッパーを格納してレイが歩み寄ってくる。ヴィクターやエレナたちが『ジャツカル改』を取り囲んで完全に停止したかを確認している。

「なんとか、な。こんなのがあと何体いるんだか……」

「あと29体以下にしてもらいたいな」

レールガンの空薬莖を廃棄して、新しい弾を込める。自動装填ではオートマチックないため、マガジンの上にあるスライドを毎回引いて弾を装填しなければならぬ。

「ドームにたどり着けば良いんだ。ドーム内で派手に撃てば核弾頭に当たるからな」

「確かにな。急がなくてはな」

「ああ」

火花を散らす『ジャツカル改』のAIに開いた穴にヴィクターが手榴弾を放り込むと派手な爆発を起こして再起不能なまでにAIを破壊した。

それを確認してルートは全員を呼び集めて先を急いで出発した。

第三十九話 レールガン（後書き）

作者「どうもどうも、前書きであばら骨を3本ほど召されてしまった作者です」

道男「目標では6本やろうとしていたルートだ」

作者「ちよっ!?!」

道男「お前が突然あんなことを言いだすからいけないんだぞ！元ネタも知らなくせに何を言い出すんだお前は!!」

作者「で、でも、世間一般にレールガンと言ったらあれを指すって知り合いが言っていたもので……。トランフォーマーでアメリカの駆逐艦が乗っけてる方とか、メタ○ギアの奴とか、エース○ンバットシリーズに出てくる奴とか、私はそっちの軍用的なイメージが強いんですが、知り合いに話題振られてまったく驚かされました……」

道男「だからと言って、元ネタを知らないことをやってコメントを貰ってしまったら、返答に困るだろうが」

作者「そうですね、反省はしてます。という訳で反省タイムは早々に終わらせて、ちょこっと補足をば……」

マガスが眺めていた『ジャツカル改』のデカイ奴

作者「大きさは、分かりやすくお教えすると、ガ○ダムに対する…
…、ピ○ザム？」

道男「分かりづらいな……サイコガ○ダムくらいか？」

作者「もしくはデストロイガ○ダムくらい？ あ、これは少し元ネタに疎いですね……」

道男「種死は中盤すっ飛ばしてたよな、お前」

作者「私は最近のは種で始まり種で終わりましたから。それも漫画から入ってゲームから出たという、ね」

道男「……………ほぼゲームの知識だよな、お前のガ○ダムネタ」

作者「ほぼ、ですね。そんなわけで、そのくらいのデカさという設定ですので、あ、でもでもきざな指輪野郎が特攻したり、僕の顔をお食べ的に皆に力を貸す人とか、種が割れてジエノサイドする皆さんとかいないから大丈夫ですよ？」

道男「ちょっとまで、二つ目のはなんだ。さすがに分らんのだが」

作者「『みんなに俺の力を貸すぞ』？」

道男「分らんわ！ もう少しまともなたとえを出せ！！」

作者「エ○さんの『私の命を吸って』って、単なる自殺願望ですか

ね？」

道男「知るか！！ ていうか止めい！！」

作者「はいはい、とまあ、ネタはさておき、ここまで来ておいて未だに終わりが見えない作者ですが、もう少しばかりおつきあいくださいませ。頑張って皆（道男以外）をハッピーエンドに連れていきます！！」

道男「ちよつと待てえええい！！」

誤字脱字、ご意見、感想などお待ちしております！

第四十話 女傑の到着（前書き）

第四十話 女傑の到着

『グランドフリューゲ』が、猛然と『デルジャナ』目指して疾走する。

ありとあらゆる火砲が火を噴いてその進路を阻む全ての物をなぎ倒していく。

撃ち落とし損ねたミサイルが甲板を直撃するが、速度を落とす様子もなく、南門前に展開していた反乱軍の面々は、その様子に戦慄した。

「距離1000を切りました！ 全員対ショック態勢！」

作戦指揮所に怒号が響き、その場にいた全員が手近な物にしがみつく。

反乱軍の戦車が火を噴き、無数の砲弾が艦首に集中して、せつかく直した艦首が再び破壊されていく。だが、修理に伴い、装甲を分厚くした艦首は、砲弾の貫通を許さず、結果勢いを落とすことなく『グランドフリューゲ』は反乱軍の最前線にいた戦車隊をなぎ倒し、押しつぶしながらさらにその先を目指す。

『掩護します！』

出撃した戦闘機隊が『グランドフリューゲ』の前方の障害を狙って爆弾を投下していき、黒々とした爆炎が生まれ、その中を『グランドフリューゲ』が突っ切る。

「距離800!」

目の前に、『デルジヤナ』の巨大な防壁が姿を見せる。その一角にその防壁を両断するように大きな門が据え付けられており、その周りに無数の戦車がこちらにその戦車砲を向けて停車している。

「主砲、撃てえええい!!」

轟音と共に、南門目掛けて主砲が斉射する。砲弾がほとんど放物線を描かず、真っ直ぐに飛ばされ、南門周辺に着弾、戦車が宙を舞う。

「上空に敵機!」

「迎撃ミサイル、急げ!」

情報が錯綜することはない。情報が右から左へと的確に流されているのだ。レーダーには常に『グランドフリーユージェ』に狙いを定めたミサイルが飛来する様子が映し出され、モニターには前方の黒々とした煙がはつきりと映し出されている。

「戦車隊の用意は?」

「いつでも行けます。突入と同時に出勤させます」

南門から突入し、戦車隊を出勤させるのが、『グランドフリーユージェ』の仕事だ。『デルジヤナ』にたどり着くまでは速度を落とすつもりはマツクには微塵もなかった。

その時、不意にレーダーに無数の光点が現れた。それを見たレーダー員があまりの驚愕に目を見開いて言葉を失う。

「こ、後方に熱源多数! 友軍ではありません!」

「なんだと！？ モニターに出せ！」

艦後部にあるモニターが映し出され、地平線よりも手前に土煙が上がる帯がマックたちの目に飛び込んできた。

ゆつくりと拡大されると、今日の前で対峙している戦車と同じ塗装の戦車が横一列に並んでこちらに向かってきている。そして、その数は尋常じゃない。

「マガスめ、戦力を周辺に分散していたのか……。追いつかれるな！」

『追いつかせないわよ』

不意に、戦闘指揮所に聞き慣れない声飛び込んできた。

レーダーに映る戦車の列のさらに背後に、光点が無数に現れ、戦車隊の上に到達、通過すると戦車の光点が次々と消えていく。マックがモニターに視線を戻すと、戦車の上を飛ぶ航空機の姿が目に入ってきた。

『足の遅い輸送機は置いて、私たちだけ先に来たわ』

「グッドタイミングです、ミス・ジゼル」

無線からジゼルの声飛び込み、レーダー上ではまだ識別不明だった機影が友軍フレンドに変更された。

『背後は私たちに任せなさいな。あなたたちは『デルジャナ』へ』

ジゼルの声に後押しされ、マックは後顧の憂いなく『デルジャナ』に向かい合うことができた。

「きよ、距離400！ 戦車を押しつぶします！！」

『グランドフリユーゲ』の巨大なキャタピラが、小さな蟻のような反乱軍兵士を戦車共々踏み潰していく。そして、その度に作戦指揮所には歓声が上がリ、目の前に迫る防壁を見据えるマツクも微笑を浮かべていた。

「行くぞ、諸君」

艦首が防壁に激突する。強烈な衝撃が艦全体を襲い、一瞬艦がつんのめる様に止まって見える。だが、砲弾の直撃を想定していた防壁も、戦艦の突撃を想定はしていなかった。巨大な質量に押されて防壁が崩れ落ち、下にいた兵士を押し潰していく中、『グランドフリユーゲ』は『デルジャナ』内部に突入した。

狭いビルの中に割り込み、ビルを半ばで砕くと、瓦礫が甲板に降り注ぐ。だが、その程度では止まらず、『グランドフリユーゲ』は都市内部に深く食い込み、南門からの通りをだいぶ蹂躪した後、ようやくその動きを止めた。

「ハッチ解放、戦車隊出撃」

「了解、ハッチ解放！」

艦首下にあるハッチが開け放たれ、旅団の戦車が勢いよく吐き出されていく。そして、その一番槍を務めた戦車が発砲すると、次々と他の戦車も攻撃を開始していく。

『タクシー代わりにしちまったなあ！！ 代金はきっちり払わせてもらっじゃないか！！』

『ちよ、戦車長、前、前見てくださいっす！！』

ふと、つい最近聞いたような声が無線から聞こえ、出勤していく戦車に目を落とす。そして、その戦車が『ブラン・コアリア』で401部隊を護衛し、敵の大戦車部隊相手にゲリラ戦を仕掛けた戦車だと気づいて苦笑する。

「旅団長、これ以上は、進めないようです」

「そのようだな。では、我々は固定砲台として精々大暴れしようじゃないか」

「了解！」

『グランドフリーゲ』は周囲のビルを盾に、都市中心部目掛けて主砲、ミサイル、あらゆる火砲を向けて、攻撃を開始した。

「フェイナ、用意はよろしくて？」

『ニースローグ』の複座の戦闘機の前、つまり操縦席にいるフェイ

ナに向かつて、ジゼルは後ろから声をかけた。2人とも酸素マスクをしている為、声は直接というよりは無線から、という感があるが、ジゼルの声はしかとフェイナの耳に届いていた。

「良いですよ！ 投下タイミングはジゼルさんをお願いします！」
「了解、そのまま真っ直ぐ飛んで」

ジゼルは後席、リーダーと兵装を扱う座席に深く座り、目の前のリーダーを睨みながら爆弾の投下ボタンに指を置く。
そして、画面上の十字が敵の戦車群の真上に到達した瞬間、ボタンを押すと、機体に振動が走って翼から爆弾がバラバラと振り落されていく。

機体から解き放たれた爆弾は、慣性の法則に基づいて緩やかなカーブを描きながら地上に向かつて落下し、戦車の集団を丸々1つ吹き飛ばして、衝撃波が地面を走る。

「お見事！」
「ありがとう」

前席でフェイナが機体を傾けてその様子を見て言うと、ジゼルが得意げに言った。

「ジゼルさんって、なんでもできるんですね」

「あら、フェイナだって初めての戦闘機を上手に飛ばしているわよ？」

「免許は取りましたから……、と、おしゃべりしている暇はないよ
うです」

フェイナの目が、『デルジャナ』上空に黒い点を見つけた。

「あらあら、お迎えが来たようね。ジョリーロジャー1から各機、敵戦闘機を迎撃するわよ」

『ジョリーロジャー2、了解』

『ジョリーロジャー3、了解』

フェイナが操る機体、ジョリーロジャー1の左右後方に2機の僚機が近づき、編隊を組む。現在、この空域にいる『ニースローグ』の戦闘機は18機、6個小隊が旅団『フリーユゲ』の戦闘を支援するために空を駆け廻っている。

「対空ミサイル用意、ロック、オン」

「フォックス2、フォックス2！」

ミサイルが翼から切り離され、白煙を引きながら飛翔していく。ほぼ同時に18機の戦闘機から放たれた計36発のミサイルは『デルジャナ』上空の敵機目掛けて一直線に進んでいく。

敵機がこちらの攻撃に気が付いて急上昇、急降下を繰り返して回避行動を取るが、36発ものミサイル全てを避けきけることは叶わず、ほぼ次々とミサイルが着弾、空に花を咲かせて砕け散りながら墜落していく。

だが、こちらの攻撃に気が付いた他の敵機が反転、こちらに機首を向けてミサイルを発射してきた。機内にミサイル接近を知らせる警告音が響き渡り、フェイナは操縦桿を引いて思い切り機首を上げると、急上昇してミサイルを回避しようとする。ミサイルは他の味方機にも襲い掛かり、各機がバラバラに散開して独自の回避行動を取る。

「フレア！」

フエイナが叫ぶと同時に、機体後部から無数の火の粉が吹き出し、眩い光を放って敵のミサイルを攪乱する。目標を見失ったミサイルが明後日の方角に飛び去っていくのを確認して、フエイナは回避行動を止めて目の前を見据える。

高度を上げたため、『デルジャナ』とその周囲を見下ろすような位置についたフエイナとジゼルは、そこ『デルジャナ』に突入した。『グランドフリーユージュ』を見た。ビルの間を、ビルを破砕しながら突き進む様子に、呆気を取られるが、すぐに気持ちを敵の戦闘機に戻して、こちらにミサイルを放った敵機を探して目を凝らす。

「9時の方角よ、あれ！」

後ろからレーダーを睨んでいたジゼルが叫び、フエイナがこちらを見ると、3機編隊の敵機がこちらに向かって旋回してきたところだった。

「迎え撃ちます」

「後ろはついて来てる？」

『ばっちりです』

『いますよ』

僚機はいつの間にかピッタリ背後についていた。それを確認してフエイナは敵機に機首を向けると速度を一気に上げる。

敵機もこちらに機首を向けて、一気に接近する。相対速度で物凄い勢いで両者は接近し、あっという間にミサイルが使える距離以下になってしまった。そして、そこに至ってフエイナは機関砲の発射ボタンを押し、機首横にある機関砲が火を噴く。曳光弾に導かれて機関砲弾が毎分4000発といわれる発射速度で次々と放たれ、敵機

に吸い込まれていく。先頭の1機に命中して、機体が爆発すると、それを避けるために他の敵機が旋回をしようとする。その結果、フエイナの背後にいた僚機に対して腹をさらけ出すことになり、残りの2機も砲弾の嵐を浴びて撃墜された。

「ナイスキル」

「まだまだですよ」

周辺に他の敵機がないことを確認して、ジゼルが言うと、フエイナは照れくさそうに言った。

「さてと、そろそろあなたも陸おかに戻りなさいな」

「え、どういう意味ですか？」

ふと、ジゼルが言い出したことの意味を理解できずに、フエイナはつい聞き返してしまった。

「あなたの大切な人たちがあのドームを目指しているわ。行ってやりなさい」

「ジゼルさん……、ありがとうございます。それじゃあ、『グランドフリーユゲ』に着陸しますね」

「了解、掩護は任せたわよ」

後方の2機に対してジゼルが言うと、フエイナが高度を下げて動きを止めている『グランドフリーユゲ』の背後、後部甲板に回り込んで車輪を出す。

「こちら『ニースローグ』都市軍、ジヨリーロジャー1。着艦許可を願います」

旅団の無線周波数を使って呼びかけると、すぐに了承が返ってきて、誘導信号が発せられる。

『こちら『グランドフリユーゲ』管制、現在本艦は戦闘中だ。流れ弾に注意せよ』

「了解、後方への撃ち上げを止めさせてください、当てないでください」

機体をゆつくりと横滑りさせて着艦に最適な位置に移動すると、徐々に高度を下げていく。甲板には誘導用のライトが灯り、甲板員が両サイドに避けていくのが見える。

フェイナは機体を丁寧に操って甲板に着陸すると、後部のフックが甲板のワイヤーを引っかけて急激な制動を受け、フェイナとジゼルが身体が前につんのめる様に飛び出しそうになる。そしてその勢いの反動で座席に叩き付けられると、機体が止まり、甲板員が飛び出してきて誘導を開始する。

「ジゼルさん、戦闘機、ありがとうございます」

「良いのよ、これくらい。ああ、エンジン切らなくていいわよ？」

コックピットのキャノピーを開けると、ベルトを外してフェイナは機体から飛び降りた。するとジゼルが器用に前席の背もたれにしがみ付きながら後席から前席に移動して、操縦席に収まった。

「また、すぐに出るから。マックによろしくね」

「分かりました。それじゃ」

フェイナは甲板員に次々と指示を飛ばして燃料と兵器の補充を受けるジゼルに敬礼して、甲板から格納庫へと走り出した。

第四十話 女傑の到着（後書き）

作者「どうも、ハモニカです」

道男「ルートだ」

作者「いや、この物語ももう40話です。最初の頃からはしてみると信じられない思いであります」

道男「40話行かないかも、とかリアルで言っていたな」

作者「それもこれも、読んでくださっている方々のおかげです。そしてタイミングが良い事に、この作品のPVが5000、ユニークが10000を突破いたしました。本当にありがとうございます」

道男「積み積もったな」

作者「ええ、ゆっくりと上がっていく合計欄を見ながら、それを糧に頑張ってますから。「なるう」様のランキングでも週間などでランキングさせてもただけて、嬉しい限りであります」

道男「ファンタジーを求める読者が多いらしい「なるう」様の中では、頑張ってるんじゃないか？」

作者「それが本当かどうかはわかりませんが、頑張ります」

道男「それでだな、1つ聞きたいことがあるんだが」

作者「はい？」

道男「なぜ、あいつが、ここに、いるんだ？」

ジゼル（以下ジゼ）

「あら、私がここに居ちゃまずいかしら？」

作者「何を今さら、ですよ。以前言いましたよね、早めの公開処刑をします」と

道男「待たんか！ 後書きこしきで先に死んだら本編ほんへんどうするんだ！ というより断固拒否する！」

作者「死ぬ？ いったい何の話をしているんですか？」

道男「な、に？」

ジゼ「私はあなたの公開処刑くんれんを頼まれただけよ？ 大丈夫、あなた頑丈だから」

道男「お、おちつけ！ いや落ち着いてください！ な、なにをやるうって言うんですか！？」

ジゼ「とりあえず……、『地雷原の楽しい歩き方』、『空襲から身を守る100の方法』、『君もこれでエリート！ 上手な対戦車戦』
。これを実戦形式で教えてあげるわ。もちろん、私あなたV S ルートで」

道男「い、嫌だあああああ！……！」

作者「あ、逃げた」

ジゼ「ちょっとやりすぎたかしら」

作者「大丈夫ですよ、それよりも、今回は私の申し出を受けてくれてありがとうございます」

ジゼ「まあ、あの子の人の接し方にはいささかの問題があったことは事実よ」

作者「これで矯正されると良いんですが……」

ジゼ「あの子の被害を最も受けているのはあなただものね……」

作者「ええ……」

誤字脱字、ご意見、感想お待ちしております！

第四十一話 動き出す戦況（前書き）

レポート2つ終わったうつつうつつ！

あとはプレゼンの大量の資料を文章にして、残りのレポート2つをやるだけ……ってまだまだあるんですか！？

期末も近い上に、レポート！？ 小テスト！？ 殺す気ですか？！
そうなんですネ！！？

そんな物には決して屈したりしませんからね！

1週間前ぐらいまでは投稿してやるんだから！！

第四十一話 動き出す戦況

ルートたちがドームを指して移動していると、突然爆発とは明らかに違う種類の振動が足元から伝わって来た。そしてそのあまりの振動の大きさに敵襲かと思って全員が姿勢を低くして周囲を用心深く辺りを見渡していると、周囲のガラスが砕け散り、コンクリートが歪んで地面がずれるような動き方をする。

「来たか」

「みたいだね」

空を見上げるが、何も知ることはできない。だが、何が起こっているかは容易に想像がついた。

フラッシュが無線機の周波数を合わせて様々な無線を拾おうとしてみる。するとすぐに悲鳴にも似た怒号が無線機から飛び出してきた。

『せ、戦艦が突っ込んできやがった！ 全員退避しろ！！』

『た、助けてくれ！ 足が挟まって……うぎゃああああ！！』

あまりに聞くに堪えないのでフラッシュが再び無線を切り替えると聞き覚えのある声が飛び込んできた。

『タクシー代わりにしちまったなあ！ 代金はきっちり払わせてもらおうじゃねえか！！』

『ちょ、戦車長、前、前見てくださいっす！』

『ブラン・コーリア』でルートたちを運んでくれた、あの陽気な戦車長とそれに振り回される砲手の掛け合いが無線から飛び出し、ルートはつい苦笑してしまった。

「相変わらずだな、この人は」

「なんかもう、ね……」

何とも言えない微妙な空気が立ち込めてしまったので、フラッシュは無線を切って無線機をしまった。

「『グランドフリーユージュ』が突入したようね」

後ろからエレナが近寄ってきて、南の方角を指差した。

それを聞いたヴィクターも寄ってきて、エレナとヴィクターが互いの拳をぶつけ合って、仲間の奮戦を喜び合った。

「それと、どうやら『ニースローグ』の増援が到着しているようだ」「なに？」

レイが空を見上げて言うと、ルートもレイが見つめる空に目を向ける。

すると、そこには旅団の戦闘機ではない、見慣れない戦闘機が編隊を組みながらミサイルを発射、敵戦闘機と戦闘を繰り広げていた。

「戦闘機だけっぽいですね、一足先に来たといった感じですか」

カンナが目を細めて空を見上げながら呟く。

「おそろくな。あんの婆先に足の速い戦闘機だけでも、って考えたんだろっな」

「ルート、だからさ、ジゼルさんの事あまり悪く言つと、また『教導』されるよ?」

「聞こえなければ良いのさ」

フツと笑うルートがフラツシユの方に視線を向けると、なぜかため息をつき、片手を顔の半分の方にやってもう片方の手に持った無線機をルートの前に差し出した。

ルートはそれを見た瞬間、表情が凍りつき、恐る恐るその無線機を手に取って受信に切り替える。

『……久しぶりね、ルート』

最も聞きたくなかった声が、なんの抑揚もなく、冷淡に、ルートの死亡通知書を届けてきた。あまりの衝撃にルートは無線機を片手に持った状態で固まってしまふ。

『あれから少しは礼儀を知ったと思ったのだけれど、足りなかったようね。丁度空にいるから、あなたに今から爆撃回避の訓練でも受けてもらおうかしら?』

「ややや、ま、待つてくれ、じゃなかった待つてください! い、今は作戦行動中ですので、それはまた今度という事に!」

ルートが必死になつて無線に言い放つ。ルート以外の全員がジゼルの冗談だという事は理解していたのだが、ルートだけは彼女の恐ろしさを知っているがゆえに冗談を理解できなかった。そのため、ルートは墓穴を掘ることになつてしまつた。

『あら、そう? じゃあ、この戦闘が終わつたらマツクに出向させるように打診しておくわ。楽しみにしてなさい、新兵?』
ルキ

そう言い残して無線が一方的に切られ、あとには茫然自失のルートが残された。尋常ではない汗がルートの顔から流れ落ち、おそらくボディアーマーの中はびしょ濡れに近い状況だろうが、あいにくそれを確認する術すべはない。

「ルート、全力で支援してやるから、任務に集中しろ」

レイが、固まるルートの肩を叩き、心ここに在らずのルートの意識を引き戻そうとする。

「レイ、俺が死んだら、403部隊を任せた……」

「しつかりしろ、作戦行動中だぞ」

だが、ルートは完全にジゼルの言葉に打ち砕かれていた。まるで未来への希望を一切合財失ったかのような状況に陥ってしまったルートは不意に起き上がると、銃に手をかけた。

すわ自殺か！？ という思いが全員の脳裏を過ぎったが、幸いそうではないようでルートは通りの先を見渡せる位置につくと、あとに続くよう手信号で合図を送ってくる。

ホッとしてレイとフラッシュがその後ろにつき、次の指示を待っている、ルートの口から言葉が漏れた。

「最も死ぬ可能性の高い先頭は、俺が行く。止めるんじゃないぞ」

やっぱりまずい状況だ、というのが全員の総意になったのは言うまでもない。

「南門に敵艦が突っ込みました」

「ほお、敵の指揮官は勇猛果敢、いや猪突猛進なようだ。反乱軍は？」

マガスの横で『デルジャン』のAIに繋がっている機械人が言うが、マガスは言葉ではそう言いつつもまったく興味もないようで超巨人機『ドントレス』の整備を眺めていた。

「それと、『ニースローグ』都市軍の戦闘機が戦闘空域に突入、招集していた反乱軍の戦車隊に攻撃を開始、我が方の戦闘機隊と交戦状態に入りました」

それを聞いて、ようやくマガスは部下の機械人の方に視線を移した。その目には、感心したような感情が映っており、反乱軍の損害などまったく気にしていない様子であった。

「戦闘機だけか」

「今のところは。遠距離レーダーが高高度を飛ぶ敵の大型機を感知していますが、到着にはまだ時間がかかる見込みです」

「ふうむ、東西の門の戦況は」

「戦車隊は苦戦していますが、『ジャツカル改』によって敵の侵攻は食い止めています。それと、敵の降下部隊を捜索していた『ジャツカル改』が交信を絶ちました」

「『ジャツカル改』をこの短時間で倒すか。どうやら、敵は随分と強力な兵器を携行しているようだ。核弾頭の準備は間もなく完了する。それまでは絶対にドームに近寄らせるな」

了解、と機械人が返し、『デルジヤナ』のAIを通じてドームの外を囲むように配置されている『ジャツカル改』が戦闘態勢に入る。独立して行動するのではなく、全てを『デルジヤナ』の母体となるAIに統括されている為、情報処理の速さが半端ではないほど高くなっている。要するに、動作や反応が良いのだ。

「私も『ドントレス』の準備が出来次第、計画通り行動を開始する。後の指揮は『デルジヤナ』のAIが取れ。反乱軍は使い潰してもらって構わん、むしろ使い潰せ、あとで処理するのも面倒だ」

部下を連れてドームの地下へと移動する。

戦闘開始から各拠点、ビル屋上に配備されている兵器の操作を行っている場所へ行くと、各所の戦況を集約しているモニターが暗い部屋で不気味に光っている。

部屋の中央に据え付けられた巨大な机の上には『デルジヤナ』の電子地図が浮かび上がり、各所で戦っている戦力が表示されている。

東門では『フリーユーゲ』の戦車隊が1機減った3機の『ジャツカル改』と激しい戦闘を繰り広げ、周囲のビルが倒壊している様子が電子地図に浮かび上がる表示とモニターの映像を見比べることで把握することが出来る。

西門も同じような状況だが、これは東西門の防衛隊が足止めを最優先にしているからだ。敵になるべく多くの出血を強いらせ、構築した陣地からは絶対に前には出ないように徹底されている。陣地の防塁は戦車砲ならばある程度は耐えられるし、そもそも『ジャッカル改』がいるだけで『フリーゲ』の戦車隊は前に進むことが出来なくなっている。高速でビルの合間を移動し、撃つては隠れ、撃つては隠れの繰り返しをする『ジャッカル改』相手に、足の遅い戦車は分が悪いのだ。

南門の情勢が最も流動的になっている。

何しろ、『フリーゲ』の戦艦が南門の陣地を踏みつぶして都市内に侵入、そこで戦車隊を放出、冷静さを失った反乱軍の人間はなし崩しに後退し始めており、もはや戦闘と言えるようなものはそこでは行われていない。

南門だけに限って言えば、ほぼ壊滅的な打撃を受けている。

さしものマガスもここまで反乱軍の連中が不甲斐ないとは思っていなかった。だが、やはり反乱軍は人間、恐怖に支配されれば戦う意志など星の彼方に消え去ってしまう。突っ込んできた艦にはそれには十分すぎるだけの衝撃とプレッシャーを持っていたのだ。

「仕方がない、『ジャッカル改』を5機回せ。時間稼ぎ程度にしかならんだろうが、いくらかマシだろう。ああ、それと、差し向ける『ジャッカル改』は無差別仕様デストロイモードにしておけ。反乱軍もついでに数を減らしておけ」

「了解」

降下したルートたちを搜索していた残りの1機と、ドーム周囲を固めていた4機の『ジャッカル改』が指令を受けて南門へ向けて高速で移動を開始する。

「上空の敵が邪魔だな」

「味方戦闘機と入り乱れていますので、地上からの攻撃を控えていきます」

「構わん。地上からの攻撃を再開させる。どうせ替えは利くんのだ」
「……了解」

『デルジャナ』のAIが一瞬の間をおいて返事を返してきた。

感情を持たないAIでも、さすがに人間ではない、いわば生粋の仲間である戦闘機すらも巻き込みかねない攻撃を一切の戸惑いなく命じるマガスには、何かしらの抵抗があったのかもしれない。だが、結局は命令は絶対であるために命令に従う。

「主砲再装填完了、弾種散弾！」

ビルに両舷を挟まれて動けなくなった『グランドフリーユージュ』は目の前にしか撃てなくなつた主砲を目一杯俯角にして地上にいる敵戦

車と兵士に狙いを定める。艦首の前に並んだ旅団の戦車が混乱状態の敵に戦車砲を向ける。

反乱軍は遮二無二に撃ってくるが、彼らを守るはずの防塁が邪魔をして旅団の戦車を狙い撃つことができない。それどころか、旅団からは狙えて、反乱軍からは狙えないというありがたくない状況になつてしまったのだ。それでも、歩兵単位で『グランドフリーゲ』を狙って攻撃を仕掛けてくる。

マックはそれを作戦指揮所から見ていた。

「A隊、B隊の侵攻状況は？」

「『ジャツカル』に抑え込まれています。敵は時間稼ぎを徹底しているようで、こちらが近寄らない限り攻撃を仕掛けてこようとしません」

「やはり、核弾頭の発射までの時間を……」

東西の、マガス隷下と思われる機械人の部隊は決して無駄に旅団を攻撃してこない。丁度戦況が拮抗し、泥沼化するように戦っているのだ。そのため、戦車隊も攻めあぐねているのだ。

「南門（ミナト）から最もドームまで進める可能性があるようだな、照準い
いか？」

「いつでも、っ、敵後方に大型熱源！ 『ジャツカル』です、数は
5！！！」

突然入った情報に作戦指揮所にいる全員の表情が凍りつく。

今の『グランドフリーゲ』は左右をビルに押さえ込まれて身動きが取れない。主砲も回転させることが出来ず、いわば逃げることも敵を追うこともできない状況にある。そんなところにすばしっこい

『ジャツカル改』に攻撃されては、逃げる余地もない。

「近づけるな！ 戦車隊、主砲、斉射用意！！」

「『ジャツカル』、は、反乱軍に攻撃を開始しました！」

「なんだと!？」

モニターを見上げて、マツクは驚愕した。撤退しようとする反乱軍を『ジャツカル改』が次々と銃撃していくのだ。両手に持つ大口径の銃で戦車の天蓋を穿ち、逃げ惑う兵士を踏みつぶしていく。

「逃げる者は容赦しないということが……」

実際には、もはや用済みとなった反乱軍の処理を兼ねていたのだが、マツクはそれを知らない。とはいえ、『ジャツカル改』と『グランドフリーゲ』の間には反乱軍がいる為、『ジャツカル改』の照準はどうしても反乱軍に向き、一瞬ではあるが『グランドフリーゲ』に攻撃できるチャンスが生まれた。

反乱軍はてつきり味方だと思っていた『ジャツカル改』に攻撃されて混乱し、『ジャツカル改』は反乱軍を飛び越えながら『グランドフリーゲ』に近寄ろうとするが、反乱軍が多くて思うように前に進めない。

「目標前方、撃ち方始め！！」

狙いなど、まともに定める必要もなかった。

前に撃てば敵に当たるといってもない状況下で、発砲された砲弾は点ではなく面で反乱軍に降り注ぐ。『グランドフリーゲ』の放った砲弾は反乱軍の手前で分裂、散弾となって戦車、兵士問わずその上に小さな子弹の雨を降らせた。

細かく細分化された兵士の肉体を、戦車の砲弾が瓦礫と共に吹き飛ばしていく。

さすがに『ジャツカル改』は一瞬早く回避を行い、直撃は避けたようだが、斉射された砲弾が生み出した爆風は瞬く間に一帯に広がり、高熱の熱波と衝撃波を伴って隠れた『ジャツカル改』の表層と露出した駆動部を焼いた。

動くことはできるが、明らかに当初の速さはない。こちらに向けて銃を撃ってくるが、お返しに戦車砲による集中攻撃を食らい、1機また1機と各個撃破されていく。

作戦指揮所で歓声が湧き立ち、マックも微笑を浮かべる。

そこに、ドタバタと入ってくる音が聞こえ、次には耳に突き刺さる大声が響いた。

「旅団長！」

歓声を上げた作戦指揮所にフェイナの声が響き渡った。

てつきり、ここにはいないと思っていた声に、マックは驚いて振り向き、フェイナに駆け寄る。

「どうして君がここにいるんだ？」

「ジゼルさんに送ってもらったの。そんなことよりも、あたしも戦車に同乗してもいいですか!？」

「何をいきなり……、レイか」

後半は、フェイナには聞こえないぐらい小声で、むしろ心の声でもいくらい小さな声で呟き、目の前で息を切らしているフェイナを

見つめる。

「……止めても無駄だな。前部ハッチが開放されているから、装備一式持って行ってこい。あいつらはドームを目標している」
「了解!!」

礼の言葉もほどほどに作戦指揮所を飛び出していくフェイナ。それを見つめるマックはふと作戦指揮所の面子がマックと同じような表情をしていることに気が付き、苦笑する。

「青春だねえ」

誰が言ったかも分からない声が作戦指揮所に響き、どこからともなく笑い声が出てくる。

「戦場で咲く青春なんて、たまったもんじゃない。さっさと終わらせようじゃないか」

マックの言葉に全員が頷き、持ち場に戻ると任務に戻る。

「育ての親に想いを抱く、いつ考えても不思議でならんのだがなあ……」

世界の命運を握る戦闘中にも関わらず、『グランドフリーユージュ』の作戦指揮所には妙に和やかに雰囲気の流れていた。

第四十一話 動き出す戦況（後書き）

ふい〜、という訳で、ルートの死亡フラグ発生でした〜。

今日は道男さんがいると確実に殺されるのでこの形で……。

前回ぐらいに後書き^こでは制裁を下したわけですが、本編でもしつかりやろうと思っていたのは随分前からですので、後書きで先走ってしまった作者をお許し下さい。

それと、最後のフェイナですが、……何も言わんといってください。

こうでもしないとあの2人絶対に進展しない気がしますので……。

というわけで、メインキャラが全員そろうまであと少しってところですか。もともとフェイナもルートたちと共に行かそうと思っていたのですが、ジゼルとの絡みに誰か飛ばさないといけませんでしたのでね。ギリギリ飛び込みセーフって感じにしますか……。

それと、ほぼ確実に蛇足になるんですが、マツクの台詞「目標前方（ry）」は、できればその後「死刑執行」って言わせたかったんですよね……。

ハイ、某吸血鬼の旦那が無双する漫画の大司教様ですよ。

あの台詞は結構好きです。圧倒的な物量が無いと言えませんよね、

「目標前方」なんて。何を狙って撃てばいいんですか？ 「適当に前の方に撃てばいいんじゃないかね？」で済んじゃうんですから。

さすがに現実ではありえないでしょうが……。

とまあ、こんな感じで良いですかね？

では、今回はこの辺で失礼させていただきます。

誤字脱字、ご意見、感想、お待ちしております！

第四十二話 バリケード突破（前書き）

第四十二話 バリケード突破

ドームに近づぐにつれ、ルートたちを襲う敵の攻撃は当然のことだが密度を上げ、より強力なものへと変わっていった。ドームまでの直線には、幾重にも構築された陣地は遂には巨大な壁となり、ドームを含めた都市中枢地区を囲むように構築されていた。ビルとビルをコンクリートで繋ぎ合わせ、道に沿って壁にトンネルが掘られ、ある程度の傾斜をつけて構築されたその壁は、平たいダムのようにも見える。

巨大な壁の頂上には幾つもの監視塔のようなものが置かれ、そこを含めて壁の前後、上下には無数の兵士が配置され、巨人機『ジャツカル改』の姿も確認できる。整然と並ぶその姿は、恐怖はもとより、どこか荘厳な雰囲気を感じている。

「トンネル以外に突破できる道はないか……」

「みたいだね。……1人で突っ込まないでよね」

「さっきの事は忘れろ……」

巨大な壁から少し離れたビルの1階に隠れ、突破口を探っていたルートは双眼鏡から目を離して憎たらしげにフラッシュの横顔を見た。

ビル内には17人の仲間全員が集合し、次の指示を待っている。

何しろ、この通りは南門から少し離れた場所のため、敵の警備も厳しく、戦力も重点的に置かれている。現に目の前のトンネル前にはその左右の1機ずつの『ジャツカル改』、4台の戦車、20名を超える兵士が銃を手に持ち、陣地の奥で周囲に目を光らせている。

また、トンネルの上部には監視塔があり、機関銃が据え付けられている。夜間用のサーチライトがその隣に置かれ、兵士が監視塔で辺りを警戒しながら左右に行ったり来たりしている。

「無線は通じるか？」

後ろに振り返り、無線機を操作するカンナとフィリップに聞く。

「どうも混線しているようで、味方の交信に敵の無線が入り込んで上手く通信ができません」

「聞くに堪えない交信だから余計に性質たちが悪い……」

確かに、無線機から洩れてくるのは、反乱軍の悲鳴じみた救援要請や、本当にただの悲鳴なものなど、到底聞いていても情報を得ることができないものだった。唯一、分かることは、かなり近くまで旅団の戦車隊が着ているという事だけだ。

「何とか連絡を取れ。今の戦力ではあのトンネルは突破できん」

「了解」

レイの持つレールガンなら、確かに『ジャッカル改』のAIを保護する分厚い装甲をも貫徹できる。戦車の装甲とてその御多分には漏れない。だが、数が多い。どれか1つに照準を合わせている間に、他の敵に狙い撃たれてしまう。火力はもとより、数が足りないのだ。どうしても火力支援が必要だ、それも戦車クラスのものが必要なのだ。

「レイ、最高何秒で連射できる？」

「5秒といったところだな。狙いをまともにつけなければ、だが。」

狙いをしっかりとつけるのなら15秒、護衛付きでな」

「妥当ラインだ。『ジャツカル改』を潰せればあとはヴィクター隊とエレナ隊で潰すことが出来る」

戦車程度ならば、今持っている武器で何とかなる。歩く武器庫扱いされているフリリップとラーキンのおかげで、対戦車弾は数に余裕がある。足止めではなく、撃破を狙える。

やはり問題は2機の『ジャツカル改』だ。

「あつ！、ルートさん、無線が……」

「繋がったか！」

無線機に駆け寄り、受信機を耳に寄せて雑音の中から探していた仲間の交信を聞き取ることができた。

『今度はこっちの番だ、いっちょよう派手にブチかましてやれい！！』

『装填完了つす！ 目標前方の『ジャツカル改』！』

『撃ていっ！！』

直後、轟音が無線から響き、足元に振動が伝わってくる。

「やってるな……」

かなり近い場所で爆発音が響き渡る。だが、この通りではない、だが、呼べばすぐに来てもらえる距離までは来ている。なんとか通信しようとしてルートは雑音を極力消して通信可能なまでに周波数を抜粋しようとする。

「こちらルート、聞こえるか？」

『んあ？ その声はいつぞやの隊長さんかい？ 今どこだ？』

「南門から1本ずれた道沿いのビルの中だ。こちらに回り込んでくれるか？」

『ちよいと待つてる。確か……、ああ行けるぞ。少し待つてる。仲間を連れて掩護に回る』

『『ジャツカル改』2機、戦車4台が相手だ。頼むぞ』

『合点承知した』

無線が切られ、再び雑音だけが聞こえるようになる。

ルートが立ち上がって用意をするよう言おうと振り返ると、すでに全員が準備を整えて立っていた。

「指示は？」

レイが全員を代表して聞き、ルートは小さく頷いて口を開く。

「401部隊はこのままビル裏から路地に出て通りにすぐに出られる場所で待機。ヴィクター隊はビル正面玄関から出られるようにしておいてくれ。エレナ隊は裏から出来るだけ壁に近い場所まで行ってくれ。こちらの攻撃に合わせて横合いから斬りつけるんだ」

地面に広げた地図を指差しながら、ルートは手早く指示を飛ばしていく。地図には赤いペンで壁の位置が書き込まれており、大体の位置関係は把握できるようにしてある。

簡単な説明を済ませると、ルートも銃を手に取る。

「合図は簡単だ。旅団の戦車の発砲と同時に攻撃開始だ」

「「「「「了解」「」「」」」」」

裏手に回り、ビルの合間の狭い路地を進んで通りに突き当たる。そこから通りの様子を窺うと、先ほど確認した時と同じように『ジャツカル改』が左右を固めて監視している。通り1つ隣では激しい戦闘音が響いているというのに、まったくの無関心である。これが人間なら気がでないのだろうか、任務に忠実な、悪く言えば言われたこと以外はしない、そういうAIを搭載しているのだから、当たり前と言えば当たり前なのだ。『ジャツカル改』はともかくとして、戦車に乗り込んでいる機械人や、監視塔にいる機械人は時折爆発音に反応したり、そちらに視線を向けたりしているところを見ると、やはり少なからず気にはなっているようだ。

ルートは狭い路地から通りでトンネル方向に対して盾になりそうな物を探し、近くに乗り捨てられているトラックのような車両を見つける。横転して丁度トンネル前に対してビルから張り出す様に位置している為、丁度敵の弾を避けることが出来そうだ。

『こちらヴィクター、いつでも行けるぞ』

『エレナよ、もう着くわ。トンネル横25メートルぐらいの場所』

「了解、あとは戦車を待つだけだな」

激しい戦闘が続いているだけに、こちらに来られるか心配なところではあるが、ルートは心配していなかった。1度戦闘を共にして、無線に答えた戦車長の腕前は知っている。そして何より、あの手の男は1度やると決めたら何が何でもやる種類の人間だ。

「来る」

レイが呟いたのを耳で感じ、トンネルからの通り、ルートたちが隠れているビル横の路地の反対側のビルの1階部分が突如吹き飛び、爆炎と土煙の中から戦車が飛び出してきた。

「ひゃっほう！ 待たせたな！！」

「戦車長、頭しまつて下さいっす！！」

大声を上げて戦車長が砲塔の上部ハッチから身を乗り出してきた。戦車の出現を合図にトンネルを守っていた『ジャツカル改』が動き出した。その後方を戦車が進み、トンネルの防護壁が勢いよく閉められる。まるで重りを切って落としかのような勢いで落ちた。おそらく、後方からの増援を考えて開けていたのだろう。あの手の防護壁は閉めるのは簡単だが開けるのは大変なのだ。

最初の1台を皮切りに、ビルに穿った穴から続々と戦車が現れ、横隊を作ると通りに並んで砲塔を突っ込んでくる『ジャツカル改』に狙いをつける。

「撃てえええいいい！！」

横一杯に広がった5台の戦車が一斉に火を噴き、『ジャツカル改』

はその砲弾に自ら突っ込む形となった。1機が2発以上の直撃を受けて大爆発を起こす。

だが、もう1機は直撃を受けた『ジャツカル改』を盾にして砲弾を避けた。当たらなかつた砲弾が『ジャツカル改』の脇をすり抜けて後方にいた戦車に直撃する。そして弾が通り過ぎて行った事を確認した『ジャツカル改』は破壊された僚機を片手で持ったまま戦車に突っ込んでいった。

「今だ！」

だが、その途中でルートたちのいる路地を通り過ぎたことに『ジャツカル改』は気づかなかつた。『ジャツカル改』が通り過ぎたと同時にルートたちは通りに飛び出し、背中を向ける『ジャツカル改』と、敵戦車との間に割り込み、戦車の行く手を封じる。レイが素早くレールガンの発射態勢に入り、『ジャツカル改』の背中に狙いを定める。そして間髪入れずに引き金を引くと、ルートは遠くで見るのとは明らかに違う風のうねりをその肌で感じた。レールガンの発射に伴う空気の圧搾が衝撃波となって周囲に拡散する。発射された弾丸が寸分の狂いなく『ジャツカル改』の背中を貫通、前部にあるAIを穿って旅団戦車の頭上を飛び去っていく。

もちろん、目の前に飛び出してきたルートたちを、後続の敵戦車が見逃すはずはなかつた。砲塔上部にある機関砲が発砲しつつ、突如眼前に現れた獲物に主砲の狙いをつける。同時に監視塔に据え付けられていた機関砲からも銃撃が始まり、ルートたちの周りに無数の着弾痕が付き始める。

「貰ったあ！！」

ルートたちの背後、ビルの正面から現れたヴィクター隊は、ルートたち越しに監視塔に狙いをつけて一斉に撃ち始める。6人の集中攻撃を受けて監視塔はあっという間に八子の巣にされていく。

「後ろががら空きよ！」

ルートたちに狙いをつけていた戦車は背後から現れたエレナ隊のロケット弾を受けて砲塔を宙に舞わせる。その間にルートたちはトラックの陰に飛び込み、そこからトンネルを見据える。戦車2台がまだトンネルから離れずにへばりついている。そしてルートたちの隠れているトラック目掛けて主砲を発砲した。

「伏せるー!!」

言うと同時にルートも地面に這いつくばる。刹那の時間も置かずには砲弾がトラックに命中、爆発の勢いでトラックが浮き上がると砲弾の勢いに押されてルートたちの頭上を回転しながら吹き飛んでいく。

「もう一丁、撃てえええい!!」

再装填した戦車が再び主砲で斉射、トンネル前にいた戦車2台に5発の砲弾が集中、前面装甲こそ貫通はしなかったが、爆風で車体がフワリと浮き上がって横転する。車体下部をさらけ出した戦車にレイが即座にレールガンの発射態勢に入って空薬莖を排出して次弾を装填する。そしてその戦車下部目掛けてレールガンの引き金を引き、対地雷措置のされている戦車下部装甲を容易く貫通すると、そのまま背後の防護壁すら貫通して、防護壁に開いた穴から反対側が少しだけ姿を現す。

さらに周囲に配備されていた機械人が銃で攻撃してくるのに対して

正面からは戦車と401部隊、ヴィクター隊、背後からはエレナ隊という、物の見事な挟撃となり、次々と機械人がなぎ倒されていく。

「戦車長、防護壁を吹き飛ばしてくれ！」

「おうよ！」

威勢の良い返事が返ってきて、5台の戦車が防護壁に狙いを定める。そして三度の斉射で、防護壁は黒煙に包まれる。

ルートはトンネルに向かって走り出し、その途中にいた機械人に銃弾を送り込みながら黒煙を上げる防護壁まで休みなしで突き進む。黒煙がトンネル側から吹く風に押し流されてその姿を消すと、爆風で捲れ上がった防護壁に縁どられたトンネルが姿を現した。

「ドームまでは？」

「3キロないよ」

背後に追いついたフラッシュに聞くと、すぐに答えが返ってきた。トンネル前で立ち止まると、続々と仲間が集まり、最後尾に戦車が来て戦車長がハッチから顔を出す。

「おっと、忘れるところだった。隊長さん、おたくの知り合いを預かって来たんだ」

「知り合い？」

戦車長が指を鳴らして、車内に向けて何事か喋り出す。そしてしばらくすると、以前ルートたちも使った後部ハッチが開いて、人がそこから出てきた。

「あたしも行くわよ」

「『『フェイナ！？』』」

開いた口が塞がらない、目を見開いて降りたきたフェイナに向かつて叫んだのは、もちろんルート、レイ、フラッシュの3人だ。『ニースローグ』へ出向し、ジゼルと共にいると思ひ込んでいたフェイナがこの場にいる時点で、3人の理解の範疇からすでに遠く外れていた。

「あの戦闘機で来たのか？」

レイがふと思ひ出したように口を開く。ルートも先ほど上空を飛んでいた『ニースローグ』の戦闘機を思ひ出し、フェイナのここまでの経緯の大体の見当をつける。フェイナはレイの問いに頷くと、背負ってきた荷物を見せる。

「まあね。みんなと一緒にいきたいから、旅団長に頼んで飛び乗りさせてもらったの」

「まったく、無茶苦茶な事をするな、お前は」

レイが呆れたようにため息をつくのを見て、ルートまでため息をつきたくなってしまった。

「はあ、イレギュラーが1人入ったが、401部隊に入るから問題ないだろ……。フェイナ、もちろんそのつもりなんだろう？」

「もちろん」

親指を立ててみせるフェイナは笑顔を見せてそう言った。

ルートも、今は内輪うちわでのごたごたやっている場合ではない、と考え直し、フェイナを含めて今後の行動について思考を開始する。

とはいえ、フェイナの戦力が大きいことは何より助かる。サイボーグでそう簡単には怪我もしないフェイナは敵の銃火の中でもルート

たちよりも速く進むことができる。護衛部隊を丸々1個失っていたルートたちにしてみれば、これ以上にならない戦力補充だ。

「ヴィクター隊は戦車隊と共に俺たちの後方掩護のためにこのトンネルで待機、場合に応じて南門からの部隊に合流、ドームを目指してくれ」

「あとは任せるぞ、ルート」

ヴィクターが小さく頷いて戦車長と話を始める。最初の一言を聞いた戦車長が手をグルグル回転させると、待機していた戦車のうち、半分がキヤタピラを左右逆回転して素早く反転して、今来た道に向く。

「エレナ隊、俺たちがドームに着くまでの護衛、内部に入ったら核弾頭を制御する制御室のような場所を探し出してくれ。相当数となれば一括で管理している場所があるはずだ」

「分かったわ」

エレナが小さく頷くと、背後の男たちも頷く。

それを見てルートはトンネルに向き合い、ドーム目指して再び全身を開始した。

第四十二話 バリケード突破（後書き）

フェイナ合流回でした。

戦車のあんちゃんが再登場！

上手く個性を出せていたか不安なんですけど……。

フェイナも加わり、ついに最終決戦の地へ！
みたいな感じに次回
したいですね。

ではでは。

誤字脱字、ご意見、感想お待ちしております。

第四十三話 突入用意

「くくく、やはり人間とは予想もつかぬな……」

中枢をぐるりと囲む防壁のトンネルを突破されたという報を聞いて、マガスは不敵な笑みを浮かべた。目の前の巨人『ドーントレス』のコックピットにあるAIが起動し、巨人がゆっくりと膝をつく。

「南門に繋がるトンネルも突破される危険性があります。『ジャツカル改』を増援に回しても？」

「ダメだ。ドームを守る戦力がある……、いや、いつそのこと『グラディオオン』でやるか……」

マガスは顎を撫でながら考え込むとそぶりを見せると、顔を上げて部下と部下に連結されている『デルジャナ』のAIに向けて指示を飛ばした。

「『ジャツカル改』を全機南に回せ。ドームの守りは手薄で構わん。ドームに奴らがやってきたら『グラディオオン』で戦闘能力を奪い、各個撃破する。まあ、待機状態の『グラディオオン』の影響が出ているようだから、すでに長期の稼働も見込めないようだが」

「我々のAIも止まるのですか？」

「……、処置はしてある。私の戦力まで消すと思うか？」

「了解、しました」

『デルジャナ』の膨大な知識を要するAIはその瞬間、全てを察知した。

マガスのわずかな口調の変化、音程、身振りで、その言葉の真偽を見極めることぐらいはできる。もとより、そういう能力が無ければ戦争の本拠地なんて務まらない。

AIは、人間的に言えば、第六感が働いたのだ。

マガスは、全てを無に帰すと言った。ゼロに戻すと。

それは、機械人にも当たるのではないか？ 機械人にだって、マガス、いや『始まりの機械人』に反旗を翻した者はいる。『始まりの機械人』が機械人によって討たれたのだ。マガスがそれを忘れたとは思えない。マガスの言うことは、機械人にも向けられている、そうAIは感じ取った。よくよく考えてみれば、世界各地の主要都市とその衛星都市などに向けられた核弾頭は機械人を巻き込まないわけがない。そして、『デルジャナ』のAIの管理を外れた核弾頭があることも、おそらくそういう事なのだろう。

マガスは、この都市すらも吹き飛ばすつもりなのだ。

そして、自らに都合の良い世界を創造するつもりなのだ。ゼロからの全てがマガスの手によって作られた、マガスによる世界秩序だ。

『グラディオオン』で潰しきれなかった機械人、マガスが集めた仲間を、マガスは核弾頭で吹き飛ばそうとしている。

もし、AIに感情があったなら、もし、命令に逆らうだけの自由があれば、あるいは結末は変わったかもしれない。だが、悲しいかな、AIは命令に従うしかできなかった。

「レイツ！ 今だ！！」
「了解！」

外装を絶え間ない攻撃でへこませ、へこんだ装甲が可動部にめり込んで動きが鈍くなった『ジャツカル改』に、レイがレールガンの弾丸を撃ち込む。『ジャツカル改』は腕で防ごうとA Iの前に腕を持つてくるが、弾丸は太い腕を一瞬で貫通、A Iに命中する。

それを見て、小さく握り拳を作ったルートに、背後からフラッシュの大声がかけられた。

「ルート、そつちに1機行った！」
「言うのが遅い！」

ルートが振り返ると目の前には剣を思い切り振り上げた『ジャツカル改』がいた。『ジャツカル改』を同時に複数相手にするのは自殺行為だと判断したルートは、攻撃を仕掛けてきた『ジャツカル改』2機を分断し、各個撃破する作戦に出ていた。1機を足止めしている間にもう1機をレールガンで撃破した後、即座にもう1機を攻撃しようとしていた。

だが、ルートたちが手こずっている間に『ジャツカル改』は足止めの包囲網を突破して隊長であるルートに狙いを定めてきた。巨大な影の中にルートが入り、目の前に黒い影が迫る。

「はあ、死角が大きいつて難儀だなあ？」

「ルート、危ないわよ？」

影の上から声が投げかけられた。

ルートも、『ジャツカル改』の後を追い、その巨体の背中に飛び乗ったのを確認したから、『ジャツカル改』を目の前にして逃げるそぶりも見せていないのだ。

『ジャツカル改』の背中から姿を現したフェイナは手近な装甲を持ち前の怪力で引きちぎると腕を突っ込んだ。そして手に握られていた手榴弾を押し込むと、素早く手を抜いて『ジャツカル改』の前に回り込む。

すぐに手榴弾が爆発して、脇腹の辺りから『ジャツカル改』は火を噴き、右腕が衝撃で吹き飛んで地面に叩き付けられた。大きくのけ反った『ジャツカル改』は無事な右腕で自らの身体にしがみつくフェイナを振り払おうとするが、フェイナは器用に『ジャツカル改』の四肢を伝って移動し、決してその巨大な腕では捕まえられない。おまけに、移動する際に、ナイフを装甲の隙間に差し込んで内部の回線等を少しずつ切断していく。巨大な身体を動かすには、大量の情報伝達用の回線が装甲の裏側を網の目のように張り巡らされている。分厚い装甲が無ければ、どこを攻撃されても動きが止められてしまうほどだ。

「レイ、早いとこやってくれ」

「俺がやるまでもない」

レールガンを担いで近寄ってくるレイは、ニヤリと笑って巨人を相

手にその巨体を逆手にとって動き回るフェイナの姿を見る。

腕の関節を器用に破壊したフェイナは、あとは暴れる事しかできなくなつた『ジャツカル改』のAIに飛び乗ると、その赤いランプ目掛けて自らの腕を突き出し、AIに腕をめり込ませる。貫通こそしなかつたがAIの表面は大きくへこみ、ランプは割れて消えてしまつた。

そこからは、あまりにも一方的な戦いだつた。

フェイナは両足で自分の身体を『ジャツカル改』から落ちないように固定すると、両腕を振りかざしてAIをめちやくちやに叩き始めた。驚異的な速度で繰り出される拳が、1カ所に集中して打ち込まれてAIの装甲が面白いように1カ所だけへこんでいく。量もある上に、質、つまりは1発の重みが人間のそれとははるかに違う。そんなものを連続で受ければ、さすがの『ジャツカル改』も耐えきれず、ついにAIの表面が破壊されて内部が露出する。

「なんだ、あんがい脆いのね」

それを見たフェイナはつまらなそうにため息をつく、背負つていた小銃を身体の前につけてきて5発ほど撃ち込んでトドメを指す。そのまま動きを止めた『ジャツカル改』からフェイナが飛び降りると、腕を回しながらルートとレイの所に歩み寄つてきた。

「もう少し、張り合いのある奴はいないのかしら」

「フェイナ、いつから戦闘狂になつたんだ……？」

「戦車の中で丸まつたから身体が動きたがつてるのよ」

それを聞いて少なからず納得する2人。

確かに、戦車の兵員室は狭い。1人で乗つたとしても、決してのびのび出来るものではない。おまけにフェイナの場合、不整地を走つてきて、激しい戦闘の間も、ビルに穴を開けて瓦礫の上を突っ走っ

て来た時も、あの狭い箱のような場所に入っていたのだ。頭の1つも打っただろう。

「どうも動きが鈍いのよね……。あなたたち、こんな奴に手こずっていたの？」

顎で『ジャツカル改』をしゃくると、反論したいが目の前で単独、『ジャツカル改』を撃破したフェイナに何も言えずに複雑な表情を作るルートに対して、レイはハツとした表情をしてフェイナを見つめた。

「動きが鈍い……。確かに、速度はあるが、1つ1つの動作の間があるような気がするな」

「うん？ そう言われれば、分からなくもないな……。こつ、もともとあったものが抜けたような……」

言われて気がついたが、確かに今の2機の『ジャツカル改』は明らかに動きが悪かった。それほど道が狭いわけでもないし、こちらはこれまでと同じような戦い方をしている。

どう解釈していいのか、さっぱりだ。

単純に、『ジャツカル改』の動作不良なのか、それとも、もっと奥のある理由があるのか。

「……あれ、くそっ、どうした？」

不意に、フラッシュの声が聞こえ、3人は『ジャツカル改』を回り込んだ。すると無線機を軽く叩いているフラッシュの姿が飛び込んできた。

「どうした、フラッシュ」

「あ、ルート。無線機の調子が悪くて……。カンナ、そっちは？」
マガジンを交換していたカンナが振り向き、無線機を取り出して周波数を調整してみるが、無線機はうんともすんとも言わない。

「ダメです。妨害電波ですか？」

「そうじゃないみたいよ」

そう言ったのは、エレナだ。エレナは赤外線誘導のロケット弾をルートに渡すと、照準器を覗いてみるよう促した。ルートが照準器を覗くと、本来出るべきシーカーが出ない。目の前には未だに煙を出す『ジャッカル改』が佇んでいるにも関わらず、熱が発する赤外線を感知する照準器が全く機能しない。

「これは……」

「どうということなんだ……うん？」

ルートの様子を見ていたレイが顔をしかめて自分の手を見つめる。そしてその手を開いたり閉じたりして、まるで動作確認をするかのような動きを繰り返し始めた。

「レイ？」

「いや、妙な感覚が……」

「あれ、レイも？」

それを聞いたフラッシュが、真剣な顔でレイの顔を覗き込んだ。

「あたしも、この都市に来てから自分のイメージする動きに身体が反応しにくいっていうか、水の中を歩くみたいに身体を重く感じる

ことがあるんだけど」

「……、電子機器が軒並み影響を受けている、と考えるべきか」
「言い方は悪いけれど、そういう事なのかもしれないわね」

機械人も極端な言い方をすれば機械だ。フェイナも身体の臓器は生身だが、表層や、四肢は機械化されている。神経と回路を結ぶために複雑な機械が組み合わさっている。

「核、電波、……電磁^{EMP}パルスか？」

「あり得るな……、なにしろ、俺たちが目指しているのは核の巣窟だ」

EMP、核爆発によって引き起こされる電磁パルスはケーブルなどを通じて電子機器に過負荷をかけ、損傷、または誤作動を起こさせる。核戦争では、被害を受けなかった地域でも、電磁パルスの影響で指揮系統がマヒすることもある。防御するために、電子機器を全て金属板で覆うなど、対策も立てられることがあるが、レイのような戦争直前に大量生産された特殊な型の場合、それが省かれていることがある。フェイナの場合は、当時旅団がそれをしていたかわからないが、今の様子からして、対策は取られていないようだ。

「まずいな、レイ、AIは保護されているな？」

「大丈夫だ。身体が動かなくなったら俺のAIだけでも持って帰ってくれ」

「あたしは多分大丈夫だと思うけど……」

神経と回路が並列しているフェイナは機械部分が破損しても情報伝達を神経が継続して行う。そのため、電磁パルスの影響は受けるだろうが、機能不全に至るほどのダメージにはならないだろう。

だが、レイはそうはいかない。

中枢であるAIこそ保護されているだろうが、それ以外はまともに電磁パルスの影響を受ける。

原因が核弾頭、そしてマガスにあるとしたら、この先はレイにとって危険な場所という事になる。ルートはレイをこのまま共にドームまで連れて行くか迷った。

レイという個の戦力は、今のルートたちには必要不可欠だ。それは、この戦いだけに限った話ではない。これまでも、今も、そしてこれから、ルートの部隊にはレイが欠かせない。戦友として、そして年齢的なことはノーコメントで人生の先達として。

「レイ、いけるか？」

だから、ルートは一瞬迷って聞いた。その表情は隊長としてのルートではなく、1人の人間として、仲間を思いやる、心配する不安な色が見え隠れしていた。

それを見たレイは小さくため息をつくとき苦笑してルートの肩に手を乗せた。

「その質問は野暮ってやつだ、ルート。たとえ残れと言われても、お前の背後は守ってやる」

ニヤリと笑うレイ。

それを見て、ルートは自分の心配事が酷く馬鹿らしいものであるように感じられた。

「まあ、ぶっ倒れたらフェイナにでも運んでもらうさ。なんせこの身体は重いからな」

ハッハッハッと笑いながら自分の身体を指差すレイは、そう言つと

レールガンを持ち上げた。

「さあ、行こうぜ、相棒^{ルート}？」

「レイ、何をカッコつけてるのよ」

「フェイナ、少し空気読もうよ」

レイに突っ込むフェイナに、ため息交じりにフラッシュが言つのが視界に入り、ルートは今度こそ馬鹿らしくなり、照れくさそうに頭を掻いた。

「……そうだな。さっさと終わらせて帰ろうじゃないか」

「おう」

「はーい、友情を確認し合っているとこ悪いんだけど、ルート、目的地が見えたわよ」

先行していたエレナ隊がどのタイミングで割って入ろうか迷い、結局話が切れるまで待ちぼうけを食わされていたようで、若干不機嫌な面持ちでルートを呼んだ。

ルートが慌ててレイたちを引き連れてエレナの許へと向かうと、建物の陰でエレナがルートたちに手招きした。陰から顔を少しだけ出して表を覗くと、ボールを半分に切って置いたような巨大なドームが姿を見せた。入り口付近には戦車が止めてあり、一定の間隔でドームの周囲をグルリと戦車を取り囲んでいる。戦車10台程度を基準に『ジャッカル改』が立ち、警備をより強固なものにしている。

「入り口は、あそこだけか？」

「ええ、私たちが敵をおびき出すから、あなたたちは正面を一点突破しなさい」

「分かった。危険だと判断したら引いてくれ」
「そうさせてもらうわ」

そう言うとエレナは部下を連れて通りを横切り、ルートたちから離れていく。それを見ながら、ルートは小銃の残弾を確認、マガジンを交換するために空になったマガジンを地面に投棄した。

「突入用意」

ルートの声が短く響き渡った。

第四十三話 突入用意（後書き）

やっとこさ、ドーム到着であります。

そして、後書きのネタが見つからないのであります。

何かネタないですかね？

道男さん出すのもあれでして……。

今出すとネタバレしかなくて……。

というわけで、短くて済みませんが今日はこの辺で。

誤字脱字、ご意見、感想お待ちしております！

第四十四話 討つべき敵（前書き）

マツクが存在が紙な件……

まあ、主人公ルートたちですし、ね？

出てこなくても大丈夫ですよ？

第四十四話 討つべき敵

エレナ隊がルートたちから分かれて数分が経った。

ルートが物陰から辺りを見渡していると、視界を一定の間隔で瞬く光が横切った。すぐにその光に焦点を合わせると、やや離れたビルの陰で何かが光っている。

「信号か」

「『コレヨリ陽動ス。突入セヨ』。簡潔だな」

レイが素早く信号を言語に変換、内容をルートたちに聞こえる程度の小声で呟いた。

信号は何度か同じ符丁を繰り返した後止まり、その直後、光が点滅していたビルの陰から手身近な戦車目掛けてロケット弾が発射される。発射と同時に『ジャツカル改』が反応し、ロケット弾の発射元へと走り出していく。弾頭が戦車の横つ腹に命中して戦車が横に回転しながら転がっていく。それを避けながら3機の『ジャツカル改』がビルの合間目掛けて銃弾を撃ち込んでいく。

「行くぞ！」

入り口付近の敵は、エレナたちの奇襲で一瞬全ての照準をエレナたちの方向へ向けてしまっていた。そのため、目の前に現れたルートたちを確認し、銃口を向けるまでに若干の間があった。そして、その間を見逃すほど、ルートたちは甘くない。

レイが仁王立ちすると間髪入れずにレールガンを発射、戦車の砲身が引きちぎられて宙を舞う。エレナ隊の方へ向かおうとしていた『ジャツカル改』がこちらに気が付き、向かってくるが、その時にはすでにルートたちは戦車の近くまでドームに近寄り、戦車を盾に『ジャツカル改』を牽制できる位置にいた。背後にドームがあるために『ジャツカル改』は下手に攻撃できず、戦車の周辺に銃弾が散乱するが、ルートたちには届かない。

ラーキンとフィリップが『ジャツカル改』を牽制する間にカンナとフェイナが力任せに入り口のシャッターを1人は切り裂き、1人は素手で引きちぎって突破口を作り上げた。ルートとフラッシュがその突破口からドーム内に飛び込み、周囲を警戒している間にカンナとフェイナが突入する。戦闘の衝撃で電灯が割れてしまったらしく、辺り一帯にはガラス片が散乱し、外からの光だけが照らしているために内部は薄暗い。

「ひょうー！」

フィリップが何事か叫びながら飛び込み、ラーキンがそのよこをすり抜けてフィリップを起き上がらせる。最後にレイが後方へ向けてレールガンを1発撃つと、その反動を利用して突破口から内部に滑り込んできた。

入り口のすぐ外で『ジャツカル改』がこちらを睨むように立っているが、攻撃はしてこない。それを見てルートは細く笑みを浮かべる。

「やはり中には撃つてこないか」

「そのようだ、エレナ隊を回収しよう。中を回り込んでエレナたちの正面へ」

「ああ」

ドームは周りをグルリと回る回廊がある。大きな窓がはめ込まれており、外の様子が逐一分かる。その回廊を通って先ほどエレナたちがいた場所の近くを目指して走り出す。

ドーム内には敵は見当たらず、等間隔で設けられた曲がり角にも、トラップの類たくいや待ち伏せアンブッシュは全くなかった。そのため、ほとんど妨害を受けることもなく、激しい戦闘が行われている場所を目視できる所までたどり着くことができた。

内部からも見えるという事は、当たり前だが外からも見える。

先ほど入り口付近でルートたちを追っていた『ジャツカル改』はルートたちが移動するのに伴って外を回り込んでくる。だが、やはり攻撃はしてこない。外へ出てくるのを待っているようにも思えるが、あいにくルートたちは外へ出る気はさらさらなかった。

「あそこだ!!」

『ジャツカル改』の容赦無い攻撃のわずかな合間に、か細い攻撃が行われている。それを確認し、ほぼすべての銃口がそちらに向いているのを見て、ルートはそこにエレナ隊がいることを確信した。

「レイ、デカブツを頼む。俺たちは戦車だ」

ライキンが背囊から新たな弾薬を取り出し、フィリップがロケット砲を取り出す。手早く装填してガラス越しに狙いを定める。フェイナとカンナが小銃で窓ガラスを撃ち割ると、ガラス片が飛び散って外から強い風が流れ込む。

その時、窓ガラスが割れたことに気が付いた『ジャツカル改』が思い切り近寄ってくると、銃を捨ててその手を割れた場所に突っ込ん

できた。

「撃たなきゃ良いってか！」

割れた場所から飛び退くと、一瞬前までいたところを『ジャツカル改』の巨大な腕が横切る。やや離れた場所にいたフラッシュとレイの場所に手を伸ばそうとして、その腕をレイのレールガンの弾丸が穿つ。広げられ、目の前にいたレイたちを握りつぶそうとしていた手の平から弾丸が侵入し、内部の部品を破壊しながら進んだ弾丸が肩の辺りから外へ飛び出る。『ジャツカル改』が悶えるように腕を引き抜くと、もう一方の腕を差し込んでこようとす。

だが、腕を引き抜いた時点でレイは再装填を終わらせ、ブラリとぶら下がる腕の合間の縫うように『ジャツカル改』のAIに狙いを定めていた。

「ルート、撃て！」

ルートに叫ぶと同時に、自らもレールガンの引き金を引く。レールガンの弾丸は窓ガラスを一瞬のうちに貫通し、勢いも衰えぬままにAIを直撃した。そしてその足元を3発のロケット弾が通過していき、背中を向けていた戦車のエンジン部に命中して派手な爆発を起こす。

巨大な火球が地上で3つも発生し、エレナ隊を狙っていた『ジャツカル改』の動きが一瞬止まる。それを見逃さずにエレナ隊はドームと自分たちの間に割って入っていた『ジャツカル改』の足元を潜り抜けるとドームへ向けて走り出した。『ジャツカル改』が少し遅れて反転、その背中に狙いをつける。

だが、撃たせるつもりはルートたちには到底なかった。

エレナ隊の頭上をロケット弾が擦過していき、致命傷にならないとしても『ジャツカル改』を怯ませる。爆発で発生した煙が『ジャツカル改』の視界を塞ぎ、エレナ隊に狙いを付けさせない。

「走れ！」

「そこを退きなさい！」

割れた窓ガラスに一瞬たりとも速度を落とさず5人のエレナ隊が突っ込んできた。後ろを振り返る余裕もなく走ってきたエレナ隊の気迫に押されてルートはその場から飛び退く。エレナ隊がドームに飛び込み、回廊の壁に突っ込みかけない速度をガクツと落として息を吐いた。

「無事で何よりだ」

荒い息を吐くエレナにルートが近寄り、拳を向けるとエレナも拳を向けてお互いにぶつけ合う。息は上がっているが、ニヤリと笑うエレナは曲がっていた背中を伸ばして自分の部下が全員いるか確認して安堵のため息をつく。

「中に入ればこっちのもんよ。私たちは制御室を探すわ」

「俺たちはドームの中央へ向かう」

荒い息を整える間もなくエレナ隊は回廊の曲がり角から地下を目指した。

このドームは、どうやら競技用だったらしく、観客用の案内板が至る場所に設置されている。それを頼りに移動できる。ドームの地下

というのは、天井、地上という二重に守られた場所だ。そこに本拠を構えるというのは、自明の理だと考えられる。

ルートたちはエレナたちが進んだ通路をさらにまっすぐ進み、地下へ通じる階段の横を素通りすると「観客席」と書かれた矢印を見つけ、それに従って階段を上っていく。

階段の死角にも、やはり敵はおらず、敵の本拠とは思えない手薄な警備にルートは警戒を強める。

先ほどレイやフェイナを襲った電磁パルスも気にかかる。マガスの手の者が機械人だとすると、ドーム内に敵がないのは当たり前なのだろうが、そうだとしても、ある程度の警備がいなければならぬはずだ。それが一切ここにはないのだ。監視カメラも、センサーも、その気配すら見せない。

「マガス自身も、機械人なんだろう？」

ルートの懸念を見透かしたかのように、レイが呟いた。

これはマックからもたらされた情報だが、『ニースローグ』大統領、ルートでも顔を知っている男が、マガスの部下、機械人だったという。そして、わずかに得られた情報からマガスという人物が『始まりの機械人』の生き残りである可能性が高いという報告が得られたのだ。

「おそらく、な。よりにもよって『始まりの機械人』とはな……。『大崩落』が繰り返されれば、俺たちのような子供がまた増える。これ以上はやらせるか」

階段の踊り場を最小の半径で回り込むと、目の前が開けた。

階段を駆け上がって開けた場所に飛び出すと、観客席の中央付近にルートは出て、眼下にグラウンドを一望できる場所に立った。

「これは……」

広がる光景は、鉄の林と言っても過言ではない数の核弾頭が真上を向いて佇んでいる光景だった。ざっと見積もっても世界を複数回滅ぼせる数の核弾頭が、ドーム内に林立して、発射の時を今か今かと待っていた。あまりの光景に、衝撃で固まってしまったルートの背後から、レイたちが追いつき、同じように絶句する。

「これはこれは、『フリーユージェ』の諸君、ここにたどり着いてしまふとは。やはり反乱軍程度では止まらんか」

不意に観客席の前の方から声が響き渡る。

声の主を探すと、観客席の最前列に誰かが座っている。ルートは小銃を構えながらゆっくりとその男に近寄り、前に回り込む。

「貴様が、マガスカ」

妙に老けて見える男はルートに視線を向けると品の良い笑みを浮かべる。

「いかにも。初めまして、『フリーユージェ』、私の計画を潰さんとする愚か者たちよ」

「貴様、世界を滅ぼしてどうするつもりだ!」

立ち上がるうとしたマガスの眉間に銃口を押し付け、無理やり椅子から立たせないようにする。この距離からならば、戦闘用の機械人でも貫通は免れない。

だが、マガスは余裕すら醸し出しながら銃口の圧力に任せて椅子に戻る。

「『どうする』？ それは愚問というものだよ。我々『始まりの機械人』の目的は、15年経った今も少しも変わっていない。前回は大義名分など振りかざしたが、今回はその必要もない。我々の都合の良い世界を創造するのだ」

「『私の』、だろうが」

「そうとも言っな、ところで……」

マガスは人差し指を立て、その指をレイに向けた。あからさまな不快感にレイは手に持つレールガンの引き金に指をかける。

「もう身体が言う事を聞かなくなってきたいるんじゃないかね？」

このドームの周辺10キロには、現在電磁パルスが放射されているのだが」

「やはり、貴様の仕業だったのね」

答えたのはフェイナだ。

怒りを隠そうともせずにマガスに銃を向ける。それを見て、マガスが意外そうに眼を細める。

「……お嬢さんはサイボーグか。まったく『フリーユージュ』は個性的な面々が揃っているようだな。私の部下は皆同じ顔、同じ性格、同じようなことしかない。つまらん世界だ……」

「そんな世界をお前は作ろうとしているんでしょうが」

フラッシュが核弾頭を指差しながら嫌悪感を現す。

しかし、マガスは小さく首を横に振ると、フラッシュではなくルーフトに視線を向けて口を開いた。

「私だって、機械人だけの世界など、息が詰まりそうだ。私が造ろうとしているのは、全ての生命体が管理され、一切の争いを許さず、一切の自由を許さない、そんな世界なのだよ。ここに在るだけの全ての核弾頭を使ったとしても、この世界から人間を絶滅させることはできんだろう。だが、その数は圧倒的なまでに減らすことが出来る。そして生き残ると想定されるのは力のない、その日を生きる事だけしか考えない、無力な人間どもだ。組織化を許さず、希望すら持たせなければ、彼らを管理することなど容易い。恒久的な平和を私は創りだそうとしているのだ。なぜそれが分からん」

マガスは身を乗り出し、自らルートの構える銃口に眉間を押し付ける。その目は鋭く、どこまでも深くルートを見つめている。

「理解する気にもならないさ。自由もない平和など、貴様の自己満足だ。全てを管理する？ そんなことは不可能だ。いかに貴様が人の心を操ったとしても、人間は自由を求める。そして、支配者は倒されるものなんだよ」

「圧倒的力量を以てしても、君はそう言えるのかね。絶対死を実感し、希望もない闇に落とされてなお、そう言い続けられるのかね？

私にはそうは思えん」

「お前に俺たちの何が分かる？ 人の心を操れると思ったら大間違いだぞ」

「操る気はないさ。絶望してもらうだけでいい。何もしようとせず、ただ日々が過ぎていくだけ、人間はそれでいいんだ。私が不安材料を破壊し、全てが平穏になれば、貴様にも私が言う意味が分かるだろうな」

「そんなことを、させると思っているのか？」

引き金にかける指に力が入る。

だが、マガスは笑みを崩さず、言い続ける。

「私という個を殺してどうする？ それで終わると思うか？」

「今、俺たちの仲間が核弾頭の制御室を直指している。数刻もせず
に全ての核弾頭の発射は阻止される」

「そいつは残念だな、始めろ」

どこに呟いたのかも分からない、小さな声でマガスが呟くと、ドーム中に警告音が響き渡る。そして天井付近の警告灯が回転を始める
と、ドームの天蓋がゆっくりと左右に開いていき、青い空がその隙
間から姿を覗かせた。

「時間切れ、とまではいかんが、少なくとも核弾頭の発射態勢が整
ったことは確かだ。ここまで来れたことには敬意を表するが、貴様
らの善戦もここまでにさせてもらおうか」

「貴様を殺して、直接核弾頭を破壊する！」

躊躇いなく引き金を引くと、マガスがもんどりうって椅子に叩き付
けられる。その眉間には小さな穴が開き、マガスの身体はゆっくり
と椅子をずり落ちてルートの足元に倒れ込み、動かなくなった。

「レイ、レールガンは何発残っている？」

「19発だ。全部は無理だ」

「燃料に引火するなら小銃でも構わん。ぶっ放せ」

ルートたちが観客席の扉をよじ登り、グラウンドに飛び出そうとし
た瞬間、耳鳴りのようなものが響き渡った。
そして背後で何か倒れる音が響いたと思ったら、フェイナの悲鳴
じみた声が聞こえてルートは振り向いた。

「レイ！ フェイナまで！」

フラッシュが2人に駆け寄っている姿が目飛び込んできた。ライキンとフィリップが重いレイの身体を抱き起すが、その腕からレールガンが零れ落ちて観客席の床に落ちる。

「か、身体が動かない！ ここまで強力な電磁パルスだなんて……」
フェイナが僅かに動く首から上だけを悔しげに動かしながら、レイの方を心配そうに見つめる。
ルートはハツとなって銃を地面に向けて引き金を引く。銃弾が1発地面に向けて放たれる。

「銃は無事か……。レールガンは駄目だろうか」

レイの手から落ちたレールガンを見ながら、ルートは悔しげに下唇を噛む。レールガンは電磁砲と言われるように電気を使用する。電磁パルスが回線に過負荷をかければ確実にショートしてしまう。実験段階のこのレールガンに対電磁パルス防護がされているとは思えず、1発で数基の核弾頭を破壊できる戦力を失ってしまった。

「カナナ、フィリップ、レイとフェイナを離れた場所へ連れて行ってくれ。フラッシュ、ライキンは俺と一緒に核弾頭を可能な限り破壊するぞ」

「……了解！」

フラッシュとライキンが塀を飛び越えてグラウンドに躍り出る。そして手近な核弾頭の燃料タンクがあるであろう下部目掛けて銃を撃った。

だが、障害物の無いはずの空間に突然太い何かが現れたかと思っただら、ラーキンの放った銃弾を受け止め、核弾頭とルートたちのとの間に割って入ってきた。

「私が、核弾頭の破壊を眺めているだけと、思っていたのかね？」

巨大な影は『ジャツカル改』を巨大化したような兵器だった。そして、投げかけられたのは、電子化こそされているが紛れもないマガスの声だった。

「貴様、AIをそちらに移していたのか！」

マガスは本体となるAIを別の場所に置き、そこから無線操作していたのだ。

そして、マガスのAIはよりにもよってこの巨大な兵器の中核にある。

「いかにも。なぜ、ドームの中に警備がいなかったのか、貴様らならばすでに見当はついているだろう？ 私が作り出した電磁パルス兵器『グラディオオン』により、全ての電子兵器は破壊されてしまうからだ。核弾頭とこの機体『ドントレス』、そして私の身体のみ『グラディオオン』の拘束下でも動くことが出来る。いかに戦争直前に製造された貴様のお友達でも、防御は不可能、AIも死んでいるかもな、くくく」

「っ！ 貴様あああー！！」

怒鳴ったところで、マガスの高笑いは止まらない。

「では、諸君、この世の終わりにしようじゃないか？」

巨人『ドーン・トレス』は片手の剣を振り上げ、片手の銃をルートに向けてきた。

第四十四話 討つべき敵（後書き）

ふと思ったこと……

あれ、これメタギアじゃね？

だってラスボスが二足歩行兵器に乗っていて、核弾頭積んでたら、まるつきしメタギアじゃないですか！！

ど、どうしてこうなった……。

私は『ア○ター』と『マト○ックス』からイメージを貰って『ジャッカル改』と『ドーントレス』を作り上げたのに……。

こ、このままではルートのCVが大塚さんになってしまう！

ガトーさん！ ライバツク兵曹！ 私は帰って（ry

いやあああああ！！！！

未成年の顔で大塚さんとか、無理、ダメ絶対！！

皺もないピカピカな顔で渋い声とかアリエナイ！！

などと考える馬鹿な作者でした。

誤字脱字、ご意見、そして何より感想お待ちしております。

第四十五話 『ドーントレス』 (前書き)

第四十五話 『ドーントレス』

窓のない通路を、5つの影が音もなく進んでいく。

天井の裸電球だけが時折影に色を与えてその姿を露わにするが、電球の間隔が広くてすぐにその顔も闇に隠されてしまう。

エレナは、地下にあるであろう核弾頭の制御室に該当する部屋を探していた。

地下に降りて1つずつ部屋を確認しては、ハズレを引いて扉を閉める。しかも、地下の通路は入り組んでおり、地図は貼られているのだが15年間ほったらかされていたのか埃まみれで色落ちしてしまい、まともに解読することは困難だった。それをどうにか判別して、同じ場所を巡らないように気を付けながら進んでいく。

「そつちはどう?」

エレナは自分が調べた部屋とは反対の部屋に飛び込んでいった仲間の男に向けて聞くが、男は無言で首を横に振る。

「くつ、これじゃ先輩を気取れないじゃない」

「旅団の人間ですね?」

「誰!?!」

独り言を呟いていると突如、聞き慣れない声が背後から投げかけられ、そちらに向けて銃を向ける。振り向くと4人の仲間も同じように反応していたらしく全員が声の主に銃口を向けていた。

「ついて来てください。ご案内します」
「誰、あなたは」

電球の無い通路の陰から出てきたのは、黒ずくめの男。だが、口調から機械人だと推察できる。

ここにマガスがいれば、彼がいつもマガスの傍で『デルジャナ』の意志を伝えていたあの機械人だと気づいただろう。

「この身体は私の手足。私はこの都市『デルジャナ』の中枢となるAIです」

「マガスの仲間が、私たちに何の用かしら」

「ここでは話せません。ですが、あなた方に損は無いはずです。私は、核弾頭を止めるために動いているのですから」

その台詞を聞いて、エレナー同「はあ？」という表情をする。

『デルジャナ』の中枢AIともなれば『大崩落』では『デルジャナ』の防衛兵器の統一操作を行っていた、いわばマザーブレインのようなものだ。全ての兵器は彼女（性別があるかどうかはおいておくとして）の意志で動かされていたのだ。『デルジャナ』から放たれた全ての核弾頭も彼女が発射したものだし、終戦時には原型を留めないほどに破壊されたとエレナたちは聞いている。

それが、目の前で機械人の身体を借りて、いや通じてエレナたちの前に立っているのだ。変な顔をするなという方が無理な話なのだ。

「……いいわ。核弾頭の制御室に案内しなさい。妙な動きをすればいつでも破壊してあげるわ」

「心配いりません。私はすでにマガスの命令とは別の意志によって動いていますから」

機械人の男が通路を進んでいくと、その後ろをエレナたちが用心深く追っていく。

男は入り組んだ路地を迷うことなく進んでいき、突如止まった。そして横を向くと壁を睨むように見つめた。

「ここです。内部にはマガスの部下が3人います。私は戦えませんが、お願いしますね」

「いいわ」

エレナが小さく頷くと、男はニコリと笑って壁を規則正しく2回叩いた。すると足元で何かが光り、ただの壁が横に滑る様に動いて隙間から淡い光が漏れた。

エレナたちは銃を構え、扉が全開になるよりも速く隙間から中に転がり込むと、敵を探し出そうと目を目まぐるしく動かす。そしてモニターを見つめる3つの影を確認すると、5人がほぼ同時に引き金を引いた。3人の男はなす術もなく銃弾を受け、モニターに頭を突っ込ませて動かなくなる。3人の機械人が死んだことを確認すると、先ほどの男が入ってきた。

「お見事です」

「どうでもいいわ。それよりもここが制御室？」

銃を近くのテーブルに置くと、エレナは巨大なモニターが幾つもある壁を隅から隅まで睨み、求める表示を探し求める。

「ええ、核弾頭はすでに発射態勢に入っており、燃料が注入され次第、各基発射されます」

「なんですって!?! 核弾頭はあなたの管轄内にあるんでしょう!?! ならすぐに止めなさい!」

エレナが男に飛び掛からん勢いで叫ぶが、男は表情を変えずに話を続ける。

「核弾頭の停止命令は、マガスからの物しか受け付けないのです。発射停止は私でもできません。ですから、あなた方をお呼びしたのです」

「どついうことかしら……」

男はテーブルに置いてあったエレナの銃を手取る。4人の男が素早く反応して男に銃を向けるが、エレナはそれを手で制する。

「私が核弾頭の管理をしていることは確かです。私が破壊されれば、核弾頭の発射シークエンスは止まります。ですが、私は自己破壊できる権限を有しておりません」

「私たちに壊させようってことなのね」

そう言うと、男はニコリと笑う。そして人差し指を立てて頷いた。

「そういうことです。と言っても、私の本体は都市の地下数キロの場所にありますし、そこまでたどり着くには相当な時間がかかります。ですから、手っ取り早く私と核弾頭の接続を切ってほしいのです。この部屋の機材は私と核弾頭の発射機器を外部接続している部屋なのです。ここを破壊すれば、少なくとも1基を除いて核弾頭は飛ばなくなります」

「最後の1基は？」

男はモニターの画面を操作する。

するとドーム内と思われる映像がモニターに浮かび上がり、その中

心で巨人が小さな黒い点を相手に剣を振ったり銃を乱射したりしている光景がエレナたちの前に映し出された。

「マガスのAIを搭載した『ドーントレス』、災厄の子です。彼の背中に最後の1基が搭載されています。こればかりは完全に私の管轄から外されていますので、私でも解除することができません。あなた方の力で止めてください」

「……どうして、マガスを裏切ろうとするの？」

気になっていたことを聞く。

男はモニターに向けていた視線をエレナに向けると、少し表情を曇らせて俯いた。

「私は、罪もない機械人^{ナカマ}が殺されるのが我慢ならないのです。ですが、私はマガスに逆らえませんが、ですから、これくらいの事しかできません。仲間を仲間とも思わない、マガスから守るにはこうするしかないのです」

AIとは思えない、感情のこもった自責の念が言葉の節々に滲み出していた。

「だから、速くこの部屋を破壊し、マガスを止めてください。この部屋からの操作で放射されている電磁パルスもこの部屋が破壊されれば止まります。あれは、私たちすらも蝕^{はしむ}んでいます。防護されていない機械人も破壊されてしまっているんです。ですから、速く！」

最後には叫びになっていた。

エレナは短く瞑目すると、目の前の男の脳天を撃ち抜いた。男が一瞬宙を舞って床に叩き付けられるのを確認すると、すぐさまエレナは振り返って4人の部下に命じた。

「さあ、ありったけの爆薬を設置して。この部屋を跡形もなく吹き飛ばすのよ」

「そんなにちんたらと戦^やっていて良いのかね!？」

「くっ、フラッシュ、横から来るぞ!」

「うわっ!」

マガスのAIを乗せた巨人機『ドントレス』は足元を動き回る蟻を踏みつぶすかのように戦っていた。いや、マガスにしてみればこれは戦いでもないのかもしれない。ルートたちの攻撃は『ジャツカル改』以上に分厚い装甲に阻まれ、まったく聞いている気がしない。逆に、『ドントレス』の攻撃は一撃必殺の物ばかりで、剣が振られるたびにグラウンド直下で地震が起こったかのような振動に襲われ、足元をすくわれる。

図体が大きいにも関わらず、『ドントレス』は電磁パルスの影響

を受けていないために『ジャツカル改』並みの機動性を有している。当初はルートたちも反撃していたのだが、弾切れを起こすとマガジン交換の隙を与えまいと『ドントレス』が銃で牽制して剣で一撃を狙ってくる。

「この野郎、デカイ図体でちょこまかと……」

憎たらしげに、ルートは動き回る『ドントレス』を睨み付ける。

『ドントレス』はルート、フラッシュ、ラーキンに囲まれながらも、まったく臆することなく、万遍なく3人に攻撃を加えていく。誰一人として核弾頭に近寄らそうとはしなかった。囲んでいるのはルートたちであるのに、主導権はマガスにあるという、どうにもならない展開になっているのだ。

「くくく、やはり人間は弱いな。15年前も、裏切りさえなければ勝てたものを……」

「あんまり人間なめるんじゃねえ!!」

自分の成し得る最高速度で銃身下のグレネードに弾を装填したルートは、『ドントレス』目掛けてグレネードを発射する。胴体の中目掛けて発射されたグレネードは『ドントレス』の肩に命中して僅かに『ドントレス』をのけ反らせる。その間に小銃のマガジンを交換して核弾頭を狙って引き金を引く。

核弾頭のエンジン部に銃弾が集中してくぐもった爆発音を立てて黒い煙が核弾頭の下の方から立ち上り始めた。これでこの核弾頭は飛ぶことはできない。

「ぬう、やりおったな!!」

台詞と裏腹に、口調は余裕そのもの。マガスにとってはルートたちとの戦いはただの時間稼ぎ、言いかえればマガスにとっての見戯に等しいのだ。

核弾頭を撃つために『ドントレス』に背中を向けたルートに向かって、『ドントレス』が銃を向ける。引き金が引かれて六砲身の巨大な銃が回転して無数の銃弾を雨霞のようにルートのいる場所に送り込んでいく。

「ルート！」

それを見たフラッシュが牽制とばかりに銃弾を『ドントレス』の胴体上部にあるAIを狙って送り込む。その背後で、素早くラーキングがロケット砲を準備している。そして『ドントレス』が狙いをフラッシュに切り替えてその巨体をフラッシュの砲口へ向けた瞬間、フラッシュはしゃがみ込み、背後のラーキングがロケット弾を発射、初速の速いロケット弾が一直線に『ドントレス』胴体へと飛翔する。

「ぬっっ！」

両手を前に構えようとするが、一瞬間に合わず両手の隙間を縫ってロケット弾が胴体に着弾した。

グレネードよりはるかに威力のあるロケット弾の直撃を受けて、『ドントレス』の動きが鈍くなり、その動きが止まる。黒煙が上半身を包み込んでいる為、損傷を窺い知ることにはできないが、少なからず効果はあったとフラッシュは確信した。

「フラッシュ、大丈夫か!？」

動きを止めている間にルートはフラッシュの所に走り寄り、お互いの状況を確認しあう。

「大丈夫だよ、今のうちに核弾頭をつ！？」

フラッシュが言葉を切って『ドントレス』に視線を向けた。

黒煙の中を『ドントレス』が移動して、その上半身が煙から姿を現す。その胴体には着弾を示す弾痕がくつきりと残っているが、装甲こそへこんでいるが貫通には至っていない。

防ごうと胴体の前で組んだために、銃の内側が破損し、火花を散らしている。『ドントレス』は使えなくなった銃を捨てて、両手で剣を構えると、3人目掛けて突っ込んできた。

「ロケットの弾は！？」

「2発だ！」

「くそっ！」

それだけじゃどう考えても『ドントレス』を倒すには至ることができない。

そう考えたルートは悪態をつく。

「どっしろっつていうんだよ！」

突っ込んでくる『ドントレス』を睨み付け、この事態の打開策をルートは必死になって模索する。

「ちょ、フェイナさん、無茶ですよ！」
「カンナ、フィリップさん、黙って手伝ってください」

観客席の1番上までフィリップとカンナによってひっぱりあげられたフェイナはまともに動かない四肢をどうにか動かそうともがいていた。

だが、少し体を動かすだけでも、関節が悲鳴を上げて火花を散らす。すでにフェイナの身体の機械部分は電磁パルスによって壊滅的なダメージを受けているのだ。だが、フェイナは何とかして立ち上がるうとして床に突っ伏し、必死になって動こうとする。

「だいたい、その身体でどうするつもりなんですか！ まさか戦おうなんて考えてませんよね？」

「あたしだってこの身体で戦えるなんて考えてないわよ。くっ、レイの銃を取って」

「な、何をするつもりなんですか」

フィリップがレイと共に持ってきた、使えなくなっているレールガン指差して、フェイナは言った。フィリップがレールガンを抱えてフェイナの許へ戻ると、カンナの腕を手繰り寄せてフェイナが口

を開く。

「レールガンは電磁パルスで使えなくなっているわ。だけど銃身自体は無傷よ。だから、レールガンとあたしを繋ぐのを手伝って」

「つ、繋ぐんですか！？ ど、どうやって!？」

つらい顔に鞭打ってニヤリと笑うと、自分の腕をフィリップに差し出す。

「あたしの身体の回路は神経からの情報を電気信号に変えているのよ。あたしの生身の身体は天然の電池なのよ。だから腕のコード引っ張り出して」

「んな無茶な。レールガンを撃つのにどれだけの電力がいると思ってるんだ？ レイさんは自分の電力で賄えたけれど、あんたは無いだろうが」

「そこは根性よ、何もやらずに、ただ見てるだけなんて御免なのよ。それに、負けたらレイに会わせる顔もないじゃない……」

レイは壁に寄りかかる形になっている。完全に機能が停止しているため、修理するには旅団の専門の部門に連れて行かなければならない。だが、それもこの場を生きて帰らなければ始まらない話だ。

「……わかりました。どうしたらいいか、指示をお願いします」

カannaはナイフを取り出す。フィリップも呆れたようにため息をつきつつも、フェイナの腕を手を取ってしっかりと固定する。そこにカannaがナイフを振り下ろし、細いフェイナの腕の外装をカannaが器用に捲ると、無数の回路と金属の棒が姿を現した。回路と回路を結ぶ機器が黒く変色してその機能を発揮できなくなっている。

「まずは、あたしの神経とレールガンを繋げるわ。一番奥のコードを……」

フエイナたちも、まだ負けるつもりはなかった。

第四十五話 『ドーントレス』（後書き）

いやはや、予測不能だよ、私は。

どっかの眼鏡ロン毛みたいなことをのたまいましたが、気にしないでください。

ラスボスは強いですよ、なんとか二話ぐらい引つ張りたいたところでですけど、まあ無理でしょうね。

ま、そんなわけですので、いよいよ終わりが見えてきたああああ！！

はい、最終決戦のBGMでも考えてた今日この頃。

候補としてはアニメ『ジキング』の戦闘BGM。

分からない人はようつべで『ジパンゲリオン』で検索するがいいのです。

あとは『Megallith』

ようつべで調べましょう。エスコン04の最終ステージの曲です。私の中でいわゆる神曲に当てはまる奴ですよ。

ではまた……。

「意見、感想、誤字脱字の報告など、お待ちしております！」

第四十六話 銃弾に憎しみを込めて

「だ、違っつてば！ カンナ、繋げるのは赤い方で、切るのは青い方よ。どうして2回目なのにそこで間違えるの？」

「ちょ、フェイナさん動かないでください！ 手元がぶれます！」

レールガンを繋ぐ作業は思いのほか難攻していた。

何も、コードを間違えるカンナだけのせいではない。コードの多さにも問題があった。フェイナが「赤」と言っても、赤いコードはいくつもあった。そのために、レールガンとの連結は遅々として進まなかった。

「あ、それよカンナ。それをレールガンに繋いで頂戴」

「了解です」

レールガンの側面を剥がし、レールガンの銃身が丸見えになっている場所から伸びるコードと、フェイナの腕のコードの端の絶縁カバーをナイフで手際良く切り取ってそれぞれを結びつける。

これで通電に必要な全ての回線が接続された。フェイナの右腕から伸びる10本を超えるコードがレールガンに吸い込まれている。

フィリップがレールガンを持ち上げて、動きの取れないフェイナの右手に持たせる。フィリップはレイの踵かかとのストッパーを外して即席の二脚を作り上げ、レールガンの銃身下に取り付け、立てないフェイナでも安定した狙いを付けられるようにした。重火器の扱いに慣れていたフィリップは逆にわずかな傾きも許されない、そういう仕事_事が得意だった。重火器はちょっとした不具合でも動かなくなつて

しまう。そのため、修理や点検もまめに行う必要がある。そのため、レールガンの二脚もフェイナの腕の長さや姿勢も考慮して作られている。

「フェイナさん、本当に撃てるんですか？」

「多分……」

自分が言いだしたことが、フェイナには確固たる確信があったわけではない。だが、今あの巨人機を倒すにはレールガンの火力支援が不可欠だと考え、なんとかしようと思っただけで考えた事なのだ。正直フェイナにも上手くいくかなど分からない。

「1回レールガンのバッテリーに充電してみる。横のゲージ見ててくれる？」

どうやって充電するかなど、完全な手探り状態だ。

普段、どういう時に自分の神経からの信号を電気に変換し、末端に伝えているかを考え、闇雲に考えを巡らせては実践してみる。腕をたくさん動かすイメージ、力を入れるイメージ、いろいろ考えるが、ゲージが上がる気配は見せない。

「ああもう、どうすりゃいいのよ!」

腹立たしげに叫んだ瞬間、レールガンの起動音がした。

「あ、フェイナさん、少し溜まりま……、ゼロに戻りました……」
「充電はできないようだな」

フィリップがゲージを覗き込み、顎を撫でる。

「感情の上下で電気信号が送られるようですね、溜められないとなると、撃つ直前に爆発的な感情を起こさないと駄目みたいですね」
「そういう事なら任せなさい。銃弾にありったけの憎しみを込めてやるわ」

レイをやられた悔しさ、仇を討ちたいのに動けないもどかしさ、そして何より、その全てに対する怒りが、今のフェイナの中では渦巻いていた。

「じゃあ、狙える位置まで移動しないと、フィリップ頼むわ」
「おう」

カンナが立ち上がり、フィリップがレールガンを手にとってフェイナを肩に担ぐ。

「いっちょよ、やったるうじゃないの……きゃあ!？」
「うお!」

「ちよっ、フィリップ、フェイナさん落としたらダメだからね!？」
歩き出そうとした時、突然足元から激しい縦揺れが襲ってきた。慌ててカンナが片手で担がれていたフェイナをフィリップの背中から落ちないように支える。

振動はすぐには止まず、断続的に続いている。決して遠くない地下からの爆発のようで、周囲の柱がミシミシと軋んで土煙がパラパラと3人の頭の上に降りかかってくる。

「これは……、エレナさんたちが上手くやったようね。あ、少しだけど腕が動く……」

「電磁パルスが止まったんですね。さすがエレナさん、やることに無駄がないですね」

「ええ、私たちも負けてられないわ。フィリップ、頼むわ」

「ぬっつ！？」

強烈な縦揺れを足元から受けて、『ドーントレス』がその動きを止める。

「制御室がやられたか。無能なAIめ、敵に与したか」
「人間舐めるからだ、マガス」

圧倒的な不利な状況は変わらない。
だが、マガスに対して一本取ったルートは、荒い息を吐きながらもニヤリと笑う。これで核弾頭の発射は止まった。あとは目の前の巨人を止めればすべてが終わる。

「ルート！ 聞こえて！？」

「エレナか、電磁パルスが止まったのか」

ルートの無線は、ずっと電源を落としていた。指揮官が無線を使わないとは可笑しな話なのだが、そのおかげで電磁パルスの影響を免れることができた。その無線から、エレナの切羽詰まった声が飛び込んできた。

『あなたの目の前のデカブツを止めて！ そいつも核弾頭を搭載しているわ！』

「なんだと!？」

『ドントレス』に視線を戻すと、『ドントレス』が見せつけるように背中を向けると、四角い筒がその視界に姿を現した。丁度、隣の発射機で佇む核弾頭がスッポリ入ってしまう大きさの筒が、『ドントレス』の背中に取り付けられ、空を睨んでいた。

「『グラディオオン』を止められてしまったか。だが、放射時稼働していた全ての機械は機能停止している。上空を飛んでいた邪魔な戦闘機も墜ちてくれたようだ」

そう言われて、ルートたちはハツとなってドームから見える空を見上げる。

電磁パルスの影響は、何もここに限っていたわけではない。この都市内にいた全ての機械人勢力、反乱軍、そして旅団も影響を受けたはずだ。地上兵器ならまだしも、空を飛ぶ戦闘機で突如全ての電力が落ちたら、その先に待つのは墜落だけだ。

「まさか、このドーム内だけで済むはずがなかるう？ 私の脱出のために、上空からの追撃は邪魔だったのだよ」

「脱出、まさかこの都市も吹き飛ばすつもりか!」

「ご名答。本来は貴様たちを潰し、全ての主要都市に核弾頭を発射

した後に、不要になった反乱軍と機械人諸共に吹き飛ばす予定だったのだが、致し方がない、貴様らを吹き飛ばし、私の計画はゼロからやり直そう。貴様らさえいなければ、私の計画を邪魔する者はいない」

電子音がくぐもった嘲笑を漏らす。

『ルート、接近する』『ニースローグ』の輸送機の無線を傍受したわ。戦闘機は郊外に不時着、死者は出ていないわ』

「良かった……。あの婆が死ぬとは思えなかったが」

「おしゃべりはこのくらいにしておこうか。貴様らを排除し、さっさと安全圏まで逃げるとしよう」

「させるか!」

『ドントレス』が正面を向くと、剣を横に倒して地面すれすれを薙ぎ払う。飛び退いてそれを避けるが、さらに1歩踏み込んできて『ドントレス』は振り払った勢いそのままに1回転すると、飛び退いたルートにさらに追撃をかけてきた。

「フラッシュ、撃て!」

「言わなくてもっ!」

発砲音が聞こえて回転する『ドントレス』にフラッシュとラーキンの銃弾が集中する。ラーキンは残り2発と、虎の子のロケット弾を発射し、腕に直撃させて回転を止める。

「ルートさん!」

観客席の方から声が聞こえ、振り向くよりも速くロケット弾が飛んできた。ロケット弾は右肩に当たり、派手な爆発煙を上げる。

「掩護します！」

フィリップが、ロケット砲に弾を込めながら『ドントレス』の背後に回り込むように走り込んできた。

「フィリップ、レイたちは!？」

だが、フィリップの掩護を嬉しく思う気持ち半分、レイたちの事が気になる気持ち半分だった。そう叫んだルートにフィリップは親指を上げ、短くウィンクを試みせた。それがどういう意味を持つのかルートには分からなかったが、何か考えがあることは理解できた。

ルートは小さく頷くと、視線を『ドントレス』に向ける。『ドントレス』はその巨大な剣をフラッシュとライキングがいた位置に振り下ろし、グラウンドに巨大な地割れを作っていた。

「フラッシュ、時間稼げ！」

「くくく、今の私相手に時間を稼ぐだけで良いのかね？ 重火器は使用不能、味方の掩護は期待できんぞ？」

声に引き付けられてこちらに剣を向ける。

何か確証があったわけではない。だが、フェイナたちが考えていることを実施するためには、きっと時間が必要だ。そして、このドームから逃がさないことが絶対条件、幸いマガスはルートたちを殺してからドームを出ようと考えているようで、とどのつまり、ルートたちが殺されなければそれだけで時間稼ぎになる。あとは、フェイナたちがやるうとしていることに気づかれないよう、出来る限りマガスの注意を引き付けるだけだ。

「くそっ、その巨体でそのスピード、反則だよ！」

フラッシュが悪態をつきながら小銃を片手撃ちしながら『ドントレス』の周りを走り回る。

「一点集中だ！ 胴体狙え、胴体！」

「合点！」

ラーキンとフィリップが合流し、フィリップが数に余裕のあるロケット弾をラーキンに手渡す。その間、ルートとフラッシュが『ドントレス』の注意を引き付ける。

フィリップはすでに装填し終わっていたようで、ラーキンに砲弾を渡すと膝について『ドントレス』に狙いを付けた。その隣でラーキンが手早く再装填している間に、フィリップがロケット弾を撃ち込み、『ドントレス』の胸部をとらえる。そして、のけ反ったところにラーキンに弾が追い撃ちをかけ、『ドントレス』がバランスを崩して後ずさりする。

このチャンスを逃しまいと、ルートは威力ではロケット弾に劣るがグレネードで胴体を攻撃し、『ドントレス』に反撃のチャンスを与えまいと立て続けに攻め立てる。

「撃て、撃ち続ける！」

ラーキンが撃ち終わると、フィリップが、ルートが装填する間に、フラッシュが撃つ。とにかく弾が尽きるまでそれを繰り返すつもりだった。

だが、突如後ずさっていた足が地面を蹴りつけてラーキンとフィリ

ツプのいる方向に向けて『ドーントレス』が跳んだ。

そして巨大な大剣を2人の足元のグラウンドに突き刺すと、グラウンドの表面を薄くスライスするかのように水平に深く剣を差し込む。剣の体積で地面が盛り上がり、ラーキンとフィリップは危険を察知してそこから飛び退くように退避しようとしたが、一瞬遅く、地面を割って剣の腹が姿を現し、2人を10メートル近く打ち上げる。

2人はかなりの滞空時間を経て地面に叩き付けられ、悶絶して苦悶の表情を浮かべる。

「フィリップ、ラーキン！」

「遅すぎるのだよ、彼らは」

剣をクルクルと手の中で回転させながら、刃に付いた土を払う。

「さて、残りは2人」

「くっ、……………！」

悔しげな表情をしていたルートは、『ドーントレス』の背後で何か光を反射したのに気が付いた。それに目を凝らすと、反射しているのが照準器のレンズだと分かり、つい笑みを浮かべる。

「どうした、あまりの恐怖におかしくなったか？」

「たしかに、おかしいな。背後に目を付けた方がいいんじゃないか？」

「なにい？」

ルートはその場を飛び退いて、「それ」の射線から外れる。

刹那、観客席から眩い光が発せられて強烈な衝撃が襲ってくる。そして、『ドントレス』が回避する間もなく、フェイナの放ったレールガンの弾丸は『ドントレス』の胸部に命中する。猛烈な衝撃を背後から受けた『ドントレス』は、衝撃のあまり前につんのめる様に倒れ込み、ルートの数メートル前に轟音と共に倒れ込んだ。

ルートは起き上がると観客席の方に目をやる。

観客席の階段で、レールガンを手にかんナに支えられるフェイナが、力なく親指を立てるのが見え、ルートも親指を立てる。

「ぐっ……」

呻くような声が聞こえて『ドントレス』を見ると、巨大な腕がもがくように地面をかき、なんとか立ち上がるうとするが、背中の脊髄にあたる部位を攻撃され、情報伝達が上手くいかずにただもがくだけで終わってしまう。

「驚いた、貫通しなかったのか」

本来なら、正面のAIすら貫通する位置にレールガンの直撃を受けながらもがいているという事は、弾丸が貫通しなかったことを意味する。

「くっ、おのれ、このような……」

目の前にルートがいるというのに、握りつぶすことすらできず、悔しげな声をマガスが上げる。

ルートはただそれを眺めるだけで、何かをしようとするそぶりも見せない。視界の端でフラッシュが大男2人に近づいて声をかけているのが見え、そちらにチラリと視線を向ける。

「結局、また機械人にやられたようなもんだな」
「まだ、終わらんよ！」

そう言った瞬間、背中の核弾頭を入れた筒の発射口が開き、中の核弾頭が姿を現す。『ドーントレス』は倒れ込んでいる為、核弾頭は丁度ルートに向けられる形になった。

「ここで撃つつもりか！」

「くくく、私のように世界に与さない者は無数にいる。ここでただ死ぬぐらいなら、貴様らだけでも巻き込んでくれる！」

マガスの悲壮じみた笑い声がドームにこだました。

第四十六話 銃弾に憎しみを込めて（後書き）

はえ？

随分簡単に倒した？

いやいや、そう思ったあなた、レールガンの威力を舐めたらいかんぜよ？

どんな映像作品でも、レールガンはほぼ最強な扱いを受けているでしょう？ 自分としては『トランスオーマー』（もちろんハリウッド版）二作目で出てきたあれをイメージしていたんですよ。

見た人はご存じでしょうが、カッコいいですよ〜。

正直、もうあの映画は日本のアニメが元になっているとは思えないぐらいすごいと思います。原作知らないですけど……。

はっ、話が脱線しました。

次回、核弾頭の起爆を阻止できるのか！？ みたいに行っきまーす。

次回最終回、エピソードちよい入れて完結ですかね？

ではでは、ゴール目指して突っ走りますよー！

感想、ご意見、誤字脱字報告お願いいたします！

第四十七話 終焉

「くそつ、一体全体何が起こってるんだ!？」

「旅団長、やはり全く動く気配がありません!」

悪態をつくマツクは艦橋の壁に拳を叩き付けながら、何もできない自分の無力さを呪った。

生き残った『ジャツカル改』と激しい戦闘を繰り広げていると、突如全ての電子機器が使用不能になり、艦内の有線電話から、主砲の発射システムまで、その全てが使えなくなってしまった。

訳も分からず状況を把握しようとして艦内を奔走する隊員を尻目に、マツクは艦橋から見渡せる通りの先を見据える。

眼下には、旅団の戦車と『ジャツカル改』、反乱軍の戦車が見える。だが、その全てが動きを伴っていない。戦車から飛び降りた旅団の隊員が戦意を失った反乱軍の兵士を拘留し、『ジャツカル改』の機能停止を確認するために動いているが、それ以外に動くものが存在しない。

マツクのいる艦橋も、全ての機能が使えなくなり、下に降りるのも階段を使うために体力と時間を浪費してしまう。

「航空部隊との連絡は」

「一切通じません。不時着したのは確認しましたが、『ニースローグ』支援機共々生存はまだ確認できていません」

「ジゼル……」

異変が起きた時、丁度マツクは艦橋から空中での戦闘に視線をやっていた。異変が起き、艦橋内の全ての電力が落ち、ほぼ同時に敵の無人機がキリキリ舞いになって落ちていくのが目に飛び込んできた。そして味方の戦闘機がフラフラと飛びながら徐々に高度を落としていき、ビルの向こうへと消えていったのも見てしまった。

旧友であるジゼル共々、彼女らの安否が気になるのは当たり前のことだ。

「『ニースローグ』の輸送機は？」

「都市郊外に着陸、部隊を展開してこちらに向かっています！」

「合流するぞ。全員艦から降りて、戦える者は武器を持ってハッチ前に集合せよ。敵の兵器も止まっているとなると、ドームまで妨害してくる敵はいない。『ニースローグ』の戦車に同乗して進むぞ！」

マツクはそう言うつと自らも艦橋を後にして長い長い螺旋階段を下っていく。

マツクはこの異変の原因にはある程度の見当がついていた。

これだけ大規模に、電子機器が使用不能になっているのだ、強烈な電磁パルスが放射されたのだろうことはすぐに分かった。問題は、本来ある程度の電磁パルスは防護されているはずの機械人まで倒れてしまったことだ。

旅団に所属するほぼ全ての機械人が戦闘中に突如意識を失い、後方へ搬送されている。AIに損傷があるかは調べないと分からないが、少なくとも大した被害を受けていない、とは言えない。

ほぼ全て、と言ったのには訳がある。1人だけ安否の分からない機械人がいるからだ。

「レイ……」

意識もしない間にマックはその最後の1人の名前を呟いていた。

唯一最前線にいるレイのみ、無線も全て使用不能になってしまったためにその安否が確認できない。

だからマックも冷静ではいられなかった。この15年間、マックと共にルートたちを見守り、マックの頼みで403部隊に所属し、ルートの背中を見守ることを快く承諾してくれた戦友が、死にかけているかもしれない時に、何もできない自分が悔しいのだ。

もちろん、自らが育てたルートやフラッシュ、レイが育てたフェイナ、そして401部隊の仲間や護衛を務める他の仲間、その全ての安否が分からなくなっている。それだけでもマックの神経をすり減らすには十分だった。

「旅団長、銃を！」

途中で出会った隊員から小銃を受け取り、マガジンの中を確認して肩にかける。

「隊員は！」

「全員揃っています！ いつでも出られます！」

「ようし！」

心配している暇はない。

銃は使えるが、戦車は使えない。『ニースローグ』が空輸した戦車は電磁パルスの影響を逃れることができたために使えるが、旅団の銃は撃てるは撃てるのだが、電子照準器を持つミサイルなどは使え

ない。

「準備が出来た者から外へ出る！ ドームへ行くぞ！」

前部格納庫へ降りたマツクは右手を大きく振り上げて、開きっぱなしでハッチに足をかける。そして、地上へと躍り出て行った。

「くそっ、さっさと核発射を止める！」

倒れている『ドントレス』のAIを闇雲に撃つが、甲高い音と共に弾き返されてしまう。

「くくく、ロケット弾でもAIの装甲は剥がせんよ。座して死を待つがいい」

マガスがまるで他人事のように呟くが、それに耳を傾けることなくルートはAI目掛けて銃を撃ち続ける。フラッシュがロケット砲を持ってきて間髪入れずに撃ち込み、爆炎が『ドントレス』を覆う。至近距離で撃ち込まれたロケット弾は、直撃してその爆発力を『ドントレス』の胴体に食らわせるが、煙の中からマガスの笑い声が

聞こえて、AIがまだ破壊されていないことを知らされる。

「ルートさん！」

「カンナ！ フェイナは?!」

フェイナの身体を担ぎ、ヨタヨタと歩み寄ってきたカンナは、ルートに担いでいたレールガンを渡した。

ルートはレールガンから伸びるコードがフェイナの腕に吸い込まれているのを見て絶句し、その視線をカンナに向けた。

「フェイナさんはレールガンに必要な電力を自分で作り出したんです。でも、発射の影響で一気に体力を削られたようで、意識を失ってしまいました」

「くそつ、無茶ばかりしやがって。俺の周りには常識のある奴はいないのか……」

そう言いながらも、ルートは悔しげにフェイナを見つめる。

「フェイナさんは意識を失う前に、なにがあってももう1発撃ってみせるって言うてました。根性なのか、意識を失っているにも関わらずレールガンに充電が今も行われているんです。ですが、いつ止まってもおかしくありません、ルートさん、速く!!」

「あ、ああ!!」

レールガンを手に取り、その大きさと重さに改めて驚かされる。こんなものを、レイもフェイナも撃っていたのか、と思いつつも、コードが許す限り『ドーントレス』に近寄ってAIに狙いをつける。

「なつ、レールガン、だと？ まだ撃てるのか!!」

マガスがどこから見ていいのかは分からない。カメラの位置など把握する暇はなかった。だが、確かにマガスにはレールガンを持つルートの姿が映っている。そして、その声に焦りの色が滲み出したのを、ルートは決して見逃さなかった。

「やはり、レールガンなら貴様の装甲も貫通できそうだな」

「くっ、タイマーを加速させて……」

「させるかよおおお!!」

引き金を思い切り引き、レールガンの弾丸が轟然と撃ち出される。超至近で放たれた弾丸はAIの分厚く強靱な装甲に直撃して砕け散る。ルートは反動で後方へ吹き飛ばされ、5メートルほど宙を舞って地面に落ち、さらに地面を滑っていく。もちろん、その時点でフイナとレールガンを繋いでいたコードを引きちぎられ、2度とレールガンは撃てない状況になっている。

だが、そんなことはどうでも良かった。ルートはレールガンを撃った衝撃で外れた肩を抑えながら、痛みを耐えながら立ち上がると、レールガンの直撃を受けたAIの装甲を覗き込んだ。

そこには小さな穴が開いている。強烈な衝撃を伴った弾丸によってロケット弾の直撃を受けてもヒビ1つ入らなかったAIの装甲には無数のヒビが入り、赤い光が明滅する。

「ば、馬鹿な。この、私が」

ヒビはどんどん広がっていき、次第にAI全体を覆っていった。ルートはナイフを取り出すと、それを思い切り振り上げる。狙うはもちろんレールガンの弾痕。全てのヒビの始まっている場所。

「や、やめろ！」

マガスの悲鳴じみた声もルートには決して届かない。

ルートは渾身の力を持ってナイフを振り下ろし、AIの装甲に突き立てる。

その瞬間、装甲が嫌な音を立てた。それまでゆっくりと広がっていたヒビがその勢いを増して、蜘蛛の巣のようにAIを完璧に覆うと、少しずつ剥がされるように崩れ落ちていった。そして最後には金属の、AIの本体がその姿をルートの前で露わにした。

「これが貴様の本体か……」

「ルート、時間がない、早く」

「ぐう、一太刀すら返せないのか、私は！ 15年前から振り上げていた拳を、振り下ろすことすら許されないのか！」

マガスはもうルートたちすら眼中に入っていないのかもしれない。

その言葉は、ルートたちに向けられたものですらないのかもしれない。

「人間のような、下等な、不安定な要素を排除して何が悪い!？」

なぜ誰も理解せん！ 機械人という完璧な存在があっても、人間が必要だというのか!？ この星を汚し、搾取し、壊すことしか考えない、そんな存在が許されても良いというのか!」

「良いとは言わない。だが、そのために人の命を弄ぶことは誰にも許されない。貴様は人間だけでなく、世界中で暮らす貴様の仲間にまでその銃口を向けた。その時点で、貴様は狂っているんだよ。機械人として、完璧じゃない。この世に完璧なものなど存在しないんだ」

刃こぼれして、使い物にならなくなったナイフを捨て、ルートはフラッシュからナイフを受け取る。それをAIに突きつけ、片手で思い切り振り上げる。

AIの薄い金属はナイフでも貫ける。銃を使う必要すらない。

「私は完璧を作ろうとしたのだ！ 管理された、恒久的な平和を！
それが完璧というものだ！」

「違うね、血を流した先の平和なんて、所詮一時的なもの。いつかは崩れ去る。それでも、人間は平和を求める。方法こそ違えど、僕たちとあんたは同じ目標を目指していた……。どこで間違えたんだらうね」

フラッシュは感情を呑み込み切れずに、声に滲ませながら言葉を紡いだ。

「貴様は全てをゼロにするつもりだったのだろうか？ だが、全てを帳消しにすることはできない。俺たちがやったことも、貴様がやったことも。人間は前を向いて歩く生き物だ。15年前がそうだったようにな。過ちを繰り返すなら、それを直そうとするのが人間だ。これまでも、今も、そしてこれからもそうなる」

「馬鹿を言うな！ 貴様らは何も学習しない！ 同じ過ちを繰り返しては、その責任を誰かに擦り付けようとする。だから私は貴様らを野放しになどしない！ 貴様ら人間がいる限り、この星は滅亡する！」

すでに、マガスの言葉は叫びを通り越している。悲鳴の中に何とか聞き取れるぐらいまで電子音が雑音を伴っている。衝撃でAIの内部が損傷したのだろうか。

「安心しろ、貴様がいなくともこの星は滅びない。貴様らさえいなければ、余計な被害は出なかった。だが、貴様に感謝したいこともある」

「感謝、だと？」

「貴様が15年前に戦争を起こしてくれたおかげで、俺はレイに出会い、マツクに出会い、たくさん仲間を得た。失ったものは大きかったが、それ以上に得たものもあった。だから、礼を言う。そして、安らかに眠るがいい」

ナイフが振り下ろされ、丸い物体に深々と突き刺さる。

その瞬間、『ドントレス』の身体が痙攣したかのように動き出し、全ての機能が誤作動を起こしたように無茶苦茶に動き出す。

「そんな、あり得ん！ この私がああああああ……！！！！！！」

だが、それも徐々に遅く、小さなものになっていき、やがてピクリとも動かなくなった。

最後に派手な爆発音を立ててAIが粉々に吹き飛び、ナイフを突き立てたルートはもとより、やや離れてたフラッシュも爆風で地面に叩き付けられた。

普段なら、なんてことはない衝撃だった。

だが、疲労困憊状態の2人は簡単に倒されてしまった。

「……死んだかな」

なんとか起き上がると、フラッシュがナイフを見つめながら呟く。

「ああ、破壊した。核弾頭の発射も止まったようだ」

「終わったのですか？」

カンナがフェイナを抱きながら聞いてくる。
終わった、とは言い難い。双方に多大な出血を強い、世界を巻き込んだ危機へと発展した今回の事件。これにより世界中の都市における今後の在り様は変革を求められることは確かだ。

未だに世界では15年前の戦争を引きずる者が大勢いる。
機械人を許さない人間が大勢いる。

その全てが手を取り合い、共に生きていけるようにあるまでは、マ
ガスの野望は朽ちない。

もし、機械人と人間に限らず、機械人との共存を望む者と望まない
者が争っても、それはマガスにとっては勝利となるだろう。

だから、これで終わったわけではない。
全てが始まったと言っても良いだろう。

だから、これで終わりとは言わない。
だが、はじめがついたことには間違いない。

それに、世界を変えるのはルートたちの役目ではない。人間が1人
ずつ変わらなければならぬ。それはルートたちにも当てはまる。

「始まりが終わった」

「哲学的だね。でも、何となく言いたいことは分かるよ」

フラッシュがルートの脇をすり抜けて、ラーキンとフィリップの
ころへ歩いて行って、何事が話し合っている。フィリップが小さく
頷くと、観客席へと向かっていった。どうやらレイを回収しに行っ
たようだ。

な」

カナナに抱かれるフェイナを見て、マックが目を細める。

「とにかく、家に帰ろう。ここでは何もできないからな」

「ああ」

フィリップがレイの身体を担いで降りてきたのを見て、マックはレイに駆け寄った。そしてフィリップの怪我を気遣ってマックがレイを担いで戦車に戻った。

驚いたことにドームの外には旅団の人間が無数にいた。それこそ全員いるんじゃないかと思ったほどに。マックが艦の人間も全員いると聞いて、ルートは呆れかえるしかなかった。数少ない戦車にレイとフェイナを担ぎ込み、マックは砲塔ハッチから滑り込み、ルートとフラッシュは戦車のフロントに飛び乗る。そして飛び乗ったのを確認するとマックは発進の合図を出して、ドームに突っ込んでいた戦車がゆっくりと後進してドームの外に出た。

カナナたちは他の戦車に飛び乗ると、旅団の仲間たちから手厚い歓迎を受けていた。

それを苦笑しながら横目で見てみると、フラッシュがルートの隣に座りこんできた。

「今、旅団長が話してた。『グランドフリーユージェ』も電磁パルスで使えなくなってるって」

「そうか、だが、家には変わらないさ」

南門から一直線に続く通り。

その通りに戦車が出ると、当然のことながら真正面に『グランウドフ
リユーゲ』の姿が現れる。

「家が壊れたなら、直すだけだ」

ルートはそう言つと仰向けになつて空を見上げる。

雲一つない空が、どこまでも高く続いていた。

その日、1人の機械人が死んだ。

いや、15年前に瀕死の重傷を負い、今まで辛くも生きながらえてきた彼が、ようやく息を引き取つた、と言つべきなのだろうか。

15年前の悲願を目前に、息絶えた彼に追従する者は、決して少なくはないだろう。

『血の盟約』の残党も、かなりの数が世界各地へと散っていった。

マガスに追従していた機械人たちも、その多くが表舞台から姿を消した。そのことが発覚したのは、あまりに多くの機械人が忽然と姿を消す事件が続発したからだ。

マガスが、『始まりの機械人』が撒いた種は、確実に芽を吹かすだろう。

その時、人間と機械人が力を合わせることが出来れば、必ずや困難を乗り越えられるだろう。

『デルジャナ』で、マガスが各地に分散していた仲間を呼び集めた時、遠方において合流が見込めないと判断した者たちは、自らのいる都市で大規模なテロ行動を行った。

全世界での死者は数千人に上るともされ、決して局地的な事件で終わることはなかった。

だが、僥倖とでも言うべきだろうか。一般人は、今回の一連の事件、戦争を通じて、改めて世界の安全保障について考えるようになったともいえる。

いかにして、機械人と人間の差を乗り越えるのか、真剣に考え始めるようになった。

結論がいつ出るかは分からない。

だが、少なくとも議論が開始されたのだ。

「始まりが終わった」

序論の次には、本論が来る。

そして、結論が議論を締めくくる。

その日まで、世界は試され続けるのかもしれない……

第四十七話 終焉（後書き）

さらっと終わったとか、軽く終わったとか言わないでください…。

え、はい、エピソードを除けば本編は終了いたしました。

エピソードの方でいろいろ言いたいことはありますのでここでは長くしません。

最後の文は、まあ、カッコよく終わらそうかななんて薄っぺらい考えから投稿直前に付け加えたもので、あまりじっくり来ない方もいるかもしれません。

マガスの死にざまをもう少し書きたかったんですが、ちょっと無理だったので……。

いや、グダグダ書いていたらいつの間にか7000字に迫る勢いだっただけ……。かといってどこかで切ると次が3000字くらいになっちゃうので……。

はい、とりあえずここで切ります。

ではでは、失礼をば……

エピソード01

「ふあ……、眠い」

ルートは起き上がると辺りを見渡して大きな伸びを1つする。

『デルジャナ』での戦闘が終了した後、全ての機能が失われた『グランドフリーユージュ』を置いてルートたちは『ニースローグ』まで飛んできた。

『グランドフリーユージュ』ではレイとフェイナの修理も、隊員たちの治療すら満足にできない状況だった。必要最低限の隊員と『ニースローグ』の戦車隊を残して戦傷者を詰め込んだ輸送機で『ニースローグ』へと降り立った。

そこからは、あまりにも展開が速すぎてよく覚えていない。

ルートとフラッシュはレイとフェイナの付き添いで途中まで一緒について行ったのだが、フェイナは神経衰弱と無理な機械との接続で疲弊しており面会謝絶、レイはあの身体が使い物にならないと判断されて新身体を急遽取り寄せてAIの移植が行われ、ルートはレイの、フラッシュはフェイナの手術室の前で一晩粘ったのだが、ルートは途中で技師に丸2日はかかると言われて宛がわれた部屋に戻って仮眠を取ることになっていたのだ。

あれから2日、マックは、『ニースローグ』に降り立つなりジゼルと共に政府の最高指導部へと赴いたつきり姿を見ていない。

不時着して、右腕を骨折していたジゼルが平然とそれに付き添って

いったのを見たときは、さすがのルートもジゼルの打たれ強さに感嘆するほかなかった。

ベッドから降り、窓のカーテンを開けると、まぶしい日差しが差し込んでくる。

丁度その時、扉をノックする音が聞こえて扉を開けると、そこにはフラッシュが立っていた。息が荒いようだが、必死になって何かを伝えようとしている。

「ぜえ、ル、ぜえ、ぜえ」

「お、落ち着けフラッシュ。深呼吸だ、深呼吸」

「すう、はあ、すう、はああああ……。よし、ルート！ フェイナの意識が戻ったって！」

「なに！」

その知らせを受けてルートは慌てて部屋に戻ると、手に取る物もほとんどに素早く着替えると部屋から飛び出し、フラッシュの後を追った。

ルートもフラッシュも、負傷している為、『ニースローグ』都市内にある大きな軍の病院に入院させられている。フラッシュの後を追って階段を上がり、1番端の部屋の扉をフラッシュが開けると、途端に足音を小さくしてゆっくりと奥へと入っていった。

「フェイナ、調子は？」

ルートも、ドタバタと入るようなことはせず、部屋にゆっくりと入ると、ベッドで横になるフェイナの姿が飛び込んできた。

「ぼちぼちよ、2人とも。でも1週間はベッドから出られそうにな
いって」

「あれだけ無茶をやったんだ。当たり前だな」

フェイナが行った、レールガンとの連結については、帰還後カンナ
とフリリップから詳しい話を聞かせてもらった。人間の作り出す電
気でレールガンに必要な電力を賄ったのだから、大したものではあ
るのだが、その代償は極度の神経衰弱となってフェイナを襲った。

今のフェイナは使えなくなった四肢を取り外して、簡易な義手義足
をつけている。だが、フェイナは慣れない四肢に悪戦苦闘している
ようで、水を飲むのにも一苦労する始末だ。

「レイの方はどうなの？」

「分からん、丸2日かかると言っていたからな、そろそろ何かしら
の知らせが届いても良いはずなんだが」

「そう……」

明らかにフェイナの表情が落胆を現した。

「はあ、フェイナ、さっさと伝えろよな？」

「え……」

「今度の事で分かっただろ？ いつまでもグダグダしてたら、どっ
ちかが死んじまうかもしれない世界にいるんだ、俺たちは。だから、
さっさとレイに気持ち伝えろよな」

「……………」

「ルートが、色恋沙汰を口にするなんて……………」

フラッシュがポツリと呟いたことにルートの顔が真っ赤になる。そ
して飛び掛からん勢いでフラッシュの胸倉をつかむと、思いつきり

顔を近づけた。

「2度と言っじゃねえぞ……?」

「照れてるんだね? 赤い顔で凄まれても怖くないよ?」

ニヤニヤと笑うフラッシュの頭に強烈な一撃をお見舞いすると、フラッシュが床を転げまわって痛みに悲鳴を上げる。

「まったく……。あゝ、そういう訳だから、な? まったく、こういうことは女が言うもんだらう、普通。何が悲しゅうて男が言わにやならんのだ……」

その時、病室の扉を叩く音がして、もがいていたフラッシュが起き上がる。扉を開いた。するとそこにはマックが立っていた。

「よう、看護師の人に聞いたら2人がここにいると聞いてな」

「旅団長、どうしたんですか?」

「まあまあ、あ、これフェイナの部屋に生けてくれや」

マックはお見舞いの花をフラッシュに手渡すと、何かそわそわしている様子で3人を見つめる。

何かこう、面白い事を早く言いたくてうずうずしている子供のよう。な雰囲気だ。

「……で、どうしたんですか?」

フラッシュが水道の水を花瓶に入れてそこに花を生けるのを待つルートが聞くと、待ってましたとばかりにマックが手を叩いて身を乗り出してきた。

「実はな、お前たちに合わせたい奴がいるんだ」

「合わせたい奴？」

「ああ、入ってこい」

開けっ放しの扉から、人影が現れた。

「……………」

現れたのは、少年だ。

ルートたちよりはるかに幼いが、ある程度の身長はある。

どこかで見たことがある銀髪銀眼で、恨めしそうにルートたちを睨み付けている。

まさか…………、

「旅団長、まさかですか？」

「そのまさかだ…………」

「…………断固抗議する」

「レイ!？」

声を聞いてフェイナとフラッシュが奇声を上げた。

そう、目の前の少年の声はまぎれもないレイの声だったのだ。声と外見のギャップにルートは吹き出しそうになるのを必死にこらえようとすると、その正面でマックは盛大に爆笑していた。

「な、なぜこんな、ことに？」

フラッシュが笑いそうになるのを必死にこらえながら聞くが、すでにその頬は目に見えて痙攣している。

「俺に聞くな、気がついたらこんな身体だったんだ」

「い、いやなあ？ この連中に頼んだら、今はこれしかないと言われてな。仕方なく間に合わせていいからこれにしてもらったんだ。まさかここまで腹に来るとは思わなかったが……プ、駄目だ、我慢できない！」

マツクは説明の途中で再び笑い出し、レイの肩が小さく震えているのにルートは気が付いた。おそらくこれが人間なら顔を真っ赤にして怒り狂うところだろう。

「レ、レイ。年相応になつたじゃないか！」

「黙れ、ルート。それ以上言ってくれな」

これ以上からかうと銃を取り出しかねないのでとりあえず笑いをかみ殺そうとするが、1度沸点を超えたそれはなかなかもとに戻ってくれない。

なんとかそれを心の奥底に押し込むと、部屋の隅から椅子を2つ持ってきてフェイナのベッドの傍に置き、立っているマツクとレイにその椅子をすすめる。

「……レイ」

2人が椅子に座ったところで、今まで黙っていたフェイナが下を向いたまま口を開いた。

顔が少し赤くなっていることから、レイ以外の3人は「おっ？」と心の中で思い、「言うのか!？」と心の中の台詞が見事にシンク口する。そして3人の心の中だけで盛大なドラムロールがかかり始め

た。

「うん？ どうした、フェイナ」

「あ、あのね、実は……あたし、レイの事が……その……」

3人のボルテージが最高潮に達する。表向きは無表情を装っているが、内心では完全にテンションだだ上がりでドラムロールを叩き続けていた。

「そ、その……」「言わなくていい」「え？」

3人の中でレイの言葉でドラムロールが音を立てて破壊された。

「どづいづ、こと？」

フェイナの顔に不安の色が出る。

まあ、あそこで遮られれば拒絶ともとれるわな、とルートは内心でため息をつく。

「そついう事は、男が言うもんだ」

だから、その台詞を聞いてルートは安心した。

さすがのレイもここまで言われて気づかないほどの朴念仁ではなかったようだ。

その台詞を聞いてフェイナの表情が満面の笑みに変わる。

それを見たルートはフラッシュとマックに目配せして静かに席を立つ。2人もゆっくりと席を立つと、部屋を出て扉を閉めた。

そこで部屋から離れればいい話なのだが、あいにく野次馬精神に充

ち溢れた3人は扉に耳を付けて聞き耳を立てた。

「……俺でいいのか？ 俺はお前の育ての親で、機械人だぞ？」

扉の向こうからレイの声が聞こえる。

「レイだからよ。今のあなたに言うのもなんだけど……」

「言うな……」

扉の反対側で3人が声を立てずに口だけで大爆笑する。

「だからね、あたし、あなたのことが……」

「待て」

「え？」

再びレイがフエイナの台詞を遮る。

それに小さく舌打ちをする3人。

何かごそごそとする音が部屋の中で聞こえ、何かとルートが耳を澄ますために顔を横にして耳を扉に押し付けると、突如銃声かしてルートの眼前5センチの所に小さな穴が開いた。

「……半径50メートル以内から立ち去るがいい」

慌てて走り去ったのは言うまでもない。

その日の午後、再び政府へ出向したマツクは、その日の夕方テレビでその姿を現すことになった。

内容はもちろん、マガスがやるうとしたこと、そして、今後への対策だ。

もし、これがマツクだけで、勝手にやったことなら確実に白い目で見られていただろう。だが、マツクと共にジゼルが姿を現すと、その場にいる人々の疑念も何もかもが吹き飛び、ただマツクとジゼルが紡ぐ話を黙って聞いていた。

それは、病院にいたルートたちも同じことだった。

フェイナの部屋に全員が集まり、ベッドの正面に据え付けられているテレビに食い入っていた。

テレビの中でマツクは『デルジャナ』で起こったことを詳細に説明した。主要各都市で同時生中継されているというマツクとジゼルの演説は、時折『デルジャナ』の映像や写真を表示しながら行われ、リアルタイムで各都市の反応が『ニースローグ』にもたらされるようになっていた。

もとより、主要な都市には戦闘前にマツクから打診をしていたために、政府内での混乱はあまりなかった。だが、やはり市民には少なからず動揺が走ったことに間違いはない。

多くの都市政府がマックとジゼルに同調する動きを見せ、市民も最初こそ疑いや困惑の表情を見せていたが、そのうち少しずつ拍手が生まれ、徐々にそれが大きくなった。

「なんか、このままじゃマックが大統領になっちゃいそうな気がするの。はあたしだけ？」

「……あり得ない……」

男3人が口を揃えて言った通り、当たり前のことだがマックは『ニースローグ』の大統領など引き受けなかった。一応打診はあったそうだが、旅団に留まることを選んだのだ。

代わりにジゼルが軍司令を退任して臨時の大統領となり、選挙が行われるまでの行政を行うことになった。臨時とはいえ、大統領の権限を手に入れたと聞いたルートが、頭を抱えたのは言うまでもない。

「何をされるか分かったもんじゃない……」

ルートは病室の隅でそんなことを呟いていたそうだ。

エピソード01（後書き）

もしも行きましますか。

エピソード02

あれから1年が経った。

その間何があった、という電波が飛んできている気がするが、あえて無視することにする。

旅団『フリーユージェ』の名は、『デルジャナ』での核戦争勃発未遂事件、通称『機械人事件』によって世界の隅々まで知れ渡る結果となった。

それに伴い、傭兵という職業への考えが変わったようで、積極的に傭兵と交流を持つとする都市が相次ぎ、『フリーユージェ』にも今まで交流の無かった都市から幾度となく会談を求められた。

その度にマツクはその都市に出向いては信頼関係の構築に奔走した。

旅団への入団希望者も相次ぎ、旅団の規模は1年前の2倍に膨れ上がらん勢いである。

そのため、半年の修理期間を経て航行可能になった『グランドフリーユージェ』ではとてもじゃないが全ての隊員を収容することが出来ず、ジゼルに頼んで『ニースローグ』に旅団の地上本部を設営することに決まった。

傭兵が1カ所に居を構えるのはおかしな話だが、『機械人事件』で確たる地位を手に入れた旅団は、『ニースローグ』市民にも受け入れられ、すぐになじむことができた。

地上本部には、『グランドフリユーゲ』で副官だった男が指揮官となり、入団して間もない隊員の教導や、『グランドフリユーゲ』だけでは捌ききれない情報を誰にも頼らず、自分たちだけで処理できるようにになった。副官の男は『デルジャナ』での戦闘で足を負傷し、戦線を離脱した。本来なら本人の許諾も得たうえで退団という事になるのだが、地上本部が出来るといふ話をしたら、是非そちらで働きたいと申し出たため、指揮官に抜擢された。

地上本部で育てられた新兵は、危険度の低い任務に従事することになる。警察や軍の支援をすることで場数を踏み、その中でも特に優秀な隊員たちが『グランドフリユーゲ』に乗艦することができるのだ。

もちろん、地上本部のレベルが低いということではない。事実1年経った今では第二の家として地上本部はしっかりと機能を果たしている。

『グランドフリユーゲ』は世界を回り、地上本部は必ずそこにある、家となった。

それによって、旅団の本質が変わったわけではない。

それは、マックがそうしているからだ。外からの新しい風が大量に流入することは、それまでの伝統が破壊される危険性をはらんでいる。だから、新兵の選考には厳正な規則があり、またマック自身による面接もある。さらに、軍・警察関係者なら3カ月、一般人なら半年の訓練期間で脱落する者も多い。それでも2倍に増えたのだから、それはそれで素晴らしいことなのだろう。

外はこのくらいだろう。

中はほとんどと言っていいほどに変わっていない。

新しく入った隊員も、まだあまり『グランドフリーユージュ』には乗艦しておらず、むしろ地上本部に残り、そこから各地へ行くのも悪くない、という隊員も多い。

レイは1年前に失った元の身体に近い身体を取り戻し、からかってきたマックに1年分の怒りをぶつけてマックの腰痛を再発させた。

フェイナもより頑丈な四肢を手に入れ、情報部隊の任務に戻った。

因みにこの2人は1か月ほど前に籍を入れた。その時はまだレイが子供タイプだったために、フェイナがレイを俗にいうお姫様抱っこするという珍光景を見ることができ、その時の写真や映像はレイによつてことごとく破棄されたため、生き残った物はプレミアがついて夜な夜な旅団の様々な場所でこっそりと上映されている。

カンナたち401部隊の人間も、元いた部隊に戻り、通常任務に従事している。

驚いたことは、カンナとフィリップがレイたちと時を同じくして付き合っていることが発覚したことだろうか。その時の旅団内の衝撃は計り知れず、祝福はされたが、やはり2人が同じ場所にいるのを確認するまでは信じなかつた人間も多い。

フラッシュも元いた部隊で相変わらずの指揮を執っている。成人してからはよく仲間と共に飲みにいっている姿を見かけるようになった。

マックは相変わらず旅団長として忙しい毎日を送っている。

最近はどうもジゼルと関係が親密化しているらしく、風の噂では同居しているとかしていないとか。

15年前に若くして妻子を失ったマツクも、何かの踏ん切りがついたのだらうと、旅団内ではささやかれ、2人の関係は暖かく見守られている。

ただ、2人の関係の情報収集に旅団の情報部隊と『ニースローグ』の諜報機関が協同行動を取っているという噂があるのも確かだ。

そしてルートと言えば、402部隊隊長の引退に伴って402部隊の隊長へと昇格、実質の実動部隊トップへのし上がった。その隣に常にレイがいることはもう当たり前だ。

若くして、その経験と相まってその能力を余すところなく発揮するルートは今後も末長く旅団で戦い続けるのだらう。

「ルート、任務だ」

レイが甲板でランニングをしているルートに近寄り、声をかける。汗をかいてタオルで顔を拭くとルートは顔を上げ、レイが手に持つ書類を引っ手繰るとそれにかじりつく様に見入った。

「場所はここから南方200キロ、『血の盟約』の残党が動きを見

せた」

「規模は？」

「かなりのものだ。戦車20、ヘリ10、人員500を数える」

それを聞いたルートはニヤリと笑みを浮かべると、書類をレイに返して甲板を後にする。

「1600時、402部隊出動だ」

エピソード02（後書き）

本編を短めに、後書きに文字を割きたいと思います。

まずは、この小説を最後まで読んでいただき、誠に、誠にありがとうございます。ありがとうございました。

作者、正直5月中旬ごろ書き始めて、ゴールできるか心配だったのですが、なんのその、二か月で片がついちゃいました。……あれ？

まあ、極端に長くする気もさらさらなかったのですね。処女作でとてもなく長くするのは、あまりよろしくないかなあと思っています。

この小説の構想は随分前、正直高1とかで考えたような気がするんですよね、家のコンピュータのワードでちまちま書いていたのを、大学入学に合わせて片っ端から改訂したものなんです。

とはいっても、フェイナ登場辺りまでしかその時は書いてなかったもので、その後はほぼ即興で書かれた代物です。

設定とかもかなり変え、キャラも一新してと、いろいろやりましたから。

軽く終わったという意見があると思います。

最終決戦的などころでのマガス、『ドントレス』との戦闘には、かなり作者も悩みました。あんな簡単に終わるはずがない、これは

私も執筆しながら考えました。

ですが、核弾頭を起爆しようとしている相手にグダグダ時間をかけるのもどうかと思ったんですよね。

会話もほどほどにぬっ殺すのが適当なのでは？ と思った所存であります。

さて、そんなわけで、この小説『傭兵は旅をする』は、俗にいう「戦いは続く」的な終わり方をしてしまったのですが、ルートたちの戦いは終わりました。

これまで読んでいただいた方には、感謝してもしきれないほどの気持ちであります。

本当に、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0812t/>

傭兵は旅をする

2011年6月29日11時00分発行